

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (57)

— 一般地方道鹿児島加世田線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

# 小 中 原 遺 跡

1991年3月

鹿児島県教育委員会







## 序 文

この報告書は、鹿児島県教育委員会が一般地方道鹿児島加世田線改良工事に先立って、平成元年度・2年度に実施した小中原遺跡の発掘調査記録です。

調査では縄文時代・奈良～平安時代・鎌倉時代の遺物・遺構が数多く発見されました。

なかでも、奈良時代から平安時代にかけての建物跡や文字の刻まれた土器などは古代阿多地方の歴史を知るうえで注目されています。

本書は、地域の歴史の解明に貴重な手掛かりを提供するものと考えており、南九州の古代文化の研究や文化財保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに、この発掘調査に御協力くださった県土木部道路建設課、伊集院土木事務所、金峰町教育委員会並びに地元の方々に心から感謝いたします。

平成3年3月

鹿児島県教育委員会  
教育長 大田 務

## 例 言

- 1 この報告書は一般地方道鹿児島加世田線改良事業に伴う小中原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、鹿児島県土木部道路建設課の受託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
- 3 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
- 4 発掘調査においては、金峰町教育委員会や阿多歴史研究会の協力・援助を得た。
- 5 現地調査に関する実測及び写真撮影は、調査担当者（牛ノ濱修・湯之前尚・宮下貴浩）で行った。
- 6 本書の執筆は、成尾英仁・小片丘彦・竹中正己に玉稿を頂き、鎌倉時代出土遺物（第IV章第4節3）を湯之前が行い、他を牛ノ濱が担当した。また、縄文土器実測を弥栄久志・井ノ上秀文、縄文石器実測を宮田栄二、須恵器実測を中村耕治、遺物写真撮影を鶴田静彦・横手浩二郎・池畑耕一・新町正・上地克哉の文化課職員に一部加勢、協力をしてもらった。
- 7 本書の編集は、鹿児島県教育庁文化課で行い、牛ノ濱がこれを担当した。
- 8 土器観察表の胎土で、Q：石英，PL：長石，H：角閃石，M：金雲母である。
- 9 平安時代の遺構で、SA：柵列，SB：掘立柱建物跡，SD：溝状遺構，SK：土壙である。

# 目 次

序 文	
例 言	
第Ⅰ章 調査の経過	15
第1節 調査に至るまでの経過	15
第2節 調査の組織	15
第3節 調査の経過（日誌抄）	17
第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境	20
第1節 遺跡の位置及び自然環境	20
第2節 遺跡周辺の史的環境	21
第Ⅲ章 層 序	29
第Ⅳ章 調査の概要	36
第1節 縄文時代の調査	36
1 草創期	36
出土遺物	36
2 早期	41
出土遺物	41
3 後期・晩期	69
出土遺物	69
4 石器	72
第2節 弥生～古墳時代の調査	74
第3節 平安時代の調査	76
1 調査の概要	76
2 遺構	76
3 出土遺物	110
第4節 鎌倉時代の調査	190
1 調査の概要	190
2 遺構	190
3 出土遺物	193
第Ⅴ章 調査のまとめ	198

## 挿 図 目 次

第 1 図	縄文海進期の推定海岸線と地形区分	20
第 2 図	小中原遺跡の位置及び周辺遺跡	25
第 3 図	土層模式柱状図	29
第 4 図	土層図 (1)	30
第 5 図	土層図 (2)	31
第 6 図	土層図 (3)	32
第 7 図	遺跡周辺の地形図	33
第 8 図	調査地域とグリッド図	34
第 9 図	遺構配置図	35
第 10 図	縄文時代石器 (1) 石鏃・剥片	36
第 11 図	縄文時代草創期遺物出土分布図	37
第 12 図	縄文時代石器 (2) 剥片・スクレイパー・磨石	38
第 13 図	縄文時代早期土器出土分布図	39
第 14 図	縄文時代早期土器 (1)	43
第 15 図	縄文時代早期土器 (2)	44
第 16 図	縄文時代早期土器 (3)	45
第 17 図	縄文時代早期土器 (4)	46
第 18 図	縄文時代早期土器 (5)	47
第 19 図	縄文時代早期土器 (6)	48
第 20 図	縄文時代早期土器 (7)	49
第 21 図	縄文時代早期土器 (8)	50
第 22 図	縄文時代早期土器 (9)	51
第 23 図	縄文時代早期土器 (10)	52
第 24 図	縄文時代早期土器 (11)	53
第 25 図	縄文時代早期土器 (12)	54
第 26 図	縄文時代早期土器 (13)	55
第 27 図	縄文時代早期土器 (14)	56
第 28 図	縄文時代早期土器 (15)	57
第 29 図	縄文時代早期土器 (16)	58
第 30 図	縄文時代早期土器 (17)	59
第 31 図	縄文時代早期土器 (18)	60
第 32 図	縄文時代早期土器 (19)	61
第 33 図	縄文時代早期土器 (20)	62



第 34 図	縄文時代早期土器 (21)	63
第 35 図	縄文時代早期土器 (22)	64
第 36 図	縄文時代後期土器 (1)	68
第 37 図	縄文時代後期土器 (2)	69
第 38 図	縄文時代晩期土器 (1)	70
第 39 図	縄文時代晩期土器 (2)	71
第 40 図	縄文時代石器 (3) 石槍・石鏃・スクレイパー	72
第 41 図	縄文時代石器 (4) 石斧	73
第 42 図	古墳時代土器	75
第 43 図	平安時代遺構配置図	77
第 44 図	掘立柱建物跡 1	79
第 45 図	掘立柱建物跡 2	80
第 46 図	掘立柱建物跡 3	81
第 47 図	掘立柱建物跡 4	82
第 48 図	掘立柱建物跡 5	84
第 49 図	掘立柱建物跡 6	85
第 50 図	掘立柱建物跡 7	86
第 51 図	掘立柱建物跡 8	87
第 52 図	掘立柱建物跡 9	88
第 53 図	掘立柱建物跡 10	89
第 54 図	掘立柱建物跡 11	91
第 55 図	掘立柱建物跡 12	92
第 56 図	掘立柱建物跡出土の遺物	93
第 57 図	土壙 (1)	94
第 58 図	土壙 (2)	95
第 59 図	土壙 (3)	96
第 60 図	土壙 (4)	97
第 61 図	土壙 (5)	98
第 62 図	土壙出土の遺物 (1)	100
第 63 図	土壙出土の遺物 (2)	101
第 64 図	溝状遺構出土の遺物 (1)	103
第 65 図	溝状遺構出土の遺物 (2)	104
第 66 図	溝状遺構出土の遺物 (3)	105
第 67 図	ピット	106
第 68 図	その他の遺構出土の遺物 (1)	107

第 69 図	その他の遺構出土の遺物 ( 2 )	108
第 70 図	須恵器出土状況	111
第 71 図	須恵器 ( 1 ) 蓋	113
第 72 図	須恵器 ( 2 ) 蓋	114
第 73 図	須恵器 ( 3 ) 皿	115
第 74 図	須恵器 ( 4 ) 坏	116
第 75 図	須恵器 ( 5 ) 坏	117
第 76 図	須恵器 ( 6 ) 碗	118
第 77 図	須恵器 ( 7 ) 碗	119
第 78 図	須恵器 ( 8 ) 碗	120
第 79 図	須恵器 ( 9 ) 高杯	121
第 80 図	須恵器 ( 10 ) 鉢	122
第 81 図	須恵器 ( 11 ) 壺	123
第 82 図	須恵器 ( 12 ) 壺	124
第 83 図	須恵器 ( 13 ) 壺	125
第 84 図	須恵器 ( 14 ) 甕	126
第 85 図	須恵器 ( 15 ) 甕	127
第 86 図	須恵器 ( 16 ) 甕	128
第 87 図	須恵器 ( 17 ) 甕	129
第 88 図	須恵器 ( 18 ) 甕	130
第 89 図	須恵器 ( 19 ) 甕	131
第 90 図	須恵器 ( 20 ) 甕	132
第 91 図	須恵器 ( 21 ) 甕	133
第 92 図	須恵器 ( 22 ) 甕	134
第 93 図	須恵器 ( 23 ) 甕	135
第 94 図	須恵器 ( 24 ) 甕	136
第 95 図	須恵器 ( 25 ) 甕	137
第 96 図	須恵器 ( 26 )	138
第 97 図	平安時代土師器出土状況	143
第 98 図	土師器 ( 1 ) 蓋	146
第 99 図	土師器 ( 2 ) 皿	147
第 100 図	土師器 ( 3 ) 坏	148
第 101 図	土師器 ( 4 ) 坏	149
第 102 図	土師器 ( 5 ) 坏	150
第 103 図	土師器 ( 6 ) 坏	151

第 104 図	土師器 (7)	碗	.....	152
第 105 図	土師器 (8)	碗	.....	153
第 106 図	土師器 (9)	碗	.....	154
第 107 図	土師器 (10)	鉢	.....	155
第 108 図	土師器 (11)	甕	.....	156
第 109 図	土師器 (12)	甕	.....	157
第 110 図	土師器 (13)	甕	.....	158
第 111 図	土師器 (14)	甕	.....	159
第 112 図	土師器 (15)	甕	.....	160
第 113 図	土師器 (16)	甕	.....	161
第 114 図	土師器 (17)	甕	.....	162
第 115 図	土師器 (18)	甕	.....	163
第 116 図	土師器 (19)	甕	.....	164
第 117 図	黑色土器・焼塩壺出土状況		.....	169
第 118 図	黑色土器 (1) 内黒土師器		.....	171
第 119 図	黑色土器 (2) 内朱土師器		.....	172
第 120 図	黑色土器 (3) 内朱土師器		.....	173
第 121 図	墨書土器・窰書土器・刻書土器 (1)		.....	175
第 122 図	窰書土器・刻書土器 (2)		.....	176
第 123 図	焼塩壺 (1)		.....	178
第 124 図	焼塩壺 (2)		.....	179
第 125 図	焼塩壺 (3)		.....	180
第 126 図	鉄器		.....	182
第 127 図	帯金具		.....	183
第 128 図	紡錘車		.....	183
第 129 図	土錘		.....	183
第 130 図	陶硯		.....	184
第 131 図	平安時代石器 (1) 砥石		.....	185
第 132 図	平安時代石器 (2) 砥石		.....	186
第 133 図	平安時代石器 (3) 磨石		.....	187
第 134 図	平安時代石器 (4) 磨石		.....	188
第 135 図	鎌倉時代遺構配置図		.....	189
第 136 図	竪穴遺構		.....	190
第 137 図	土師器 (1)		.....	191
第 138 図	土師器 (2)		.....	192

第 139 図	陶磁器 (1)	194
第 140 図	陶磁器 (2)	195
第 141 図	陶磁器 (3)	196

## 表 目 次

第 1 表	周辺の遺跡一覧表 (1)	26
第 2 表	周辺の遺跡一覧表 (2)	27
第 3 表	周辺の遺跡一覧表 (3)	28
第 4 表	縄文時代土器分類表 (1)	65
第 5 表	縄文時代土器分類表 (2)	66
第 6 表	縄文時代土器分類表 (3)	67
第 7 表	弥生～古墳時代土器一覧表	74
第 8 表	掘立柱建物跡 1 計測表	79
第 9 表	掘立柱建物跡 2 計測表	80
第 10 表	掘立柱建物跡 3 計測表	81
第 11 表	掘立柱建物跡 4 計測表	82
第 12 表	掘立柱建物跡 5 計測表	84
第 13 表	掘立柱建物跡 6 計測表	85
第 14 表	掘立柱建物跡 7 計測表	86
第 15 表	掘立柱建物跡 8 計測表	87
第 16 表	掘立柱建物跡 9 計測表	88
第 17 表	掘立柱建物跡 10 計測表	89
第 18 表	掘立柱建物跡 11 計測表	91
第 19 表	掘立柱建物跡 12 計測表	92
第 20 表	土壌一覧表	99
第 21 表	遺構出土遺物一覧表	109
第 22 表	須恵器計測表 (1)	139
第 23 表	須恵器計測表 (2)	140
第 24 表	須恵器計測表 (3)	141
第 25 表	須恵器計測表 (4)	142
第 26 表	土師器計測表 (1)	164
第 27 表	土師器計測表 (2)	165
第 28 表	土師器計測表 (3)	166
第 29 表	黒色土器一覧表	174
第 30 表	焼塩壺計測表	181

## 図 版 目 次

カラーグラビア 1	遺構遠景（航空写真）	
	2 遺構遠景（航空写真）	
	3 「阿多」線刻土器	
図版 1	遠景 航空写真（北から）、近景 航空写真（北から）	206
図版 2	近景 航空写真（北から）、近景 航空写真（東から）	207
図版 3	近景 航空写真（西から）、遺構（西から）	208
図版 4	遺構 航空写真、縄文草創期発掘風景	209
図版 5	土層断面図、土層断面図（G-21区）	210
図版 6	発掘風景（第一次調査）、発掘風景（第一次調査）	211
図版 7	遺構 検出作業風景、平安時代遺物出土状況	212
図版 8	平安時代遺物出土状況、平安時代遺物出土状況	213
図版 9	平安時代遺物出土状況、土師器坏出土状況	214
図版10	土師器坏出土状況、土師器坏出土状況	215
図版11	土師器坏出土状況、須恵器蓋出土状況	216
図版12	土師器坏出土状況、土師器皿出土状況	217
図版13	成川式土器出土状況、土壙（Sk04）と土師器坏出土状況	218
図版14	縄文土器出土状況、縄文時代後期土器出土状況	219
図版15	柱穴検出状況、柱穴断面図	220
図版16	ピット検出状況、平安時代土壙人骨出土状況	221
図版17	掘立柱建物跡（SB02）、掘立柱建物跡（SB03）	222
図版18	掘立柱建物跡（SB03）、掘立柱建物跡（SB06, 07）	223
図版19	掘立柱建物跡（SB10）	224
図版20	鎌倉時代竪穴遺構	225
図版21	縄文時代出土石器	226
図版22	縄文時代早期土器（1）、縄文時代早期土器（2）	227
図版23	縄文時代早期土器（3）、縄文時代早期土器（4）	228
図版24	縄文時代早期土器（5）、縄文時代早期土器（6）	229
図版25	縄文時代早期土器（7）、縄文時代早期土器（8）	230
図版26	縄文時代早期土器（9）、縄文時代早期土器（10）	231
図版27	縄文時代後期土器	232
図版28	縄文時代晩期土器、弥生～古墳時代土器	233
図版29	掘立柱建物跡出土遺物	234

図版30	土壙出土の遺物	235
図版31	溝状遺構出土の遺物（1）	236
図版32	溝状遺構出土の遺物（2）	237
図版33	その他の遺構出土遺物	238
図版34	須恵器（蓋）	239
図版35	須恵器（皿）（高坏）	240
図版36	須恵器（坏）	241
図版37	須恵器（碗）	242
図版38	須恵器（鉢）（壺）	243
図版39	須恵器（壺）	244
図版40	須恵器（壺）	245
図版41	須恵器（甕）	246
図版42	須恵器（甕）	247
図版43	須恵器（甕）	248
図版44	須恵器（甕）	249
図版45	須恵器（蓋）（皿）	250
図版46	土師器（皿）	251
図版47	土師器（坏）	252
図版48	土師器（坏）	253
図版49	土師器（坏）	254
図版50	土師器（坏）（碗）	255
図版51	土師器（鉢）	256
図版52	土師器（甕）	257
図版53	土師器（甕）	258
図版54	「阿多」刻書土器	259
図版55	墨書土器・篋書土器・刻書土器	260
図版56	焼塩壺	261
図版57	帯金具・紡錘車・土錘	262
図版58	砥石	263

# 第 I 章 調査の経過

## 第 1 節 調査に至るまでの経過

鹿児島県は主要地方道鹿児島加世田線（通称南薩横断道）改良工事を計画し、施工していたところ、平成元年 8 月、計画用地内に遺物が散布している通報があり、県教育委員会文化課で分布調査及び試掘を行ったところ遺跡であることが判明した。そこで、県土木部と文化課はその取り扱いについて協議を重ねた。協議の結果、I 期工事区域を平成元年度に、残りの区域を平成 2 年度に発掘調査を実施して、記録保存を行うこととなり、今回の調査が行われた。

平成元年度は平成元年 11 月 28 日～2 月 9 日まで、平成 2 年度は平成 2 年 5 月 23 日～11 月 8 日まで行い、その後、文化課収蔵庫で報告書作成を行った。

## 第 2 節 調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教 育 長	濱里 忠宣（平成元年度）
〃	〃	〃	大田 務（平成 2 年度）
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課 長	吉井 浩一（平成元年度・2 年度）
調査企画者	〃	課 長 補 佐	奥園 義則（平成元年度）
〃	〃	〃	濱松 巖（平成 2 年度）
〃	〃	主 幹	立園多賀生（平成元年度・2 年度）
〃	〃 主任文化財研究員兼埋蔵文化財係長	吉元 正幸（平成元年度・2 年度）	
事務担当者	〃	企画助成係長	京田 秀允（平成元年度）
〃	〃	主幹兼企画助成係長	濱崎 琢也（平成 2 年度）
〃	〃	主 査	平山 章（平成元年度・2 年度）
〃	〃	主 事	末永 郁代（平成元年度・2 年度）
〃	〃	文化財調査員	原口 雅恵（平成元年度・2 年度）
調査担当者	〃	主 査	牛ノ濱 修（平成元年度・2 年度）
〃	〃	文化財研究員	湯之前 尚（平成 2 年度）
〃	金峰町教育委員会	文化財専門員	宮下 貴浩（平成元年度・2 年度）
調査指導者	鹿児島県文化財保護審議会委員	河口 貞徳（考古学）	
	鹿児島大学法文学部教授	上村 俊雄（考古学）	
	鹿児島女子大学短期部教授	中村 明蔵（古代史）	
	鹿児島県文化財保護審議会委員	沈 壽官（陶芸家）	
	鹿児島大学歯学部教授	小片 丘彦（人類学）	
	福岡大学人文学部教授	小田富士雄（考古学）	

尚、調査及び報告書作成中、次の方々から指導助言を頂いた。記して感謝の意を表したい。

(敬称略，順不同)

池畑耕一・松山友子(黎明館)，立神次郎・上東克彦(加世田市教育委員会)，有元彰順(鹿児島県考古学会会員)，諏訪下忠雄(金峰町文化財審議員)，阿多歴史研究会，永山修一(ラサール高校教諭)，梅北浩一(伊集院町教育委員会)，山下元(鹿児島市体育センター)，前迫亮一(阿久根中学校教諭)，谷口俊治(北九州市埋蔵文化財室)，島田正浩(宮崎県高岡町教育委員会)，本田道輝(鹿児島大学法文学部助手)，小林敏男(鹿児島短期大学教授) 虎尾達哉(鹿児島大学法文学部助教授)，須田勉(文化庁記念物課文化財調査官) 上村純一(川辺町教育委員会)，砂田光紀(知覧町教育委員会)，西谷正(九州大学文学部教授)，下山覚(指宿市教育委員会)，峯崎幸清(佐賀県塩田町教育委員会)，八尋実(佐賀県神崎町教育委員会)

#### 発掘作業員

伊野道夫・益満敏弘・前野克昭・鶴東秋利・堂蘭妙子・福留洋子・有蘭洋子・坂元愛子・横手節子・諏訪蘭チエ子・掛越タネ・弥勒タツ子・上堂園ヨツ子・上堂園フジ子 上堂園サツキ・宇治野マリ子・東上床テル・宮本サツ子・小牧富子・安藤テル子 東久保フミ子・前野サチ子・三角ハナエ・有村まさ子・北蘭エイ子・前田正子・永田トミ子 森蘭笑子・上蘭光子・東小蘭テル子・平山ミエ子・中間タエ子・神野ハツミ・前蘭和子 川口みつ子・有蘭加代子・玉利和子・玉利ヨシエ・南ヨツエ・上大田五月子・福留ノリ子 上橋ヨシ子・栄国シナエ・福地キクエ・永田秀子

#### 整理作業員

中原巳美子・行船順子・岩坪千枝子・宮岡雪子・木田安枝・四丸久美子・春山まり子 後堂悦子・槐島孝子・前田まさ子・川田美津子・高橋文子・竹添つるえ



### 第3節 調査の経過

発掘調査は、平成元年度（平成元年11月28日～2月9日）と平成2年度（5月23日～11月8日）に行った。経過は日誌抄により月毎に略述する。

平成元年度

月	調 査 の 経 過
11月	発掘調査開始。道路中心杭を基準に10mグリッドの設定。元年度は8区までの80m幅の調査を行い、残部は2年度に行う。2m幅のトレンチを5ヶ所設定し、遺跡の範囲及び包含層の確認を行う。その結果、F-3, G-4トレンチから縄文時代早期の前平式土器が、F-5, G-6, F-7トレンチからは平安時代の須恵器・土師器を出土する遺物包含層が確認された。G-6トレンチⅡ層から「多」の窺書土器出土。
12月	3・4区－表層排除作業。表層下のⅡ・Ⅲ層は昭和45年の農地整備で削平されている。Ⅳ層下部から縄文時代早期の前平式土器が多量に出土する。 5～8区－Ⅰ・Ⅱ層が厚く機械力でⅠ層及びⅡ層中程まで排除する。Ⅱb層から平安時代の須恵器・土師器が多量に出土する。11日－日置教育事務所・12日－池畑・松山氏（黎明館）・20日－河口先生現地指導・21日－上村先生現地指導・阿多小学校5・6年生体験学習・22日－阿多歴史研究会
1月	5～8区－Ⅱb層掘り下げ。G-7区、縄文時代確認トレンチ遺物出土なし。 F-5～8区、Ⅲ層上面にて遺構検出。ピット・土壙検出。F・G区畦はずし。縄文早期土器出土する。掘立柱建物跡4軒（2間×3間＝2軒、1間×2間、1間×1間）検出。F-5区溝状遺構検出。24日－永山氏（ラ・サール高）・29日－F-8区Ⅱ層から墨書土器出土。
2月	F・G-7・8区遺構検出。F・G-3～6区縄文時代早期掘り下げ及び旧石器時代確認。旧石器時代遺物なし。F・G-7・8区の柱穴に白砂をいれ、来年度の調査準備を行う。5日－児島氏（金峰町町長）・諏訪下氏（金峰町文化財審議委員）9日平成元年度調査終了。

平成2年度

月	調 査 の 経 過
5 月	<p>23日調査再開。F・G-11～20区，トレンチ確認調査。ほぼ全域に平安時代の層位を確認するが，西側になるにつれて包含層が薄くなる。17区まで表層排除作業。F・G-8区遺構面検出。24日－立神氏（加世田市教委）・25日－梅北氏（伊集院町教委） 28日－池畑氏（黎明館）・29日－F-13区Ⅱb層より「阿多」線刻土器出土。寺前氏（金峰町教育長）。</p>
6 月	<p>F・G-9～14区 Ⅱ層調査。 F・G-11・12区 溝状遺構検出。 F・G-7～10区 Ⅲ層上面にて遺構検出作業。 6日－南日本新聞遺跡取材・12日－永山氏（ラ・サール高）・20日－山下氏（鹿児島市教育委員会）・22日－日置・鹿児島地区文化行政・文化財保護審議会委員研修会約100名・26日－金峰町教頭会10名・27日－紡錘車出土。焼土検出。航空写真撮影。</p>
7 月	<p>E～G-9～16区 Ⅱ層調査。 F・G-8～10区 Ⅲ層上面遺構検出作業。 SB03・SB06・SB07（掘立柱建物跡）検出及び写真撮影。 F・G-8～9区遺構平面実測。 4日－前迫亮一（阿久根中教諭）・13日－谷口氏（北九州市教委）・島田氏（宮崎県高岡町教委）・18日－本田氏（鹿大）・24日－中村明蔵先生現地指導・小林敏男氏（鹿短教授）・虎尾達哉（鹿大助教授）・永山修一氏（ラ・サール高）・25日－諏訪下氏（金峰町文化財保護審議員）</p>
8 月	<p>E・F-14～19区 Ⅱ層調査。 G-13区 Ⅰ～Ⅱ層 SB06・SB07・SB11及び土壙遺構検出。 17～22区鎌倉時代遺構検出。 F-18区竪穴遺構検出。 5日－「古代探訪」100名体験学習。7日－金峰中学生徒14名体験学習。22日－枕崎地区社会科担当者22名見学。 SK19にて墨書土器「安」出土。</p>

月	調 査 の 経 過
9 月	<p>17～20区 鎌倉時代遺構検出。  F17～19区 Pit 群検出作業。  溝状遺構検出作業。  F-21区 縄文確認トレンチ設定。Ⅶ層上部より黒曜石剥片3点出土。  F-11区 縄文晩期遺物Ⅲ層より出土。全体の確認にはいる。  鎌倉・平安時代 平面実測。  5日-須田調査官(文化庁)・10日-沈寿官先生(県文化財保護審議会委員)・11日-河口貞徳先生(県文化財保護審議会委員)・航空写真撮影・25日-上村氏(川辺町)・砂田氏(知覧町)</p>
12 月	<p>平安時代遺構実測。  鎌倉時代遺構実測。  F・G-21～23区 Ⅶ層 縄文時代草創期掘り下げ。石鏃・磨石・石皿・土器片出土。  F列南側断面実測。  E・F-10～17区 Ⅲ層 掘り下げ。  G-9・10区, E-13区, G・H-13区拡張部掘り下げ。</p>
1 月	<p>G-9・10区拡張部掘り下げ  出土遺物平板実測・取り上げ。  発掘用具, 器材収蔵庫へ運搬。  5日-全調査を終了する。各関係機関へのあいさつ。  6日より収蔵庫にて出土遺物整理及び報告書作成。</p>

## 第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境

### 第1節 遺跡の位置及び自然環境

小中原遺跡は、日置郡金峰町大字新山字小中原に所在する。

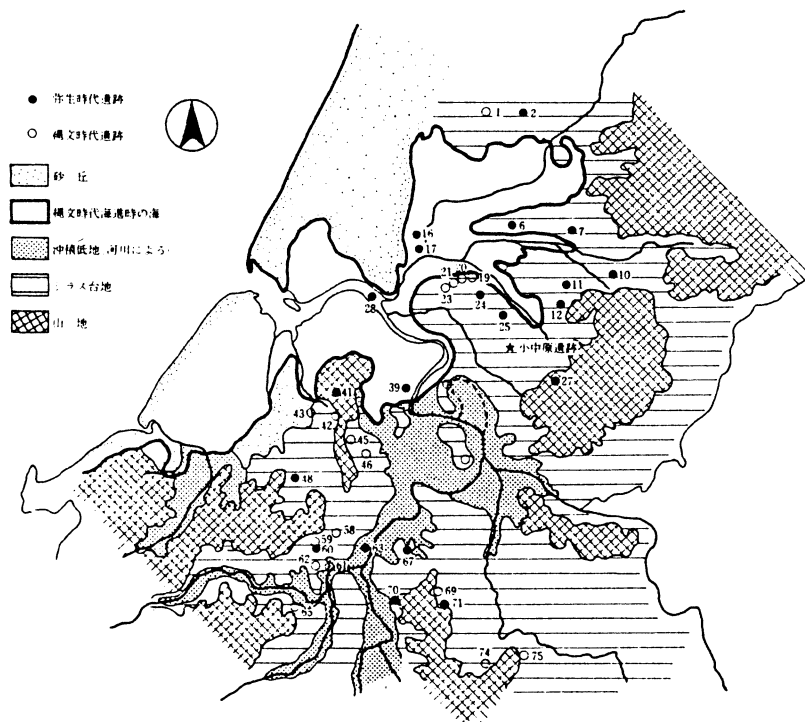
金峰町は、薩摩半島のほぼ中央部から西端に位置し、北は吹上町、東は鹿児島市・川辺町、南は加世田市に接し、西は東シナ海に面している。

金峰町の地形は、大きく山地、シラス台地、沖積平野・砂丘の三つに区分される。

山地は町の東半分を占めていて、九州山地から延びる金峰山系が南北に走っている。金峰山系は金峰山（636m）を主峰とし、中岳（288m）をはじめ200～300mの山々で形成されている。

シラス台地は、錦江湾奥部にある始良カルデラから噴出したシラスが堆積した台地で、シラスは約22,000年前に噴出した火山噴出物で「入戸火砕流堆積物」と呼ばれている。

沖積平野は、万之瀬川の下流域に広がっている。万之瀬川は、薩摩半島の脊稜部に当たる鹿児島市の500～600mの山地（美濃岳錫山付近）に源を発し、南西流して加世田市万世に至る延長30km、流域面積約381km<sup>2</sup>の二級河川である。途中、川辺町で麓川・永里川が、金峰町で堀川・長谷川が、加世田市で大谷川・加世田川が合流し、蛇行しながら加世田市万世で日本三大砂丘のひとつである吹上砂丘のある東シナ海に注いでいる。沖積平野は、これらの河川が長年に



第1図 縄文海進期の推定海岸線と地形区分

わたって運んできた土砂（砂・礫・シルト等）から形成されている。

吹上浜は、串木野市島平から加世田市小湊に至る約30kmのとおい遠浅海岸である。冬は北西の風が強く、海岸の砂は内陸部に吹きたまり、最大幅2 km、最高所47 m（金峰町竹原）という吹上砂丘ができた。

遺跡のある阿多地方は、日置郡金峰町の南半を占めている。阿多の起源は、上古阿多・田布施一帯を「吾田の国笠沙」と呼んだところからこの名があるという。1889年（明治22年）花瀬・宮崎・新山・中津野・浦之名・白川の六ヶ村が統合して、阿多村として発足した。阿多の地形は中世層の砂岩、頁岩からなる300 m前後の山地と、その谷間に堆積したシラス台地を、万之瀬川とその支流長谷川・境川・岩元川などが彫刻してつくった狭い谷底平野と、宮崎西部の吹上浜砂丘裏の低地からなり、河岸には段丘の発達がみられる。

遺跡は、古窯跡で知られる中岳（標高 287 m）の裾野にあたり、中岳より北西部に約 3 km 突出した台地のほぼ中央部の、標高約 27 m に位置する。この台地末端部には著名な阿多貝塚、下原遺跡が存在する。

小中原遺跡の位置する台地と低地の比高差は約 5 m である。

## 第2節 歴史的環境

阿多地方には、縄文・弥生・古代・中世・近世の遺跡が多数発見されていて、発掘調査が実施されてものも少なくない。そこで、周辺地域とあわせて主な遺跡を時代順に若干紹介したい。

### 旧石器時代

南薩地方では、旧石器時代の遺跡は指宿地方で発見されているのみであったが、最近枕崎・吹上地方でも農業基盤整備の調査によって確認されてきている。枕崎市は石橋遺跡・奥木場遺跡・円妙ヶ堀遺跡である。石橋遺跡ではナイフ形石器・台形石器・尖頭器・彫器が、奥木場遺跡では細石刃核・細石刃・台形石器・ナイフ形石器・尖頭器が、円妙ヶ堀遺跡では尖頭器が出土している。金峰町から吹上町にかけては、約11,000年前の桜島起源の軽石層（薩摩火山灰）がブロック状にみられることから、旧石器時代から縄文時代草創期の判断が可能な地域である。岩ノ元遺跡で細石刃・台形石器・石核が採集され、塚ノ越遺跡では「薩摩火山灰」下位より石鏃・楔形石器・削器・剥片等が出土している。また、小中原遺跡からも「薩摩火山灰」の下位より土器と伴に石鏃・石皿・磨石等が出土し、この一帯には旧石器時代から縄文時代草創期にかけての問題点が多く残っている。

### 縄文時代

当地は古くから縄文時代の宝庫と呼ばれ、村原（楯ノ原）遺跡（50）、阿多貝塚（19）、上焼田遺跡（22）、堀川貝塚（20）、上加世田遺跡（53）、下原遺跡（14）等、南九州を代表する遺跡が多く知られている。

村原（楯ノ原）遺跡は早期～後期、古墳時代、歴史時代の複合遺跡である。万之瀬川と加世田川の合流点西側の独立丘陵上に立地する。昭和50・52・61年に加世田市教育委員会によって

調査され、石坂式・塞ノ神式・岩崎上層式・市来式土器、古墳時代の住居跡、中世山城の掘立柱建物跡・塚・古道が検出された。また、都市計画に伴って現在も調査中であり、中世山城が再び全貌を現している。阿多貝塚は前期を主とする貝塚で、万之瀬川の支流堀川によって形成された沖積平野に突き出た標高9mの舌状台地に立地する。昭和初期寺師見國氏等によって調査され、本県の学史に残る遺跡である。昭和52年、国指定史跡に伴い確認調査が金峰町教育委員会によって実施され、塞ノ神式・轟式・曾畑式土器、晩期土器、古墳時代の住居跡等が確認されている。上焼田遺跡も前期を主とする遺跡で、田布施平野に舌状に延びた低台地の北側斜面にあり、阿多貝塚と近接している。昭和50年、鹿児島県教育委員会によって発掘調査され、塞ノ神式・轟式・春日式・黒川式・夜白式土器と少量の弥生土器が出土している。また、縄文時代の人骨2体も検出された。堀川貝塚は前期から晩期にかけての遺跡で、塘集落の北西のシラス台地の先端に立地し、春日式・並木式・阿高式・岩崎式・指宿式・鐘ヶ崎式・市来式・黒川式土器が出土している。上加世田遺跡は縄文時代晩期を主とする遺跡で、加世田川下流域の沖積平野にのぞむ標高20mの台地縁辺に立地する。昭和43年から48年まで、6次にわたって鹿児島県史跡調査会をはじめ加世田市教育委員会によって調査が行われ、上加世田式土器、深鉢・浅鉢をはじめ、南九州では数少ない土偶の他、軽石製岩偶、石棒を多数出土し、また、これらと共伴する斐翠の原石や管玉・小玉・勾玉・石斧等も出土した。加世田市は昭和58年夏、集中豪雨に見舞われ、加世田川の氾濫により多大の被害を受けた。そこで、加世田川河川改修工事が行われ、その中に上加世田遺跡が含まれることから、昭和59・60年調査を行った。その結果、やはり晩期が主であったが早期・前期の遺物、古墳時代の住居跡、歴史時代の掘立柱建物跡、製鉄遺構が確認された。下原遺跡は金峰町役場の南側、沖積平野に突き出た舌状台地に立地する。昭和52年、金峰中学校建設に伴い発掘調査が金峰町教育委員会によって実施され、轟式・曾畑式・夜白式土器や石包丁が出土した。晩期の土器片に刳痕のついたものがあり、石包丁の出土とともに稲作を考える上で重要な遺跡となっている。

#### 弥生時代

弥生時代の遺跡として、高橋貝塚(17)、下小路遺跡(16)、松木藪遺跡(6)、中津野遺跡(11)があげられる。高橋貝塚は前期を主とする貝塚で、万之瀬川の支流堀川の右岸、標高11mの洪積世砂丘上に形成された貝塚で、吹上砂丘の内陸部の最東端に立地する。昭和37・38年に河口貞徳氏が発掘し、縄文時代晩期の夜白式土器と高橋Ⅰ式土器が共伴したことや最古の鉄器が出土したことで本県の学史に残る遺跡となった。また、南海産の貝を素材にした貝輪や南海産貝が出土し、交易範囲の広大さを示した。下小路遺跡は高橋貝塚の北方に位置する中期の埋葬遺跡で、昭和51年に河口貞徳氏により調査が行われ、須玖式土器を用いた甕棺墓で、棺内の人骨にはゴホウラ製の貝輪が着装されていた。松木藪遺跡は後期の遺跡で、金峰山を背に田布施平野へ突出する尾下台地先端近くに立地する。昭和53年、本田道輝氏等により発掘された。V字状の溝状遺構が検出され、遺構内からは、本県においてこれまで不明確であった後期の土器が多量に出土し、弥生土器編年の空白部を埋める好資料となっている。中津野遺跡は中岳北

西麓の標高約30mの台地に立地し、昭和25年河口貞徳氏が発掘した。壺・甕・蓋・高坏・鉢・手捏土器等が40個以上完形のまま、径約5mの三段に掘り込められた竪穴から検出された。また、「薩摩式」と呼ばれる製塩土器も出土している。終末期の遺跡である。

### 古墳時代

本県には円墳、前方後円墳の高塚古墳と隼人族の墓制といわれる地下式横穴・地下式板石積石室が知られている。高塚古墳は大隅地方、北薩西海岸地方にみられ、地下式横穴は宮崎県から大隅地方・北始良・伊佐に、地下式板石積石室は川内川流域から熊本県南部まで分布する。阿多地方では、以上の形式の古墳はみられないが、加世田市万世に六堂会箱式石棺墓（相星古墳）がある。六堂会箱式石棺墓は、昭和6年に発見されたもので、山地から南へ突出する舌状台地の先端部に立地する。長さ225cm、幅80cmの組合式箱式石棺で深さは約60cmあり、2枚の板石で蓋石としている。石棺の内側には、丹が塗られた箇所がみられる。副葬品は180cmの鉄剣と刀子が小玉と一緒に埋葬されていた。この箱式石棺は本県では西海岸だけにみられるもので、切通古墳（出水市）、鬼塚2号墳（長島町）、御釣場古墳（川内市）が知られている。また、生活跡としては前述したように、村原（梶ノ原）遺跡、上加世田遺跡、中小路遺跡から成川式土器と共に住居跡が検出されている。

### 古代

金峰町は旧郡の阿多郡に属している。阿多郡には鷹屋・葛例・田水 阿多の四郷があり鷹屋は今の加世田、葛例は勝目、田水は田伏を当てている。ただ、郡衙の所在地は不明である。小中原遺跡遺跡が郡衙の可能性が強いことから、この阿多一帯で調査が進めば、古代史の謎も解けてくる可能性がある。金峰町ではこの時代の遺跡として、尾下台地遺跡群が知られている。その他、浦之名でも奈良～平安時代の遺物の散布がみられる。隣の加世田市には、杉本寺遺跡があり奈良時代の蔵骨器が、土師器・灯明皿・埴と共に発見されている。また、上加世田遺からは、「久米」と墨書きされた奈良時代の土師器碗が出土している。

### 中世

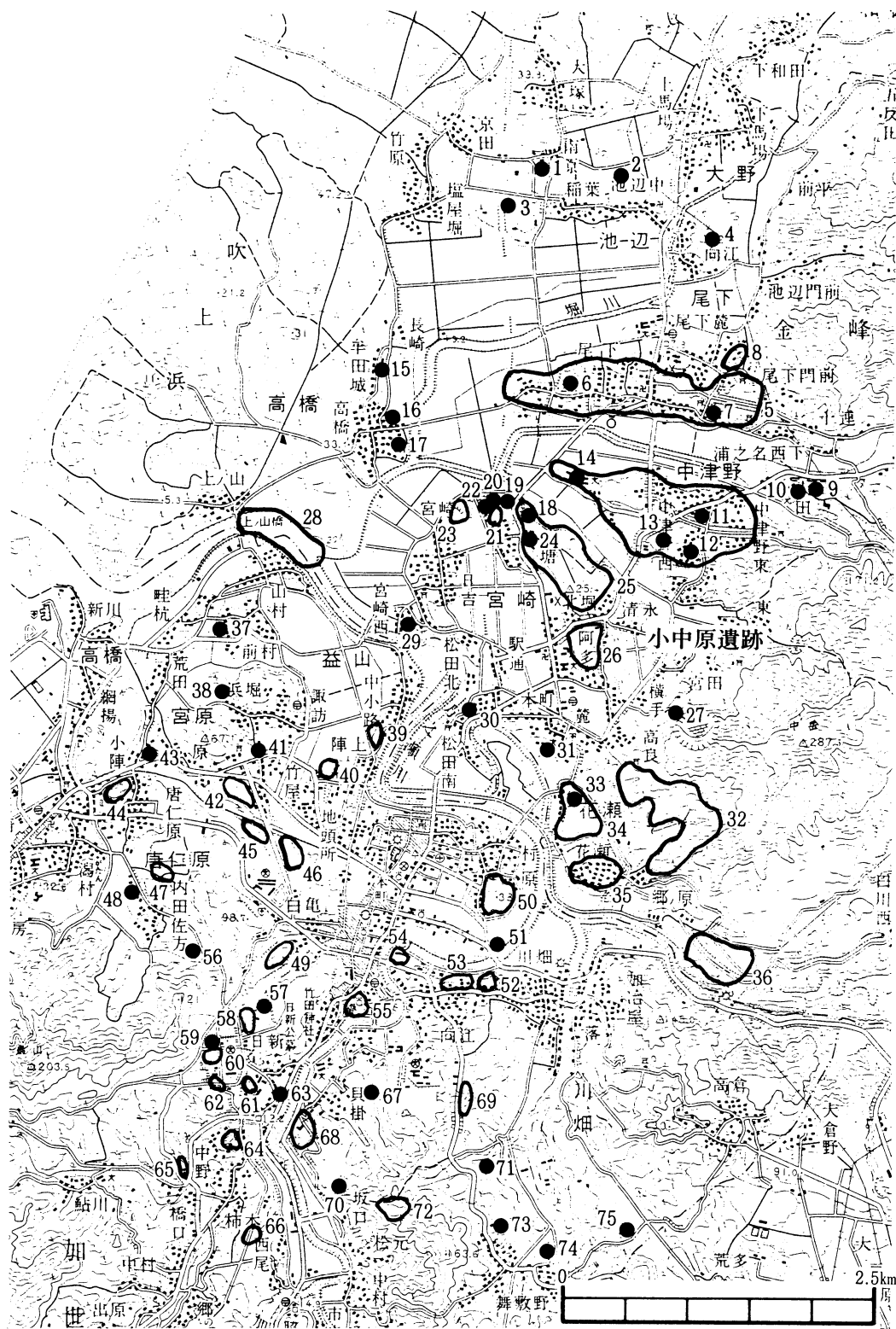
金峰町では、鶴之城・上床城・貝殻崎城・古城・亀ヶ城・江田城・牟田城・牟礼ヶ城・今城の中世城館が知られ、万之瀬川の対面には別府城の支城である、現在も調査中である村原遺跡の尾守ヶ城が知られている。

小中原遺跡のある台地先端には、鮫島一族が建久3年～応永年間に居城していた貝殻崎城があり、遺跡より約1kmの台地南端の万之瀬川沿いには、保延年間から阿多氏・島津氏が居城した別名「阿多城」と呼ばれる鶴ヶ城がある。

引用文献

- 注1 枕崎市教育委員会「石橋遺跡」枕崎市埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 1987
- 注2 枕崎市教育委員会「奥木場遺跡」枕崎市埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 1987
- 注3 枕崎市教育委員会「円妙ヶ堀遺跡」枕崎市埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 1988
- 注4 吹上町教育委員会「内門堀遺跡」吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 1988
- 注5 吹上町教育委員会「塚ノ越遺跡」吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 1990
- 注6 加世田市教育委員会「村原(柁ノ原)遺跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)1977  
加世田市教育委員会「村原(柁ノ原)遺跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(5)1987
- 注7 金峰町教育委員会「阿多貝塚」金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1978
- 注8 鹿児島県教育委員会「上焼田遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 1977
- 注9 有元彰順「堀川貝塚について」鹿児島考古10 1974
- 注10 河口貞徳『河口貞徳先生古希記念著作集下巻』1983  
加世田市教育委員会「上加世田遺跡-1」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 1985  
加世田市教育委員会「上加世田遺跡-2」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 1987
- 注11 鹿児島県教育委員会『埋蔵文化財の知識』1986
- 注12 河口貞徳「鹿児島県高橋貝塚」考古学集刊3-2 1965
- 注13 河口貞徳「下小路遺跡」鹿児島考古12 1976
- 注14 本田道輝「松木蘭遺跡出土の土器について」鹿児島考古14 1980  
本田道輝「松木蘭1号住居址出土土器とその意義」鹿大史学32 1984
- 注15 河口貞徳「鹿児島県の弥生式諸遺蹟について」鹿児島県考古学会紀要2 1952  
春成秀爾「鹿児島県日置郡中津野遺跡出土の製塩土器」鹿児島考古6 1972
- 注16 土持鋤夫・住谷正節「薩摩萬世町六堂會古墳」古代文化3-3 1942
- 注17 川内市教育委員会「御釣場古墳」
- 注18 立神次郎「中小路遺跡」鹿児島県考古学会平成2年度秋季大会発表要旨 1989
- 注19 『加世田市史』上巻 1986





第2図 小中原遺跡の位置及び周辺遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧表(1)

番号	遺跡名	所在地	時代	遺物・備考	文献
1	南原 A	金峰町大野南原	縄文(中・後)	竊式・黒曜石	①
2	南原 B	〃 大野南原	弥生	弥生式土器散布	②
3	塩屋堀	〃 大野塩屋堀	中世		②
4	牟礼ヶ城跡	〃 池辺小城園地	鎌倉～室町	二階堂氏居城 別名池辺城	③
5	尾下台地遺跡群	〃 尾下	縄文～室町		
6	松木園	〃 尾下松木園	弥生(後)	溝状遺構・松木園Ⅰ・Ⅱ式	④⑤
7	筆付	〃 尾下筆付	弥生(後)	弥生土器片散布	②
8	亀ヶ城跡	〃 尾下城柵他	室町	相州島津家居城 別名田布施城	③
9	上床城跡	〃 浦之名上床原他	室町	上床氏居城	③
10	上床原	〃 浦之名西下	弥生(後)	弥生式土器散布	②
11	中津野	〃 中津野1119	弥生(終末)	竪穴状遺構・中津野式・製塩土器	⑤
12	加治屋坂	〃 中津野加治屋坂	弥生	弥生式土器・石斧	②
13	江田城跡	〃 中津野城之越	室町	別名城越城・中津野城	③
14	下原	〃 中津野下原	縄文(前中後)	竊式・曾畑式・夜臼式・石包丁	⑥
15	牟田城跡	〃 高橋真門砂入	鎌倉	二階堂氏居城 別名高田城	③
16	下小路	〃 高橋下小路	弥生(中)	合口甕棺・貝輪・人骨	⑦
17	高橋貝塚	〃 高橋	縄文(晩)・弥生	住居跡・夜臼式・高橋式・骨角器	⑧
18	貝殻崎城跡	〃 宮崎貝殻崎	鎌倉～室町	鮫島氏居城 別名鮫島城	③
19	阿多貝塚	〃 宮崎上焼田	縄文早～弥生後	竊式・曾畑式・獣骨・貝殻・甕棺	⑨
20	堀川貝塚	〃 宮崎	縄文(中～晩)	春日式・阿高式・黒川式・石斧	⑩
21	下堀	〃 宮崎上焼田	縄文～古墳		②
22	上焼田	〃 宮崎上焼田	縄文早前晩・弥生	壺ノ神式・竊式・黒川式	⑪
23	天神原	〃 宮崎天神原	縄文・弥生・古墳	壺・甕・高杯・土師器	②
24	塘	〃 宮崎塘	弥生(中)	甕形土器	②
25	新山北堀	〃 新山2113	弥生(中)	弥生土器	②
26	小中原	〃 新山小中原	縄文・平安・鎌倉	前平式・建物跡・土師器・須恵器	本文
27	新山南	〃 新山南	弥生(中)	弥生土器	②
28	万之瀬川川床	〃 益山万之瀬川	弥生・古墳	土器片	②
29	古城跡	〃 宮崎城之岡	室町	別名城之岡・宮崎城	③
30	松田南	〃 宮崎	縄文(早)・古墳	土器片	②
31	鶴之城跡	〃 花瀬城内地	平安末期～室町	阿多氏・島津氏居城 別名阿多城	③
32	中岳山麓古墳群	〃 花瀬	平安	須恵器窯跡	⑫⑬
33	今城跡	〃 花瀬上今城原	室町	臨時城砦	③
34	花瀬今城原	〃 花瀬今城原	縄文～古墳	土器片	②

第2表 周辺の遺跡一覧表(2)

番号	遺跡名	所在地	時代	遺物・備考	文献
35	花瀬	金峰町花瀬	古墳	土器片	②
36	郷ノ原	〃 花瀬		土器片	②
37	鶴塚陣	加世田市益山宇都		別名鶴ノ塚陣	③
38	浜堀	〃 宮原浜堀	古墳		②
39	中小路	〃 益山中小路	弥生・古墳・鎌倉		⑭
40	陣	〃 益山陣		別府氏居城	③
41	竹屋	〃 宮原萬一畑	弥生	壺形土器	②
42	西荒田	〃 益山西荒田	縄文・古墳		②
43	小陣貝塚	〃 唐仁原小陣	縄文・弥生	土器片	②
44	小陣	〃 唐仁原山下他		益山氏居城	③
45	田武平	〃 益山田武平	縄文・古墳		②
46	下東堀	〃 宮原下東堀	縄文(早)・古墳	土器片	②
47	佐方城	〃 唐仁原佐方城		益山氏居城	③
48	佐方	〃 唐仁原佐方	弥生	弥生土器	②
49	内田城	〃 唐仁原陣ノ尾			③
50	村原・梶ノ原	〃 村原梶ノ原	縄文・古墳・城跡	吉田式・前平式・住居跡・尾守城	⑮⑯
51	永田	〃 川畑永田	古墳	土器片	②
52	花牟礼城	〃 川畑花牟礼		堀	③
53	上加世田	〃 川畑上加世田	縄文～古墳・鎌倉	上加世田式・岩偶・玉・鍛冶跡	⑰⑱
54	杉本寺	〃 川畑杉本寺	弥生	壺形土器	⑲
55	別府城跡	〃 武田城ノ山	鎌倉～室町	別府氏・島津氏居城	③
56	潮潟	〃 武田潮潟		土器片	②
57	上ノ城	〃 武田上城	弥生・鎌倉～室町	住居跡・成川式・中世城跡・青磁	⑳
58	釈迦院宇都	〃 武田釈迦院宇都	縄文(早晚)古墳	土器片・土師器	②
59	愛宕A	〃 武田愛宕	縄文(早晚)	土器片	②
60	花敷野三本松	〃 唐仁原三本松	弥生	弥生土器片散布	②
61	愛宕B	〃 武田愛宕	縄文(早前)	押型文・石坂式・石鎌・石匙	②
62	川路	〃 武田川路	縄文(早)・古墳	土器片	②
63	愛宕山	〃 武田愛宕後	弥生	土器片	②
64	柿本城跡	〃 武田中野他	平安末～	別府氏居城	③
65	登ノ上	〃 武田登ノ上	縄文(早)	前平式	②
66	古城	〃 内山田原他			②
67	屋地	〃 武田屋地	弥生	土器片	②
68	荒瀬ノ下	〃 武田荒瀬ノ下	古墳	土器片	②

第3表 周辺の遺跡一覧表(3)

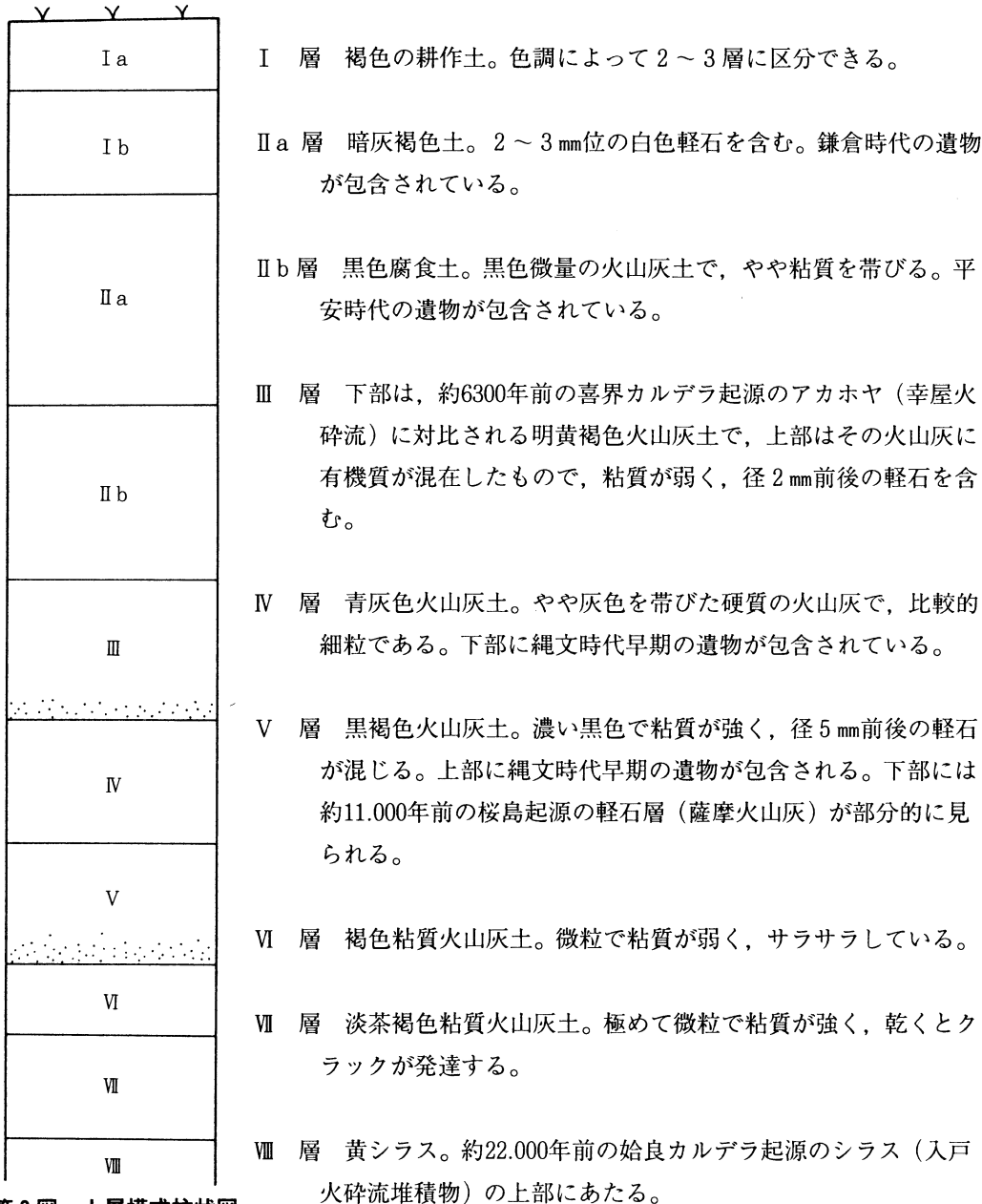
番	遺跡名	所在地	時代	遺物・備考	文献
69	遠見ヶ丘	加世田市武田遠見ヶ丘	縄文・弥生	黒川式・石斧・弥生土器片	②
70	荒瀬原	〃 武田荒瀬	弥生	土器片	②
71	みかきの	〃 川畑見掛野	弥生	土器片	②
72	荒瀬城跡	〃 武田池ノ山他	鎌倉～室町	郭・堀・土塁・虎口	③
73	祝原	〃 川畑湯間原	弥生	土器片	②
74	神山	〃 川畑神山	縄文(早)	押型文	②
75	平山尻	〃 川畑平渡瀬	縄文・弥生	土器片・石匙・黒曜石	②

文献

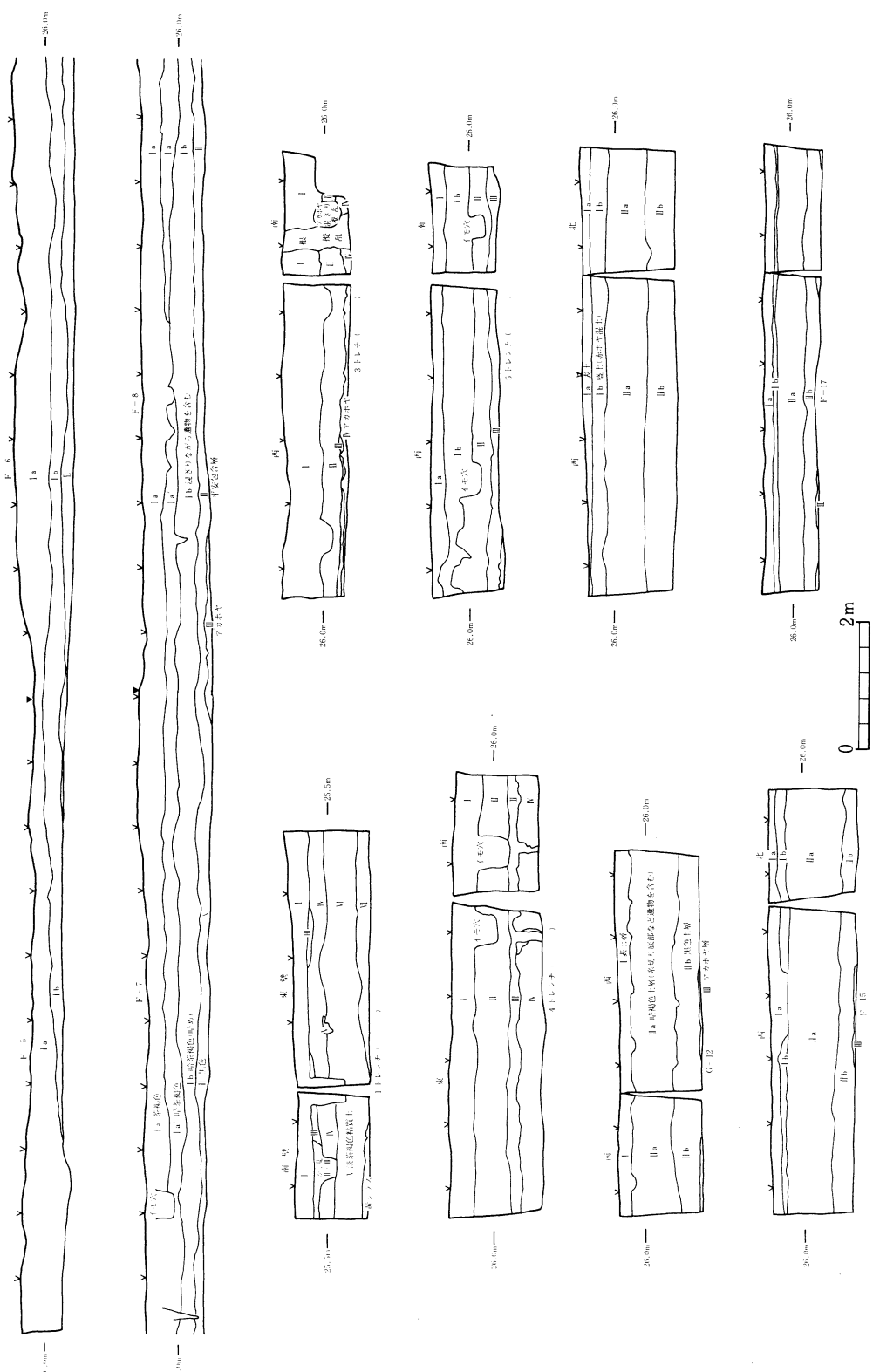
- ①寺師見国「田布施村大野の縄文遺蹟地」鹿児島県考古学会紀要4 1955.11
- ②鹿児島県教育委員会「鹿児島市町村別遺跡地名表」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書36 1985.3
- ③鹿児島県教育委員会「鹿児島の中世城館」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書40 1987.3
- ④本田道輝「松木園遺跡出土の土器について」鹿児島考古14 1976
- ⑤河口貞徳「鹿児島県の弥生式諸遺蹟について」鹿児島県考古学会紀要2 1952.11
- ⑥弥栄久志「下原遺跡」考古学年報31
- ⑦河口貞徳「入来支石墓調査概要」
- ⑧河口貞徳「鹿児島県高橋貝塚」考古学集刊3-2 1965
- ⑨金峰町教育委員会「阿多貝塚」金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書1 1978.3
- ⑩有元彰順「堀川貝塚について」鹿児島考古14 1980
- ⑪鹿児島県教育委員会「上焼田遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書5 1977.3
- ⑫上村俊雄「鹿児島県荒平須恵器古窯趾群発見の意義とその問題について」古文化談叢14 1984
- ⑬上村俊雄・坪根伸也「鹿児島県中岳山麓須恵器古窯群に関する一考察」古文化談叢15 1985
- ⑭立神次郎「中小路遺跡」鹿児島県考古学会平成2年度秋季大会発表要旨 1989.11
- ⑮加世田市教育委員会「村原(柗ノ原)遺跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書1 1977.11
- ⑯加世田市教育委員会「村原(柗ノ原)遺跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書5 1987.3
- ⑰加世田市教育委員会「上加世田遺跡1」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書3 1985.3
- ⑱加世田市教育委員会「上加世田遺跡2」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書4 1987.3
- ⑲加世田市『加世田市誌上巻』1986.12
- ⑳加世田市教育委員会「上ノ城遺跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書2 1980.3

### 第三章 層 序

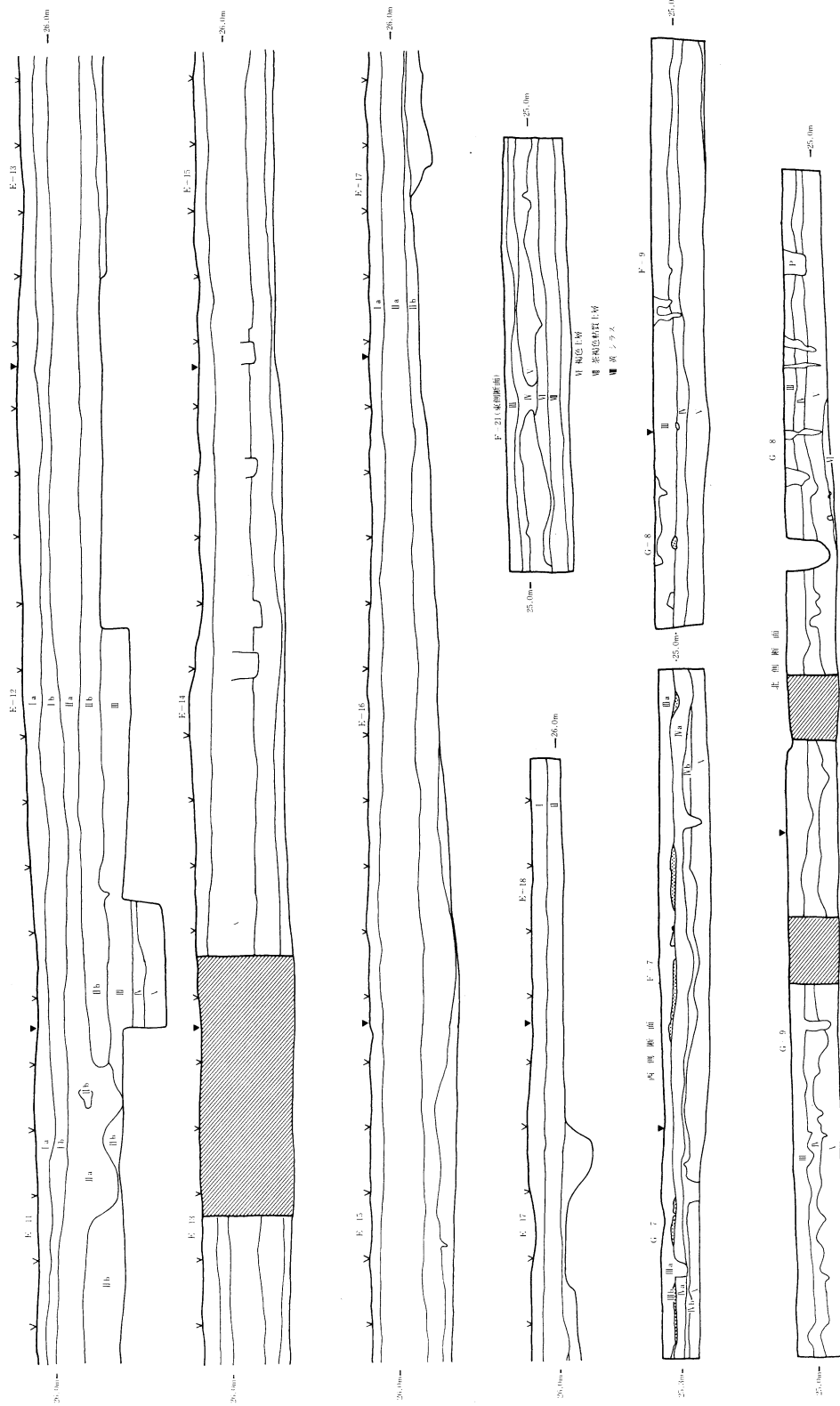
遺跡内の地層は、発掘調査対象区域が約 200mにもおよぶため、場所によって層序に若干の相違がある（東側ではV層がみられず、IIa層・IIb層の堆積が厚い。逆に西側になるとIIa・IIb層とも削平されている箇所が多く、IV～VII層が厚くなっている）が、基本的にはI層耕作土からVIII層シラスまで第 3 図のように8層に区分できる。



第3図 土層模式柱状図



第4図 土層図(1)



第5図 土層図(2)



第6図 土層図 (3)





第7図 遺跡周辺の地形図



第8図 調査地域とグリッド図



第9図 遺構配置図

## 第IV章 調査の概要

小中原遺跡は、古窯跡で知られる中岳の裾野にあたり、北西部に約3km突出した台地の、ほぼ中央部の標高27mに位置する。台地先端部には、著名な阿多貝塚がある。

調査実施にあたって10m四方を単位としてグリッドを設定することとし、道路のセンターラインを基準として東西、南北方向に10m方眼を組み、A-1、A-2……C-23と区を設定して区域名を表すこととした。(第8図)

調査の結果、遺跡は中世から縄文にかけての複合遺跡であり、そのうち主体は縄文時代(早期)と平安時代である。

### 第1節 縄文時代の調査

#### 1 草創期

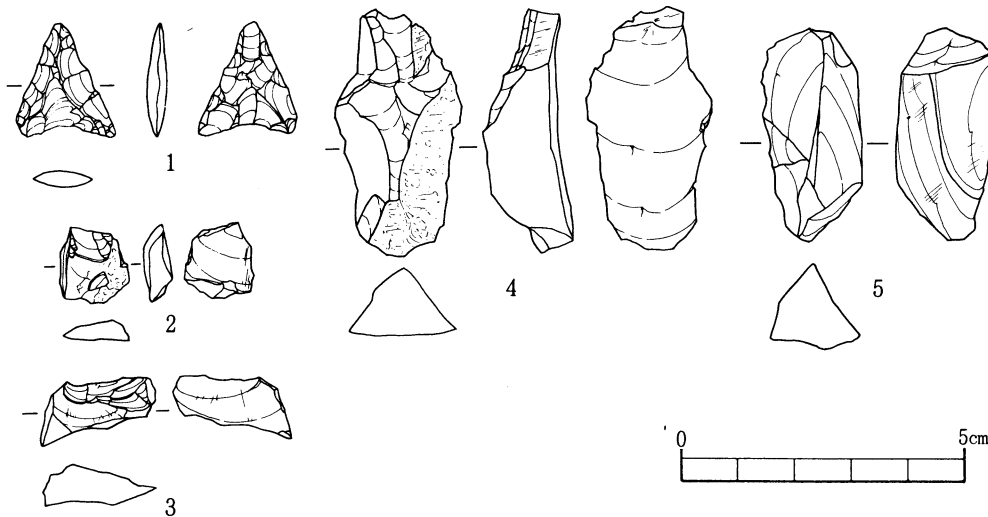
F・G-20・21区より総数74点の遺物がサツマ火山灰下のⅦ層(淡茶褐色粘質火山灰土)より出土した。当初、旧石器時代の遺物であると考え、詳細に調査したが、遺物等より縄文時代草創期の可能性が高い。

#### 石 鏃(1)

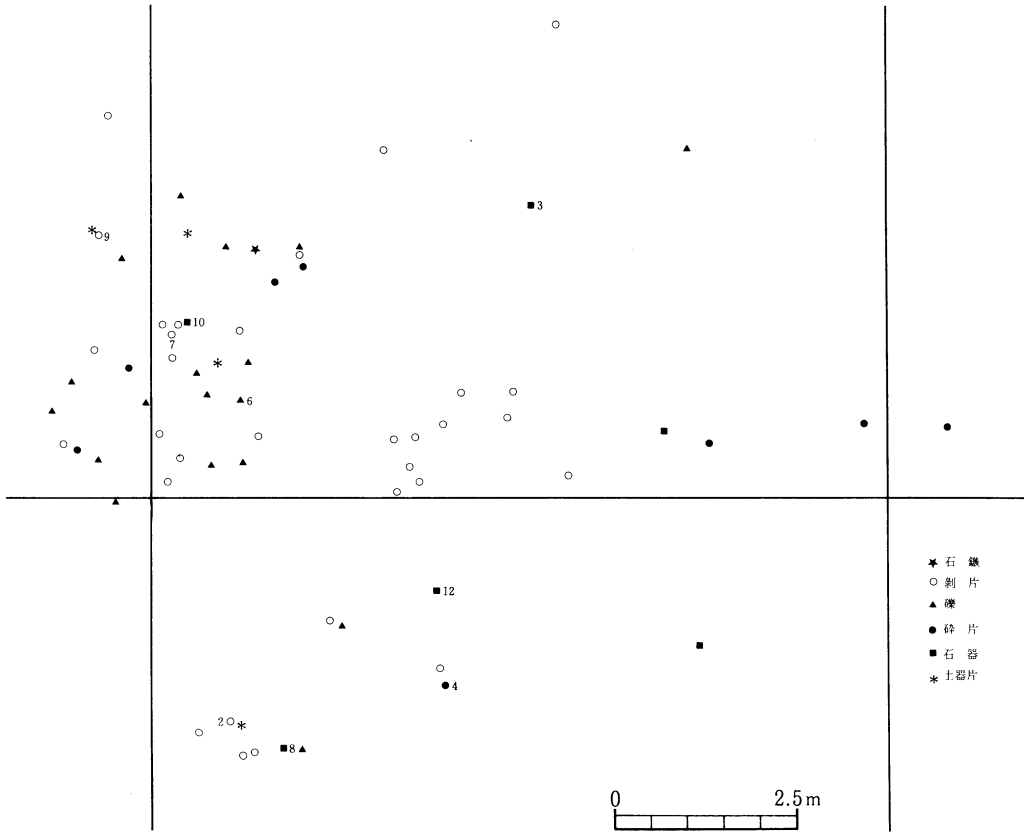
1は頁岩を石材に用い、先端部はやや鈍く、側辺がまっすぐで三角形を呈する。基部は逆刺が鋭く挟りがやや深い。長径2.1cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、重量0.85gを測る。

#### 剥片(2~9)

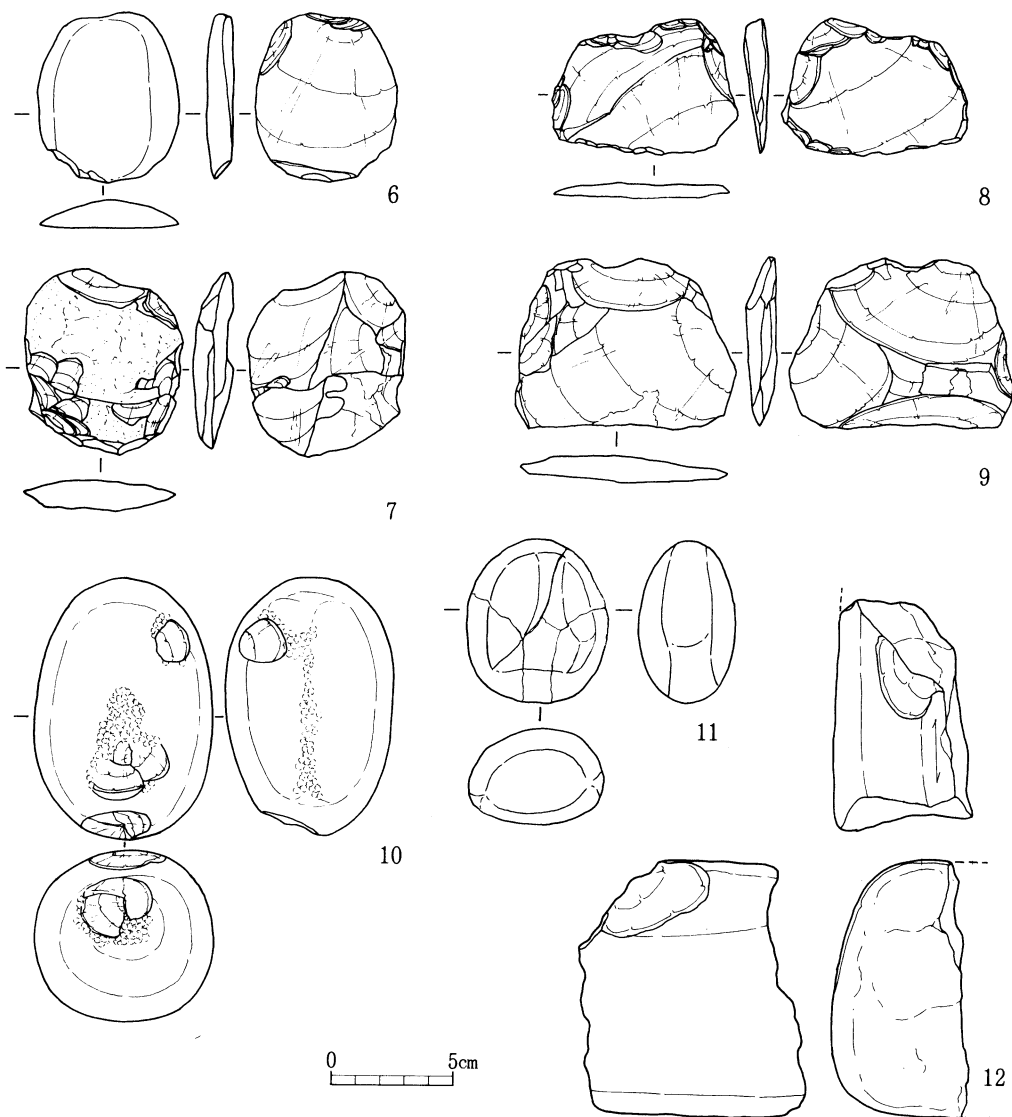
2は鉄石英で、3・4は樋脇町上牛鼻原産地の黒曜石を石材として用いている。重量は0.74g・1.01g・9.9gを測る。5は気泡の多い灰色を呈した黒曜石を用いた剥片で、8.7gを測る。6~9は大型の剥片である。9は安山岩で他は全て頁岩である。8は二次剥離を加えて刃



第10図 縄文時代石器(1) 石鏃・剥片



第11図 縄文時代草創期遺物出土分布図



第12図 縄文時代石器（2） 剥片・スクレイパー・磨石

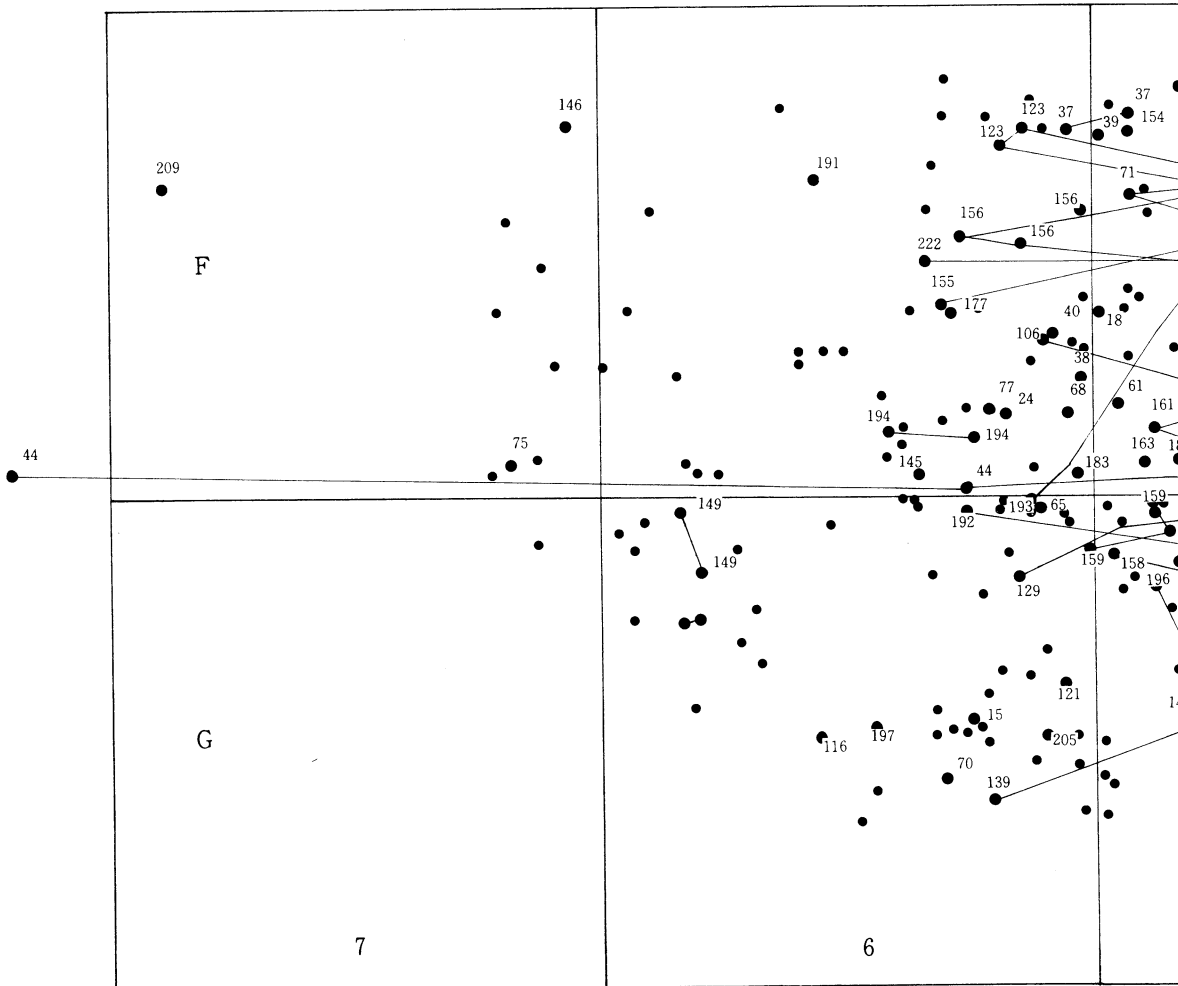
部を形成している。重量は 30.9g・64.2g・56.3g・74.2gを測る。

磨石（10・11）

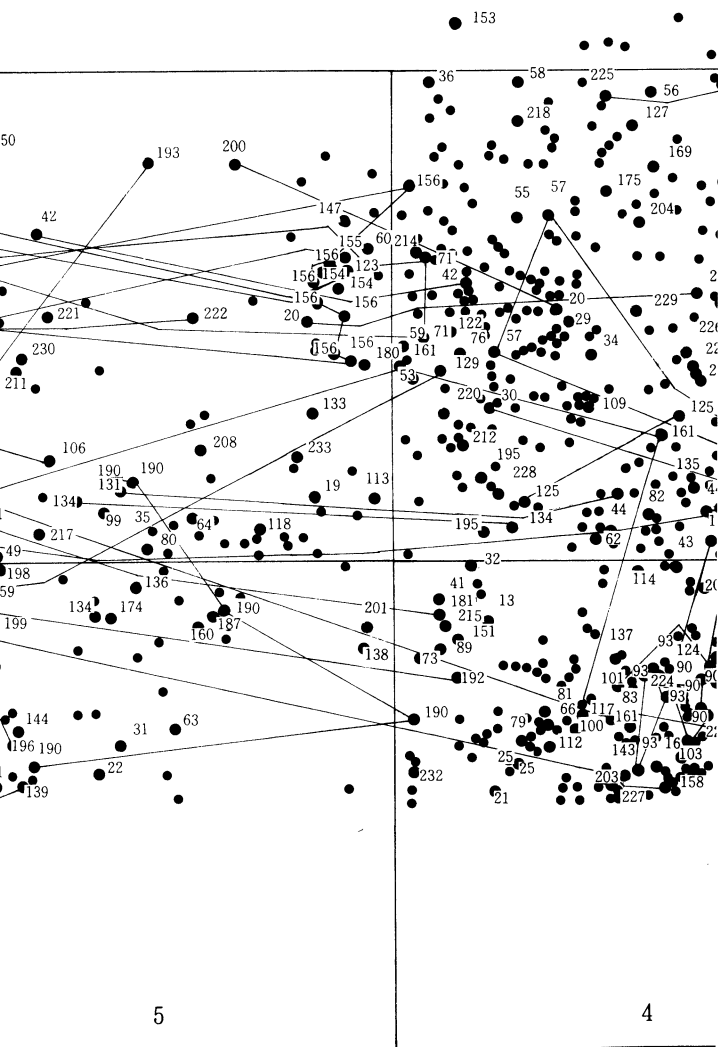
10・11は砂岩製の磨石である。敲き、押し潰し、磨るといった多機能をもつものである。10は長楕円形を呈し、表裏面の両方のほぼ中央に連続した敲打による潰れ痕があり、上端側縁部にも敲打痕がみられる。重量は 752gを測る。

石皿（12）

12は石皿の欠損品である。割り石を利用したもので、中央部の研磨痕は認められないが、敲打による整形等から石皿と思われる。重量は 172gを測る。

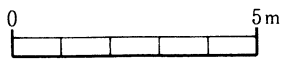
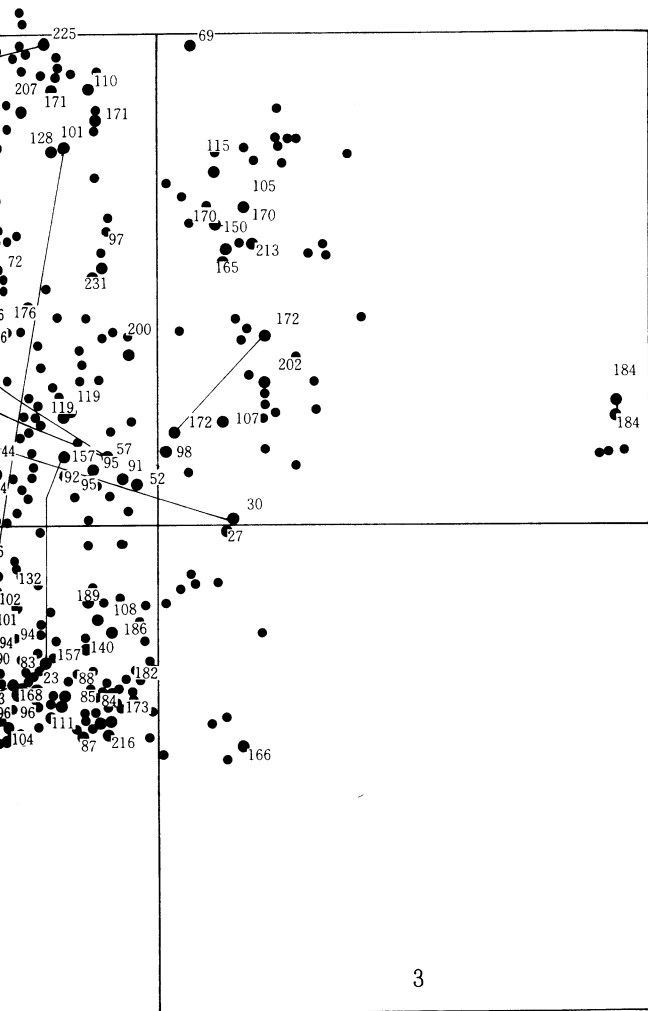


第13図



繩文時代早期土器出土分布図





## 2 早期

F・G-4～6区のⅣ層下部の青灰色火山灰土とⅤ層上部の黒褐色火山灰土から多くの縄文時代早期の遺物が出土した。

### 遺構

遺構は十数個の礫がやや集中した状態の集石遺構が2ヶ所検出されたが、掘り込み等は認められず、集石下位は平坦面であった。

### 出土遺物

第Ⅳ・Ⅴ層から出土した縄文時代早期の遺物は総計2,814点で、その内訳は土器片 2,413点、石器及び石片77点、礫 324点である。これらは、調査区域内全域から万遍なく出土したのでなく、第13図からわかるようにF・G-4～6区に集中している。

### 土器

出土した土器は、完形に近い少数の土器を除くと大部分が小碎片であるが、器形・文様等により大きく次のように分類できる。

I類……口縁部は直行し、胴部は直線的に平底の底部となり、底部径は口縁部径よりわずかに小さくなる円筒形土器である。文様は、口唇部と口縁部だけに貝殻腹縁の施文具による押圧文を施すが、口縁部位に制約されるものである。胴部は器外面に横位・斜位の浅い貝殻条痕文を施すものである。口縁部文様の差位により a～f に分類される。

II類……クサビ形凸帯を有し、器形は、口縁部がわずかに外反し、胴部は口縁部直下から直線的に底部へ移行し、器壁の厚さは口縁部から胴部、底部まで均等な薄手の円筒形土器となる。口唇部は平坦で、刻目文を施す。文様は、口縁部直下に貝殻腹縁で、横位に押引文や押圧文を施し、胴部には、横位および斜位の貝殻条痕文を施し、その上から再度、貝殻腹縁の刺突による縦列文を施す。底部側面は篋状施文具によって縦位の沈線文を丁寧に施している。

III類……口縁部は直行するものと、やや外反するものがある。底部径は口縁部径よりわずかに小さく、口縁部直下から直線的に底部へ移行する円筒形土器となる。文様は、口縁部直下に貝殻腹縁で押圧文を施し、胴部も貝殻腹縁による押引文・押圧文までである。口唇部は平坦で、刻目文を施す。

IV類……器形の角筒を除けば円筒土器 I 類に類似する土器である。4隅が山形となるものと平坦なものがある。口唇部は平坦で口縁部はやや内傾する。胴部はわずかに丸味を帯びる。文様は口唇部に丁寧な刻目文を施したものもある。口縁部は貝殻腹縁を縦位に刺突文を施す。胴部から底部全面に貝殻条痕を横位・斜位に施し、さらに篋や貝殻腹縁で沈線文や刺突線文を「Y」字形、菱形文を縦位に施文する。相接する器面の接合部分は貝殻腹縁による刺突文を施す。

V類……円筒形土器で上記以外のものを一括した。

## I 類土器

### I a 類 (13~18)

I 層より出土する土器で、量的には少ない。口縁部は直行し、胴部は直線的な円筒形土器である。文様は、口唇部と口縁部だけに貝殻状施文具による押圧文を施し、口縁部位に制約される。器外面に横位に浅い貝殻条痕文が施されているが、13~16は横ナデ整形を行っている。又、内面も貝殻条痕文を施して、横ナデ整形が行われている。口唇部内側に稜をもつ16~18と稜がなく鋭利な口唇部となる13~15がある。口唇部には篋状施文具で押圧文を施し、小さな波状口縁となる。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。

### I b 類 (19~40)

I a と同様の円筒形土器であるが、口唇部が平坦なものである。口縁部は直行し、胴部は直線的である。文様は、口縁部だけに貝殻状施文具による押圧文を施しているもの19~24と、押引文を施しているもの25~40に分けられる。37~40は貝殻腹縁による押引文を2列施すものである。器外面には横位、斜位の貝殻条痕文が施される。23・40は浅い条痕を施文した後、横ナデ整形が行われている。器面内部には、底部から胴部へ整形及び調整のための引っかけの痕跡が認められ、口縁部付近では横位方向に痕跡が認められる。口縁部から口唇部にかけて研磨されているもの28~40もある。34は内面全体に横位方向のナデ整形が認められる。色調は褐色~暗茶褐色を呈し、焼成はやや良好なものが多い。

### I c 類 (41~43)

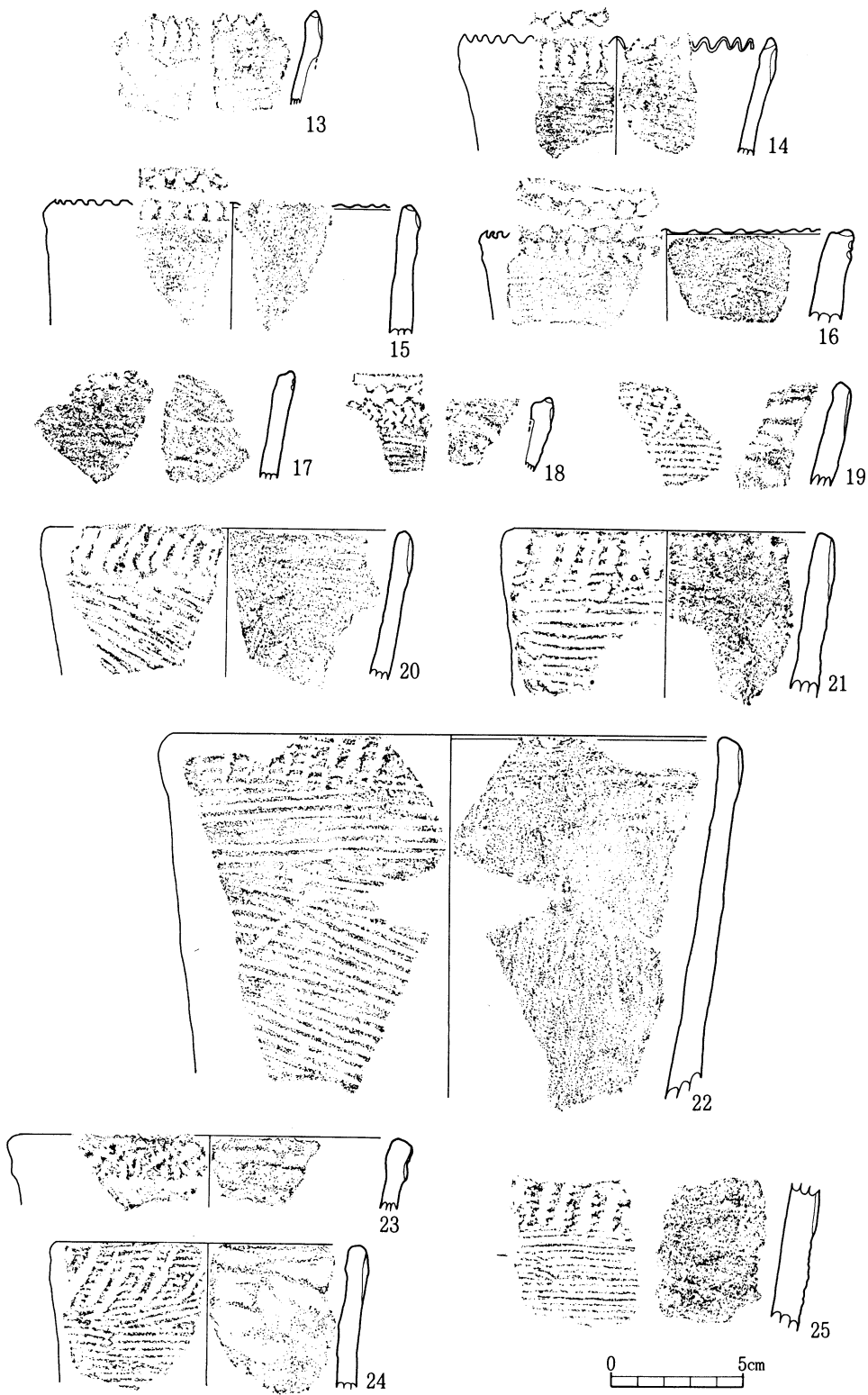
IV層より出土する土器で、少量である。口縁部は直行し、胴部は直線的な円筒形土器である。口唇部は平坦である。文様は、口縁部直下には2~5段に貝殻刺突線を口縁部の弧状に沿って施す。器外面には斜位の貝殻条痕文が施される。器面内は、斜ナデ整形が、口縁部付近では横位方向のナデ整形が認められる。色調は暗茶褐色を呈し、胎土に石英・長石・角閃石を含み、焼成はやや粗である。

### I d 類 (44~51)

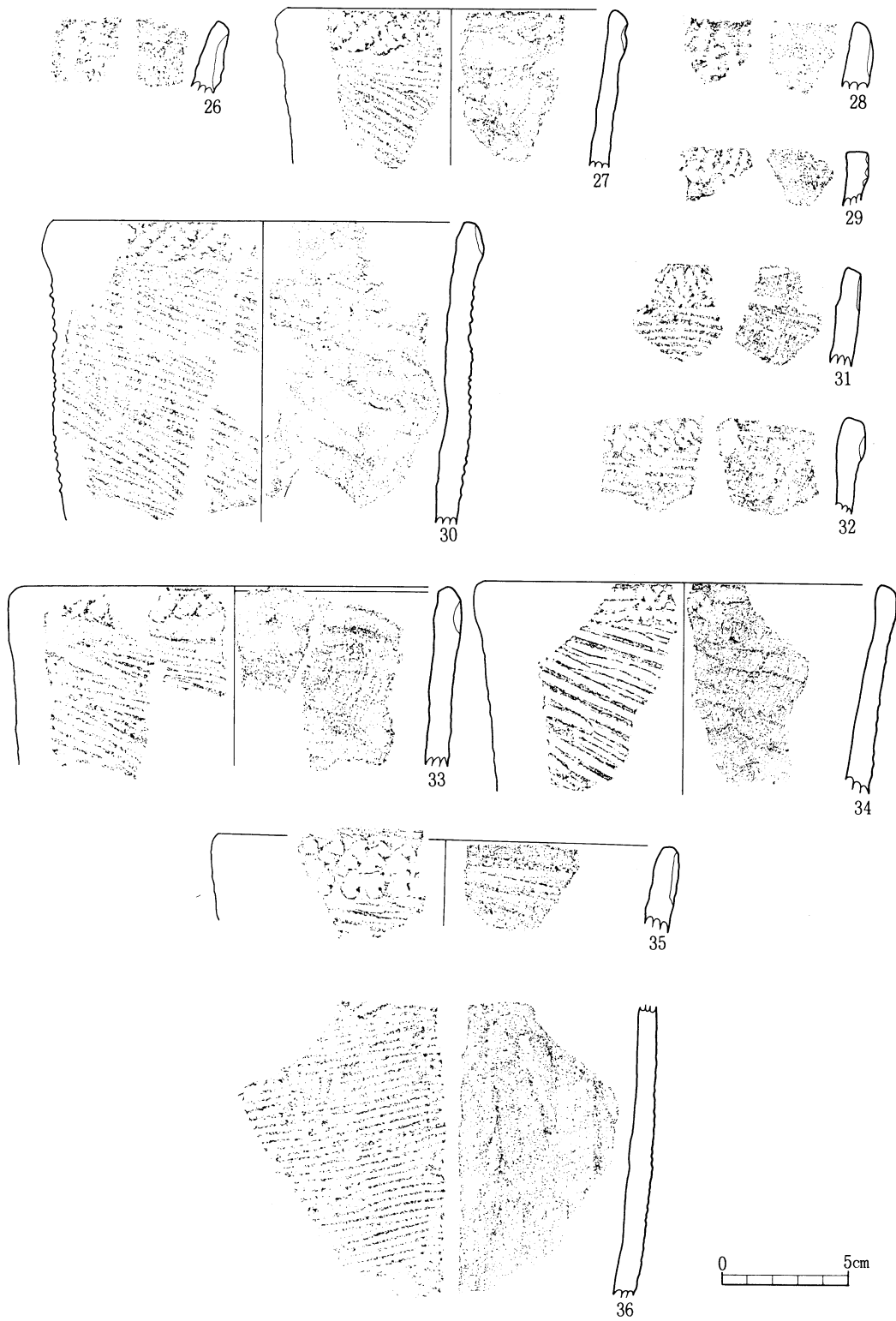
口縁部は直行し、胴部は直線的な円筒形土器である。口唇部は平坦で、文様は口縁部だけに二枚貝(ハイガイ等)の貝殻頂部や、叉状施文具で横方向に2条押圧している。器外面は横位・斜位に貝殻条痕文を施している。器面内部には、横位方向のナデ整形が認められる。44は底部付近を除いて復元できたものである。貝殻頂部を押圧して文様を構成し、胴部はやや深い貝殻条痕文を斜位から縦位方向に施している。口唇部は丸みを帯び、口縁部はやや内湾している。口径17.0cmを測るもので、色調は暗黄褐色を呈し、焼成は良好である。45・48も44と同様である。46・47・49~51は叉状施文具を2条横方向に押圧している。貝殻条痕文が横方向に器外面に施されている。46・50は口唇部に貝殻条痕文が斜位に施されている。

### I e 類 (52~70)

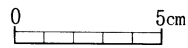
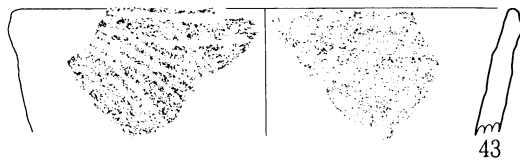
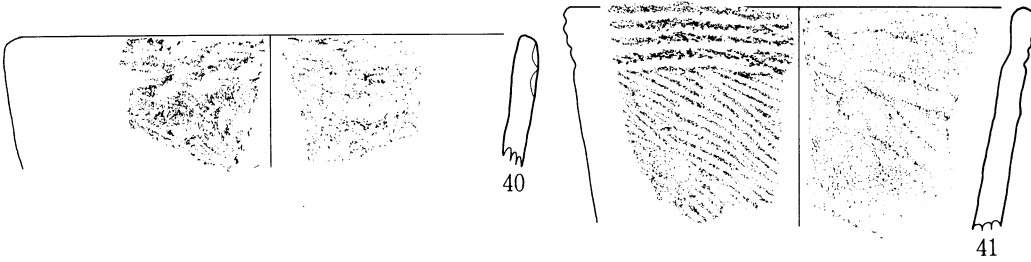
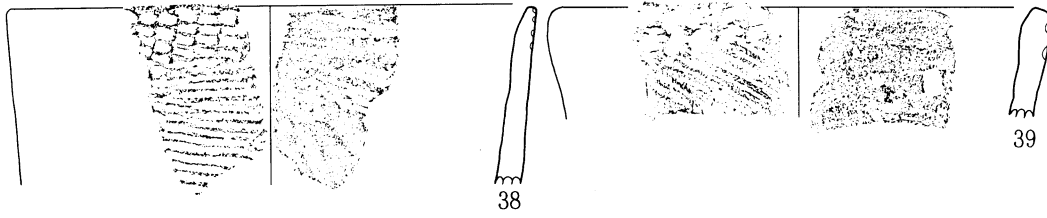
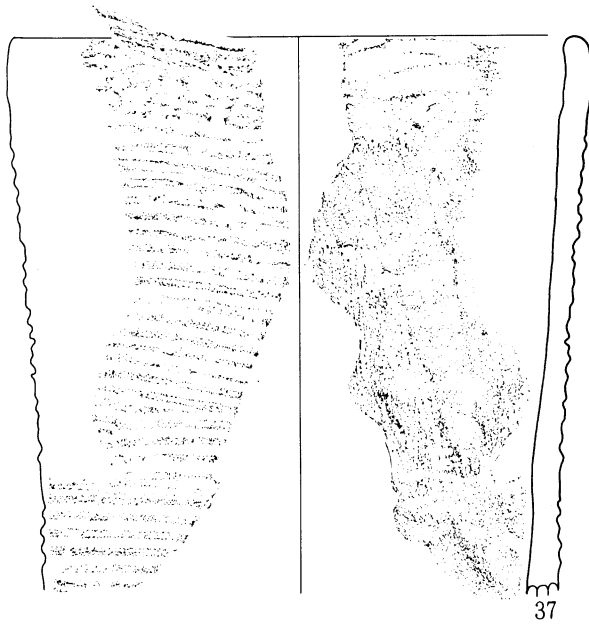
I e 類はI d 類と同様の、口縁部に貝殻状施文具による押圧文を施したものであるが、口唇部に刻目を施したもので、文様も貝殻腹縁によるやや浅く条痕を斜位・綾杉状、横位方向に施



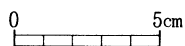
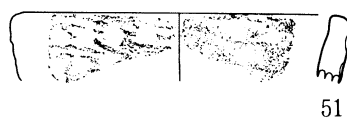
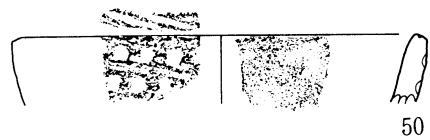
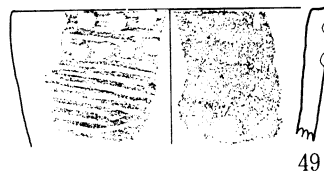
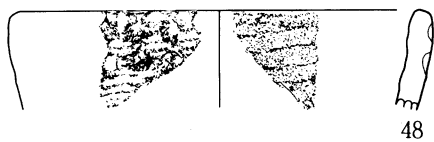
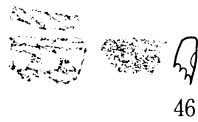
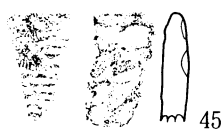
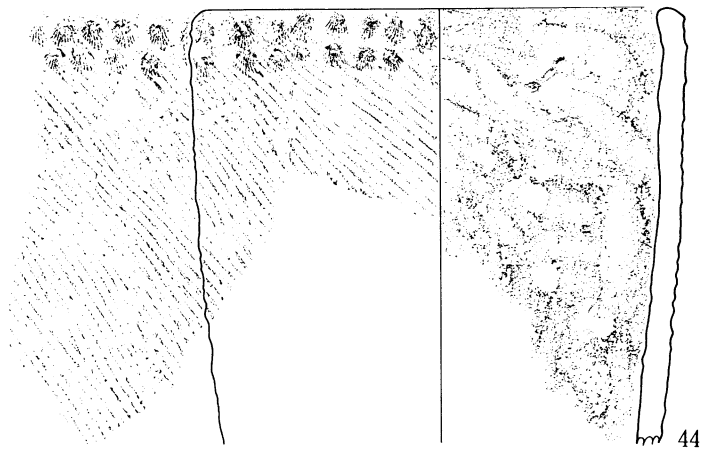
第14図 縄文時代早期土器(1)



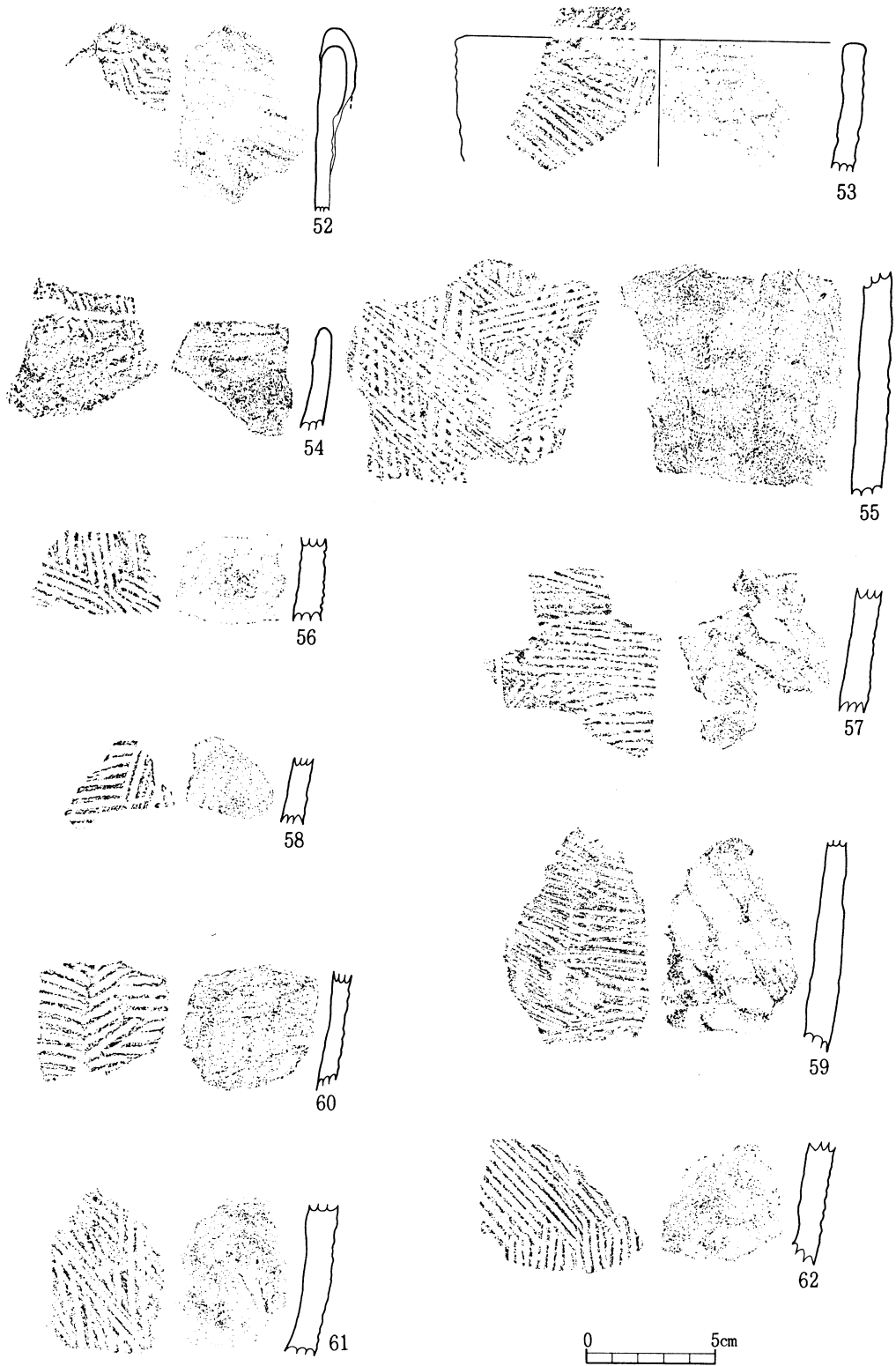
第15図 縄文時代早期土器（2）



第16図 縄文時代早期土器 (3)

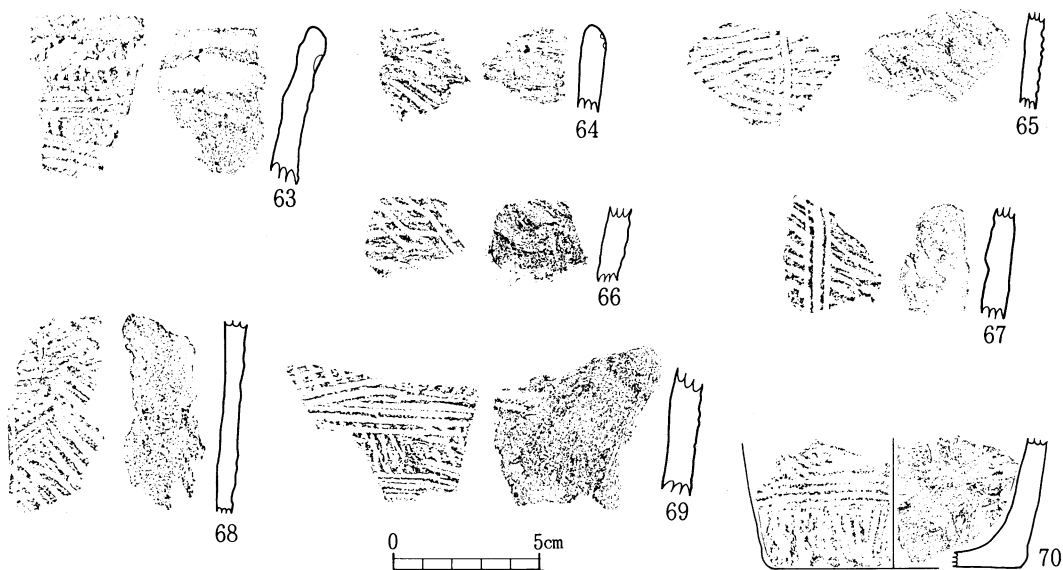


第17図 縄文時代早期土器(4)



第18図 縄文時代早期土器 (5)



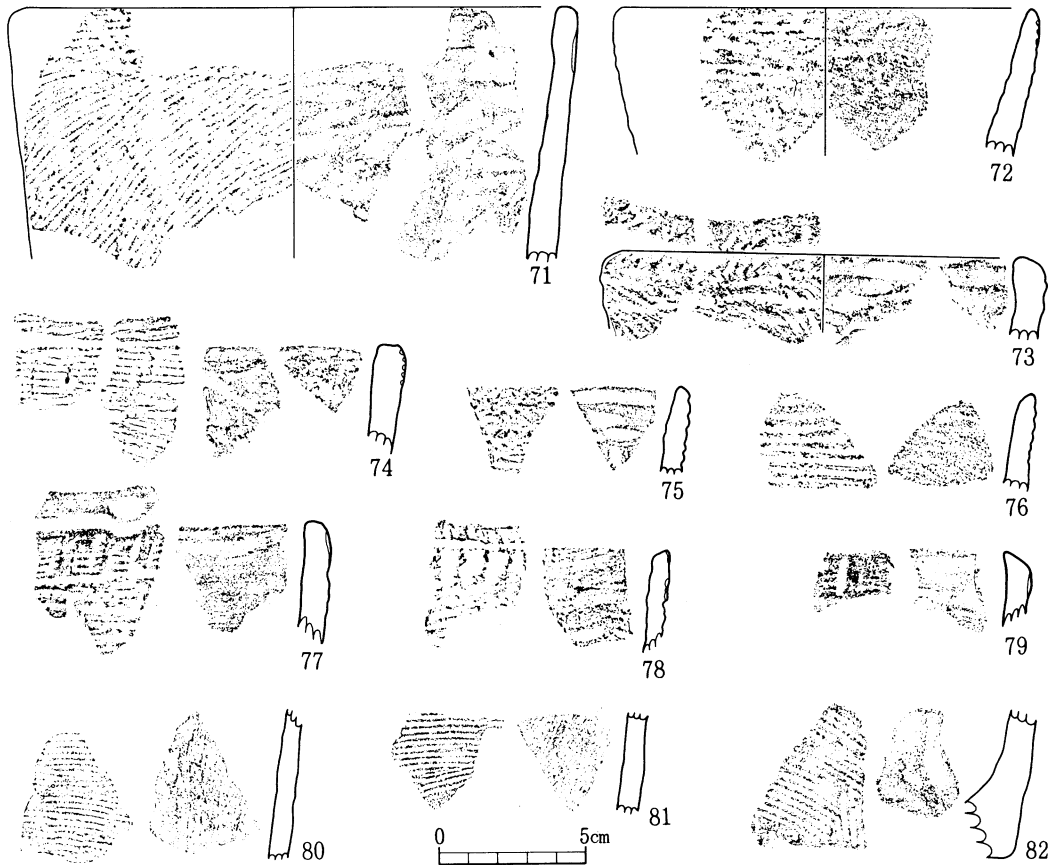


第19図 縄文時代早期土器（6）

している。52は突起部をもつもので、口縁部は直行している。器内面は横方向のナデ整形が認められる。53は、口縁部に貝殻刺突を横方向に5条巡らし、口唇部は平坦面をもち、貝殻刺突を横方向に施したもので、胴部の文様は、貝殻条痕文を稜杉状に施している。内面には横方向のナデ整形が認められる。54は、やや内湾する口縁部をもち、口縁部に貝殻腹縁による押圧文が斜位に施されたもので、口唇部は篋状施文具で刻目を施し、やや鋭利な口唇部となっている。55～59は、5～8肋の貝殻腹縁を施文具に用い、縦位・横位・斜位に条痕を重複して施すものである。色調は淡赤褐色を呈している。60は稜杉状に貝殻条痕を施している。61・62は底部付近である。斜位の条痕がそのまま底部近くまで施されている。胴部末端部には貝殻腹縁によって底部から胴部へかき上げている。63は、口縁部が外反し、貝殻腹縁によって押圧文を施し、口唇部はナデ整形によって整えている。胴部の文様は縦位方向の条痕の後、横位の貝殻条痕文を施したものである。65～69も縦位方向の条痕の後、横方向の貝殻条痕を施したものである。70は、底部径 9.0cmを測る底部で平底を呈する。胴部末端部は3～4条の貝殻の放射肋を用い、底部から胴部へかき上げている。底面はナデ整形である。

#### I f 類 (71～82)

I f 類は、貝殻腹縁による押圧文で文様体を構成するもので、胴部は間隔の狭い貝殻条痕文が横位・斜位方向に施されている。71は、直行する口縁部で胴部は直線的な円筒形土器である。口唇部は平坦で、口唇部直下に貝殻腹縁を鋸歯状に押圧し、その下位に貝殻腹縁で押圧文を2条巡らすものである。胴部は斜位の貝殻条痕が施され、内面はナデ整形が認められる。72・73・75は、口唇部直下に貝殻腹縁で押圧文を3～7条巡らしたもので、73は口唇部にも腹縁押圧がみられる。75は、やや外反する口縁部である。74は口唇部直下に貝殻腹縁による押引きを施



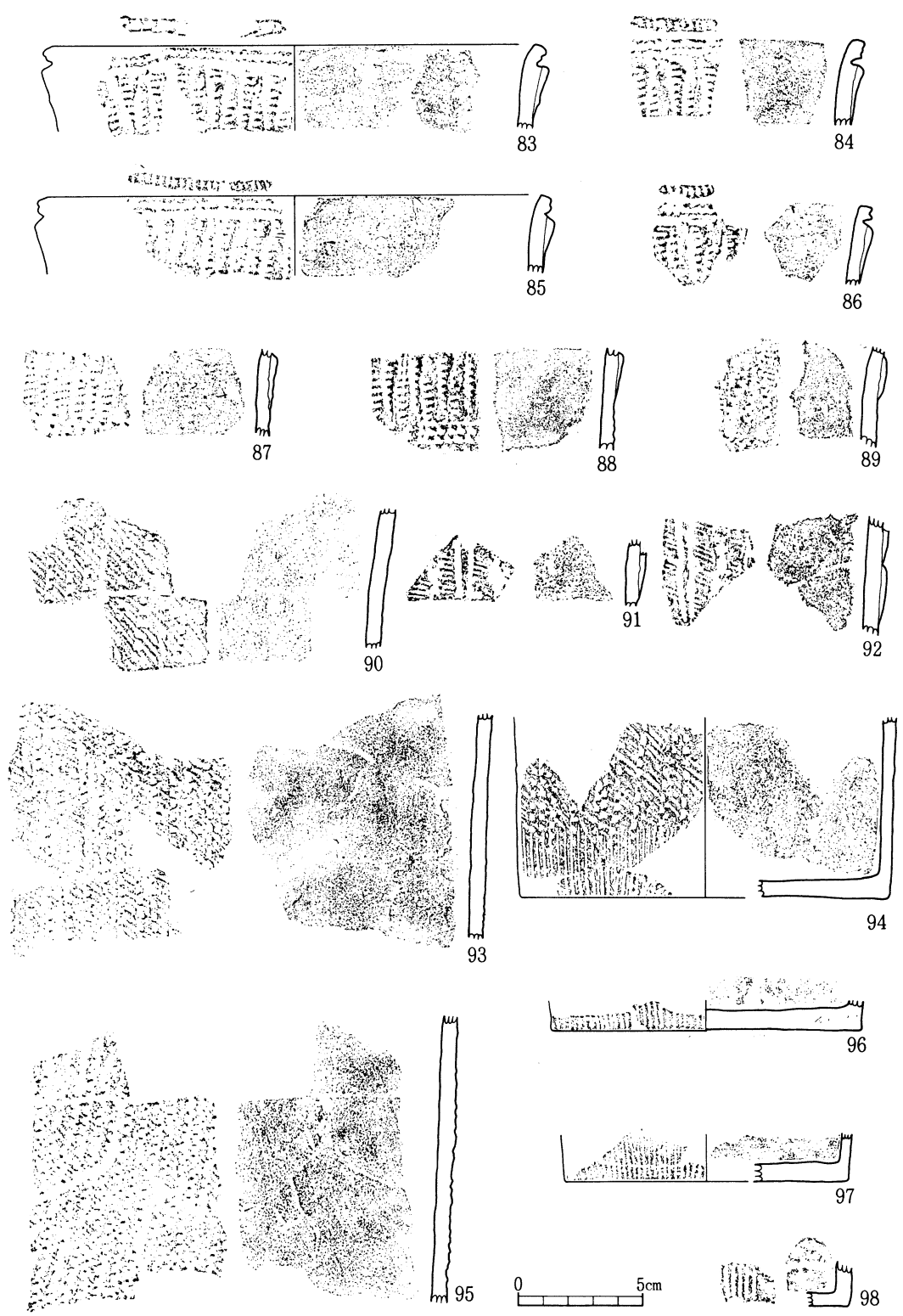
第20図 縄文時代早期土器（7）

し、その下位に3条の押圧文を巡らす文様である。口唇部は貝殻条痕で整形し平坦面となっている。76は4条の押圧文を巡らし、その下位に縦方向の貝殻腹縁押圧を施したものである。77・79は押しきと押圧文で文様構成したものである。口唇部はナデ整形で、指頭による刺突がみられる。78も口縁部に貝殻腹縁による押しきと押圧文で文様を施したもので、口唇部に篋状施文具による刻目が施されている。82は平底の底部である。

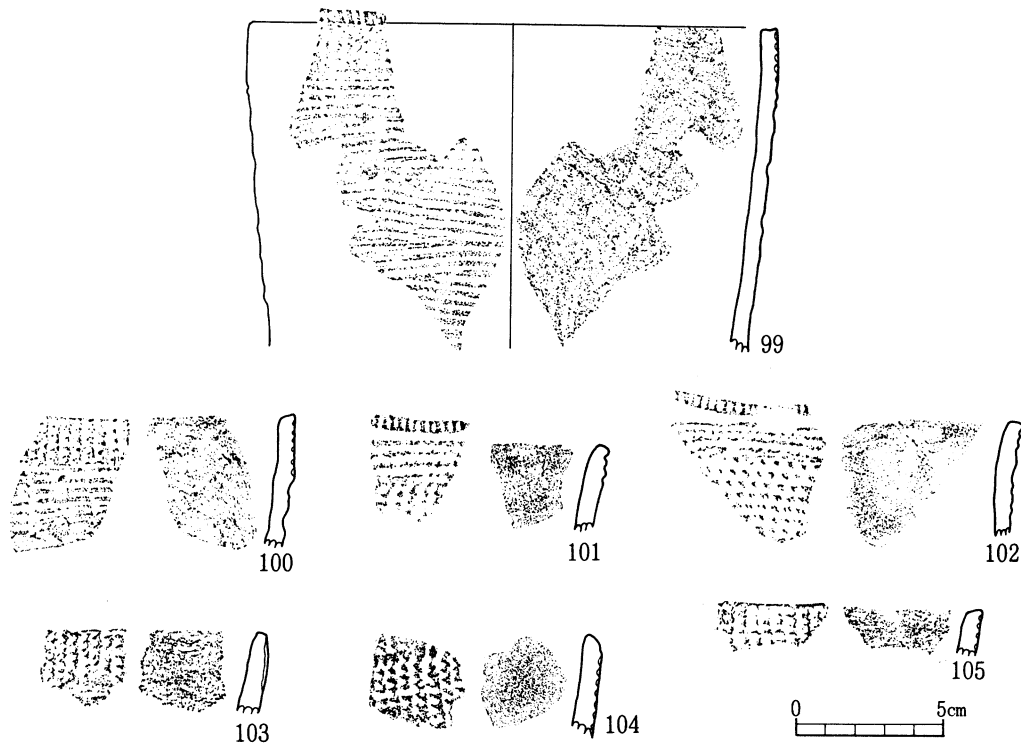
#### Ⅱ類土器

器形は、わずかに外反し、胴部は口縁部直下から直線的に底部へ移行し、器壁の厚さは、薄手の円筒形土器である。胴部の文様によって2種類に分類される。貝殻腹縁による押し文・押し文（Ⅱa類）と横位及び斜位の貝殻条痕文を施し、その上から再度、貝殻腹縁の刺突による縦列文（Ⅱb類）を施すものである。器内面は篋による研磨がなされている。

83～86は外反する口縁部で、クサビ形凸帯を有している。口唇部には篋状施文具による刻目が施され、口縁部直下には2段に貝殻刺突線を、口縁部の弧状に沿って施す。その下位に、貝殻腹縁の押しきによりクサビ形凸帯文を作り出している。クサビ形凸帯文の頂部は篋状施文具によって調整し、文様効果を表している。87・88は下位のクサビ形凸帯文で胴部には、貝殻腹



第21圖 縄文時代早期土器（8）



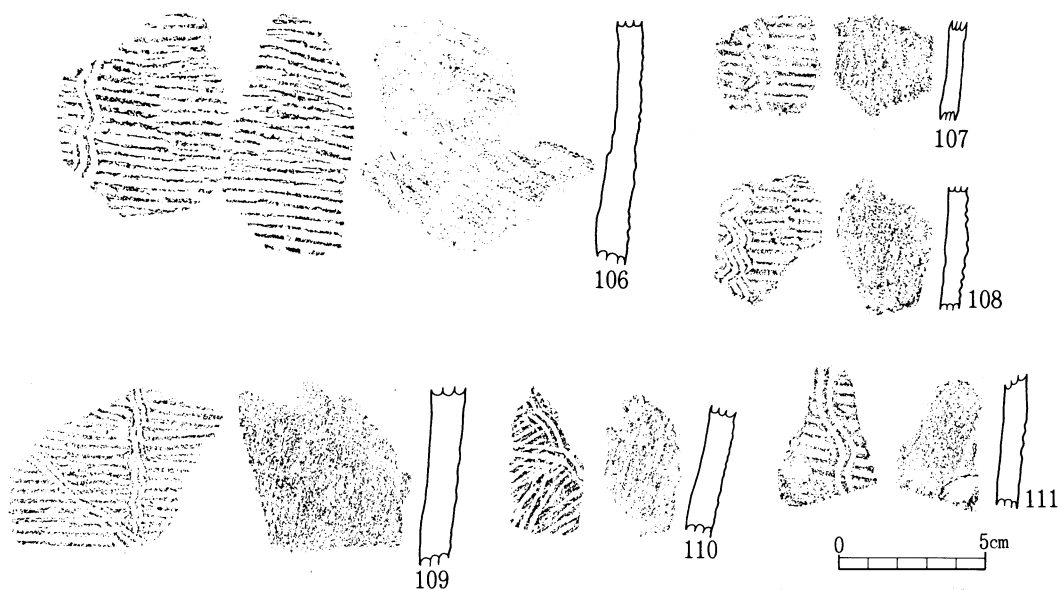
第22図 縄文時代早期土器（9）

縁による押引文が施されている。89～92は、2 cm間隔で長さ3 cmの細いクサビ形凸帯文を施している。このクサビは頂部と両端を篋で整形する。しかもクサビの両端は櫛状施文具によって連点文様が施されている。93は胴部で斜位の貝殻条痕文を施し、その上から貝殻刺突によって縦列文を施したものである。94も同様の円筒土器で、文様が貝殻腹縁による押引文・押圧文である。95～98は平底の底部である。外底部に篋状施文具による縦位の沈線文を丁寧に施す。95はⅡb類の底部である。Ⅱ類は色調は暗褐色で、胎土は粒子が細かく、焼成はきわめて良好である。

99・100は口縁部が直行し、胴部から底部へ直線的に移行する円筒形土器である。口唇部に刻目を施し、口縁部直下に4～5筋の貝殻腹縁による押引文を巡らし、その下位には貝殻刺突線を弧状に沿って施す。また、クサビを意図したと思われる文様が、貝殻腹縁押圧で縦方向に2 cm間隔で施され、その間には貝殻頂部の押圧文を施している。器面は薄手でよく焼成されている。

Ⅲ類（101・102・104・105）

101・102はやや外反する口縁部で、口唇部は平坦で刻目文を施す。口縁部直下には3段に貝殻刺突線を、口縁部の弧状に添って施す。胴部の文様は貝殻腹縁による押引文である。104・105は直行する口縁部で、口唇部は平坦で刻目文を施し、貝殻腹縁による押引文を施したものである。色調は茶褐色を呈し、胎土は粒子が細かく、焼成もきわめて良い。



第23図 縄文時代早期土器 (10)

106～111は、横位の貝殻条痕文の上から、2～5列の櫛状施文具を縦方向で波状に施している。109・110は、貝殻腹縁による刺突線文が菱形に施されている。

112～133貝殻条痕文を横位・斜位に施した胴部である。

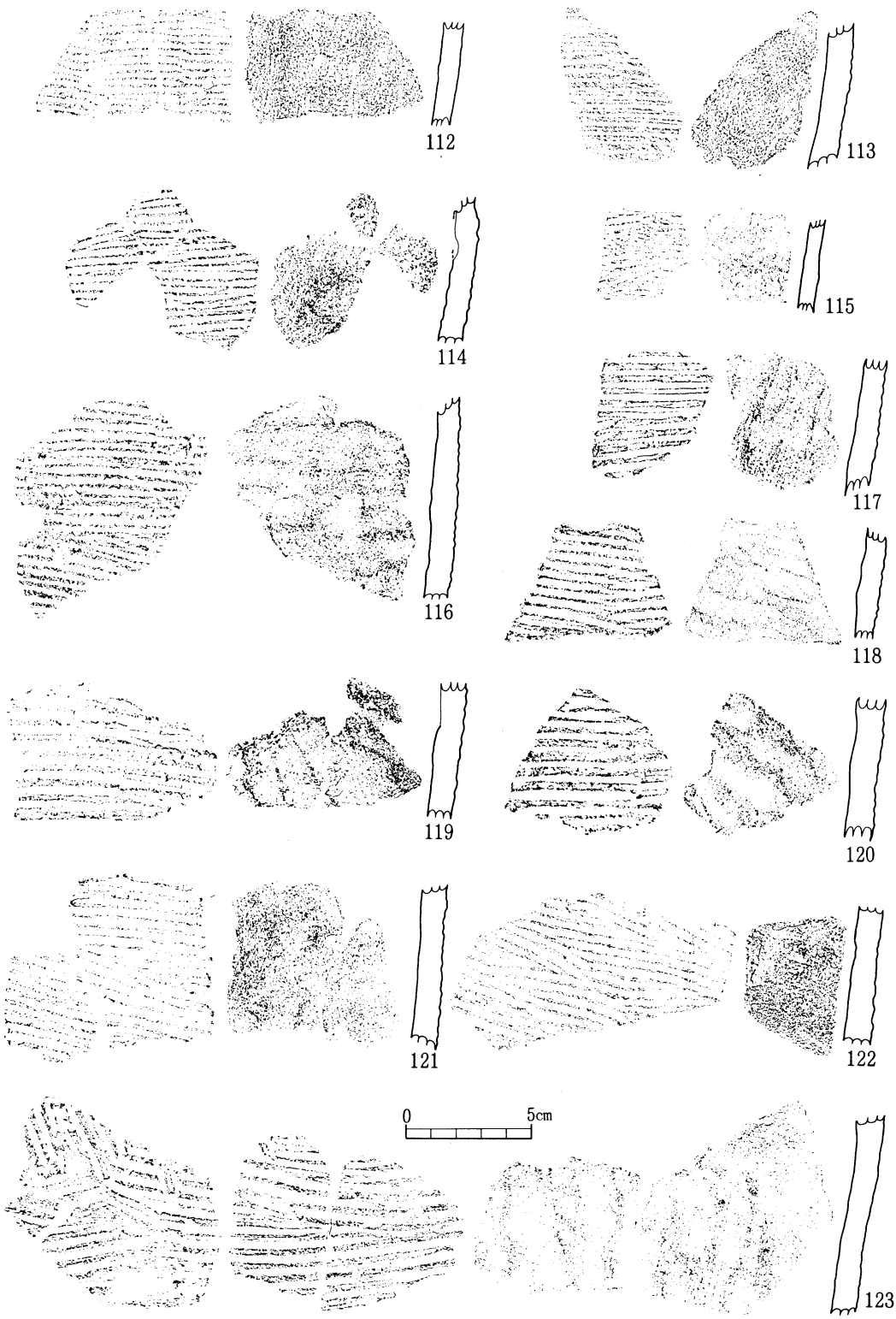
134～137は、貝殻条痕文を縦位に施した胴部で、内面は窠ナデ整形である。器壁はやや厚く、焼成は良好である。138もやはり、縦位の貝殻条痕文を施す底部で、平底である。窠による凹線文はない。底面はナデ整形である。

139～155は底部である。比較的厚いものである。139～141窠による凹線がなく、縦方向の条痕文である。140は、内外面ともよく研磨されている。142～151は、底部近くの胴部末端部は、ほとんど窠状施文具により縦位の刻みを巡らしている。147・153は、円盤状のもので、円盤状の底部から胴部へ積み上げるといふ土器の製作過程が観察される。154・155は底部径が14.0cm・17.0cmと大型の底部であり、底部近くに斜位の刻みを持つものである。

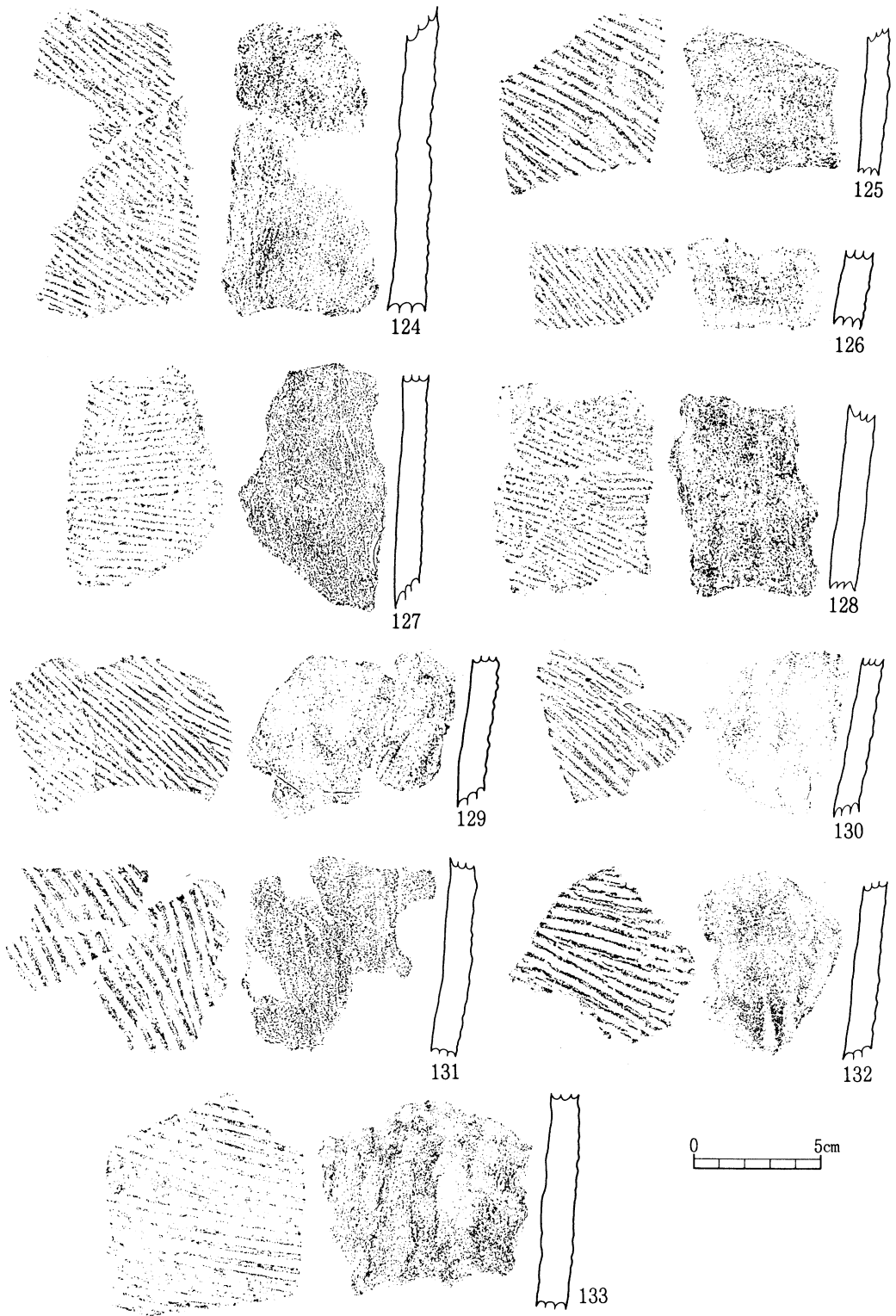
#### IV類

IV類は角筒土器である。156・157は、角筒をのぞけば円筒形土器のI f類に類似する土器である。口縁部の一辺が11.5cmで、4隅が山形となる角筒土器である。口唇部は平坦で口縁部はやや内傾する。胴部はわずかに丸味を帯びる。文様は口唇部に丁寧な刻目文、口縁部は貝殻腹縁を縦位に刺突文を施す。胴部に貝殻条痕を横位に施し、さらに貝殻腹縁で沈線文や刺突線文「Y」字形、菱形文を縦位に施文する。157も同様である。口縁部近くに1.5cmの長さの穿孔があるが貫通されていない。その右1cm程に2.0cmの縦長の楕円形補修孔を外面から穿孔しているのがみられる。

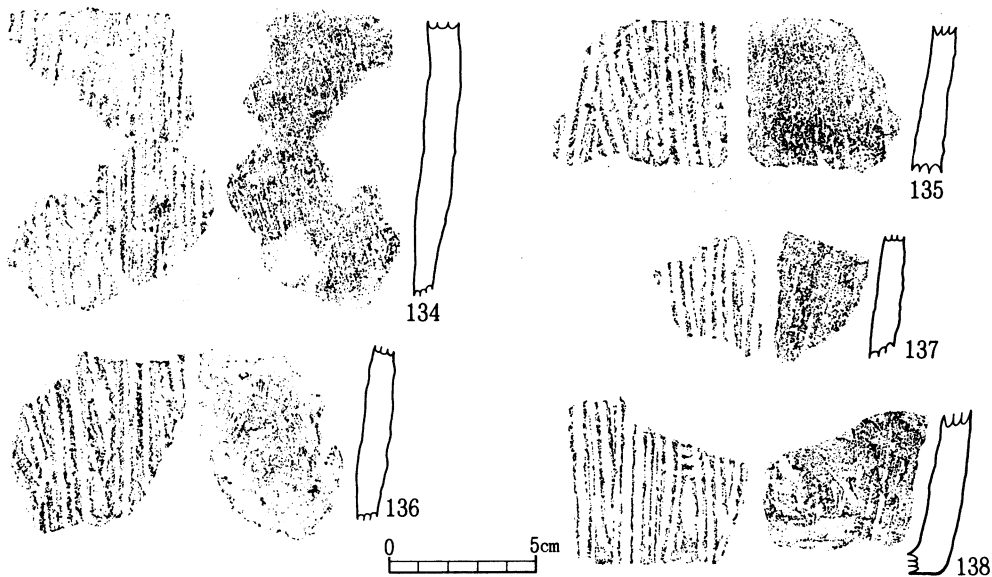
158は角筒をのぞけば円筒形土器のI c類に類似する土器である。4隅がやや山形となるが



第24図 縄文時代早期土器 (11)



第25図 縄文時代早期土器 (12)



第26図 縄文時代早期土器 (13)

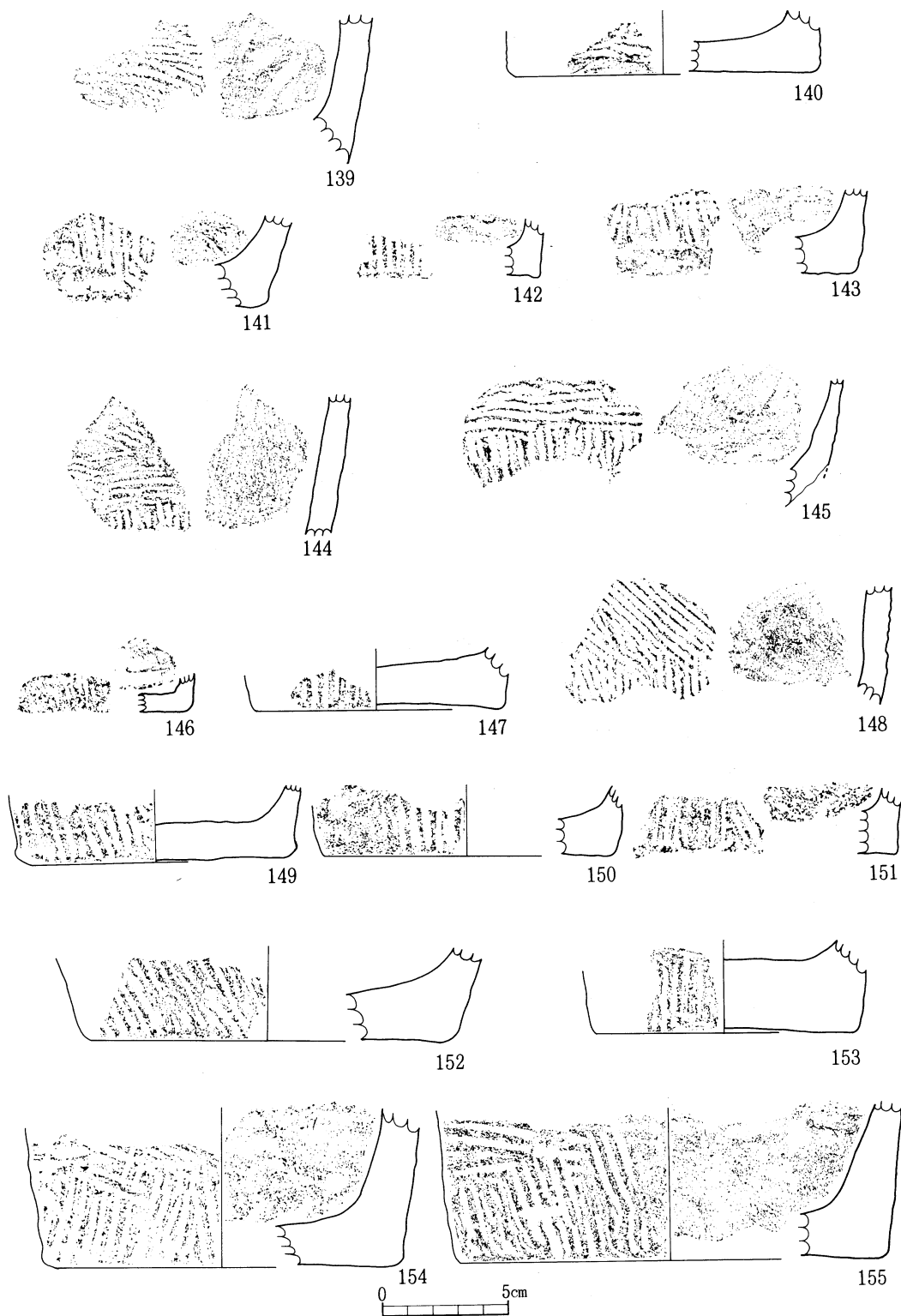
口縁部は平坦で直行する。口縁部直下には7～8段に貝殻刺突線を、口縁部に添って施す。胴部は横位の貝殻条痕文で、その上から縦位に貝殻腹縁による施文を施す。

159～163は角筒をのぞけば円筒形土器のI b類に類似する土器である。4隅が山形となり、口唇部は平坦で口縁部はやや内湾する。文様は、口縁部だけに貝殻腹縁の押引文を施している。胴部から底部全面に横位、斜位の浅い貝殻条痕文を施すものである。

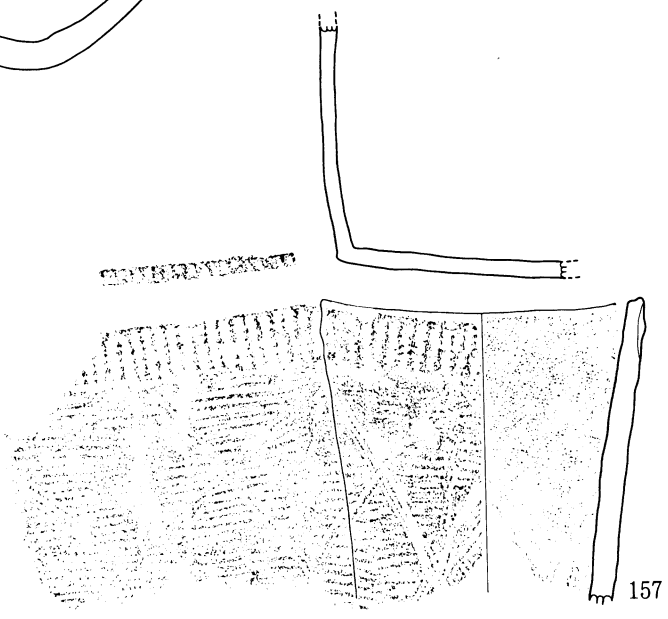
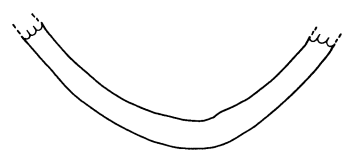
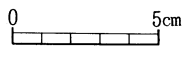
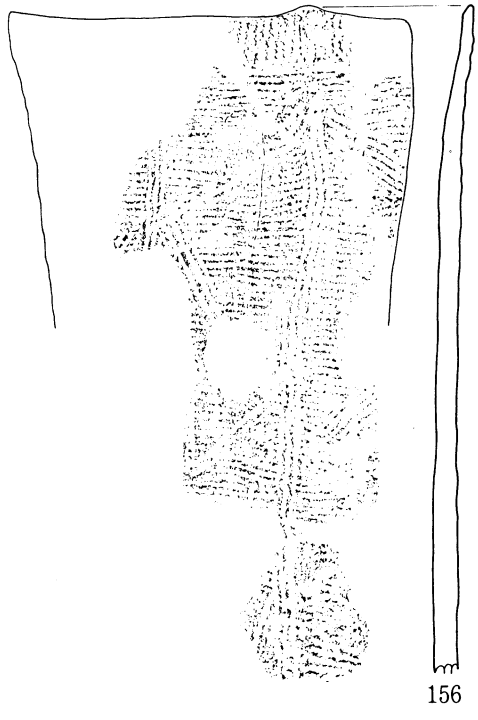
222・223は略方形の底部である。

224～233は貝殻腹縁による施文の円筒形土器である。224・225は同一個体と思われるもので、口唇部端は平端で内傾する。226は内湾する口縁部をもつ。227・228は貝殻腹縁を横位に連続刺突したものである。233は貝殻条痕を底部に施したものである。

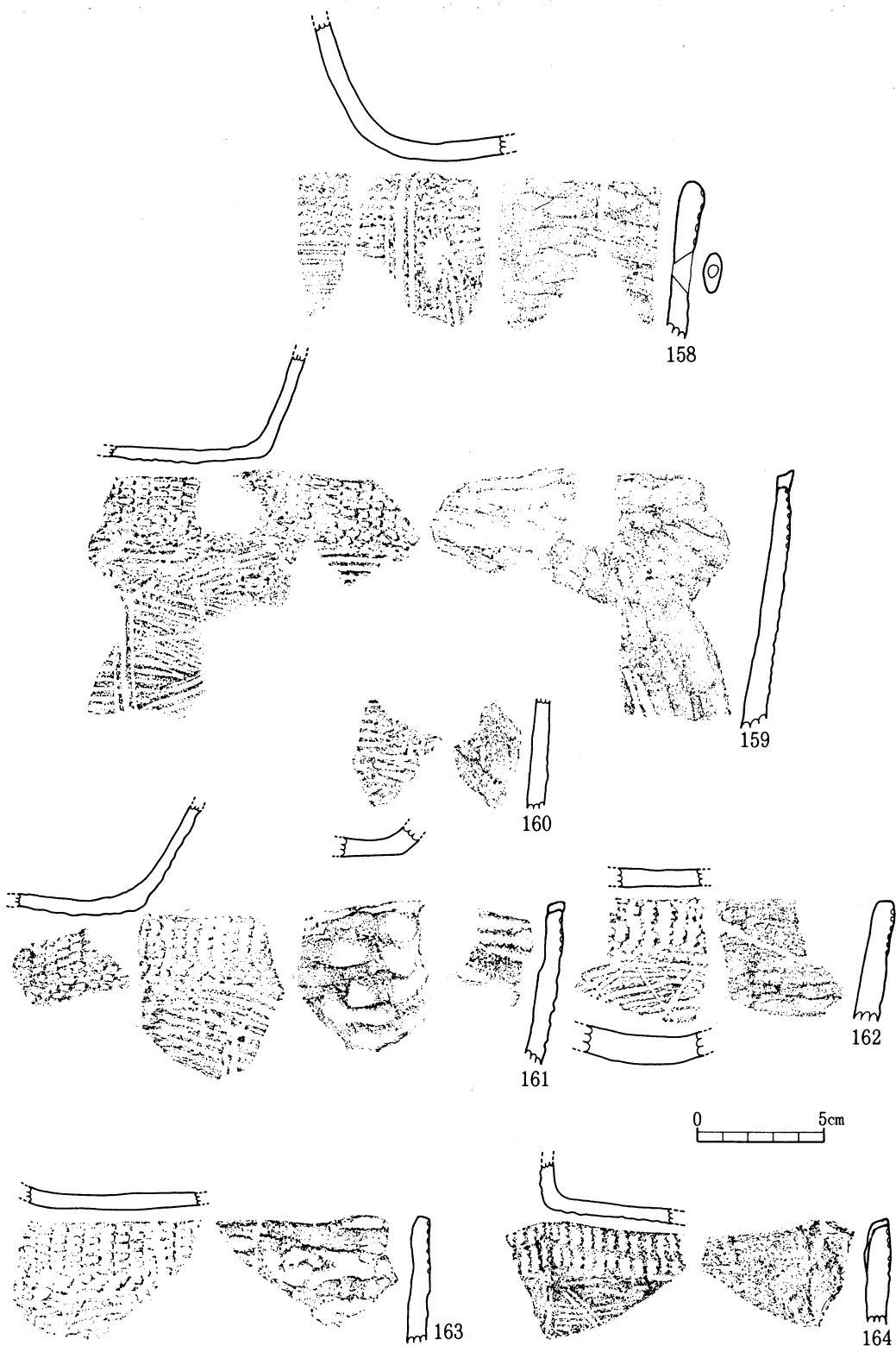




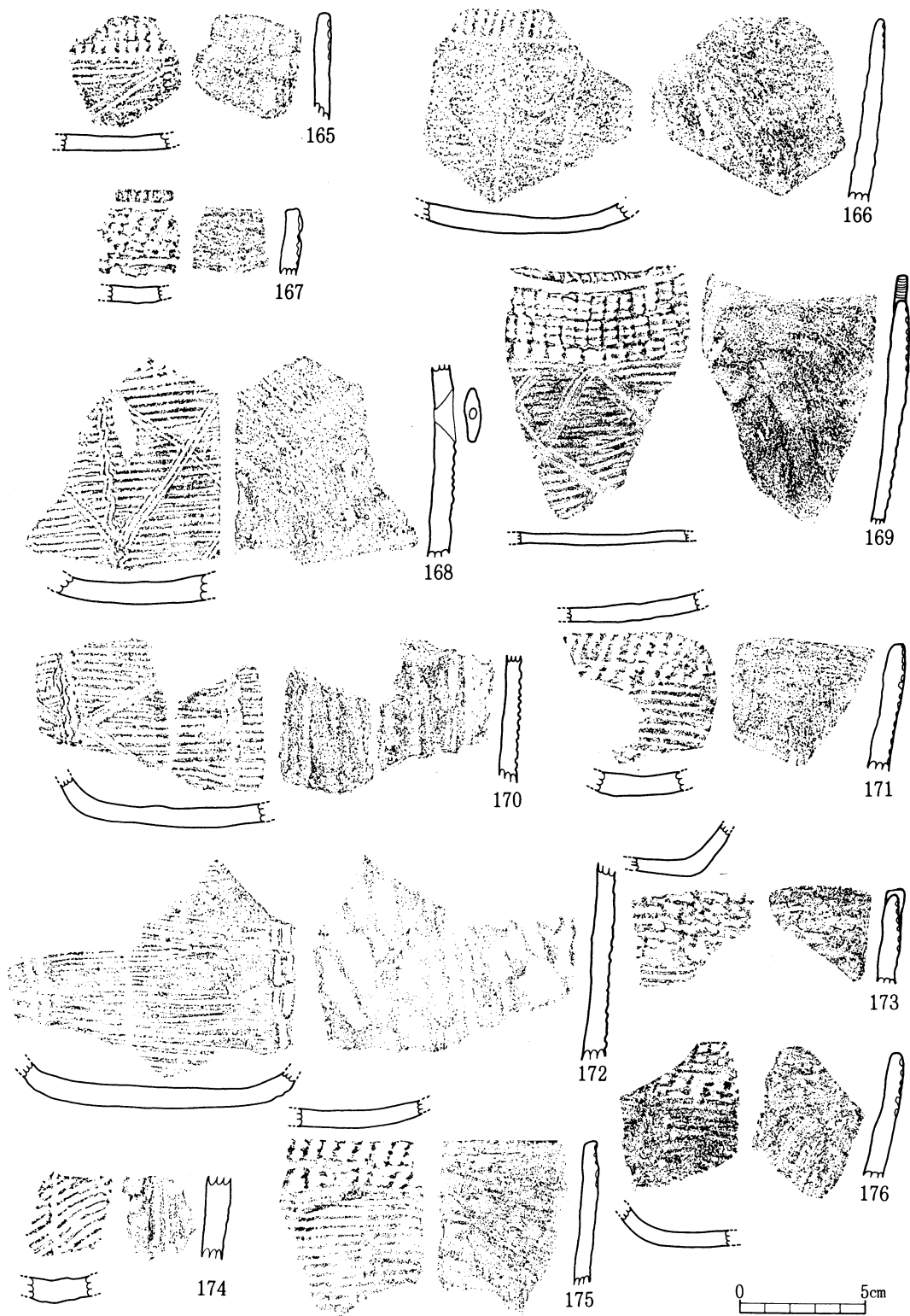
第27図 縄文時代早期土器 (14)



第28図 縄文時代早期土器 (15)



第29圖 縄文時代早期土器 (16)



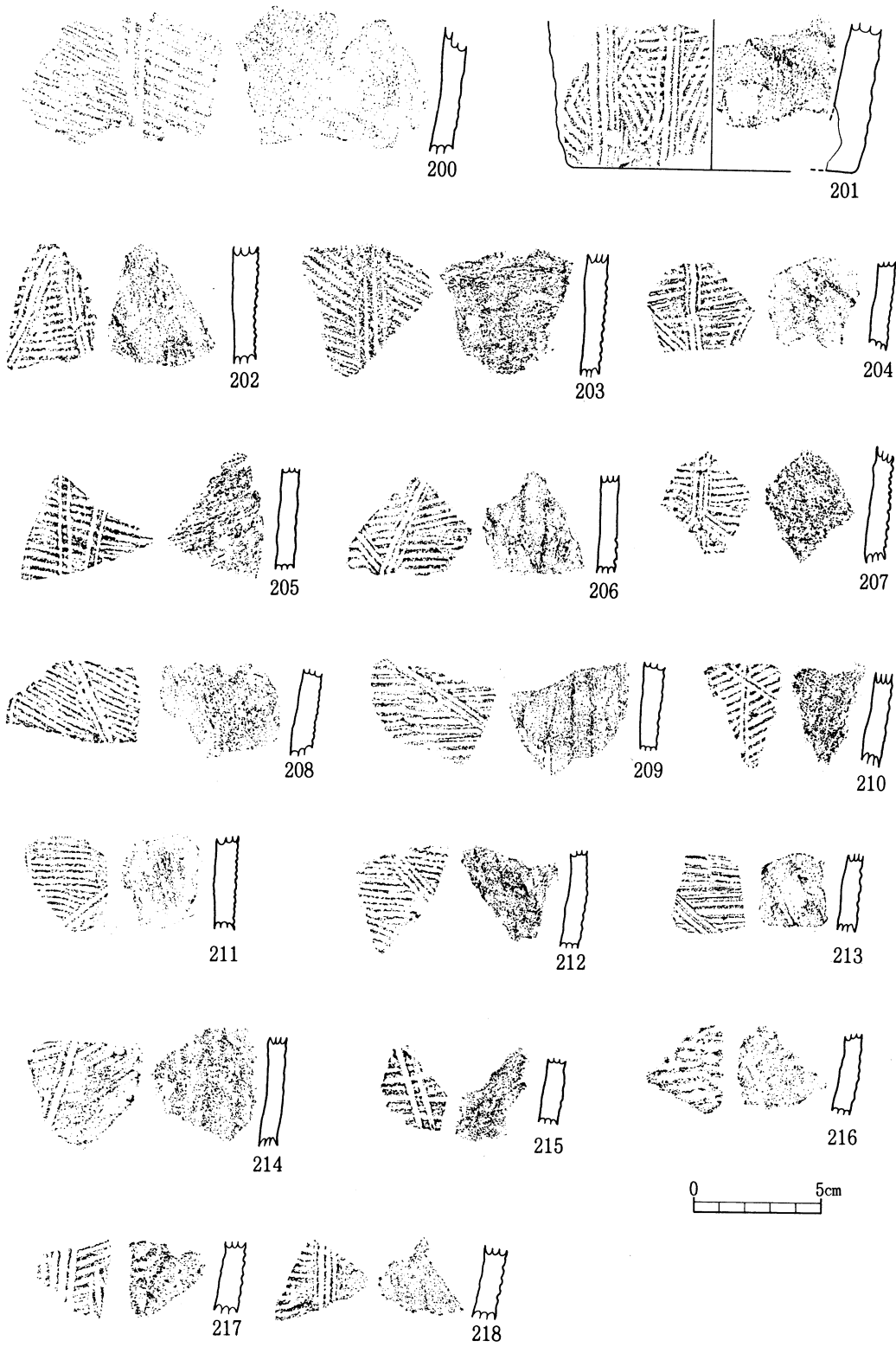
第30図 縄文時代早期土器 (17)



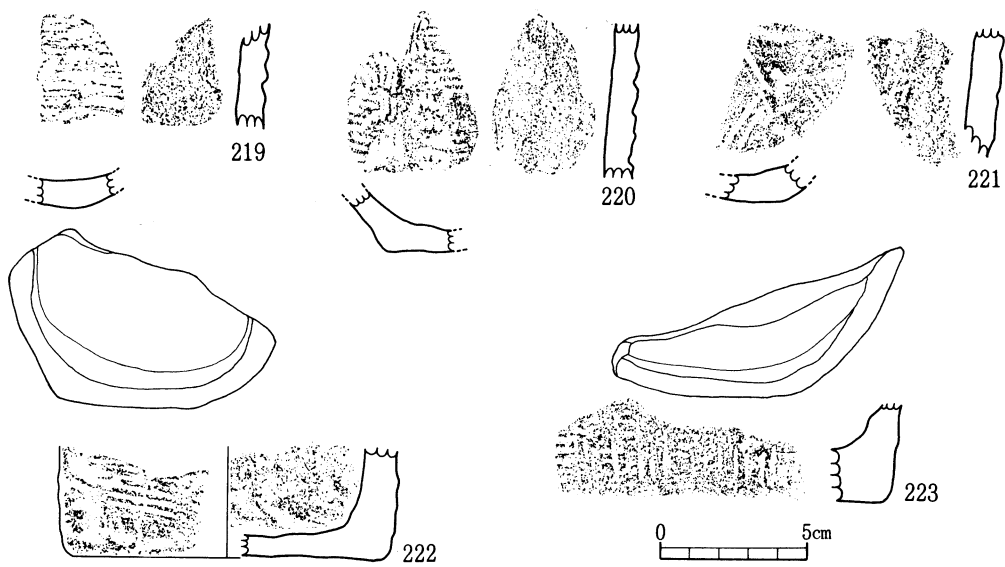
第31図 縄文時代早期土器 (18)



第32図 縄文時代早期土器 (19)

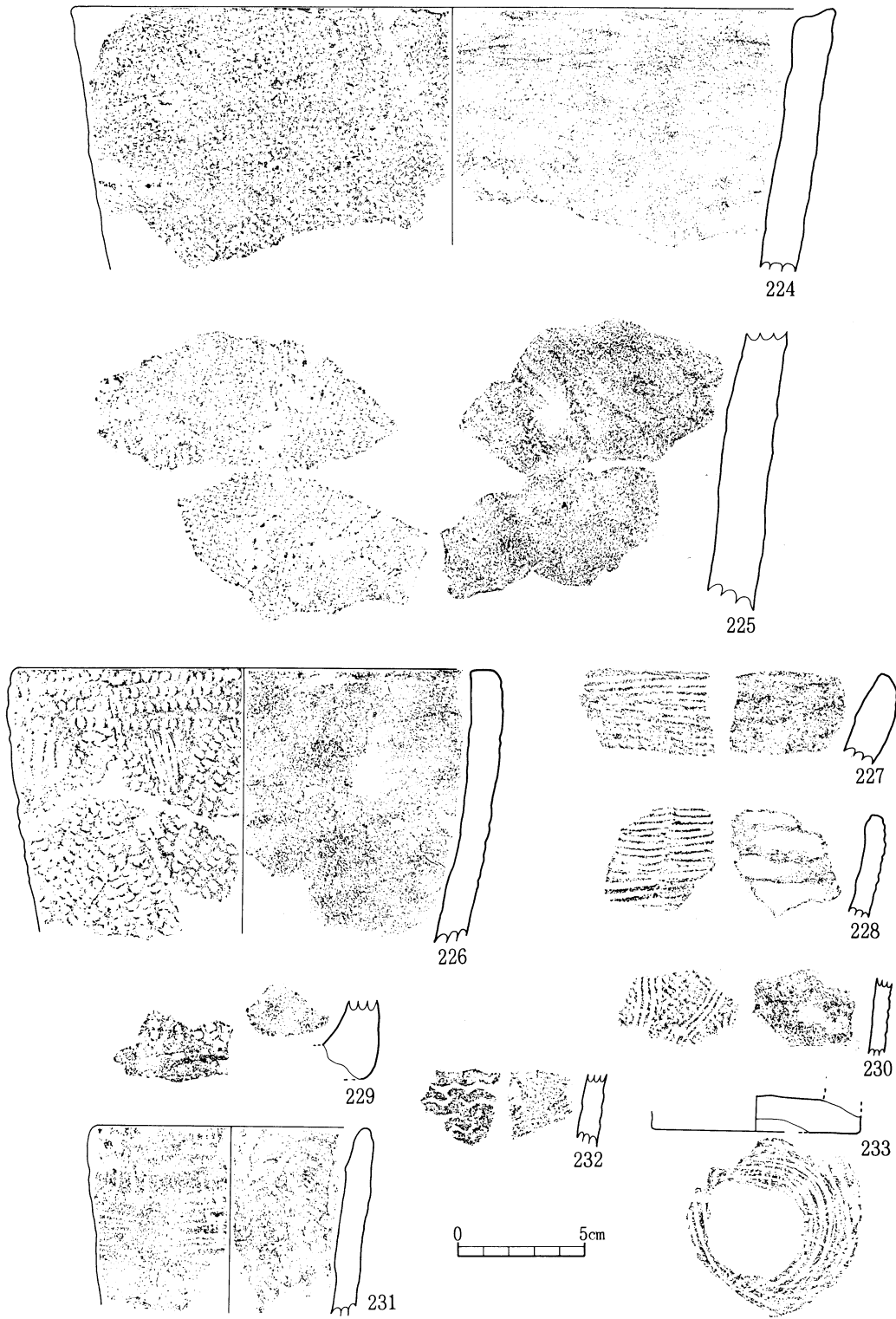


第33圖 縄文時代早期土器 (20)



第 34 図 縄文時代早期土器 (21)





第35図 縄文時代早期土器 (22)

第4表 縄文土器一覧表(1)

番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調	備考
13		G-4 IV	Q・PL・H	良好	褐色	口縁部
14		F-6	Q・PL・H	良好	褐色	口縁部
15		G-4 IV	Q・PL・H	良好	褐色	口縁部
16		G-4 IV	Q・PL・H	良好	褐色	口縁部
17		G-6 IV	Q・PL・H	普通	暗褐色	口縁部
18		G-5 V上	Q・PL・H	良好	褐色	口縁部
19		F-5 IV下	Q・PL・H	良好	茶褐色	口縁部
20		F-5 IV下	Q・PL・H	良好	茶褐色	口縁部
21		G-4 IV	Q・PL・H	良好	茶褐色	口縁部
22		G-5 IV下	Q・PL・H	普通	暗褐色	口縁部
23		G-4 IV	Q・PL・H	普通	暗茶褐色	口縁部
24		F-6 IV下	Q・PL・H	普通	暗茶褐色	口縁部
25		F-5 IV下	Q・PL・H	普通	淡褐色	
26		F-6	Q・PL・H	普通	淡褐色	口縁部
27		G-4 IV下	Q・PL・H	良好	暗茶褐色	口縁部
28		表探	Q・PL・H	普通	暗茶褐色	口縁部
29		F-4 IV	Q・PL・H	良好	暗茶褐色	口縁部
30		F-4 IV	Q・PL・H	普通	暗茶褐色	口縁部
31		F-6 III	Q・PL・H	普通	暗茶褐色	口縁部
32		G-4 IV下	Q・PL・H	普通	暗茶褐色	口縁部
33		G-4 IV下	Q・PL・H	普通	暗茶褐色	口縁部
34		F-4 IV	Q・PL・H	良好	暗茶褐色	口縁部
35		F-6 IV	Q・PL・H	普通	暗茶褐色	口縁部
36		F-4 IV下	Q・PL・H	普通	暗褐色	
37		F-6 IV下	Q・PL・H	普通	暗褐色	口縁部
38		F-6 IV	Q・PL・H	普通	暗褐色	口縁部
39		F-6 IV下	Q・PL・H	普通	黒褐色	口縁部
40		F-6 IV下	Q・PL・H	普通	褐色	口縁部
41		G-4 IV	Q・PL・H	良好	暗褐色	口縁部
42		F-5 IV下	Q・PL・H	普通	暗褐色	口縁部
43		F-4 IV	Q・PL・H	やや粗	暗褐色	口縁部
44		F-4 IV	Q・PL・H	普通	暗褐色	口縁部
45		F-4 表	Q・PL・H	普通	暗褐色	口縁部
46		F-4 表	Q・PL・H	普通	暗褐色	口縁部
47		F-6 III上	Q・PL・H	普通	暗褐色	口縁部
48		F-6	Q・PL・H	普通	褐色	口縁部
49		G-5 IV	Q・PL・H	普通	褐色	口縁部
50		F-5 I下	Q・PL・H	普通	暗褐色	口縁部
51		G-5	Q・PL・H	普通	暗褐色	口縁部
52		F-4 IV下	Q・PL・H	普通	褐色	突起口唇部
53		F-4 IV	Q・PL・H	普通	暗褐色	口唇部刻目有
54		F-4 IV	Q・PL・H	普通	淡茶褐色	口唇部刻目有
55		F-6 IV上	Q・PL・H	普通	淡茶褐色	
56		F-4 IV	Q・H・H	普通	淡茶褐色	
57		F-4 IV	Q・PL・H	普通	淡茶褐色	
58		G-4 IV	Q・PL・H	普通	淡茶褐色	
59		F-4 IV下	Q・PL・H	普通	淡茶褐色	
60		F-5 IV	Q・H・H	普通	茶褐色	
61		F-5 V	Q・PL・H	普通	褐色	
62		F-4 IV	Q・PL・H	普通	褐色	

番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調	備考
63		G-5 V上	Q・PL・H	普通	暗褐色	口縁部
64		F-5 IV上	Q・PL・H	普通	茶褐色	口縁部
65		G-6 IV	Q・PL・H	普通	暗褐色	
66		G-4 IV	Q・PL・H	普通	暗茶褐色	
67		F-5	Q・PL・H	普通	暗茶褐色	
68		F-6 IV	Q・PL・H	普通	暗茶褐色	
69		F-3 IV	Q・PL・H	普通	暗茶褐色	
70		G-6 V上	Q・PL・H	普通	茶褐色	底部
71		F-4 IV	Q・PL・H	普通	茶褐色	口縁部
72		F-4 IV	Q・PL・H	やや粗	褐色	口縁部
73		G-4 IV	Q・PL・H	普通	暗褐色	口縁部
74			Q・PL・H	普通	暗茶褐色	口縁部
75		F-4 IV	Q・PL・H	普通	暗褐色	口縁部
76		F-4 IV	Q・PL・H	やや粗	暗茶褐色	口縁部
77		F-6 IV上	Q・PL・H	普通	褐色	口縁部
78		G-5	Q・PL・H	普通	淡茶褐色	口縁部
79		G-4 IV	Q・PL・H	普通	褐色	口縁部
80		F-5 IV	Q・PL・H	良好	茶褐色	底部
81		G-4 IV下	Q・PL・H	良好	茶褐色	底部
82		F-4 IV	Q・PL・H	普通	淡茶褐色	底部
83		G-4 IV	Q・PL・H	普通	淡茶褐色	クサビ
84		G-4 IV	Q・PL・H	良好	淡茶褐色	クサビ
85		G-4 IV	Q・PL・H	普通	淡茶褐色	クサビ
86		G-4 IV	Q・PL・H	普通	茶褐色	クサビ
87		G-4 IV	Q・PL・H	普通	淡茶褐色	クサビ
88		F-4 IV	Q・PL・H	普通	暗褐色	クサビ
89		G-4 IV	Q・PL・H	良好	淡茶褐色	クサビ
90		G-4 IV	Q・PL・H	普通	茶褐色	
91		G-4 IV下	Q・PL・H	普通	淡茶褐色	クサビ
92		F-4 IV下	Q・PL・H	普通	茶褐色	クサビ
93		G-4 IV下	Q・PL・H	良好	暗茶褐色	
94		F-4 IV	Q・PL・H	普通	茶褐色	
95		G-4 IV	Q・PL・H	良好	茶褐色	
96		G-4 IV下	Q・PL・H	良好	暗茶褐色	底部
97		F-4 IV	Q・PL・H	良好	茶褐色	底部
98		F-4 IV下	Q・PL・H	良好	茶褐色	口縁部
99		F-5 IV下	Q・PL・H	良好	茶褐色	口縁部
100		G-4 IV	Q・PL・H	良好	茶褐色	口縁部
101		G-4 IV	Q・PL・H	良好	茶褐色	口縁部
102		F-4 IV	Q・PL・H	良好	茶褐色	口縁部
103		F-4 IV下	Q・PL・H	普通	茶褐色	口縁部
104		G-4 IV	Q・PL・H	普通	褐色	口縁部
105		F-3 IV	Q・PL・H	良好	茶褐色	口縁部
106		F-5 IV	Q・PL・H	普通	淡茶褐色	
107		F-3 IV	Q・PL・H	普通	褐色	
108		G-4 IV	Q・PL・H	普通	褐色	
109		F-4 IV	Q・PL・H	普通	暗褐色	
110		F-5 V上	Q・PL・H	普通	黒褐色	
111		G-5 IV	Q・PL・H	普通	褐色	
112		G-4 IV	Q・PL・H	普通	褐色	

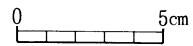
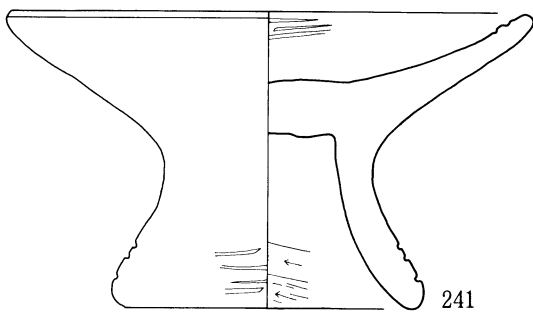
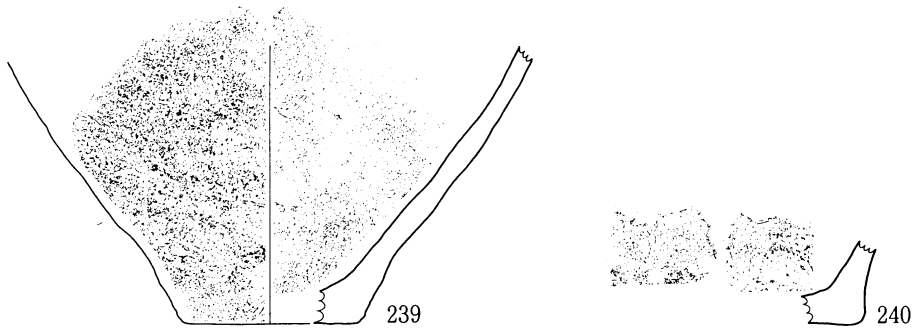
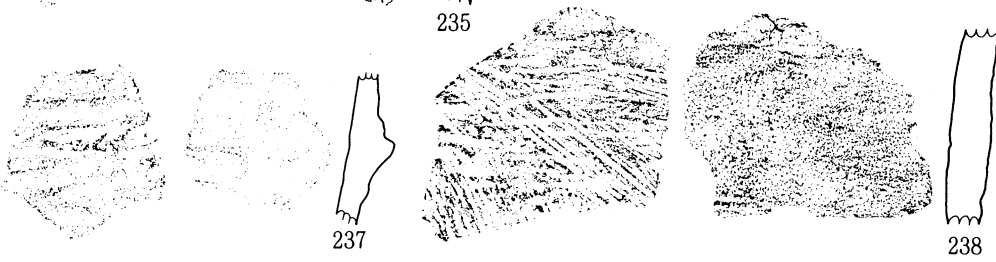
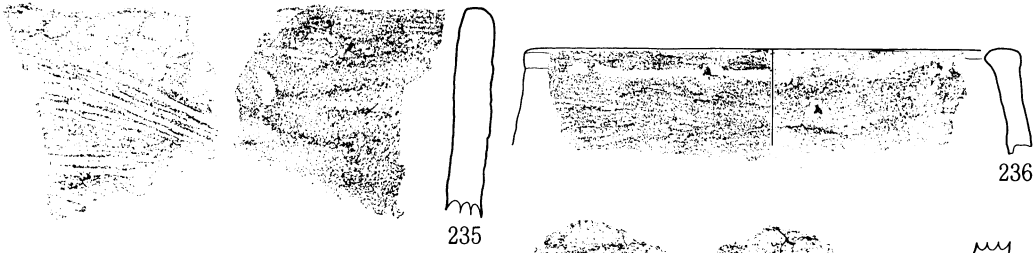
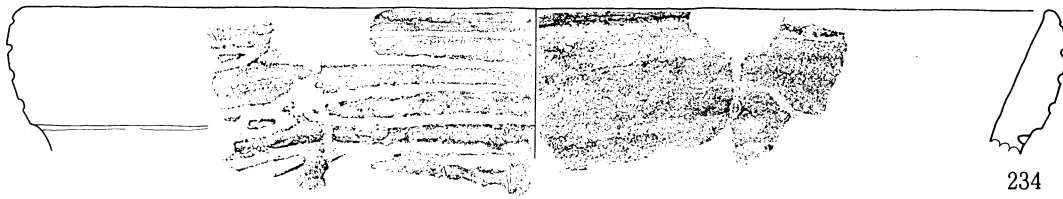
第5表 縄文土器一覽表(2)

番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調	備考
113		F-5 V上	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	
114		G-4 IV	Q·PL·H	普通	黒褐色	
115		F-3 IV	Q·PL·H	良好	褐色	
116		G-6 V上	Q·PL·H	普通	暗茶褐色	
117		G-4 IV	Q·PL·H	普通	褐色	
118		F-5 V上	Q·PL·H	普通	暗茶褐色	
119		F-5 IV下	Q·PL·H	普通	暗茶褐色	
120		F-5 V上	Q·PL·H	普通	褐色	
121		G-6 IV	Q·PL·H	普通	茶褐色	
122		F-4 IV	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	
123		G-6 V上	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	
124		F-4 IV	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	
125		F-4 IV	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	
126		F-4 IV	Q·PL·	普通	褐色	
127		F-4 IV	Q·PL·	普通	褐色	
128		F-4 IV下	Q·PL·H	普通	褐色	
129		G-6 IV下	Q·PL·H	普通	褐色	
130		G-4 IV	Q·PL·H	普通	暗褐色	
131		F-5 IV下	Q·PL·H	普通	淡褐色	
132		G-4 IV	Q·PL·H	良好	淡茶褐色	
133		F-5 IV	Q·PL·H	良好	茶褐色	
134		F-5 IV下	Q·PL·H	普通	茶褐色	
135		F-4 IV下	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	
136		F-5 V上	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	
137		G-4 IV	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	
138		G-5 IV	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	底部
139		G-5 V上	Q·PL·H	今粗	褐色	底部
140		G-4 IV下	Q·PL·H	良好	茶褐色	底部
141		G-5 V下	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	底部
142		F-4 IV	Q·PL·H	普通	暗茶褐色	底部
143		G-4 IV	Q·PL·H	普通	茶褐色	底部
144		G-5 IV	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	
145		F-6 IV上	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	
146		F-6 II	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	底部
147		F-5 IV	Q·PL·H	普通	茶褐色	底部
148		G-4 IV	Q·PL·H	普通	褐色	底部
149		G-6 IV上	Q·PL·H	普通	褐色	底部
150		F-3 IV	Q·PL·H	普通	褐色	底部
151		G-4 IV	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	底部
152		G-6 IV下	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	底部
153		F-4 IV	Q·PL·H	普通	茶褐色	底部
154		F-5 V上	Q·PL·H	普通	暗褐色	底部
155		F-6 V上	Q·PL·H	普通	暗褐色	底部
156		F-5 IV上	Q·PL·H	普通	暗褐色	
157		F-4 IV上	Q·PL·H	普通	暗褐色	
158		G-4 IV上	Q·PL·H	普通	暗褐色	角筒 口縁部
159		F-6 IV上	Q·PL·H	普通	暗褐色	角筒 口縁部
160		G-5 III	Q·PL·H	普通	暗褐色	角筒 口縁部
161		F-5 V上	Q·PL·H	普通	暗茶褐色	角筒 口縁部
162		F-4 IV上	Q·PL·H	普通	茶褐色	角筒 口縁部
163		F-5 V	Q·PL·H	普通	暗褐色	角筒 口縁部
164		G-4 IV	Q·PL·H	普通	暗茶褐色	角筒 口縁部
165		F-3 IV	Q·PL·H	今粗	茶褐色	角筒 口縁部
166		G-3 IV上	Q·PL·H	今粗	茶褐色	角筒 口縁部
167			Q·PL·H	普通	淡褐色	角筒 口縁部
168		G-4 IV	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	角筒 穿孔有
169		F-4 IV上	Q·PL·H	普通	暗褐色	角筒 口縁部
170		F-3 IV	Q·PL·H	普通	茶褐色	角筒
171		F-4 IV	Q·PL·	普通	暗褐色	角筒
172		F-3 IV上	Q·PL·H	普通	暗褐色	角筒
173		G-4 IV	Q·PL·H	普通	暗褐色	角筒 口縁部
174		G-5 IV	Q·PL·	普通	淡褐色	角筒
175		F-4 IV	Q·PL·	普通	褐色	角筒 口縁部
176		F-4 V	Q·PL·	今粗	褐色	角筒 口縁部
177		G-6 V	Q·PL·H	普通	淡褐色	角筒 口縁部
178		F-5 V	Q·PL·H	普通	淡褐色	角筒 口縁部
179		F-4 IV	Q·PL·	普通	淡茶褐色	角筒
180		G-5 IV下	Q·PL·H	普通	暗褐色	角筒
181		G-4 IV上	Q·PL·	普通	淡褐色	角筒
182		G-4 IV	Q·PL·H	良好	淡茶褐色	角筒
183		F-5 V上	Q·PL·H	良好	淡茶褐色	角筒
184		F-3 IV	Q·PL·H	良好	茶褐色	角筒
185		G-5 上	Q·PL·H	普通	暗褐色	角筒
186		G-4 IV	Q·PL·	普通	茶褐色	角筒
187		G-5 IV	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	口縁部
188		F-5 IV	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	口縁部
189		G-4 V	Q·PL·	普通	茶褐色	
190		G-5 IV上	Q·PL·	普通	茶褐色	
191		F-6 III	Q·PL·H	普通	暗褐色	
192		G-6 IV上	Q·PL·H	普通	暗褐色	
193		G-6 IV上	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	
194		F-6 上	Q·PL·H	普通	暗褐色	
195		F-5 IV	Q·PL·H	普通	茶褐色	
196		G-5 IV上	Q·PL·H	普通	暗褐色	
197		G-6 V	Q·PL·H	普通	暗褐色	
198		G-5 IV上	Q·PL·H	普通	茶褐色	
199		G-5 IV	Q·PL·H	普通	暗褐色	
200		F-5 III上	Q·PL·H	普通	暗褐色	
201		G-4 IV	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	底部
202		F-3 IV	Q·PL·H	普通	茶褐色	
203		G-4 IV	Q·PL·H	今粗	暗褐色	
204		F-4 IV下	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	
205		G-6 IV下	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	
206		G-4 IV	Q·PL·H	普通	茶褐色	
207		F-4 IV	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	
208		F-5 IV上	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	
209		F-4 IV	Q·PL·H	普通	暗褐色	
210		F-4 IV下	Q·PL·H	普通	褐色	
211		F-5 IV	Q·PL·H	普通	淡茶褐色	
212		F-4 IV下	Q·PL·H	普通	暗褐色	

第6表 縄文土器一覽表(3)

番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調	備考
213		F-3 IV	Q. PL. H	良好	茶色	
214		F-4 IV	Q. PL. H	普通	暗褐色	
215		G-4 IV	Q. PL. H	普通	褐色	
216		G-4 IV	Q. PL. H	今粗	暗褐色	
217		F-5 IV	Q. PL. H	普通	淡茶色	
218		F-4 IV	Q. PL. H	普通	淡茶褐色	
219		G-5 表	Q. PL. H	普通	褐色	角筒
220		F-4 IV	Q. PL. H	普通	淡茶褐色	角筒
221		F- IVF	Q. PL. H	今粗	茶褐色	角筒
222		F-6 V 上	Q. PL. H	普通	褐色	角筒 底部
223		G-4 IV	Q. PL. H	今粗	茶褐色	角筒 底部

番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調	備考
224		G-4 IV	Q. PL. H	普通	淡茶色	口縁部
225		F-4 IVF	Q. PL. H	普通	淡茶色	
226		F-4 IV	Q. PL. H. M	普通	茶褐色	口縁部
227		G-4 IV	Q. PL. H	普通	褐色	口縁部
228		F-4 IV	Q. PL. H	普通	淡茶色	口縁部
229		F-4 IV	Q. PL. H	普通	淡茶色	底部
230		F-5 VF	Q. PL. H	普通	暗茶色	口縁部
231		F-4 IV	Q. PL. H	普通	暗褐色	
232		F-5 IV上	Q. PL. H	普通	暗褐色	
233		F-5 V上	Q. PL. H	普通	暗褐色	底部



第36図 縄文時代後期土器(1)

### 3 後期・晩期（第36～39図）

縄文時代後期・晩期の土器は第Ⅲ層上部から出土したものである。

234～242は縄文時代後期の土器である。234は肥厚した口縁部にヘラ状施文具で横位の沈線を施したもので、南福寺式土器に類似する。復元口径34.2cmを測る。

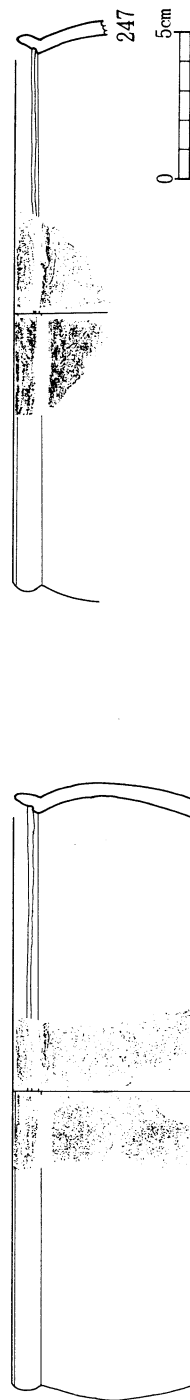
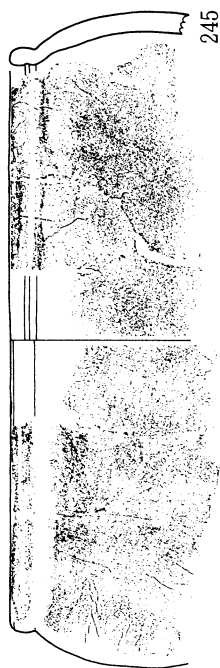
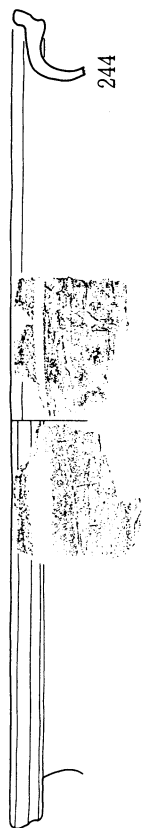
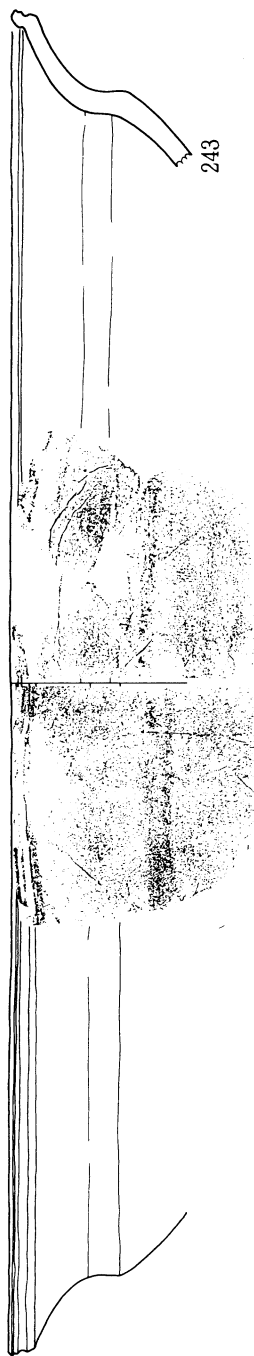
241は台付皿形土器である。口径17.6cm，底径9.6cm，器高10.0cmを測るもので，底部外面に3条の沈線を巡らせている。市来式土器である。242は突起をもつ深鉢で口縁部付近にヘラ条施文具で沈線を施している。器面の外面に貝殻条痕を斜位に，内面は横位に施している。

243～263は晩期の土器である。243・244は頸部が大きく外反し，口縁部が短く直立する浅鉢形土器である。口縁部外面に沈線がみられる。245～247はマリである。248～263は深鉢形土器である。口縁部外面に横位沈線が施されたもので，外弯気味にのびる頸部から口縁部が立ち上がるものである。上加世田式土器である。

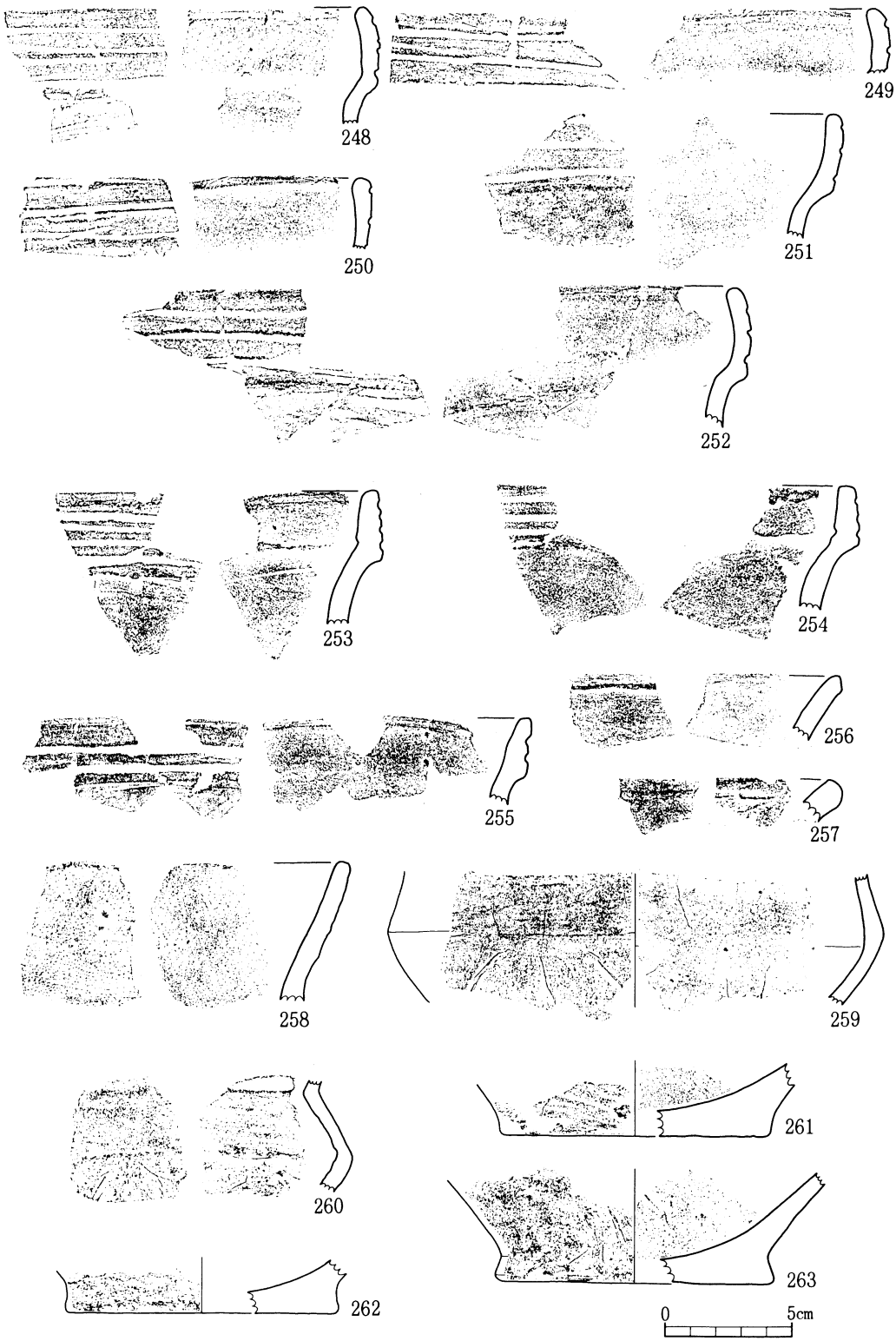
261～263は外方へ大きく張りだし円板貼り付け状になる平底の底部である。



第37図 縄文時代後期土器（2）



第38図 縄文時代晚期土器(1)



第39圖 繩文時代晚期土器（2）



#### 4 石器

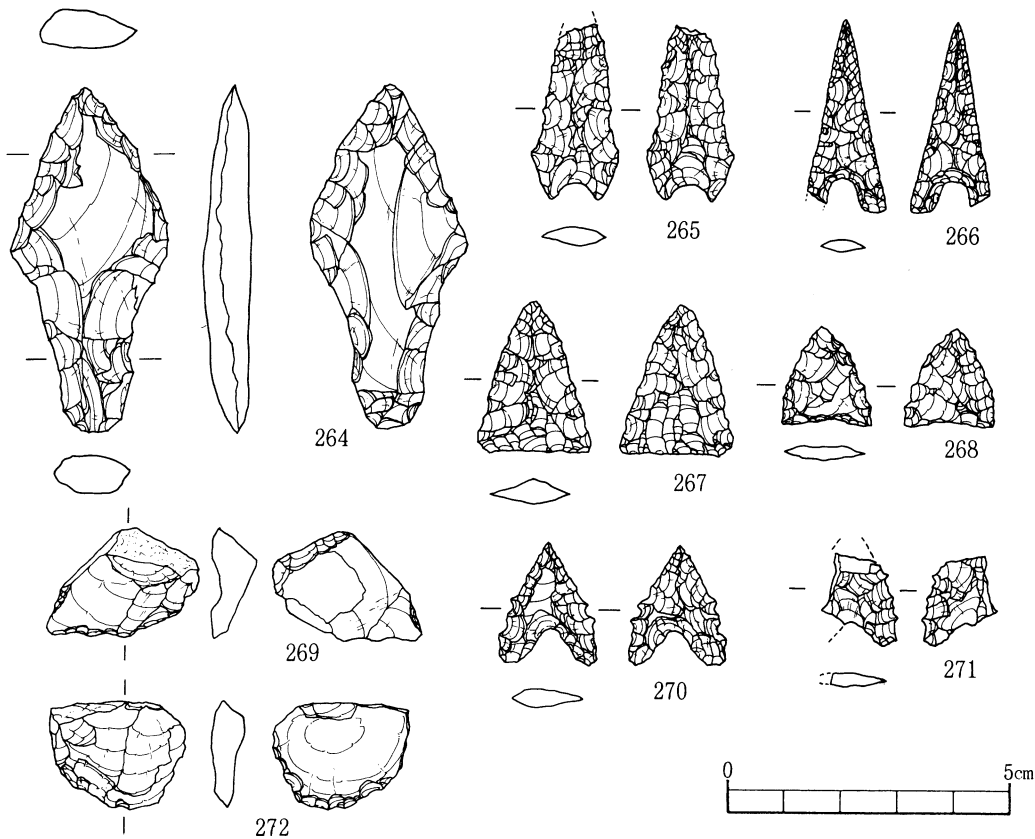
石器は、石槍・石鏃・スクレーパー・剥片・石斧が出土した。また、石材については、黒曜石・チャート・頁岩・鉄石英・石英・安山岩がみられた。

##### 石槍 (264)

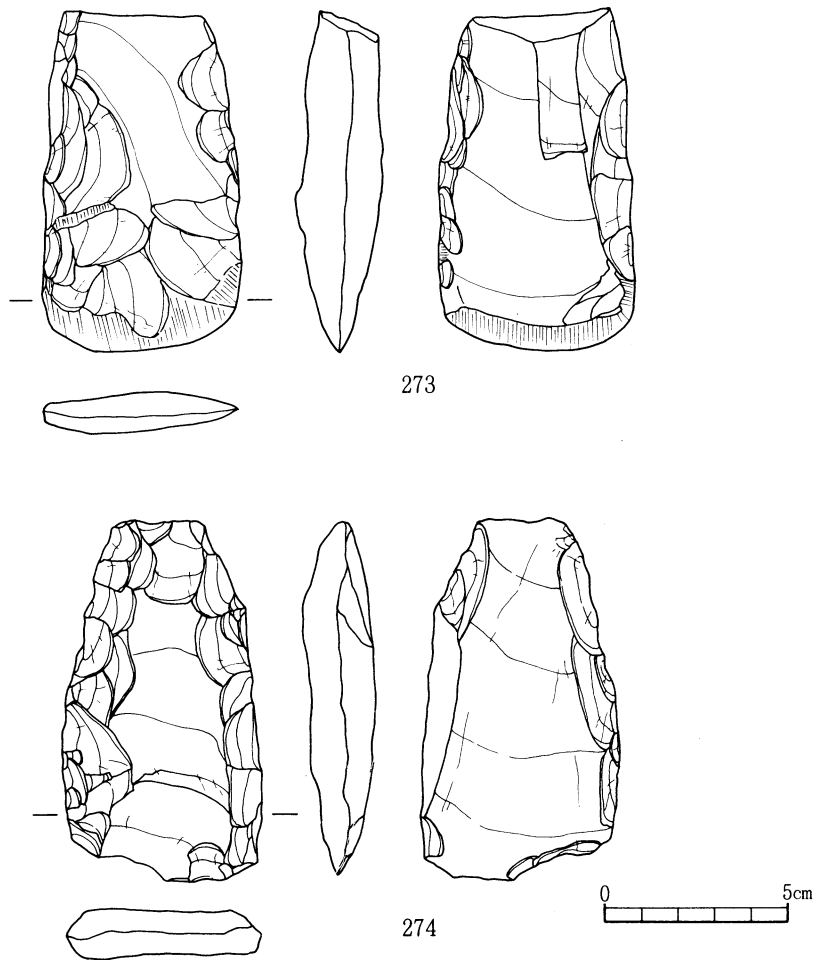
264はF-8区, IV層から出土した。所謂、有舌尖頭器と呼ばれる石器である。長さ6.2cm, 幅2.8cm, 厚さ0.85cm, 重量13.6gを測る。頁岩を石材に用い、先端部は尖り、側辺を丁寧な交互剥離によって調整している。約2.7cmの棒状の茎をもつものである。茎も丁寧な交互剥離が施され、よく整形されたものである。共伴した土器はなかったが、IV層下部の出土から、本遺跡出土の縄文早期土器よりも若干古い時期が想定される。

##### 石鏃 (265~270)

石鏃は破損品を含めて6点出土している。石材は頁岩・チャート・黒曜石が用いられている。265はG-21区, IV層から出土した暗青灰色のチャートを石材に用い、先端部は欠損しているが、側辺がまっすぐで長三角形を呈し、鋸歯状である。最大幅は下方にあり、基部は逆刺が鋭く、挟りがやや深い。266はG5区, IV層から出土した頁岩製のよく整形された石鏃である。先端は鋭く、側辺部は非常に丁寧な交互剥離によってよく調整され、まっすぐで長三角形を呈



第40図 縄文時代石器(3) 石槍・石鏃・スクレイパー



第41図 縄文時代石器（4）石斧

する。基部は逆刺が円く、挟りが極めて深い。267はF-5区、IV層から出土した暗灰色のチャート製で、先端部はやや鈍く二等辺三角形を呈する。268はG-13区、IIb層から出土した暗灰色の頁岩製で、側面が外湾し、基部は逆刺が鈍く挟りが浅いものである。269はE-4区、IV層から出土した頁岩製で、先端部は鋭く、側辺はやや外湾して鋸歯状を呈する。基部は逆刺が鈍く挟りが極めて深い。270はF-10区、V層出土のガラス質の弱い淡黒色の黒曜石を石材とした鋸歯状の側辺を呈するものである。欠損品である。

スクレイパー（271・272）

271・272は鉄石英を石材として用いている。やや厚みのある剥片の側辺部に一面ないし二面に片面剥離を施している。

石斧（273・274）

273はF-10区、IV層から出土の頁岩製の磨製石斧である。側辺部を左右両側縁からの平坦な粗い調整によって、厚みを取り除くように全面を加工し、刃部のみを研磨したものである。

274はF-4区、表層出土で、やはり側縁調整された打製石斧である。

## 第2節 弥生～古墳時代の調査

### 1 調査の概要

弥生から古墳時代の遺物は、F-7～E・F-15区のⅡb層下部に散在して出土した。

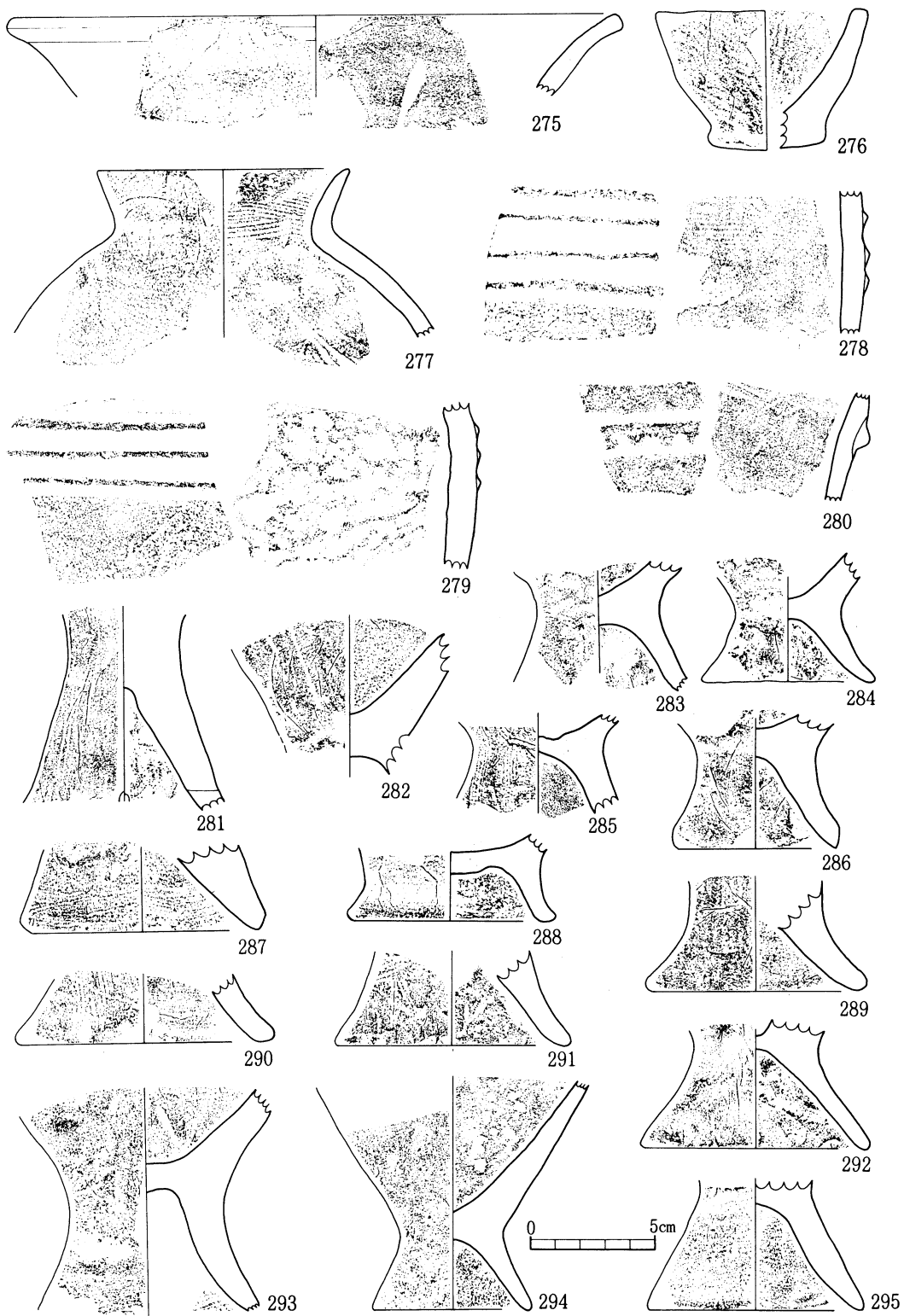
### 2 遺物

高坏・小型鉢形土器・壺形土器・甕形土器が出土している。

275は高坏の坏部口縁である。口縁直径24.4cmを測る口縁部が体部から外折反転したものである。内外面とも丁寧なナデ整形を行っている。276は小型の鉢形土器である。底部があげ底にならず、肥厚して平底となるもので口縁は外開きに直口する。口縁直径 8.1cm, 器高 5.3cmを測る, 外面は斜位のハケ目調整, 内面は縦位のナデ整形を施している。277は復元口径10cmを測る壺形土器の口縁部である。「く」字状に外反し, 口唇部は尖り気味である。内外面ともハケ目調整を施し, 口縁部はナデ整形を行っている。278・279は弥生時代の甕形土器の球状にわずかに膨らむ胴部で, 貼り付け突帯文を三条巡らしている。280は頸部に貼り付け突帯文を巡らせた古墳時代の甕形土器の胴部である。281は高坏の脚柱部である。脚柱は短めであり, 裾は外に広がるものと考えられる。284～295は甕形土器の底部である。282～283は底部と胴部の接合部分である。284～295はあげ底の脚台であり, 288は浅いあげ底である。

第7表 弥生～古墳時代土器一覧表

番号	器種	出土区層	法 量			胎 土	焼成	色 調	調 整		備 考
			口径	底径	器高				外 面	内 面	
275	高坏	F-10 Ⅱb	24.4			Q. PL. H	良好	明茶褐色	ナデ	ナデ	
276	鉢	F-9 "	8.1	4.8	5.3	"	"	"	ハケ目	"	
277	壺	F-13 "	10.0			"	"	淡茶褐色	"	ナデ	
278	甕	表探				Q. PL. H. M	"	赤褐色	ナデ	ハケ目	煤付着
279	"	F-12 "				Q. PL. H	"	明赤褐色	"	ナデ	
280	"	F-11 "				"	"	"	"	"	
281	高坏	F-13 "				"	"	淡茶褐色	"	"	
282	甕	F-9 "				"	"	褐色	"	"	
283	"	G-13 "				"	"	明赤褐色	"	"	
284	"	F-14 "		6.6		"	"	淡茶褐色	"	"	
285	"	F-8 Ⅱ				"	"	"	ハケ目	"	
286	"	F-8 "		6.6		"	"	明茶褐色	ナデ	"	
287	"	F-10 Ⅱb		9.8		"	"	淡茶褐色	ハケ目	ハケ目	
288	"	F-7 I		8.1		"	"	"	ナデ	ナデ	
289	"	F-11 Ⅱb		10.1		"	"	褐色	"	"	
290	"	F-8 Ⅱ		9.2		"	"	淡茶褐色	ハケ目	"	
291	"	F-11 Ⅱa		8.6		"	"	"	ナデ	"	
292	"	P412				"	"	褐色	"	"	
293	"	F-12 Ⅱb		6.1		"	"	淡茶褐色	"	"	
294	"	E-16 "		9.1		"	"	"	ハケ目	"	
295	"	F-10 "		8.5		"	"	明茶褐色	ナデ	"	



第42図 古墳時代土器

### 第3節 平安時代の調査

#### 1 調査の概要

平安時代の調査は、5～20区のⅡb層出土の遺物とⅢ層上面で検出された遺構であった。遺構は掘り立て柱建物跡12棟、土塋42基、溝状遺構13条が検出された。建物跡は主軸の方向からいくつかのグループに分けられる。また焼土も検出された。遺物は、土器・石器・鉄器・青銅器等約12,000点が出土した。土器では、土師器（甕・壺・碗・坏・坏蓋・皿）・須恵器（甕・壺・碗・坏・坏蓋・高坏）・焼塩壺・紡錘車・灯火器・黒色土器・墨書土器、刻書土器等が出土している。石器には砥石・磨石があり、鉄器には刀子・鉄滓が出土している。また、青銅製の帯金具も出土している。

#### 2 遺構

##### ①掘立柱建物跡

柱穴が744個検出され、掘立柱建物跡としてまとまったものが12棟であった。なかには、溝状遺構と重複しているものもあり、時期差が想定できる。

##### 掘立柱建物跡1

掘立柱建物跡1は、F・G-6区に検出された。梁間2間(4.36m)×桁行3間(6.63m)を測る。建物の桁行は、南北軸方向である。梁間の1間が平均2.18m、桁行間が2.21mとなる。柱穴の掘り方は円形ないし楕円形のプランを呈し、建物柱穴の平均径は38cmを測る。深さの平均は検出面より71cmである。

##### 掘立柱建物跡2

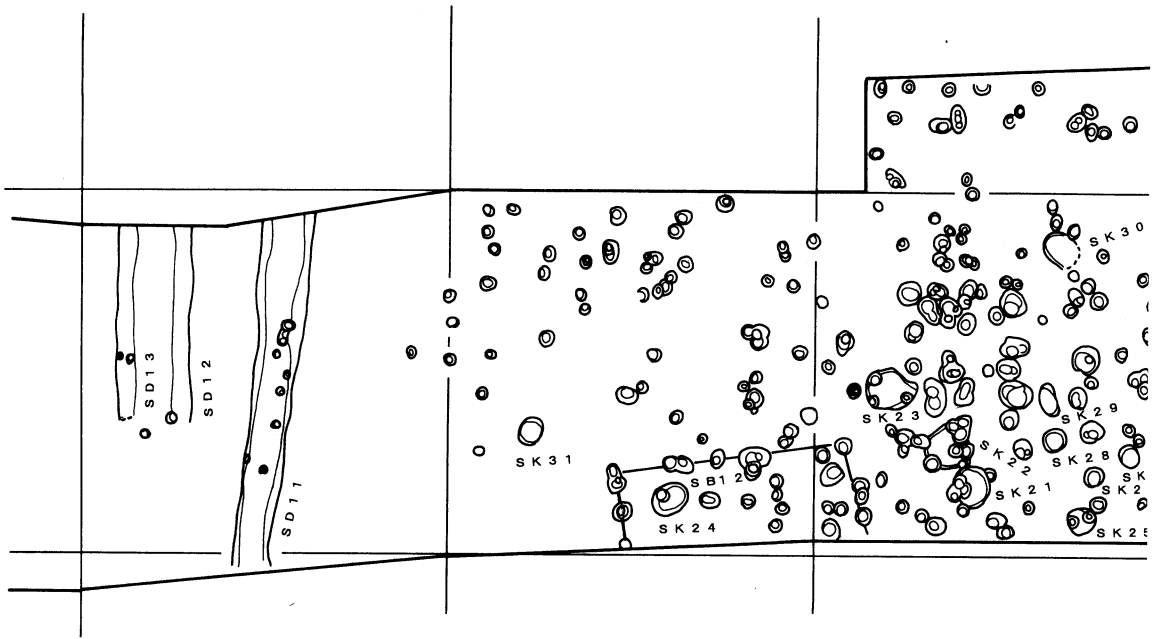
掘立柱建物跡2は掘立柱建物跡1の西約10mのF・G-7・8区に検出された。梁間2間(3.40m)×桁行3間(5.09m)を測る。建物の桁行は、N02度W方向である。梁間の1間が平均1.70m、桁行間が1.70mとなる。柱穴の掘り方は円形ないし楕円形のプランを呈し、建物柱穴の平均径は43cmを測る。深さの平均は検出面より34cmである。P1～P4は当方の手違いで削平されてしまった。北側約 mには平行して6個の柱穴が並び柵列と思われる。

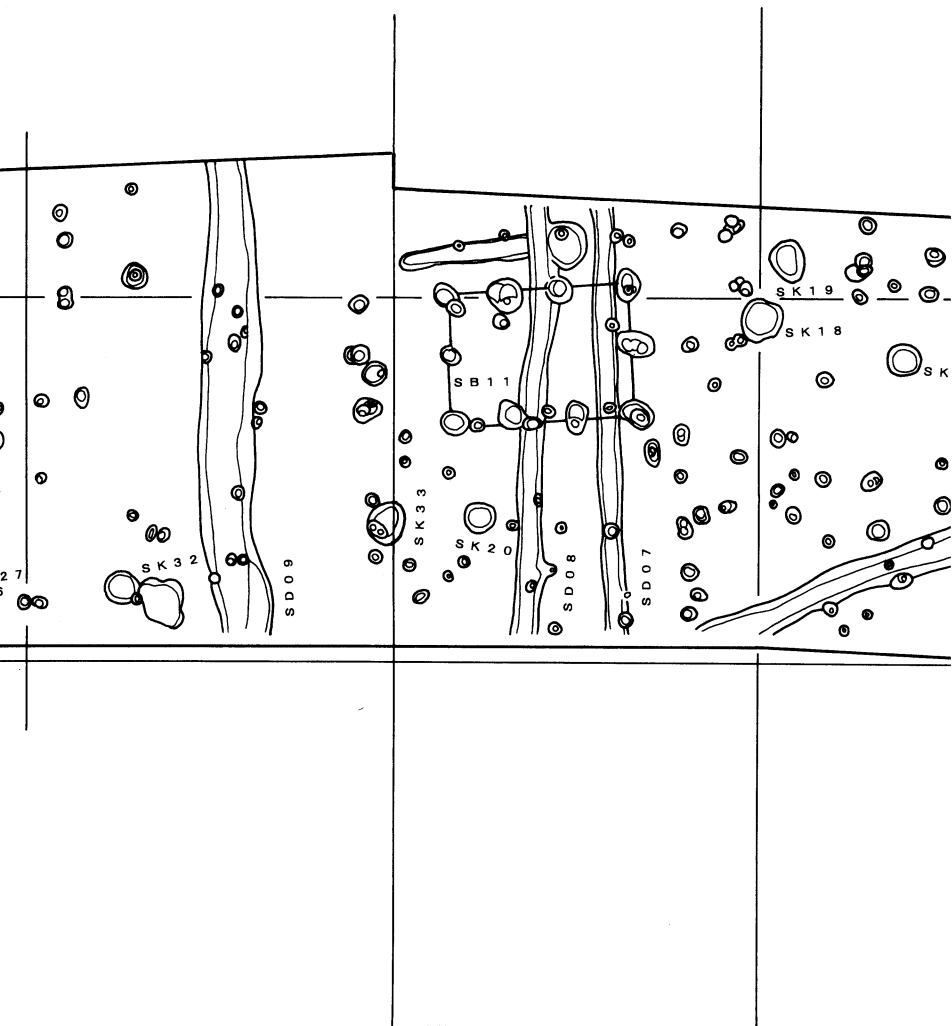
##### 掘立柱建物跡3

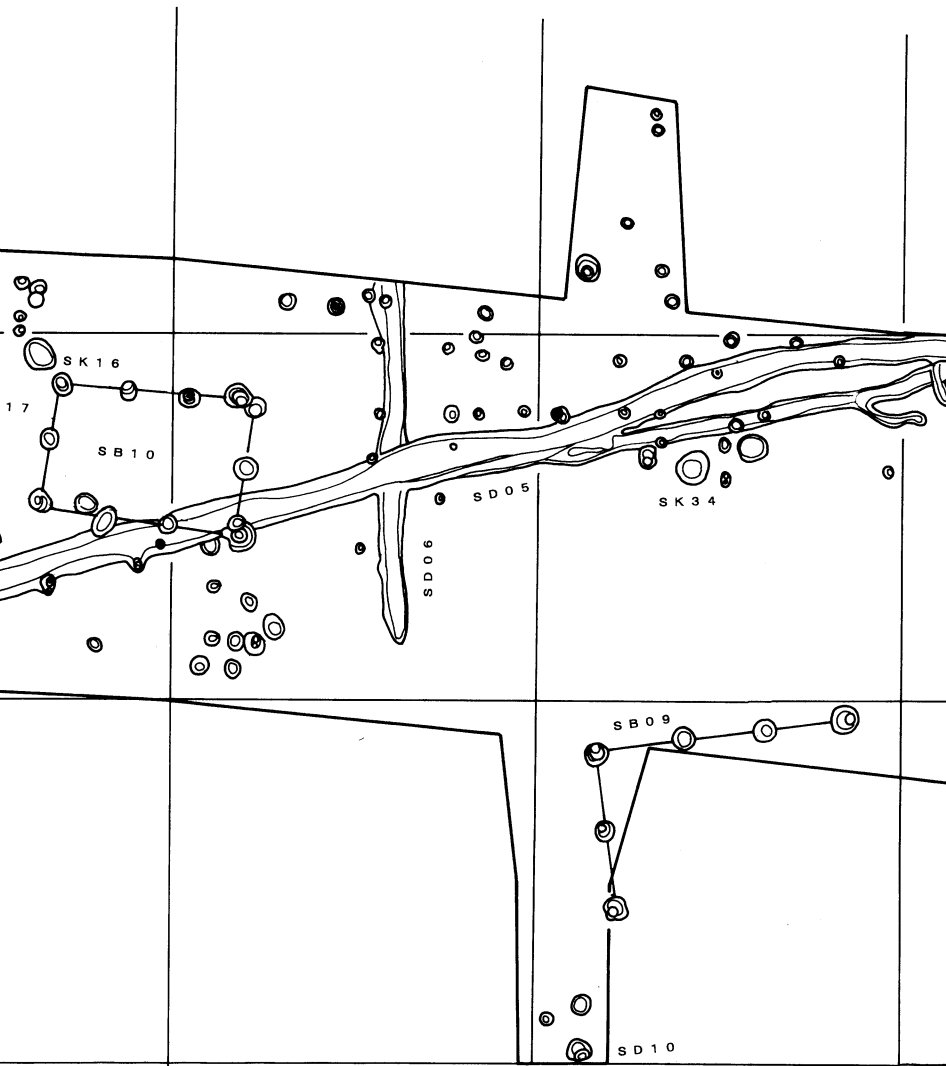
掘立柱建物跡3は掘立柱建物跡2の西側 mのF・G-8・9区に検出された。梁間2間(2.90m)×桁行3間(4.23m)を測り、北側梁間に mの庇がついているものである。建物の桁行は、N07度W方向である。梁間の1間が平均1.45m、桁行間が1.41mとなる。柱穴の掘り方は円形ないし楕円形・方形のプランを呈し、建物柱穴の平均径は43cmを測り、深さの平均は検出面より42cmである。

##### 掘立柱建物跡4

掘立柱建物跡4は遺構群の東端F・G-8・9に検出された。溝状遺構1の内側にあり、梁間1間(3.82m)×桁行1間(3.61m)を測る。建物の桁行は、N01度W方向である。柱穴の掘り方はP4がやや楕円形である外は全て円形を呈する。建物柱穴の平均径は32cmを測り、深さの平均は検出面より47cmである。

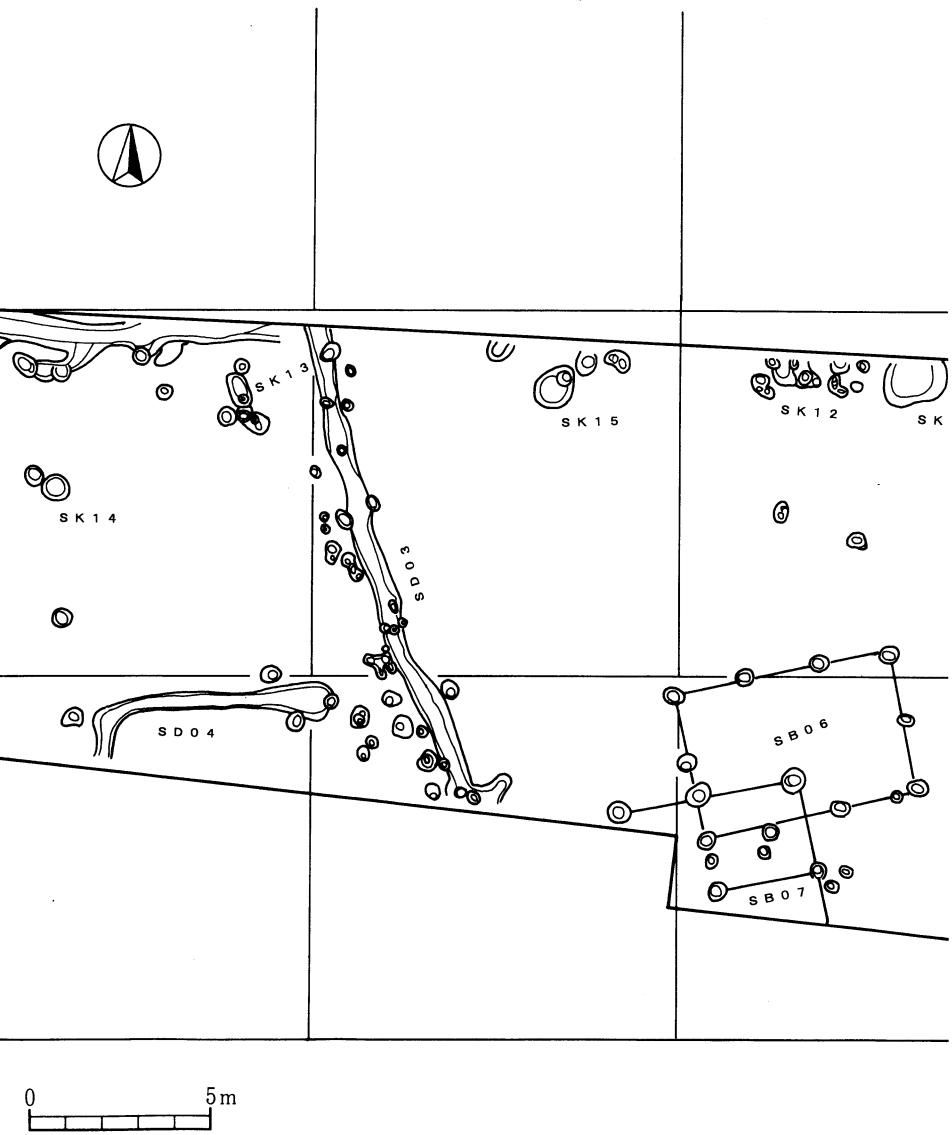


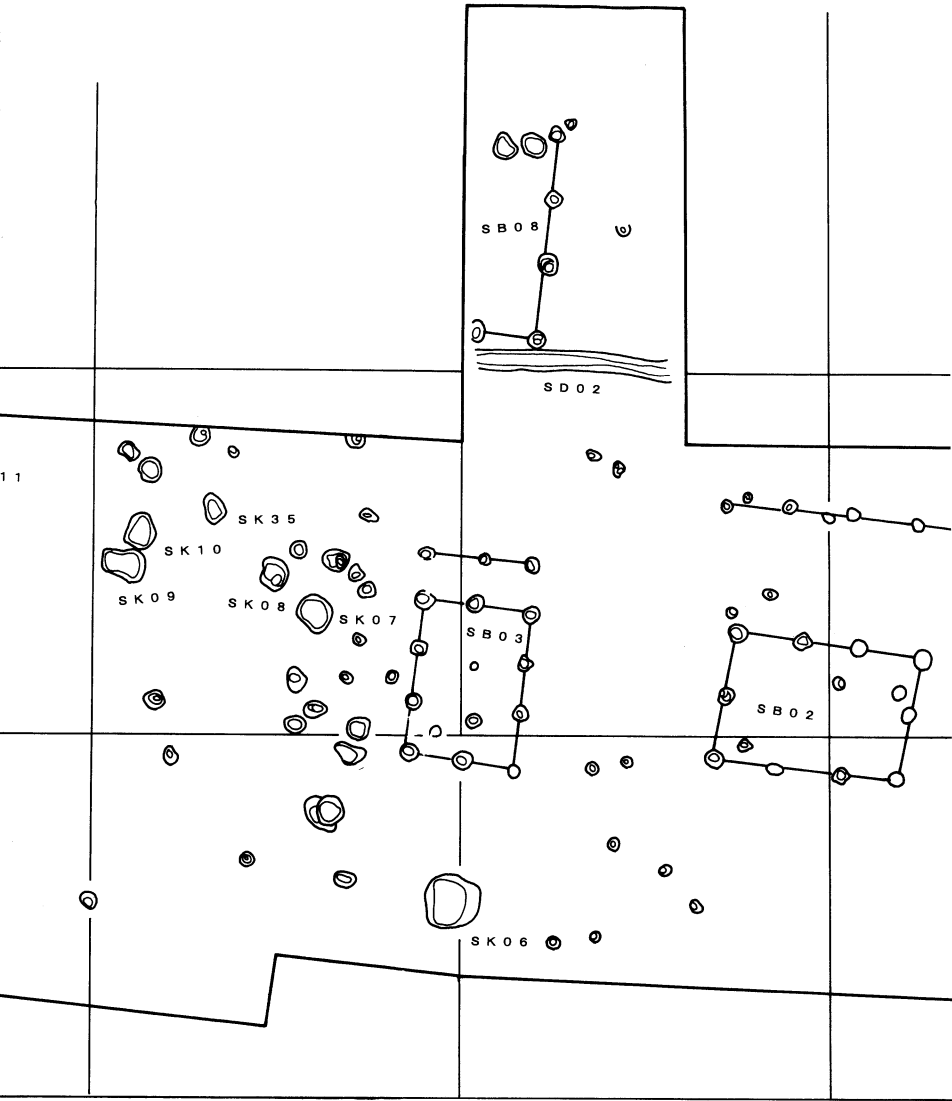




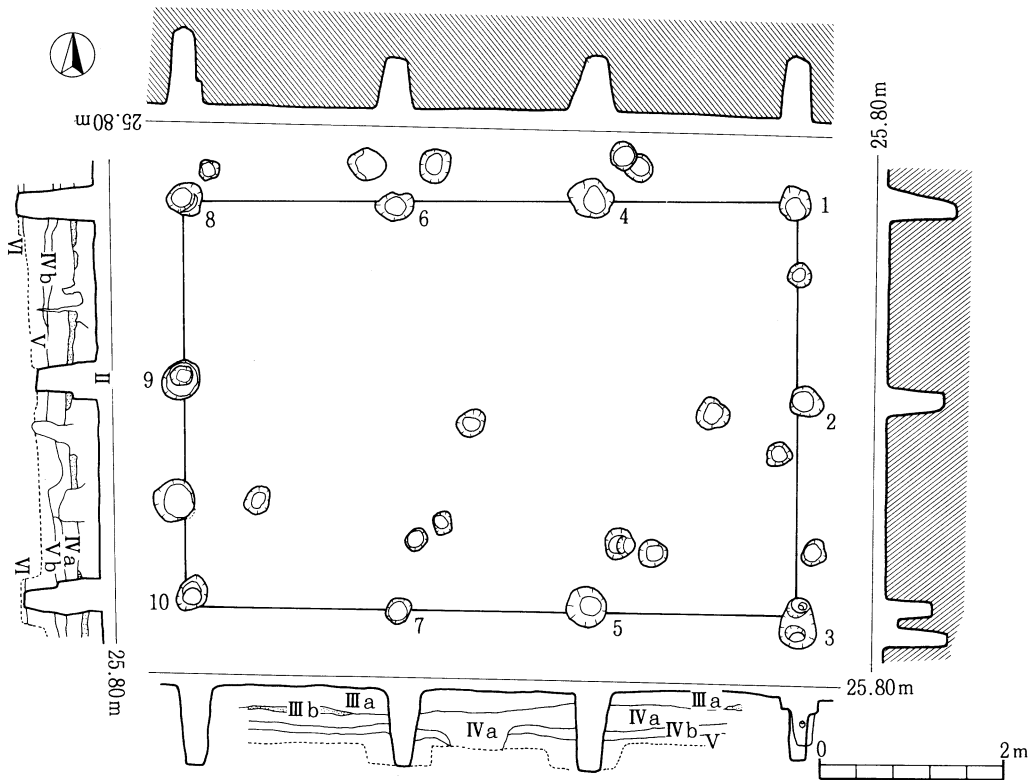
第43図 平安時代遺構配置図







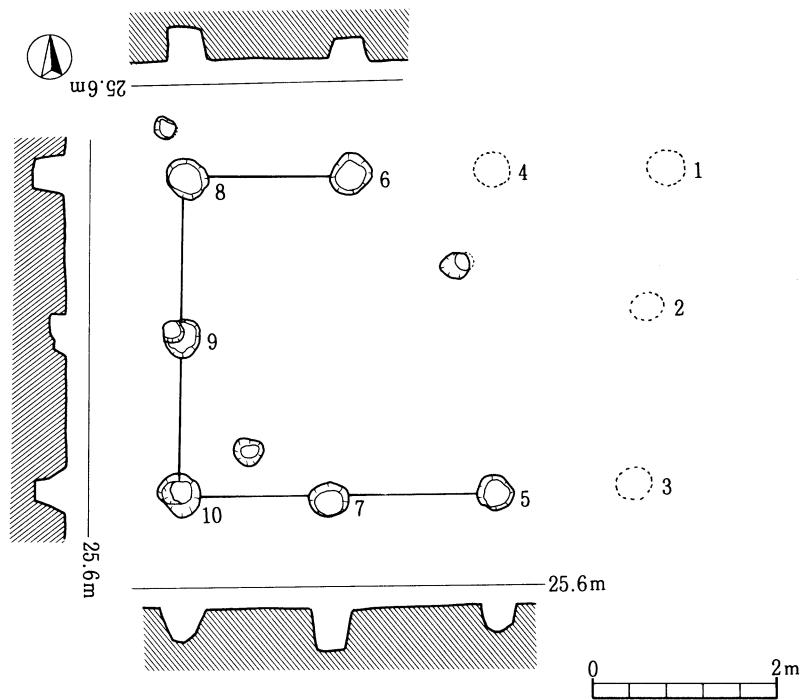




第44図 掘立柱建物跡 1

第 8 表 掘立柱建物跡 1 計測表

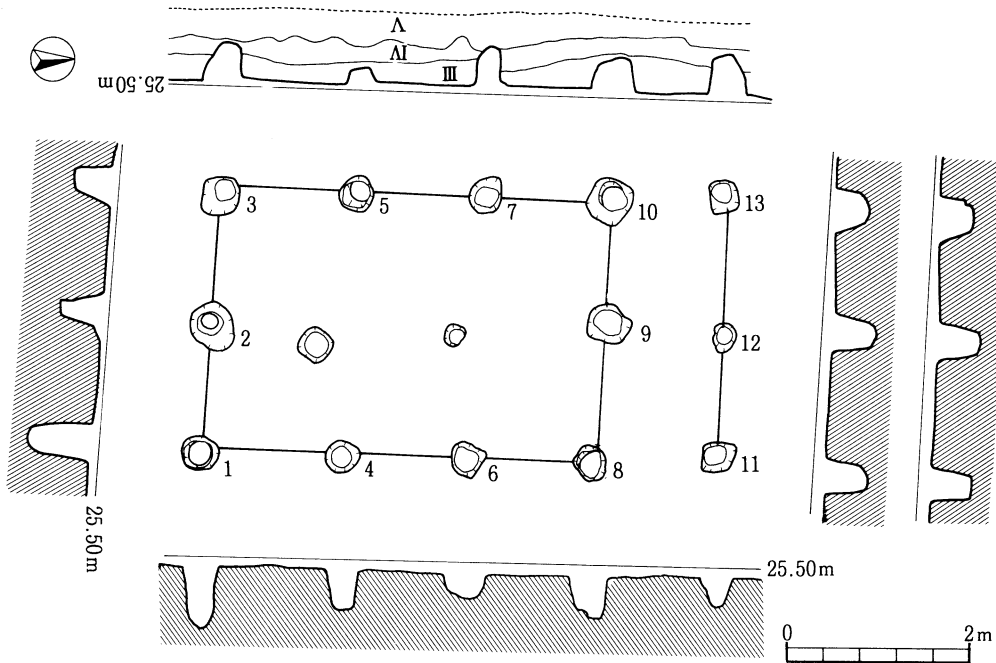
2 間×3 間	梁間柱間 (cm)	梁 間 間 (cm)	N-00'-E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁 行 間 (cm)	Pit	深 さ (cm)	長 径 (cm)	短 径 (cm)	掘 り 方
P 1 - P 2	212	432	P 1 - P 4	216	666	P 1	72	38	34	円 形
P 2 - P 3	226		P 4 - 6	216		P 2	62	36	30	橢 円 形
P - - P 5	194	440	P 6 - 8	233	660	P 3	52 · 71	53	40	橢 円 形
P 6 - P 7		440	P 3 - 5	229		P 4	59	50	39	橢 円 形
P 8 - P 9	238	432	P 5 - 7	210	660	P 5	86	45	44	円 形
P 9 - P 10			P 7 - 10	223		P 6	56	42	30	橢 円 形
						P 7	82	28	26	円 形
						P 8	85	40	40	円 形
						P 9	65	45	34	橢 円 形
						P 10	86	42	34	橢 円 形
平 均	218	436	平 均	221	663		71	38	36	



第45図 掘立柱建物跡 2

第9表 掘立柱建物跡 2 計測表

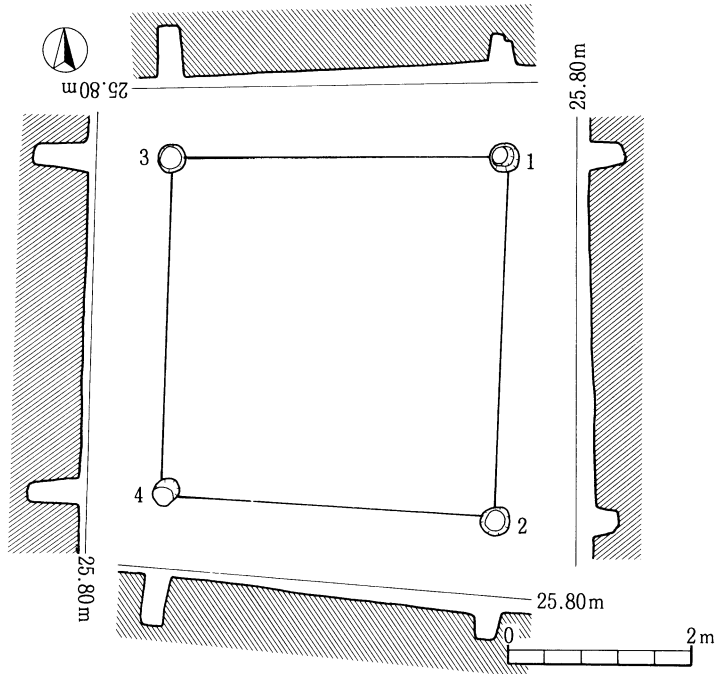
2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-00'-E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P(1)-P(2)	(150)	340	P(1)-P(4)	(190) ↓	(528)	P(1)				
P(2)-P(3)	(190)		P(4)-P 6	(160) ↓		P(2)				
			P 6 - P 8	178 ↓		P(3)				
P 8 - P 9	172	340	P(3)-P 5	(150) ↓	(490)	P(4)				
P 9 - P10	168		P 5 - P 7	180 ↓		P 5	31	38	38	円形
			P 7 - P10	160 ↓		P 6	36	36	36	円形
						P 7	46	43	36	楕円形
						P 8	37	46	45	円形
						P 9	18	44	38	楕円形
						P10	34	48	48	楕円形
平均	170	340			509		34	43	39	



第46図 掘立柱建物跡 3

第10表 掘立柱建物跡 3 計測表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-00'-E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 1-P 2	146	292	P 1-P 4	153	424	P 1	70	40	36	円形
						P 2	49	52	48	楕円形
P 4-P 5	156	289	P 6-P 8	135	422	P 3	40	40	40	方形
P 6-P 7						40	38	36	円形	
P 8-P 9	133	289	P 3-P 5	142	422	P 5	22	38	38	円形
P 9-P 10						P 6	26	44	36	楕円形
平均	145	290	平均	141	423	P 7	43	38	34	楕円形
						P 8	47	38	32	楕円形
						P 9	47	48	44	円形
						P 10	37	50	48	方形



第47図 掘立柱建物跡 4

第11表 掘立柱建物跡 4 計測表

1間×1間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-00'-E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 1 - P 2	396		P 1 - P 3	358		P 1	41	32	32	円形
						P 2	29	32	32	円形
P 3 - P 4	367		P 2 - P 4	363		P 3	59	31	30	円形
						P 4	57	32	26	楕円形
平均	382		平均	361		平均	47	32	30	

#### 掘立柱建物跡5

掘立柱建物跡5は掘立柱建物跡1のすぐ北側のF-6区に検出された。梁間1間(1.84m)×桁行2間(3.70m)を測る。建物の桁行は、N03度E方向である。柱穴の掘り方はP1・P4が楕円形で他は円形プランを呈す。建物柱穴の平均径は40cmを測り、深さの平均は検出面より42cmである。

#### 掘立柱建物跡6

掘立柱建物跡6は掘立柱建物跡3の西側12mのG-10区に検出された。梁間2間(4.03m)×桁行3間(5.97m)を測る。建物の桁行は、N24度E方向である。梁間の1間が平均1.95m、桁行間が1.87mとなる。柱穴の掘り方は円形ないし楕円形プランを呈し、建物柱穴の平均径は約47cmを測る。深さの平均は検出面より23cmである。

#### 掘立柱建物跡7

掘立柱建物跡7は掘立柱建物跡6と重複してG-10・11区に検出された。南側は区域外で調査できなかったが、他の建物跡の柱穴よりも大きい柱穴とP4の位置から総柱建物の可能性もある。建物の桁行は、N13度E方向である。梁間の1間が平均2.63m、桁行間が2.53mとなる。柱穴の掘り方は円形ないし楕円形プランを呈し、建物柱穴の平均径は約60cmを測る。深さの平均は検出面より46cmである。

#### 掘立柱建物跡8

掘立柱建物跡8は掘立柱建物跡3の北側10mのE-8区に検出された。西側は区域外で調査できなかったが、構造・規模については2間×3間の建物が推定される。桁行間は4.83mを測る。建物の桁行は、N03度E方向である。梁間の1間が平均1.65m、桁行間が1.87mとなる。柱穴の掘り方は円形、楕円形プランを呈し、建物柱穴の平均径は50cmを測り、深さの平均は検出面より74cmである。

#### 掘立柱建物跡9

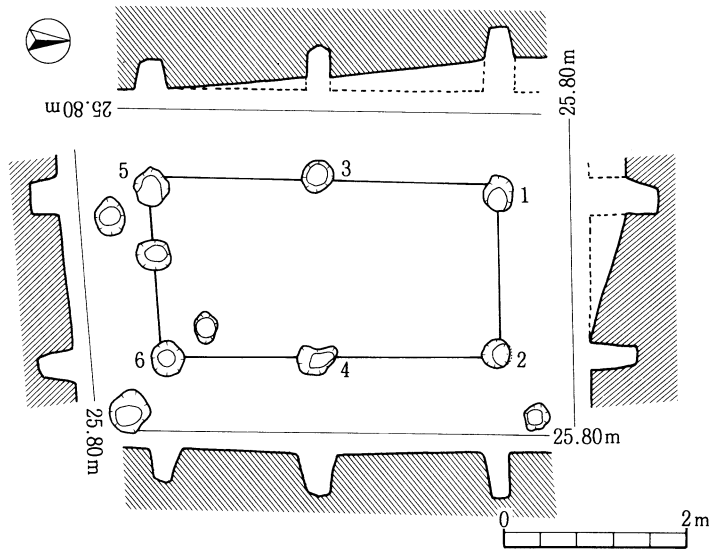
掘立柱建物跡9は掘立柱建物跡7の西側20mのG-13区に検出された。東南部が区域外であるが、2間×3間の建物跡と推定される。梁間2間(4.50m)×桁行間3間(6.96m)を測る。建物の桁行は、N13度E方向である。梁間の1間が平均2.25m、桁行間が2.32mとなる。柱穴の掘り方はP1の楕円形を除いて円形プランを呈し、建物柱穴の平均径は66cmを測り、深さの平均は検出面より54cmである。柱根径は約20cmである。

#### 掘立柱建物跡10

掘立柱建物跡10は掘立柱建物跡9の北西17mのF-14・15区に検出された。掘立柱建物跡10を溝状遺構05が切っている。梁間2間(3.53m)×桁行間3間(5.46m)を測り、建物の桁行は、N01度W方向である。梁間の1間が平均1.74m、桁行間が1.83mとなる。柱穴の掘り方は円形・楕円形のプランを呈し、建物柱穴の平均径は60cmを測り、深さの平均は検出面より38cmである。柱根径は約20cmである。

#### 掘立柱建物跡11

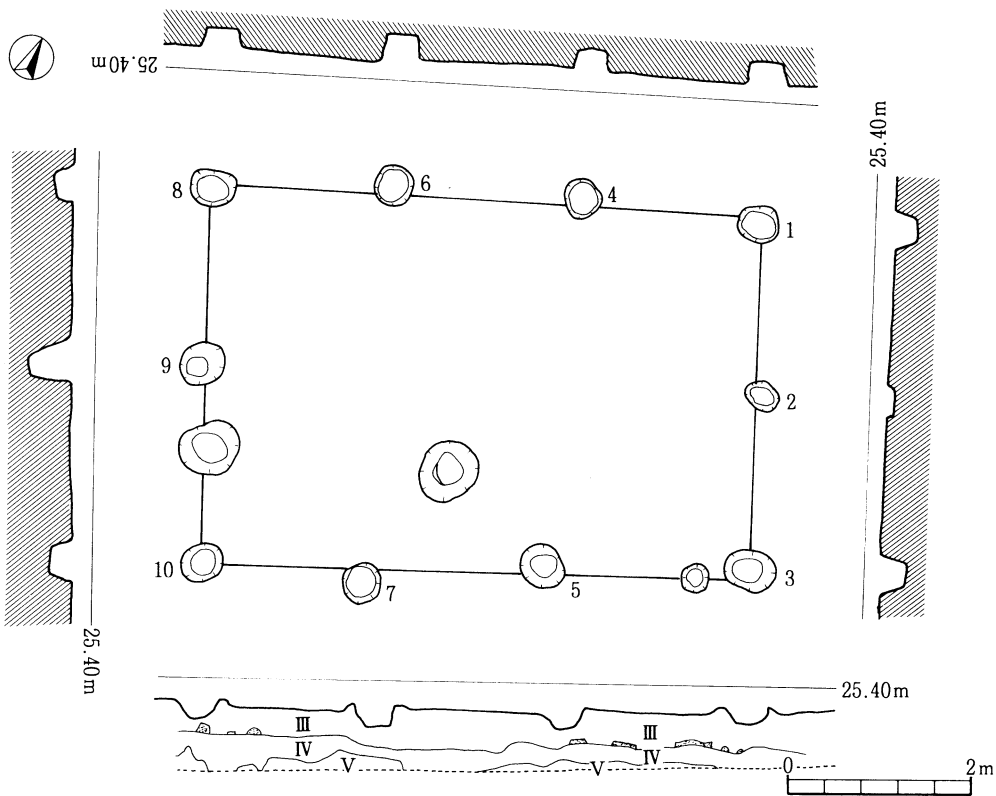




第48図 掘立柱建物跡 5

第12表 掘立柱建物跡 5 計測表

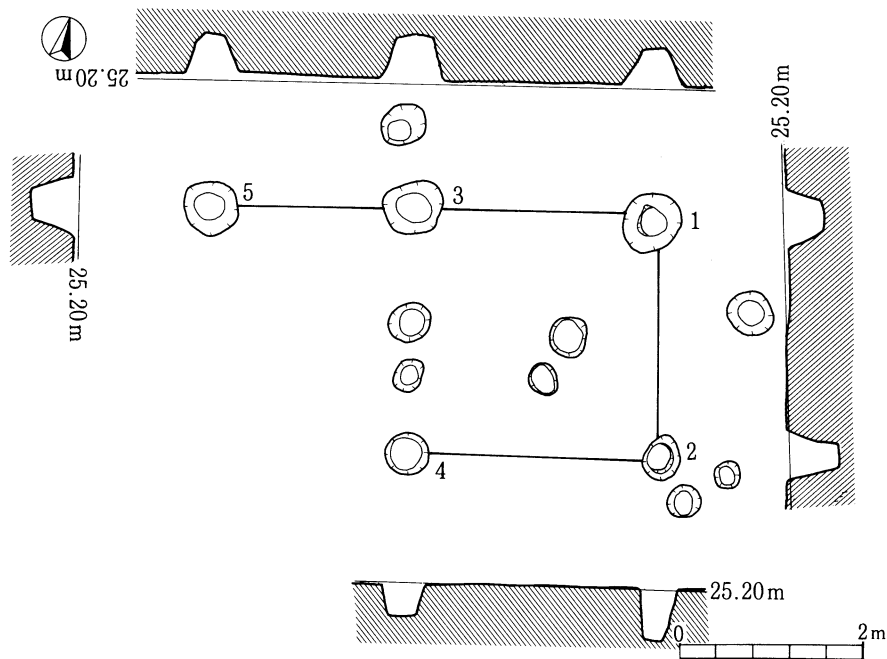
1間×2間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-00'-E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 1 - P 2	169		P 1 - P 3	198	376	P 1	42	40	32	楕円形
P 2 - P 4	200		P 3 - P 5	180		P 2	52	39	34	円形
P 5 - P 6	182		P 2 - P 4	196	364	P 3	39	36	34	円形
P			P 4 - P 6	166		P 4	46	44	27	楕円形
						P 5	32	42	38	円形
						P 6	40	38	36	円形
平均	184		平均	185	370		42	40	34	



第49図 掘立柱建物跡 6

第13表 掘立柱建物跡 6 計測表

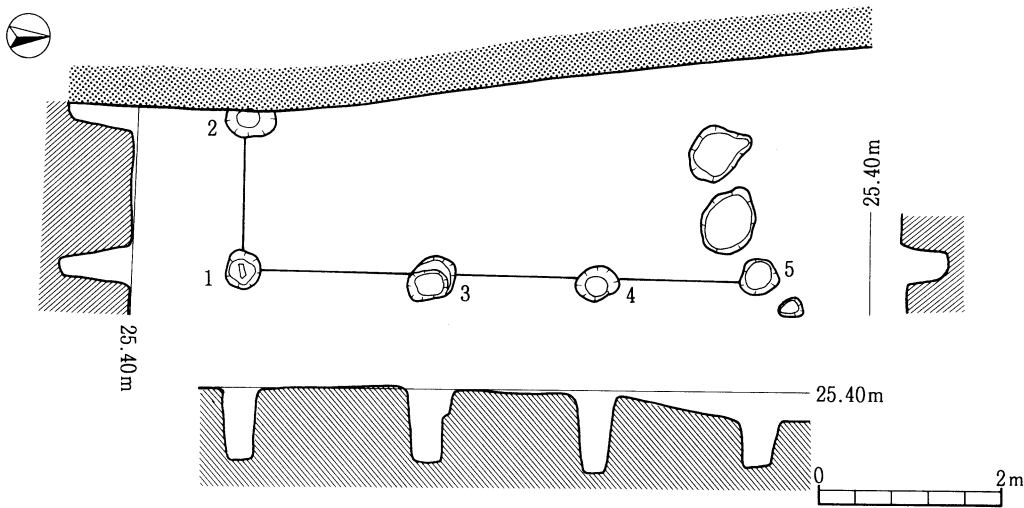
2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-00'-E (cm)	桁柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 1 - P 2	186	374	P 1 - P 4	192	595	P 1	24	45	40	円形
P 2 - P 3	188		P 4 - P 6	206		P 1	9	40	30	楕円形
P 4 - P 5			P 6 - P 8	197		P 3	29	54	44	楕円形
P 6 - P 7		430	P 3 - P 5	224	598	P 4	25	43	38	方形
P 8 - P 9	194	406	P 5 - P 7	200		P 5	30	50	45	円形
P 9 - P 10	212		P 7 - P 10	174		P 6	23	45	44	円形
							P 7	21	44	40
						P 8	19	51	40	楕円形
						P 9	29	48	45	円形
						P 10	24	46	42	円形
平均	195	403	平均	187	597	平均	23	47	41	



第50図 掘立柱建物跡 7

第14表 掘立柱建物跡 7 計測表

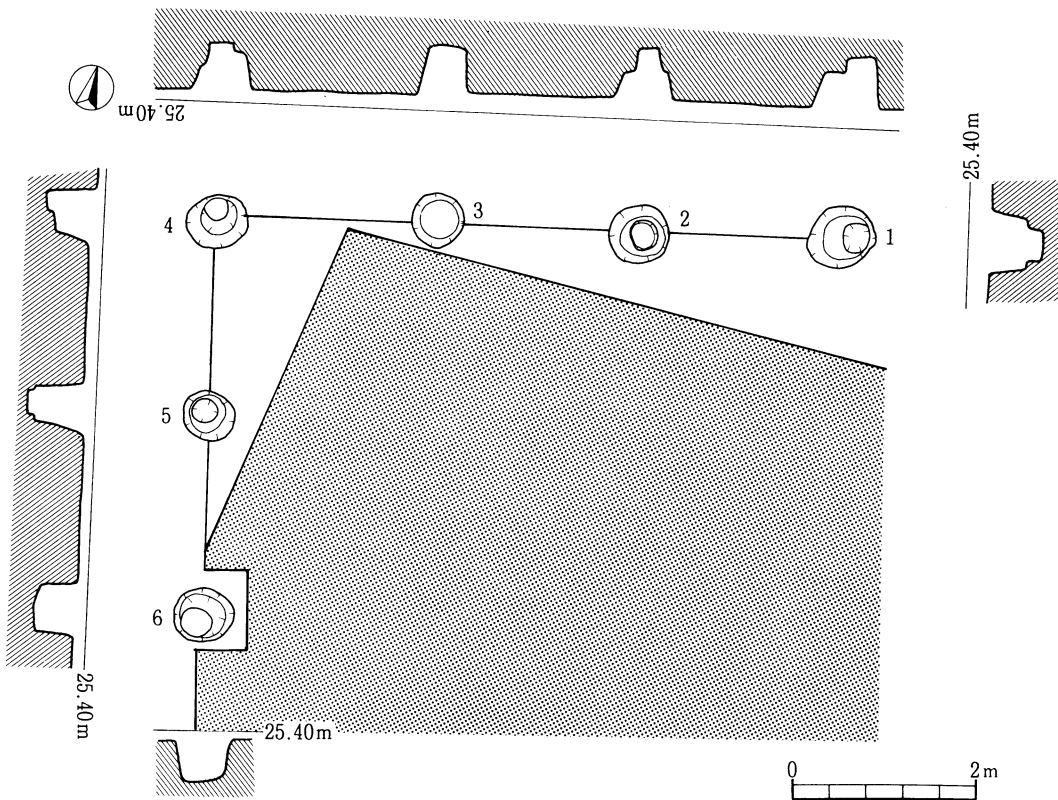
2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-00°-E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 1 - P 2	256		P 1 - P 3	260	483	P 1	41	70	62	楕円形
P - P 4	270		P 3 - P 5	223		P 2	59	50	40	楕円形
			P 2 - P 4	276		P 3	49	68	58	楕円形
						P 4	35	50	46	円形
						P 5	46	63	58	円形
平均	263		平均	253	483		46	60	53	



第51図 掘立柱建物跡 8

第15表 掘立柱建物跡 8 計測表

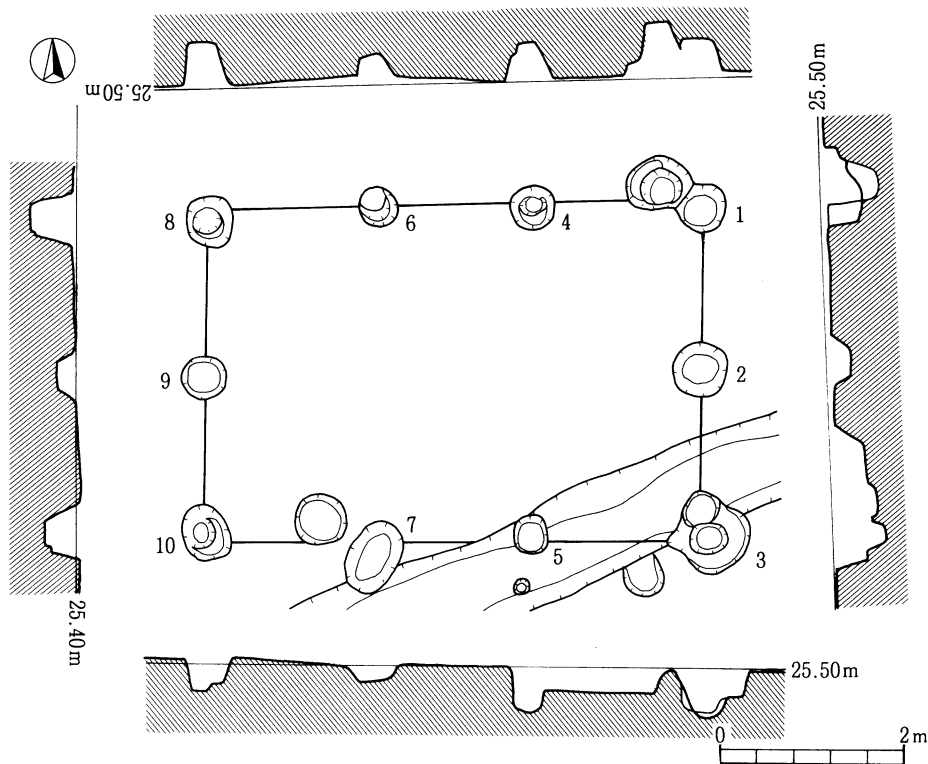
2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-00'-E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 1 - P 2	165		P 1 - P 3	206	562	P 1	74	42	40	円形
			P 3 - P 4	180		P 2	74	56	楕円形	
			P 4 - P 5	176		P 3	82	60	43	楕円形
						P 4	86	48	38	楕円形
			P 5	52		42	38	円形		
平均	165		平均	187	562	平均	74	50	40	



第52図 掘立柱建物跡 9

第16表 掘立柱建物跡 9 計測表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-00'-E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 4 - P 5	220	450	P 1 - P 2	232	696	P 1	58	76	66	楕円形
						P 2	56	70	63	円形
P 5 - P 6	230	450	P 2 - P 3	222	696	P 3	54	58	56	円形
						P 4	54	67	60	円形
						P 5	60	56	55	円形
						P 6	44	66	60	円形
平均	225	450	平均	232	696		54	66	60	



第53図 掘立柱建物跡10

第17表 掘立柱建物跡10 計測表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-00'-E	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 1 - P 2	170	356	P 1 - P 4	128	542	P 1	37・56	74	57	円形・楕円形
P 2 - P 3	186		P 4 - P 6	176		P 2	20	62	60	円形
P 4 - P 5			P 6 - P 8	184		P 3	57・49	91	90	円形
P 6 - P 7		352				P 4	41	50	48	円形
P 8 - P 9	170	338	P 3 - P 5	194	550	P 5	48	42	38	楕円形
P 9 - P 10	168		P 5 - P 7	172		P 6	22	46	40	楕円形
			P 7 - P 10	190		P 7	18	80	56	楕円形
						P 8	48	56	50	楕円形
						P 9	21	49	48	円形
						P 10	37	64	50	楕円形
平均	174	353	平均	183		546	平均	38	60	53

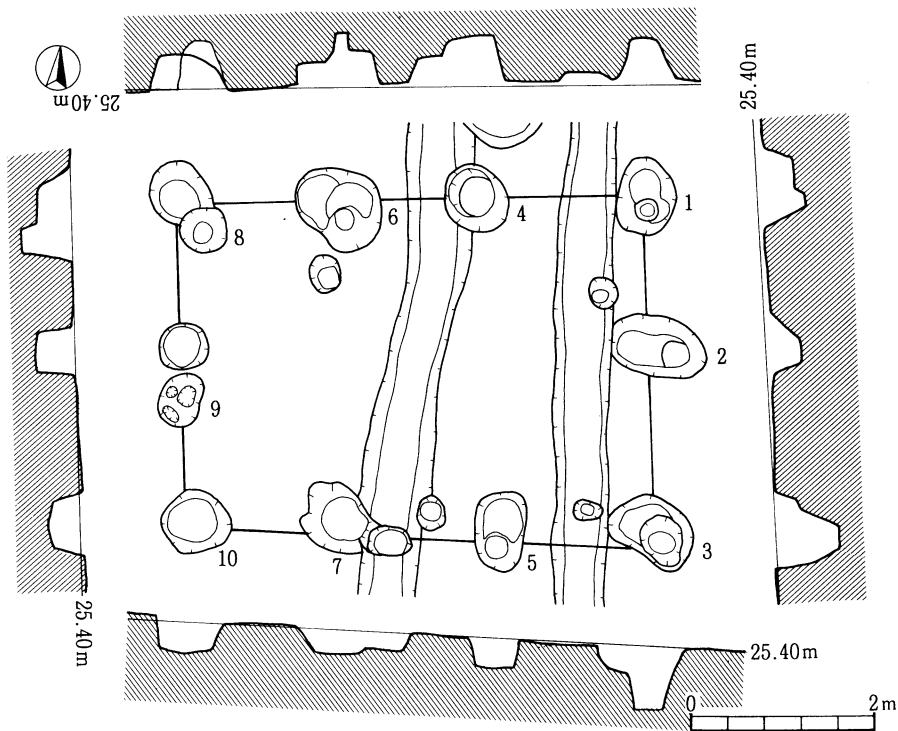
掘立柱建物跡11は掘立柱建物跡10の西側10mのE・F-16区に検出された。掘立柱建物跡11を溝状遺構07・08が切っている。梁間2間(3.56m)×桁行間3間(5.08m)を測り、建物の桁行は、N07度E方向である。梁間の1間が平均1.78m、桁行間が1.70mとなる。柱穴の掘り方はほぼ楕円形のプランを呈し、建物柱穴の平均径は91cm×54cmを測り、深さの平均は検出面より50cmである。

#### 掘立柱建物跡12

掘立柱建物跡12はF-18区に検出された。南側は区域外で調査できなかったが、構造・規模については2間×3間の建物跡が推定される。桁行間は6.36mを測る。建物の桁行は、N07度E方向である。梁間の1間が平均1.95m、桁行間が2.12mとなる。柱穴の掘り方は円形であるが、二重になっている。建物柱穴の平均径は67cmを測り、深さの平均は57cmである。

#### 出土遺物

296～312は掘立柱建物跡の柱穴内から出土した遺物である。296～301はSB01出土の土器で308・309は須恵器で他は土師器である。296は口径10.5cmを測る高台付小皿である。底部から体部へ直線的にのび、平坦な皿に、内面が内傾し付け根部が肥厚する高台を付す。内外面とも横ナデ調整を施す。297・298は坏である。口縁部がやや内弯し、底部をやや直線的に形成している。ヘラ切り底である。299は口縁部が外反する鉢である。300は高台付碗である。底径に比べて器高の高いもので口縁部は直線的に立ちあがる。301はタタキを有する甕の胴部である。302・303はSB02の柱穴内から出土した土師器の皿と坏である。302は体部と底部の境に明瞭な稜を形成し、体部は外傾度が強く直線的にのびるもので、口縁端部を丸くおさめている。口径は14.8cm、器高は2.2cmで底部は若干のあげ底気味でヘラ切りである。303は坏の底部で平坦なヘラ切りの底部をもち、体部との境が明瞭なものである。304はSB03の出土の坏で、体部と底部の境が明瞭でない。内外面とも丁寧な横ナデ整形で、口縁部付近で外反するものである。305は、SB05出土の坏で、平坦な回転ヘラ切り底をもち体部との境が明瞭で、体部が直線的にのびるものである。306・307はSB08出土の碗と甕である。306は内面に朱を塗った内朱土器である。底部は不明である。体部の外傾度が強く直線的にのびるもので碗と思われる。307は「く」の字状に外反する直線的な口縁部を有し、体部があまり張らないもので、頸部は肥厚する。外面全体にススが附着している。308～310はSB09出土の須恵器坏蓋と鉢である。308・309は口縁部のみであり全体の器形は不明であるが、口縁端部を断面三角形に短く折りまげたものである。

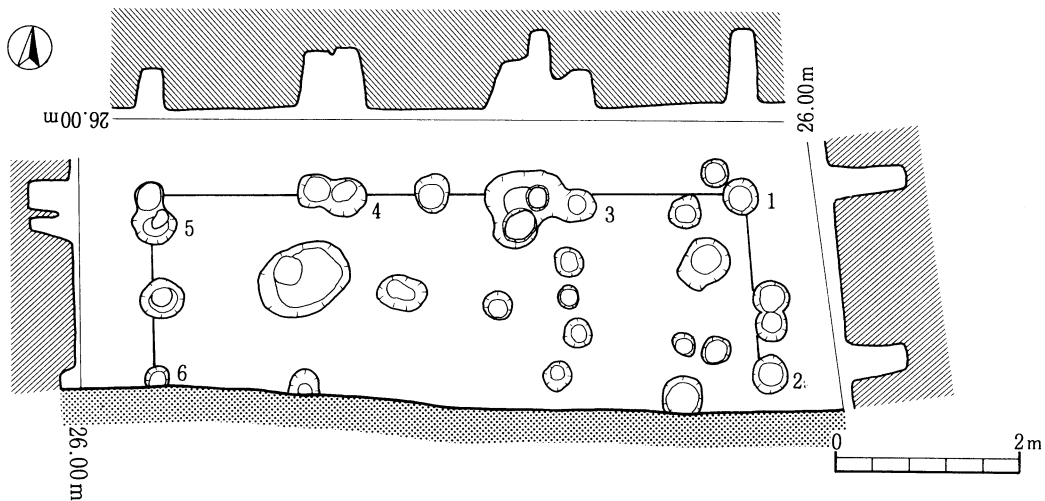


第54図 掘立柱建物跡11

第18表 掘立柱建物跡11 計測表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-00'-E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 1-P 2 P 2-P 3 P 4-P 5 P 6-P 7 P 8-P 9 P 9-P 10	162	364	P 1-P 4	188	506	P 1	39	86	63	橢円形
	202		P 4-P 6	140		P 2	31	106	66	橢円形
			P 6-P 8	178		P 3	71	98	62	橢円形
					P 4	49	71	66	橢円形	
		351				P 5	33	88	54	橢円形
	162	348	P 3-P 5	175	511	P 6	33・24・55	102	78	橢円形
	186		P 5-P 7	170		P 7	29・65	88	67	橢円形
			P 7-P 10	166		P 8	38・54	65	62	円形
							P 9	45	53	50
						P 10	37	74	70	円形
平均	178	356	平均	170	508	平均	50	91	54	

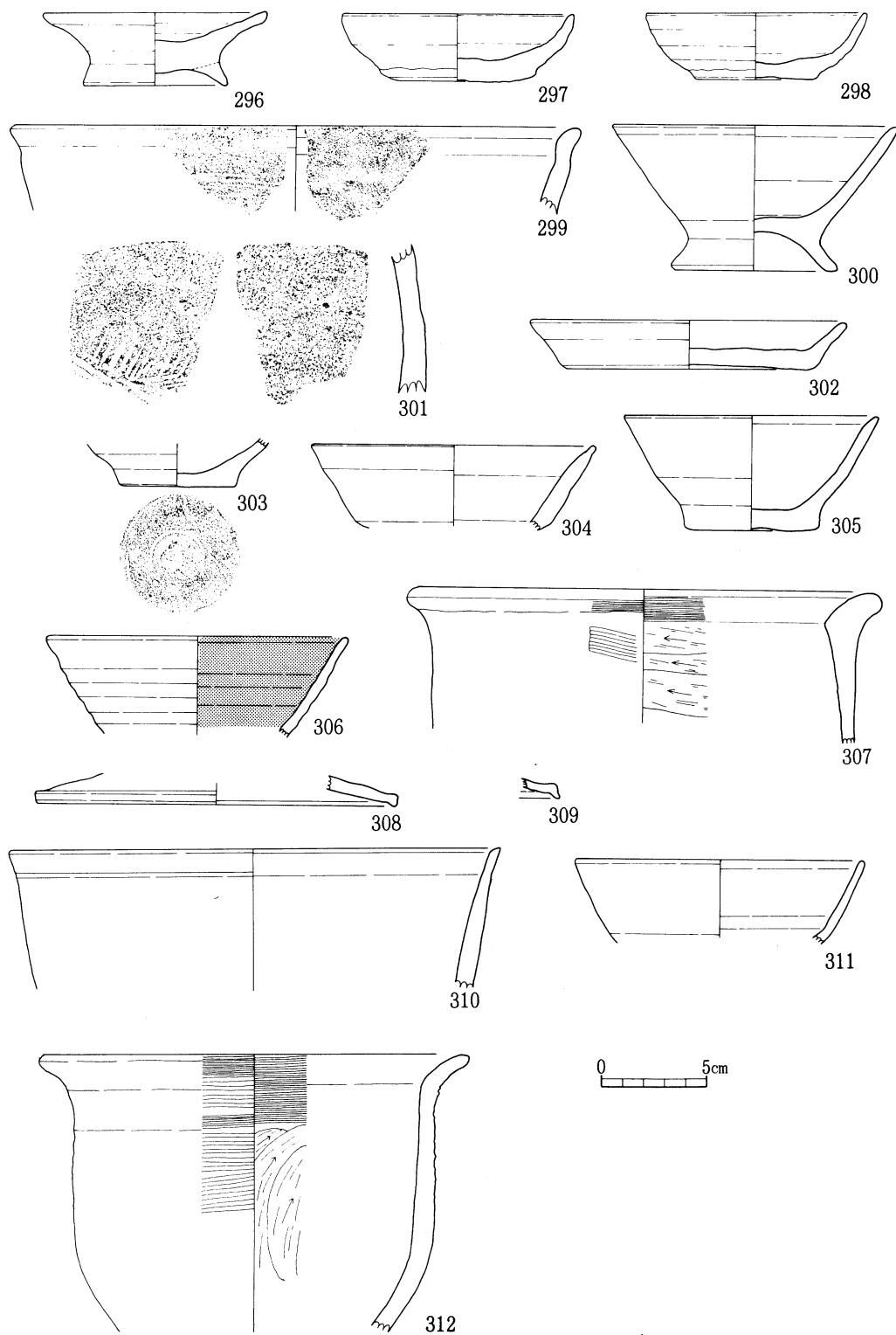




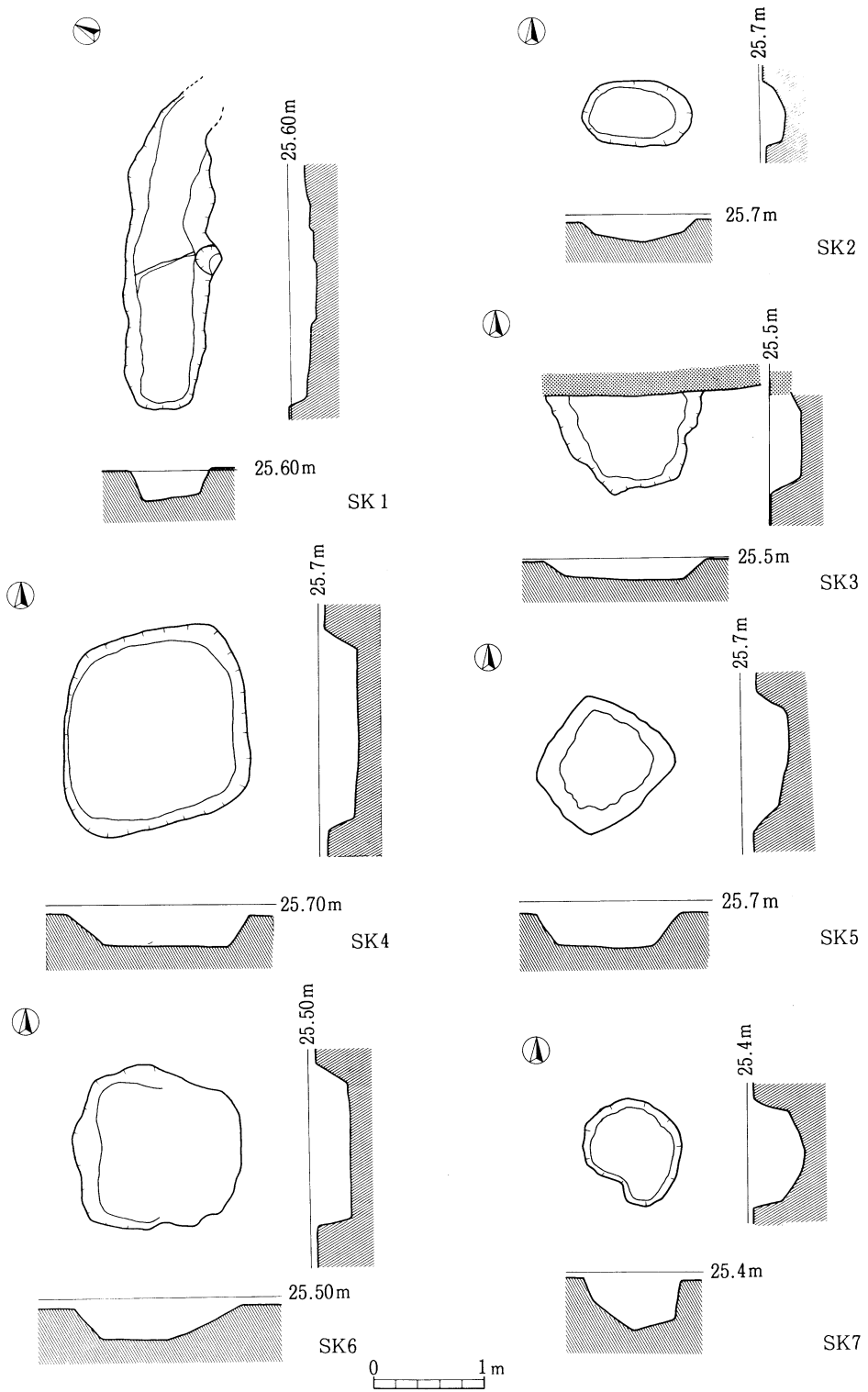
第55図 掘立柱建物跡12

第19表 掘立柱建物跡12 計測表

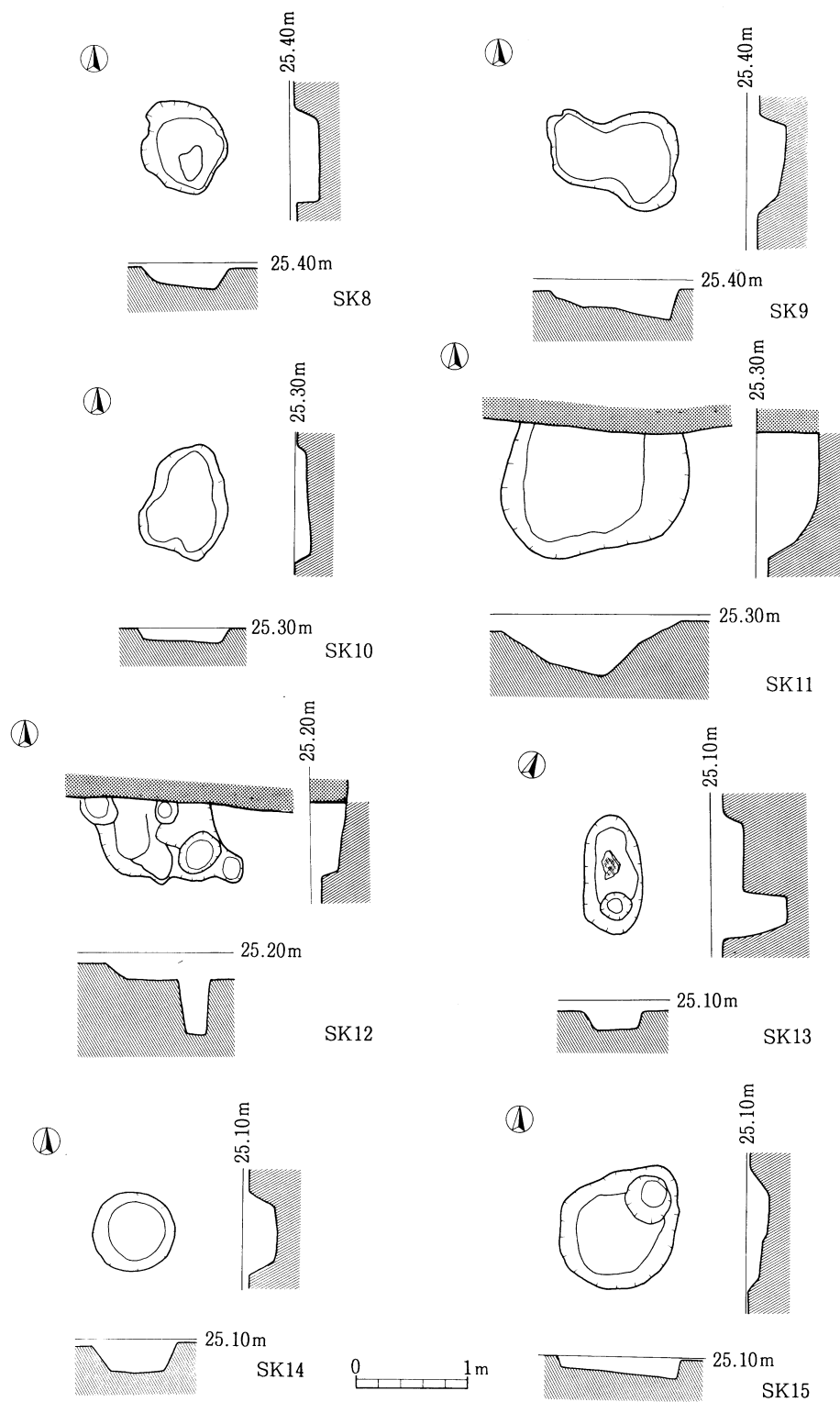
2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-00'-E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 1 - P 2	196		P 1 - P 3	216	636	P 1	80	40	36	円形
			P 3 - P 4	210		P 2	63	42	38	円形
P 6 - P 7	194		P 4 - P 5	210		P 3	43・84	121	84	二重
						P 4	68・63	78	44	二重
						P 5	46・45	68	48	二重
						P 6	17		24	
平均	195		平均	212	636	平均	57	67	45	



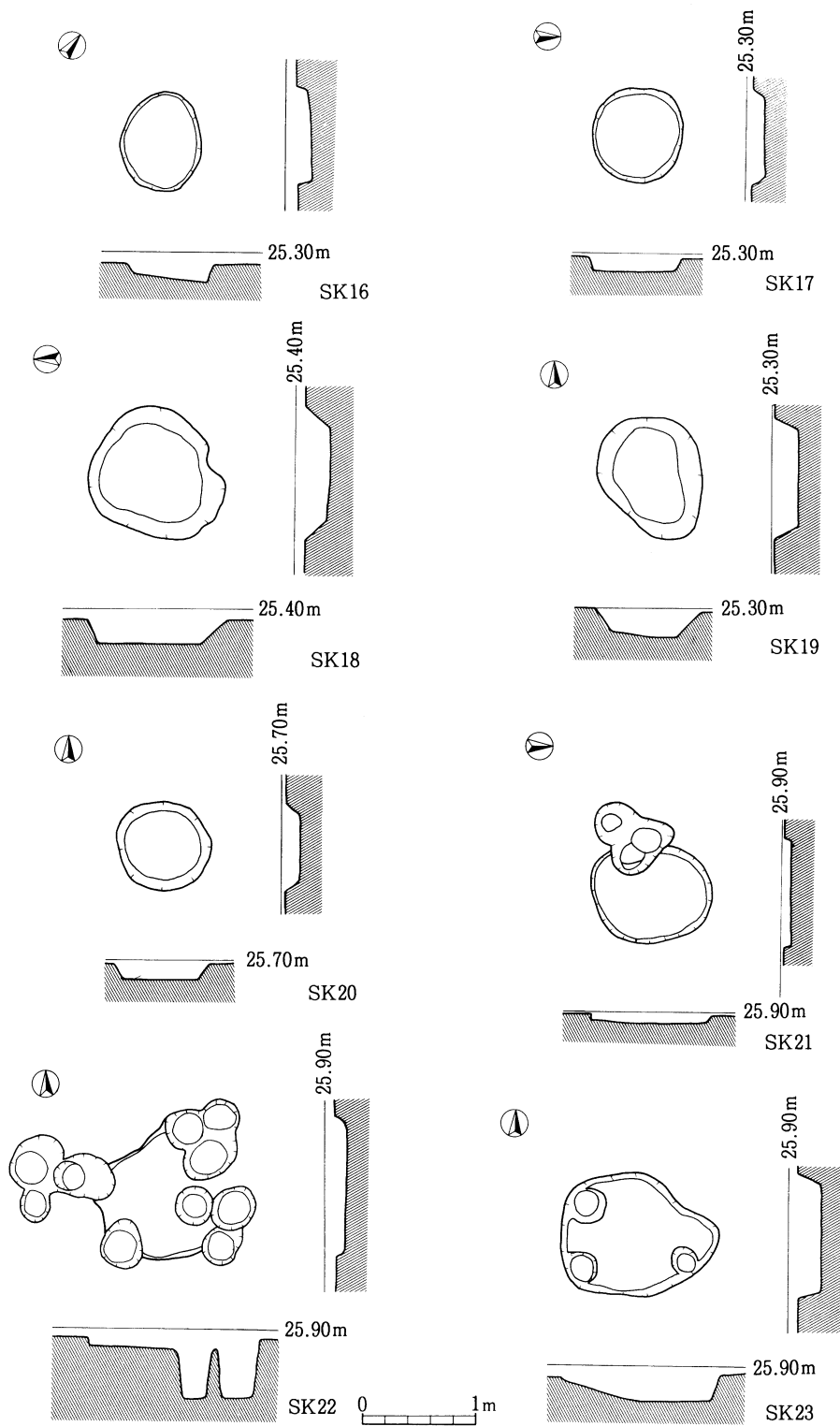
第56図 掘立柱建物跡出土の遺物



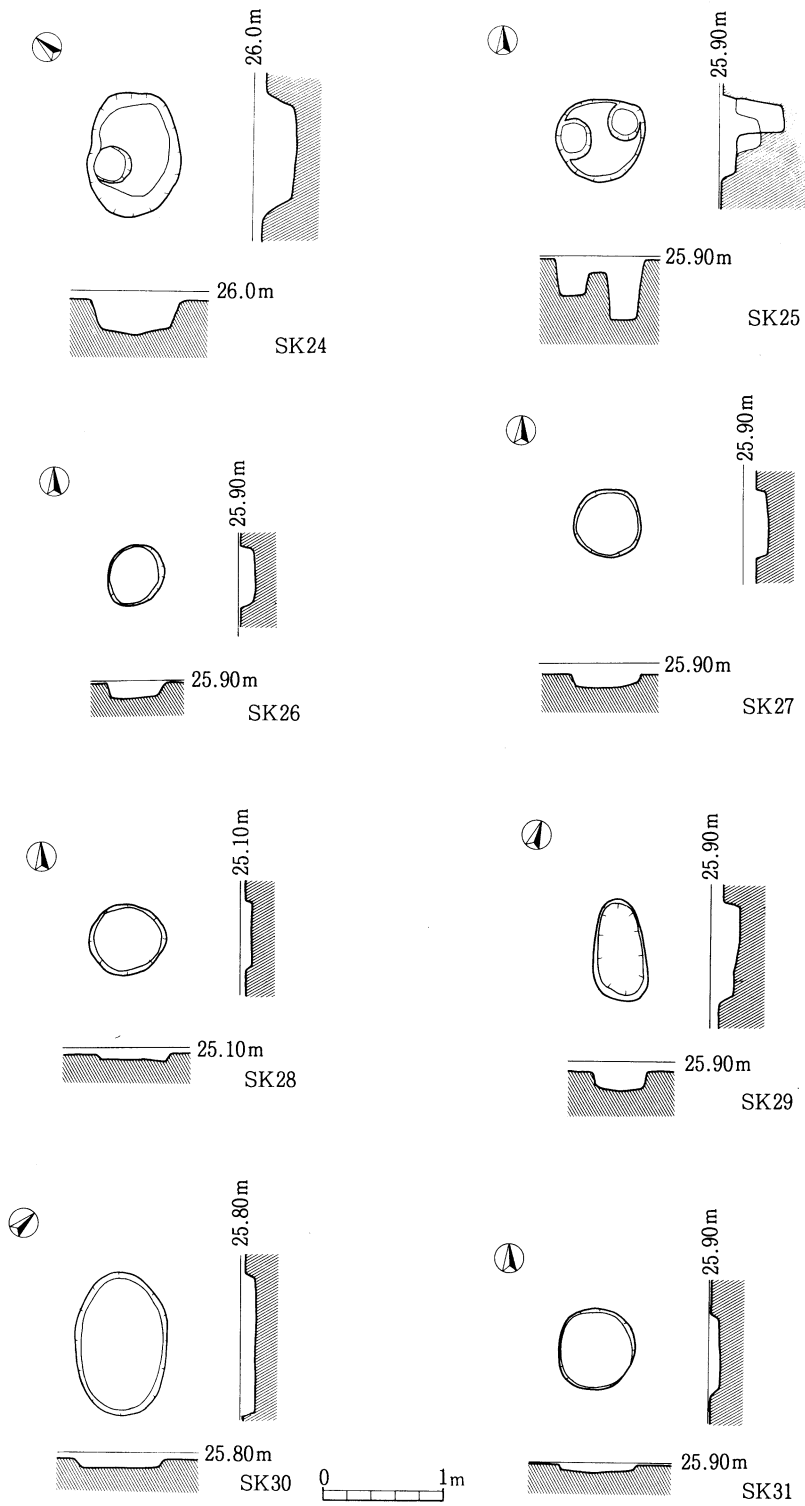
第57図 土坑 (1)



第58図 土坑 (2)



第59圖 土坑 (3)



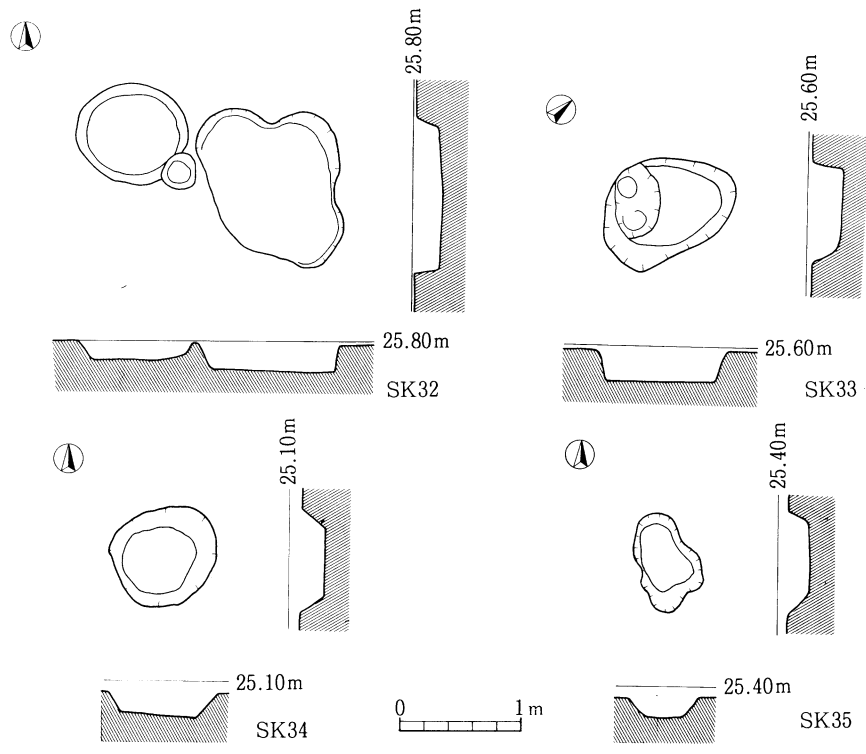
第60図 土坑 (4)

② 土壙

検出面から10～30cmの浅い掘り込みをもつ長方形の土壙が36基検出された。土壙の詳細は、第20表に示したとおりである。

出土遺物

313はSK01出土の土師器甕である。「く」の字状に外反し口縁端部は丸くなる。内側はヘラケズリ調整を施し、上位と外面は横方向のハケ目調整を行っている。314・315はSK02出土の坏である。314は須恵器の底部で、平坦な底部から稜をなして立ち上がる体部をもつものである。ヘラ切り底である。315は土師器の完形坏で平坦なヘラ切り底である。体部が丸みをもち内弯しつつ立ちあがるもので、底部をやや直線的に形成している。316・317は体部と底部の境に明瞭な稜を形成し、体部の立ち上がりが急で、口縁部が短く外反し底部がややふくらみをもつ深みのあるものである。318・319はSK14出土の須恵器甕の肩部で、外面格子叩き、内面は上位が同心円叩き目で下位は平行状叩きを縦横方向に行っている。胎土に細砂を含み焼成は良好である。319も甕の胴部付近で内面は平行状叩きがなされているが、外面はナデ消されている。320はSK19出土の須恵器甕で、外面は赤茶褐色を呈し、格子叩き、内面は平行状叩きを行っている。321はSK20出土の須恵器甕口縁部である。口縁部は外反したのち、口縁下位が屈曲するもので、屈曲部には1条の突帯を巡らす。内外面ともナデ整形を施している。色調は暗

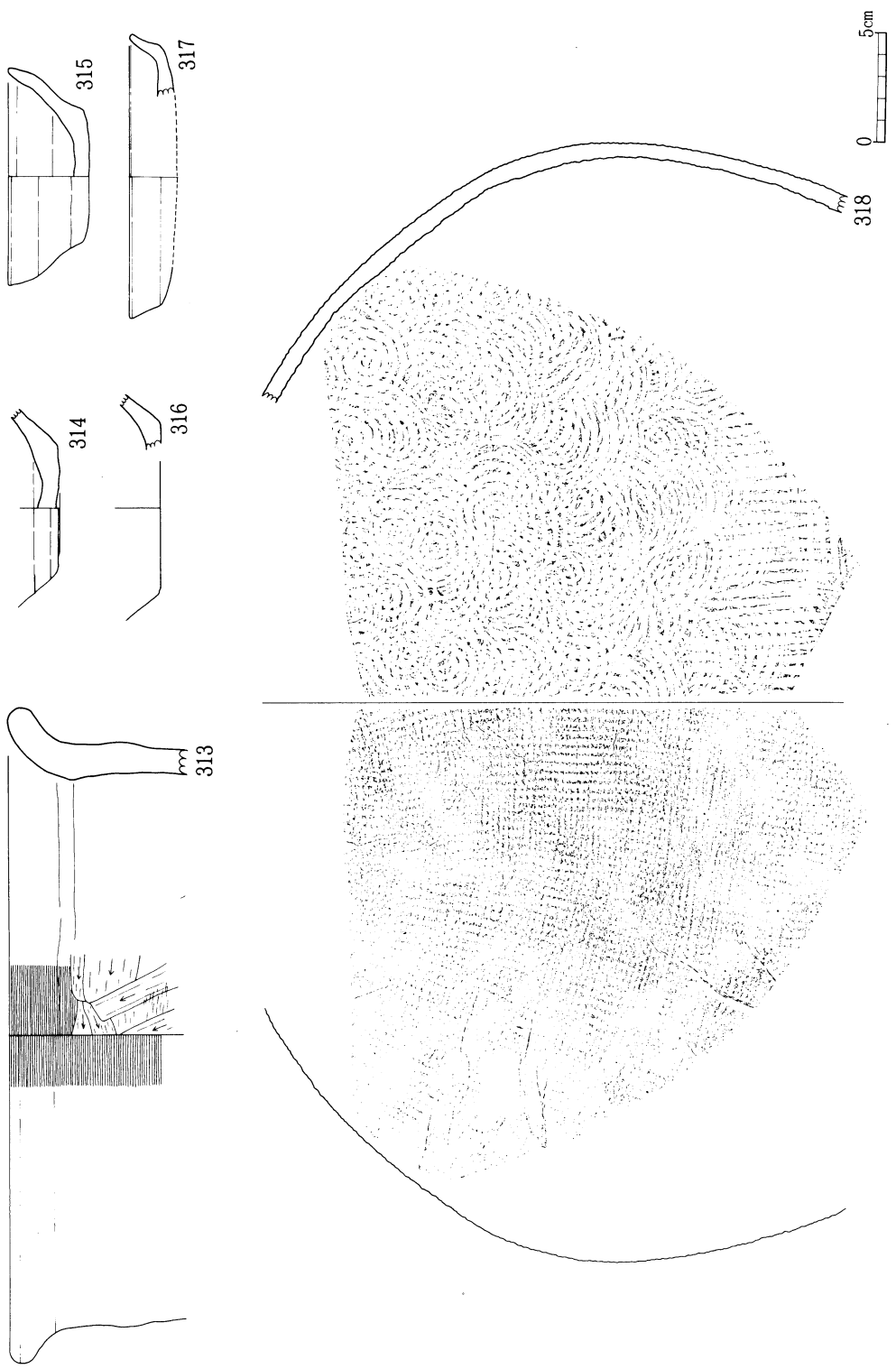


第61図 土壙(5)

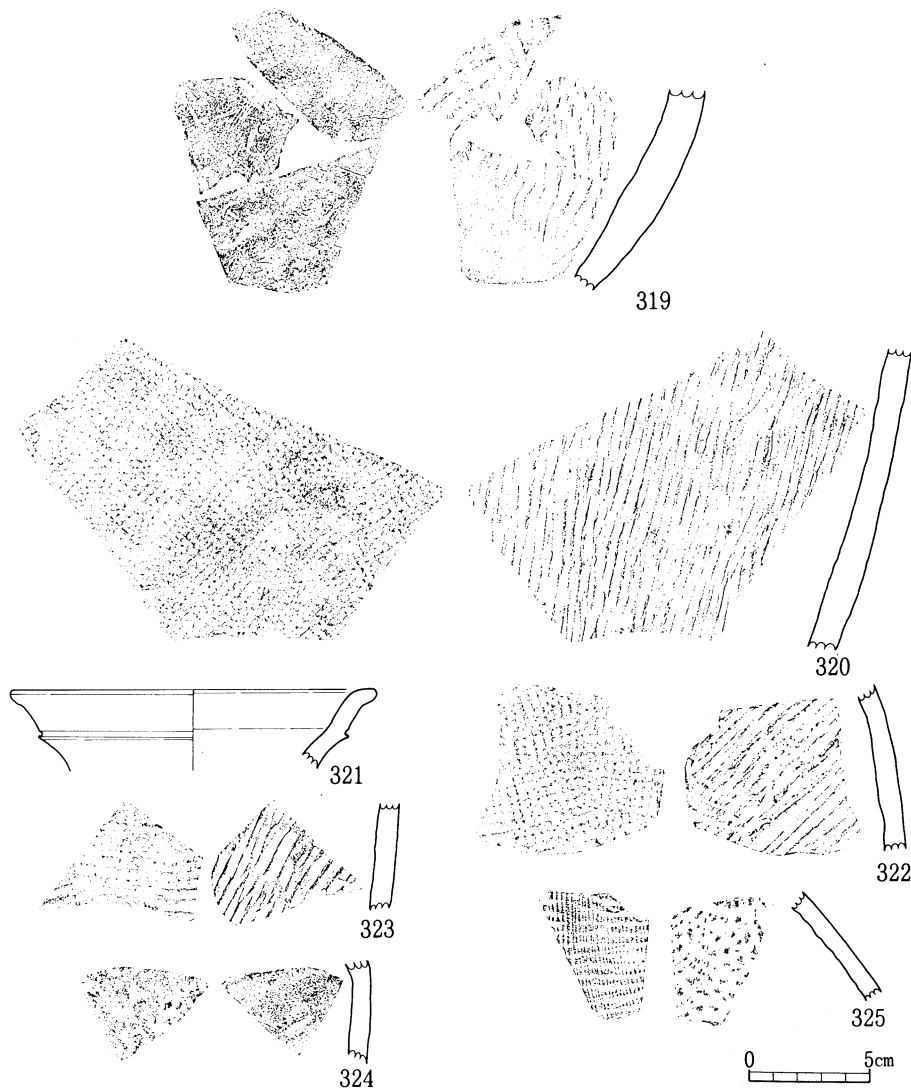
第20表 土壌一覧表

土壌	区	形態	規模 (m)	特徴
SK01	F 5	不整形	1.45×0.4 (0.12)	削平を受けており、かなり浅くなっている。断面形は逆台形状をなし、遺構中央部はやや窪んでいる。SD01と切り合い関係にあり、SD01より新しい。遺構東部で土師器が浮かんだ状態で出土している。
SK02	F 5	楕円形	0.5×0.3 (0.1)	鍋底状に掘り込まれている。土師器片2点が黒褐色の埋土中から出土している。
SK03	F 6	"	0.4×0.7 (0.15)	断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。半分は調査区域外である。
SK04	G 6	隅丸方形	0.95×0.8 (0.15)	断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。
SK05	F 6	"	0.6×0.5 (0.15)	断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。
SK06	G 9	"	0.8×0.8 (0.15)	断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。東部は傾斜面稜が曖昧である。
SK07	G 9	不整形	1.41×0.74 (0.16)	稜が不明瞭で樹根の可能性もある。
SK08	F 9	略円形	0.5×0.5 (0.25)	鍋底状の低部を呈し、やや深めに掘り込まれている。土師器片の底部(316)・皿(317)が出土している。
SK09	F 9	"	0.4×0.4 (0.1)	断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。
SK10	F 9	楕円形	0.6×0.4 (0.1)	断面形は逆台形状をなし、西から東側へ傾斜している。
SK11	F 9	"	0.5×0.4 (0.1)	検出面からの掘り込みは浅く、断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。
SK12	F 10	"	0.6×0.85 (0.3)	鍋底状の低部で、やや深めに掘り込まれている。北側半分は調査区域外である。
SK13	F 10	不整形	0.3×0.5 (0.15)	柱穴と複合しているが、平坦に底部が掘り込まれている。北側半分は調査区域外である。
SK14	F 12	楕円形	0.55×0.3 (0.1)	断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。須恵器片2点(318.319)が黒褐色の埋土中から出土している。
SK15	F 12	円形	0.4×0.35 (0.1)	断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。
SK16	F 11	"	0.55×0.5 (0.1)	断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。西から東側へ傾斜してある。
SK17	F 15	楕円形	0.45×0.35 (0.1)	断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。西から東側へ傾斜してある。
SK18	F 15	円形	0.4×0.4 (0.05)	検出面からの掘り込みは浅く、断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。
SK19	F 15	略円形	0.6×0.6 (0.1)	断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。須恵器片(320)が出土している。
SK20	E 15	楕円形	0.55×0.45 (0.1)	断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。須恵器片口縁部(321)が出土している。
SK21	F 16	円形	0.45×0.4 (0.05)	検出面からの掘り込みは浅く、断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。須恵器片(322)が出土している。
SK22	F 18	楕円形	0.5×0.4 (0.02)	検出面からの掘り込みは非常に浅く、平坦な底部をなす。
SK23	F 18	略円形	0.6×0.5 (0.1)	柱穴と複合しているが、平坦に底部が掘り込まれている。
SK24	F 18	楕円形	0.7×0.55 (0.1)	断面形は逆台形状をなし、西から東側へ傾斜してある。須恵器片(323)が出土している。
SK25	F 19	"	0.5×0.4 (0.1)	鍋底状の低部を呈し、やや深めに掘り込まれている。
SK26	F 18	略円形	0.4×0.35 (0.1)	柱穴と複合しているが、平坦に底部が掘り込まれている。須恵器片(324)が出土している。
SK27	F 18	円形	0.25×0.25 (0.05)	検出面からの掘り込みは浅く、断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。
SK28	F 18	"	0.3×0.3 (0.05)	断面形は逆台形状をなし、遺構中央部はやや窪んでいる。須恵器片(325)が出土している。
SK29	E 18	"	0.3×0.3 (0.05)	検出面からの掘り込みは浅く、断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。
SK30	F 18	楕円形	0.45×0.25 (0.1)	断面形は逆台形状をなし、遺構中央部はやや窪んでいる。
SK31	F 18	"	0.6×0.4 (0.05)	検出面からの掘り込みは浅く、断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。
SK32	F 19	円形	0.35×0.3 (0.05)	断面形は逆台形状をなし、遺構中央部はやや窪んでいる。
SK33	F 17	不整形	0.75×0.6 (0.1)	断面形は逆台形状をなし、遺構中央部はやや窪んでいる。
SK34	F 17	楕円形	0.6×0.4 (0.15)	断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。
SK35	F 13	"	0.45×0.4 (0.1)	断面形は逆台形状をなし、底部は平坦である。西から東側へやや傾斜してある。
SK36	F 10	楕円形	0.4×0.25 (0.1)	断面形は逆台形状をなし、遺構中央部はやや窪んでいる。





第62図 土壇出土の遺物(1)



第63図 土壌出土の遺物（2）

赤茶褐色で細砂を含み焼成は良好である。322～325はそれぞれ、SK21・SK24・SK26・SK26・SK28から出土した須恵器である。322は甕で外面を格子状叩き、内面に同心円状叩きと平行状叩きがみられる。323も甕で淡茶褐色を呈し、外面に格子状叩き、内面に平行状叩きを施す。324は壺の胴部で内外面ともナデ消しがなされている。外面一部に緑飴状の自然釉を発している。325も甕の胴部と思われる。内面は同心円叩きであり、外面は粗めの布で圧痕した叩き目がみられる。外面は青灰色で内面は赤紫色を呈する。

### ③溝状遺構

Ⅲ層上面でⅡb層の埋土をもつ溝状遺構が13条検出された。東西方向に走る4条と南北方向に走る8条、それと屈曲する1条からなる。その位置関係は第43図に示したとおりである。

幅は0.2m～0.8m、検出面からの深さは0.1m～0.4mを測る。埋土中からも遺物は出土したが、流水作用の砂粒等は確認できなかった。区域をあらわす遺構と考えられる。SD02とSB02、SD03とSB06、07は並行であり、SB11はSD07、08により切られていることから、溝と掘立柱建物跡の新旧関係があることが判明した。

326～359は溝状遺構の埋土中から出土した土器である。326は須恵器甕の口縁部である。頸部が大きく外反し、口縁下位において屈曲するものである。屈曲部には1条の突帯を巡らす。内外面とも淡褐色を呈し、焼成はやや粗である。外面に平行状叩きがあり内面は横位のナデ整形を施す。327・328はSD02出土の須恵器甕である。327は赤紫色の外面に縦横方向の平行状叩きを内面に平行状叩きを施す。328は焼成の粗な淡褐色を呈したもので、外面に格子目叩き内面に平行状叩きを施す。

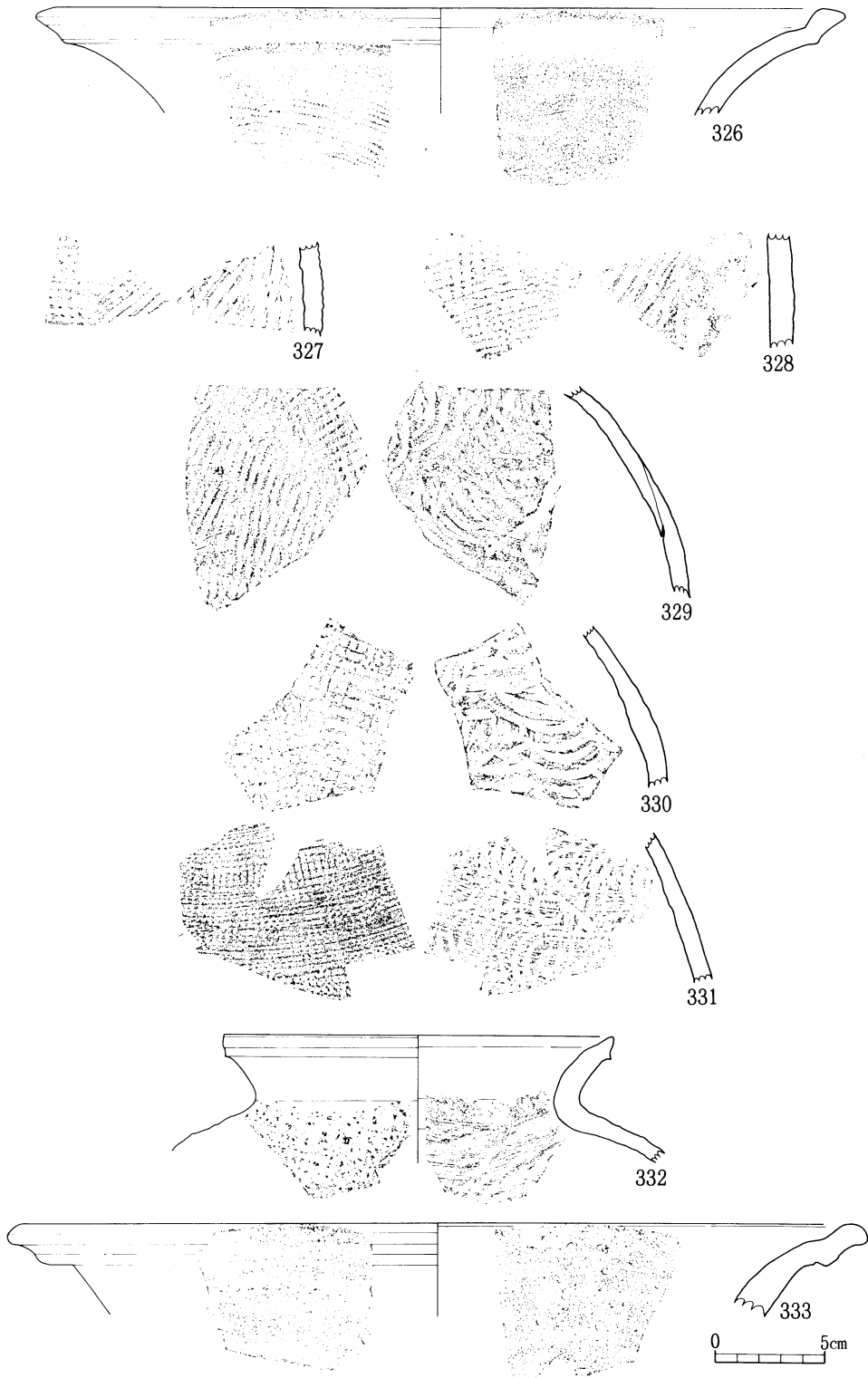
329～331はSD03出土の青灰色を呈した焼成の良い須恵器甕である。全て外面は格子状叩きで内面には同心円状のあて板痕跡が残る。332～338はSD05出土の土器である。332・333は須恵器甕で、332は短く外反し、口縁直下に1条の突帯を巡らす。外面に格子状叩き、内面に同心円状叩きがみられる。333は頸部が大きく外反し、口縁下位において屈曲するものである。

334は内朱土師器の鉢である。体部はあまり開かず、直線的に立ちあがり口縁部にいたる。口縁端部は平坦で内傾する。内面に、赤色顔料を塗り込めたもので、外面は黄灰色を呈し、胎土はわずかに細砂を含む。335は内黒土師器の坏である。平坦なヘラ切り底から、体部がやや内弯しながら立ちあがるもので、器面をヘラミガキし、内面を黒色に燻したもので光沢をもつ。

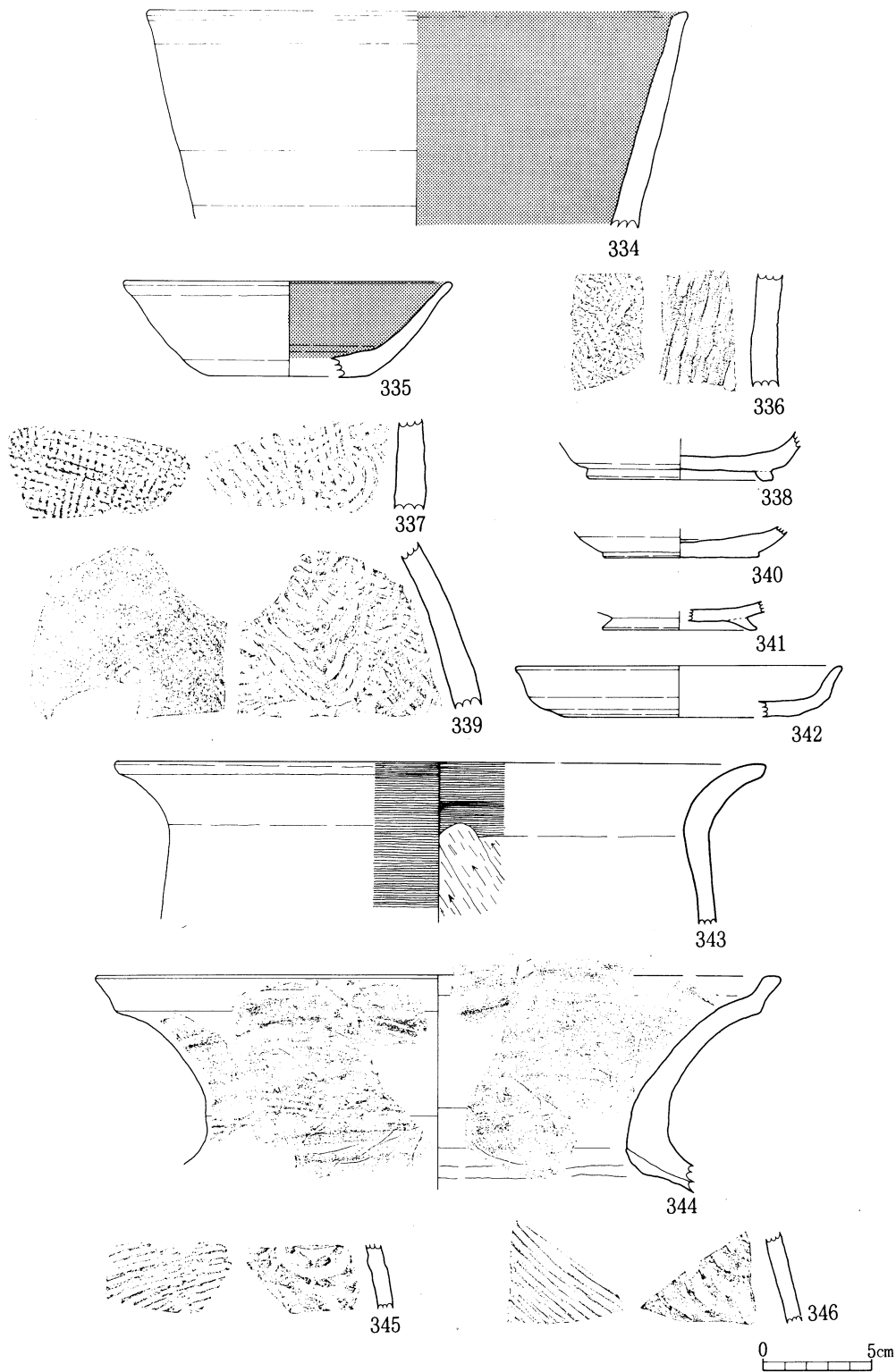
336・337は須恵器の甕で外面は格子状叩き、内面は平行状叩き・同心円状叩きを施す。338は須恵器の高台付き碗である。体部と底部の境に明瞭な稜を形成し、高台は底部端よりやや内側に貼付けるものである。

339～343はSD06出土の土器である。339は須恵器の甕で内面に同心円状叩き、外面が格子状叩きで外面全体に濃緑鉛状の自然釉を発している。340は須恵器甕の平底である。ヘラ切り底である。341は土師器碗の底部で、底部端に極端に外向する高台をもち、底部から体部へ直線的にのびていくものである。内外面とも器面を丁寧にヘラミガキし光沢をもつ。342は土師器皿で、体部と底部の境に丸みをもち、口縁部が短く外反するものである。底部がややふくらみをもち深みのあるものである。343は土師器甕で「く」の字状に外反し、内面はヘラケズリ調整を施し、上位と外面は横方向のハケ目調整を施している。

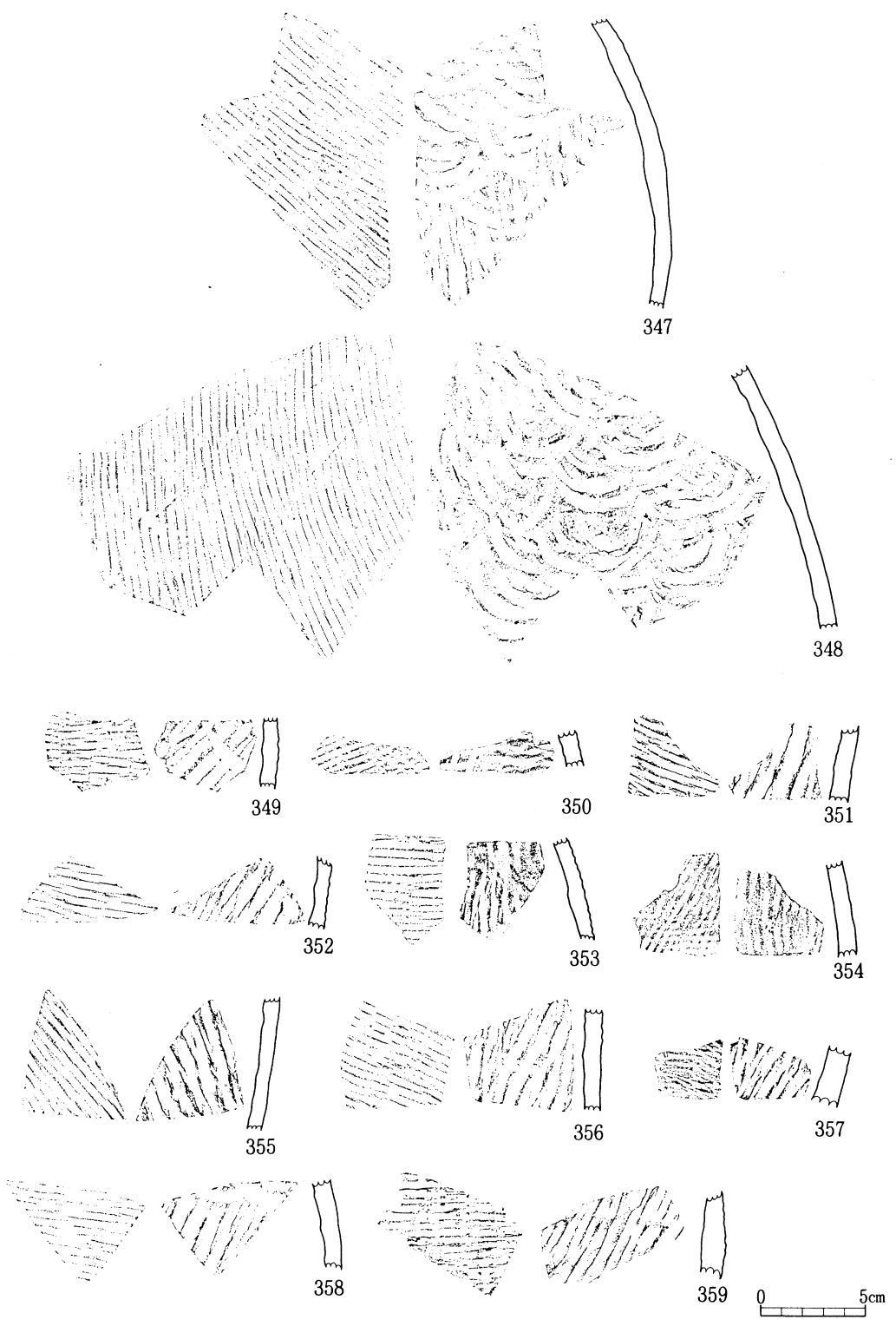
344～359はSD09から出土した須恵器の甕である。344は「く」の字状に外反し、口縁部が屈曲して立ちあがる口縁部である。内外面とも黄灰色を呈し、焼成はやや粗である。345～348は内面に同心円状叩き、外面に平行状叩きを施したもので、349～358は、内外面とも平行状叩き、349は外面に格子状叩きを施したものである。



第64図 溝状遺構出土の遺物（1）



第65図 溝状遺構出土の遺物（2）



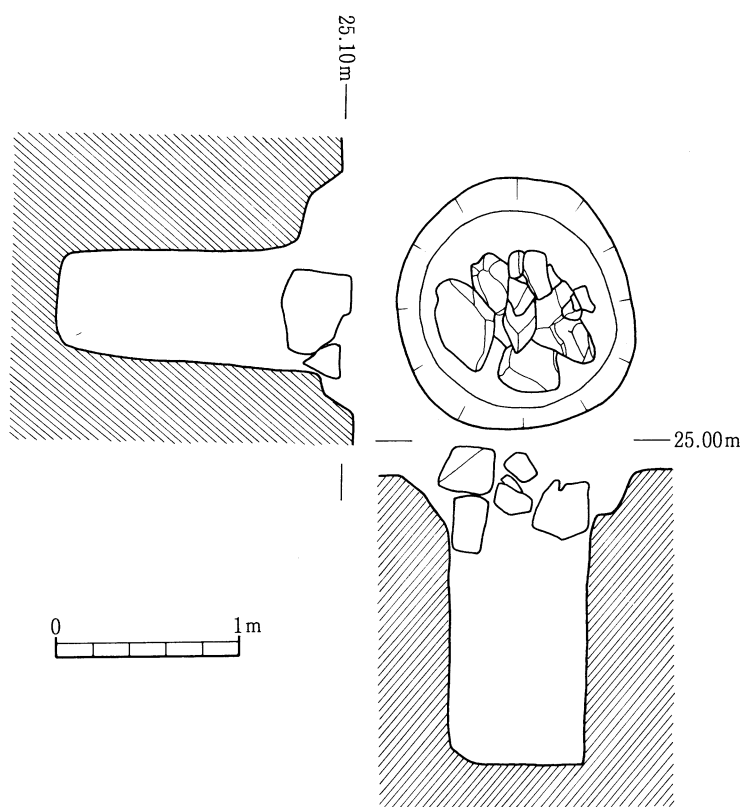
第66図 溝状遺構出土の遺物（3）

柱穴群出土の遺物（第68・69図）

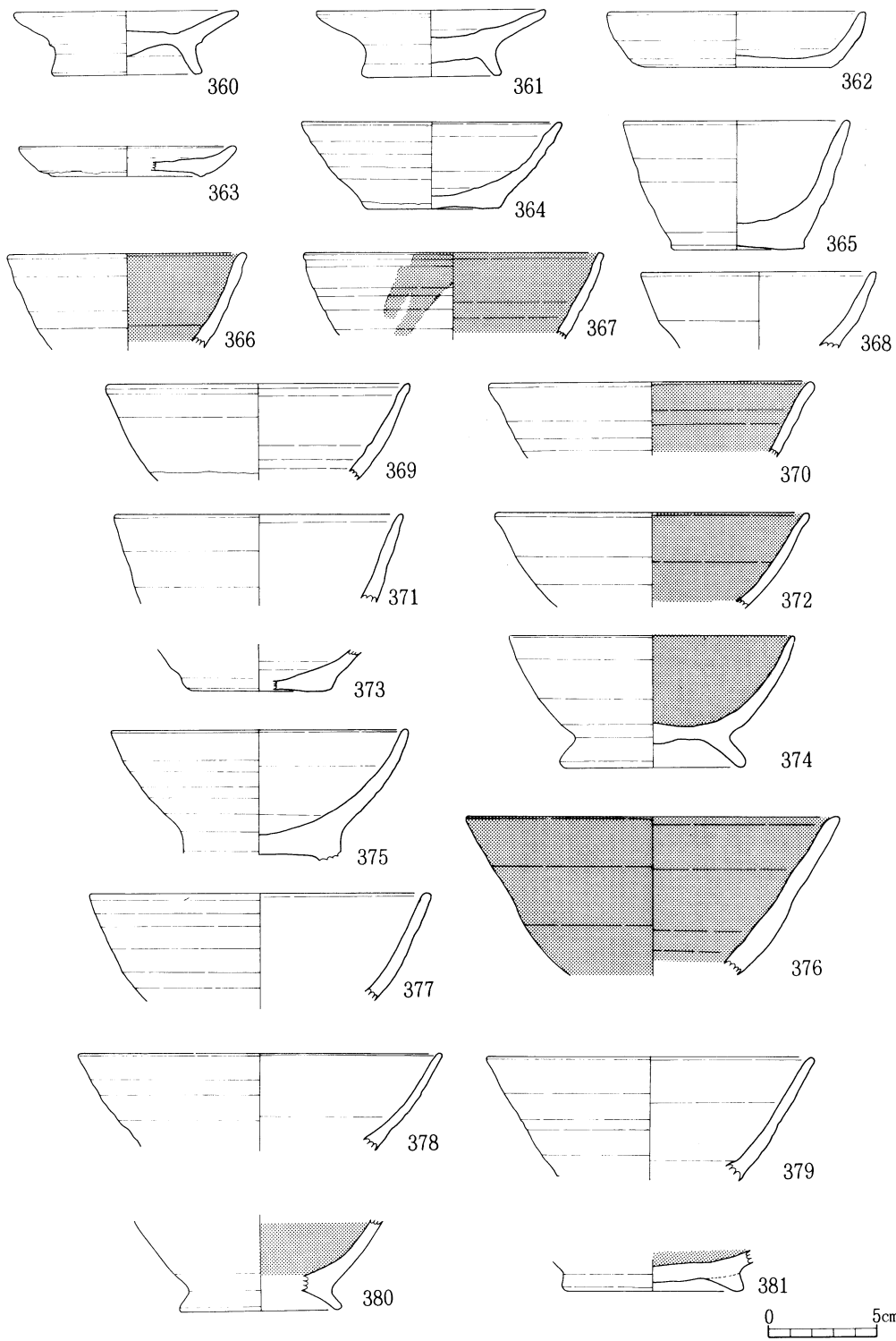
360・361はピット内出土の土師器高台付皿である。底部から体部へ直線的にのび、平坦な皿に高台を付している。360は底部と体部の境付近に突帯を1条巡らせている。362・363もピット内出土の土師器皿である。362は口径11.4cmで口縁部がやや内弯するもので、底部は平底でヘラ切りである。363は平底で器高は浅く体部はやや内弯しながら立ちあがるものである。363～373は土師器の坏である。364は平底から体部が直線的にのびるもので、外底部は丁寧なヘラケズリを行い、体部は横ナデである。365は、368・377と同ピット埋土中から出土したもので、器高が高く碗の範疇にはいるものであるが、高台付を碗に全て入れた。底径に比べて器高のあるもので口縁部は直線的に立ちあがる。底部はヘラ切りの平底である。366・367・370・372は内朱土師器である。

374～381は土師器碗である。374は器面をヘラミガキし、内面を黒色に燻した内黒土師器の碗である。体部は丸みもち内弯しつつ立ちあがり、高台は外向し端部は丸くおさめている。

376は内外面とも赤色顔料を塗り込めた朱色土器である。380・381は内黒土師器の碗底部で

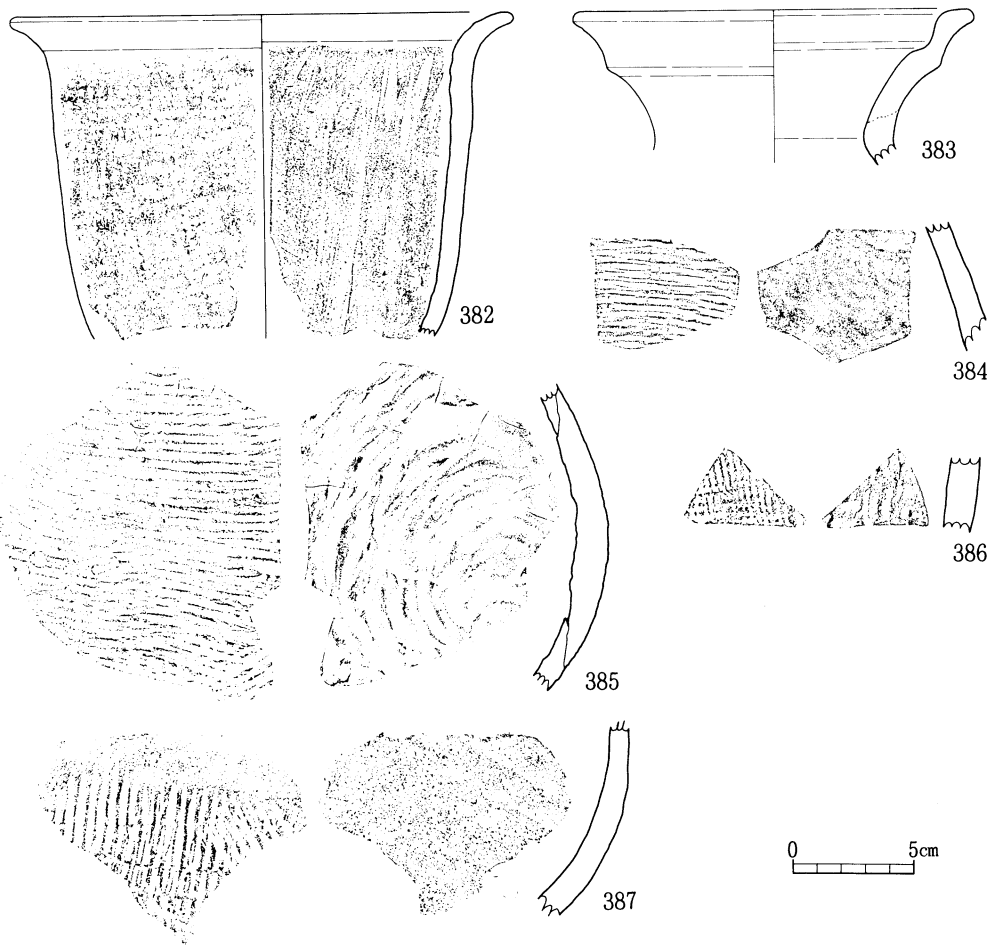


第67図 ピット



第68図 その他遺構出土の遺物（1）





第69図 その他の遺構出土の遺物（2）

ある。

382は外面に格子状叩きを行った土師器の甕で、口縁は「く」の字状に外反する。内面はヘラケズリ調整を施し、口縁部付近は内外面とも横方向のハケ目調整を施している。明赤茶褐色を呈し、外面にススが付着している。

383は口径20.8cmを測る須恵器壺の口縁部である。頸部から外反し、口縁下位で屈曲して立ちあがる黄灰色を呈した焼成は軟質のものである。

384・385は須恵器甕である。外面が格子状叩きで内面はそれぞれ同心円状・平行状叩きを施している。

386は須恵器横瓶の側面で円板貼り付け部分である。外面平行状叩き、内面は同心円叩きと側面に押圧がみられる。387は382同様格子状叩きを外面に施した土師器の甕である。内面にヘラケズリ調整がみられる。

第21表 遺構出土遺物一覽表

番号	器種	出土区層	法量			備考
			口径	底径	器高	
296	台付皿	SB01	10.5	6.8	3.4	土師器 完形
297	坏	SB01	10.9	7.2	3.2	土師器 完形
298	坏	SB01	10.3	5.8	3.1	土師器 完形
299	鉢	SB01	26.9			土師器 口縁部
300	竈	SB01	13.4	7.8	6.8	土師器 完形
301	甕	SB01				土師器
302	皿	SB02	14.8	11.8	2.2	土師器 完形
303	坏	SB02		5.5		土師器 底部
304	坏	SB03	13.4			土師器 口縁部
305	坏	SB05	12.0	6.4	3.4	土師器 完形
306	竈	SB08	14.2			内朱土師器口縁部
307	甕	SB08	22.4			土師器 口縁部
308	煮	SB09	17.0			須恵器
309	煮	SB09				須恵器
310	鉢	SB09	23.0			土師器
311	竈	SB11	13.6			土師器
312	甕	SB11	20.2			土師器
313	甕	SK01	29.8			土師器 口縁部
314	坏	SK02		6.0		須恵器 底部
315	坏	SK02	10.0	6.0	3.7	土師器 完形
316		SK06		7.8		須恵器
317	皿	SK06	13.0			土師器
318	甕	SK14				須恵器
319	甕	SK14				須恵器
320	甕	SK19				須恵器
321	甕	SK20	10.2			須恵器 口縁部
322	甕	SK21				須恵器
323	甕	SK24				須恵器
324	甕	SK26				須恵器
325	甕	SK28				須恵器
326	甕	SD01	36.2			須恵器
327	甕	SD02				須恵器
328	甕	SD02				須恵器
329	甕	SK03				須恵器
330	甕	SK03				須恵器
331	甕	SK03				須恵器
332	甕	SD05	17.8			須恵器
333	甕	SD05	39.0			須恵器
334	鉢	SD05	25.0			内朱土師器口縁部
335	坏	SD05	15.0	7.4	4.5	内黒土師器 完形
336	甕	SD05				須恵器
337	甕	SD05				須恵器
338	碗	SD05		8.0		須恵器 底部
339	甕	SD06				須恵器
340	坏	SD06		7.2		須恵器 底部
341	竈	SD06		7.0		土師器 底部

番号	器種	出土区層	法量			備考
			口径	底径	器高	
342	皿	SD06	15.0	10.2	2.4	土師器 完形
343	甕	SD06	30.0			土師器 口縁部
344	甕	SD09	31.6			土師器 口縁部
345	甕	SD09				須恵器
346	甕	SD09				須恵器
347	甕	SD09				須恵器
348	甕	SD09				須恵器
349	甕	SD09				須恵器
350	甕	SD09				須恵器
351	甕	SD09				須恵器
352	甕	SD09				須恵器
353	甕	SD09				須恵器
354	甕	SD09				須恵器
355	甕	SD09				須恵器
356	甕	SD09				須恵器
357	甕	SD09				須恵器
358	甕	SD09				須恵器
359	甕	SD11				須恵器
360	台付皿		11.0	7.0	3.0	土師器 完形
361	台付皿		10.5	6.4	3.0	土師器 完形
362	皿		11.4	9.0	2.6	土師器 完形
363	皿		10.0	7.0	1.5	土師器 完形
364	坏		12.0	6.2	4.1	土師器 完形
365	坏		10.4	6.0	6.0	土師器 完形
366	坏		11.0			内朱土師器口縁部
367	坏		14.0			内朱土師器口縁部
368	坏		10.8			土師器 口縁部
369	坏		14.0			土師器 口縁部
370	坏		15.0			内朱土師器口縁部
371	坏		13.2			土師器 口縁部
372	坏		14.5			内朱土師器口縁部
373	坏			6.2		土師器 底部
374	竈		13.0	8.5	6.1	内黒土師器 完形
375	竈		13.7			土師器 高台欠損
376	竈		17.2			内朱土師器口縁部
377	竈		15.7			土師器 口縁部
378	竈		16.8			土師器 口縁部
379	竈		15.0			土師器 口縁部
380	竈			7.4		内黒土師器 底部
381	竈			8.2		土師器 底部
382	甕		20.8			須恵器 口縁部
383	壺		16.5			須恵器 口縁部
384	甕					須恵器
385	甕					須恵器
386	甕					須恵器
387	甕					須恵器

### 3 出土遺物

平安時代の遺物は、Ⅱb層の黒色腐食土から全体に約12,000点の遺物が出土した。須恵器・土師器・黒色土器・墨書土器・饅書土器・刻書土器・焼塩壺・鉄器・青銅器・紡錘車・土錘・陶硯等多種な遺物が出土している。

#### ①須恵器

須恵器には、蓋・皿・坏・碗・高坏・鉢・甕がある。

#### 蓋（第71・72図 388～466）

388～466は坏蓋である。平坦な天井部をもつもので、口縁部はかえしがなく、口縁端が下方に鳥嘴状に突出するものである。388は扁平な擬宝珠形つまみがつくもので、平坦な天井部である。390は口縁端部を極端に折りまげたもので、口唇外面は平坦である。391も天井部は平坦で、口縁部付近で一旦くぼみ、端部は折りまげている。392は頂部はヘラ切りのままで、口径16.0cmを測るものである。口縁部付近で一旦くぼみ、端部は下方に鳥嘴状に突出したもので、やや外反する。393～399まで同様のもので、口唇外面に凹みをもつものもある。400は完形品である。扁平な擬宝珠形つまみが付くもので、口径13.9cm、つまみ径1.6cm、器高2.3cmを測る。頂部はヘラ切りのままである。401～404は平坦な天井部で、端部は下方に突出している。403は口唇外面に浅い凹みをもつ。404～417は口縁部付近で一旦くぼみ、端部は下方に短く突出したもので、口唇外面に凹みをもつ。天井部は平坦でヘラ切りのままである。口径は14～17cmとやや大型で器高も1.4～1.9cmである。418～423は口径が12.2～13.8cmで、器高も1.1～1.7cmを測るものである。体部は口縁端部までゆるやかに傾斜し、端部は下方に短く突出したもので、口唇外面は丸みをもつ。418は、重ね焼の痕と思われる口縁部内面に灰を被っている。424～433は口縁部付近で一旦くぼみ、端部は下方に若干突出が見られるもので、口唇外面は丸みをもつ。口径も15.8～16.6cmと大型である。434～440は口縁部付近で一旦くぼみ、端部は短く突出し、内面にくぼみをもつものもある。438は黒飴状の自然釉を発している。439は赤橙色を呈し焼成は粗である。440は灰褐色を呈し焼成は粗である。441は口径17.4cm、器高1.4cmを測るもので、端部に短い外反する鳥嘴状の突出をもつ。灰褐色で焼成はもろい。442・443・446は口縁端は丸みをおびて、やや長く開き気味に突出する。442は器壁は厚いが器高が1.2cmである。

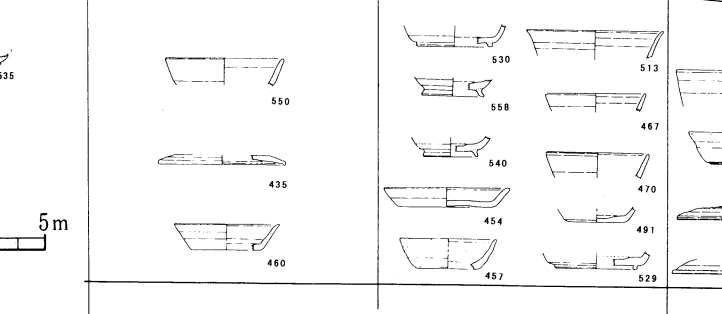
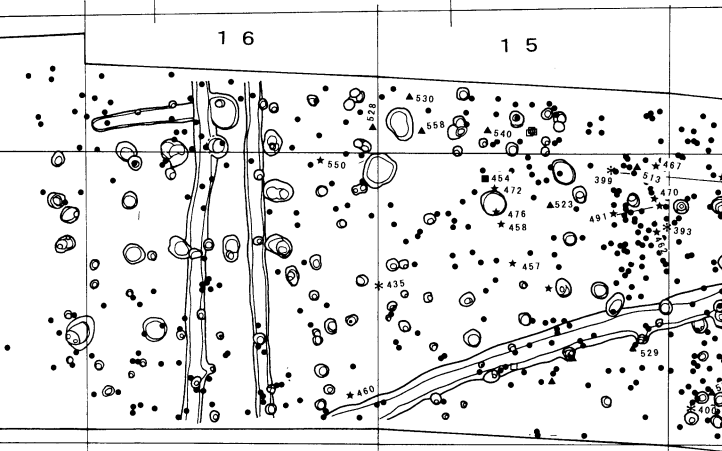
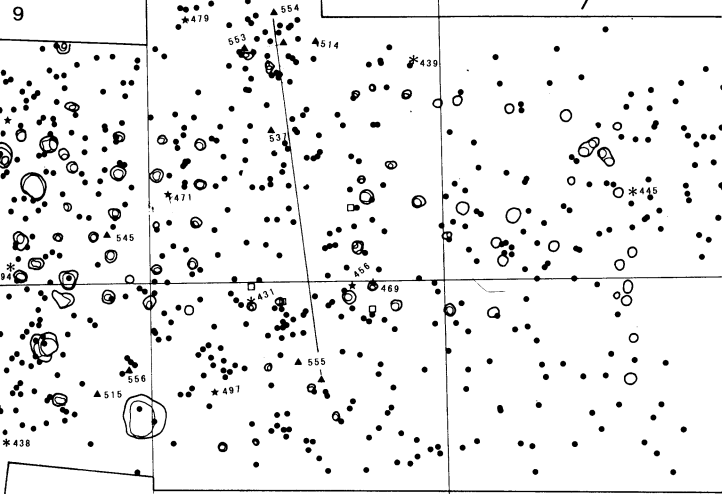
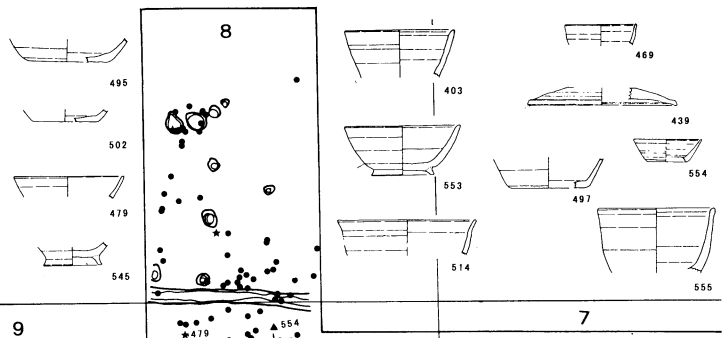
#### 皿（第73図、447～454）

447～454は皿である。底部はヘラ切りの平底で、体部は若干外反するものと直線的に延びるもので、口径は10～11cm、器高は1.6～2.3cmを測るものである。

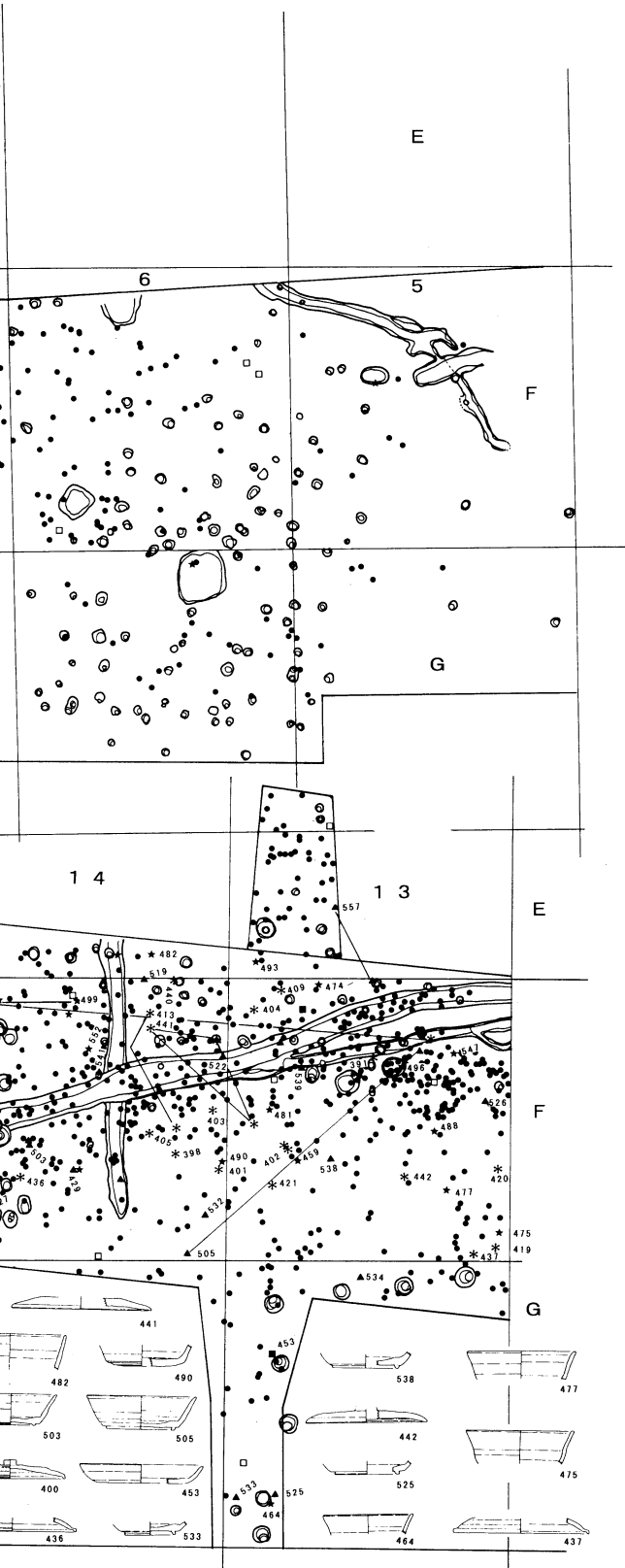
447～451は、体部と底部の境が明瞭な稜をもつもので、体部の立ち上がりが急なものである。447は口縁端部が外反する。448は口縁端部が丸みをおび、449・450はやや尖り気味である。452は体部と底部の境が若干丸みを帯びたものである。451・452とも外面の底部を回転ヘラ削りし、体部内面を回転ヘラミガキした精製品である。453は、ヘラ切りのあげ底気味の底部で、体部の立ち上がりが急に直線的にのび、口縁端部が丸みをおびているものである。

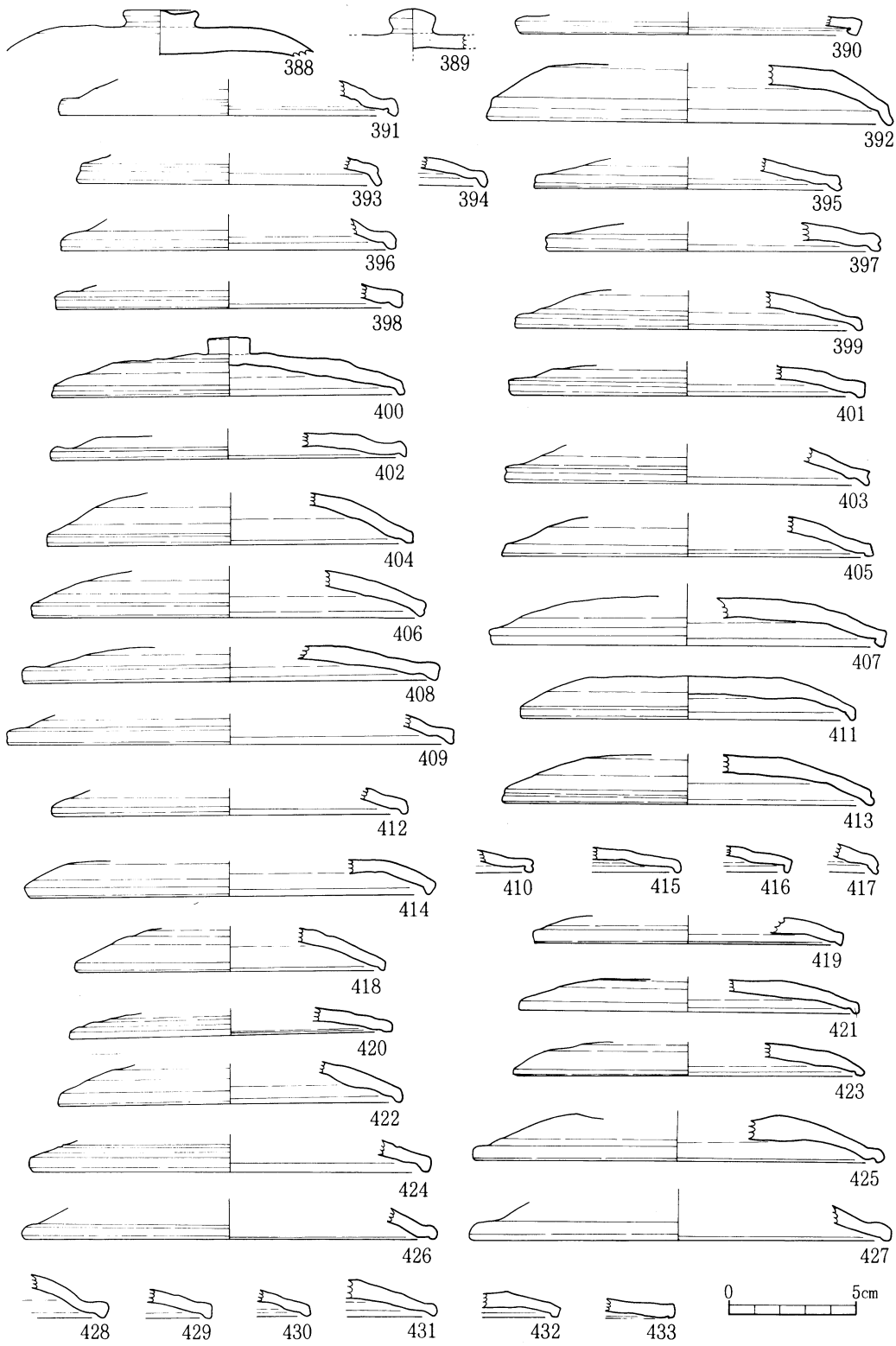


第70图 須惠器出土状况

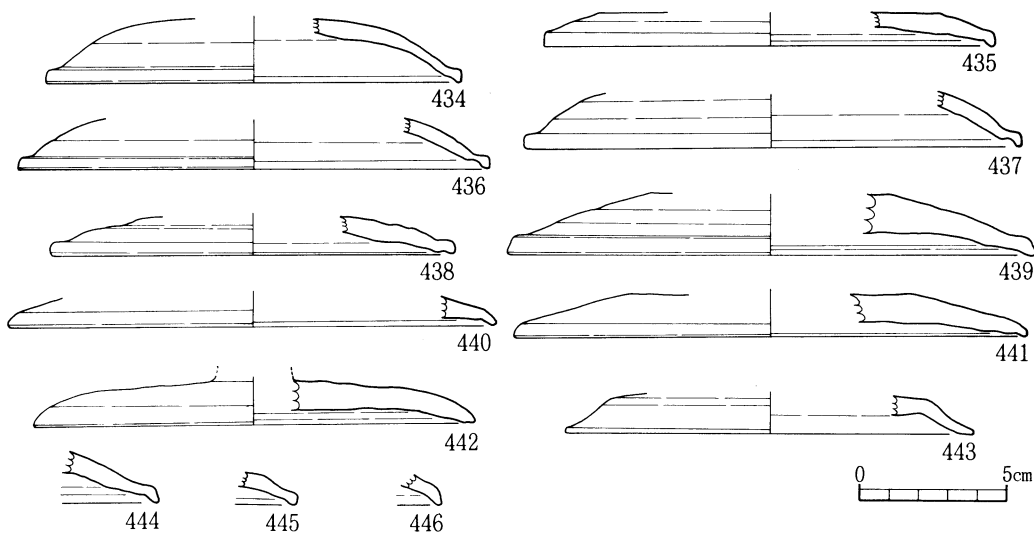


5m





第71圖 須惠器(1)蓋



第72図 須恵器（2） 蓋

454は口径19.8cm、器高2cmの大型の製品である。底部がややふくらみをもつもので、体部と底部の境に丸みをもち、体部の立ちあがり急で、口縁端部を丸くおさめている。

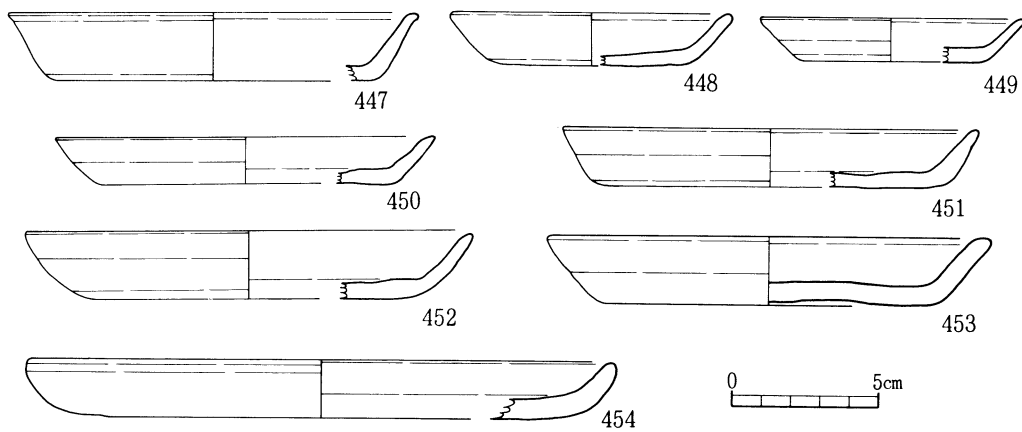
坏（第74・75図、455～501）

455～459は須恵器の坏である。455～459は底部から体部まで有るもので、455・456は体部と底部の境に明瞭な稜をもたず、体部は立ちあがり急で斜め上方に直線的にのびるものである。口縁端部は尖り気味である。457・458はあげ底気味のヘラ切り底部で、立ちあがり急な体部をもち斜め上方に直線的にのびるものである。459は平坦な底部から明瞭な稜をなして立ちあがる体部をもち、立ちあがり急で斜め上方に直線的にのび、口縁端部は外反する。いずれも、胎土は精良で青灰色を呈し、硬質に焼成されている。460～488は体部である。口径10.2～15.6cmを測り、体部の立ちあがり急で、斜め上方に直線的にのびるものである。465・482の様にやや内弯するものや、463・464・474～477・480・484～488の様にやや外反する口縁端部をもつものもある。460は口縁端部が尖り気味である。胎土には砂粒をあまり含まず、青灰色～灰色を呈し硬質に焼成されているものが多いが、462・467・482・485・488は灰白色で軟質である。475は胎土に砂粒を多く含み、赤茶褐色を呈す。481は外面に緑飴状の自然釉を発している。484は外面の口縁端部に緑灰色の飴状の自然釉を発している。469は火襷をもつ。470は体部に重ね焼きの痕跡をとどめている。

489～501は底部である。底径は6.0～9.0cmを測る。489は底径9cmを測るもので、立ちあがり急な体部をもち底部から体部の境に2条の凹線を巡らしている。ヘラ切り底であり、体部及び内面は丁寧なナデ調整が行われている。

490・491・493・494・496・499・500は平坦な底部から明瞭な稜をなして立ちあがる体部をもち、立ちあがり急で斜め上方に直線的にのびるものである。492・501は体部と底部





第73図 須恵器 (3) 皿

の境に明瞭な稜をもたないもので、立ちあがりは急である。495は底部を直線的に形成したものである。底部から体部で斜め上方に直線的にのびている。胎土には砂粒をあまり含まず、青灰色～灰色を呈し硬質に焼成されているものが多いが、493・495・497・498・500は灰白色で軟質である。

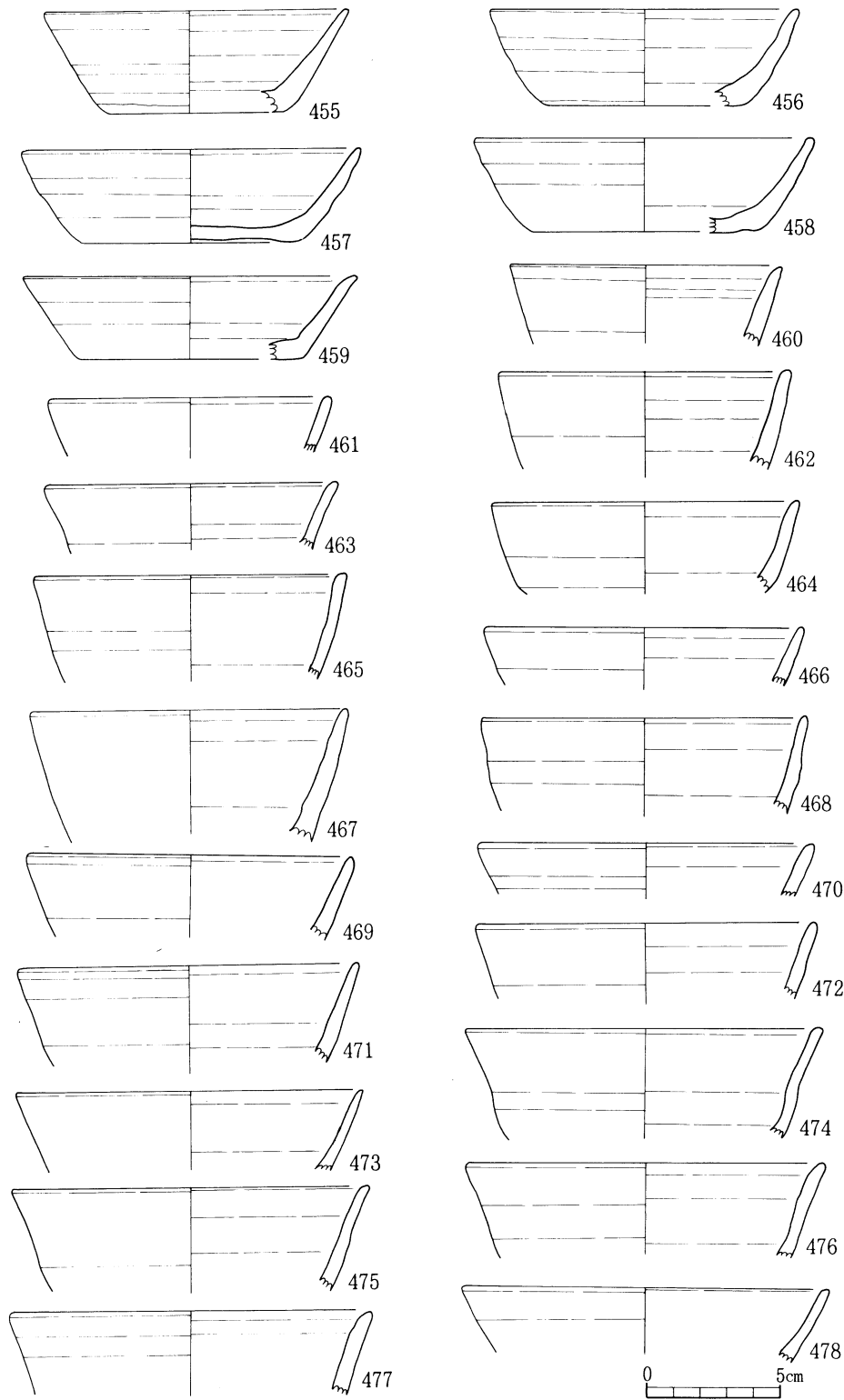
碗 (第76・77図 502～546)

高台を貼り付けてあるものを碗とした。器高が低く坏の名称も考えたが、碗ということで分類した。また体部のみのものは器高の高いものを碗のなかであつた。

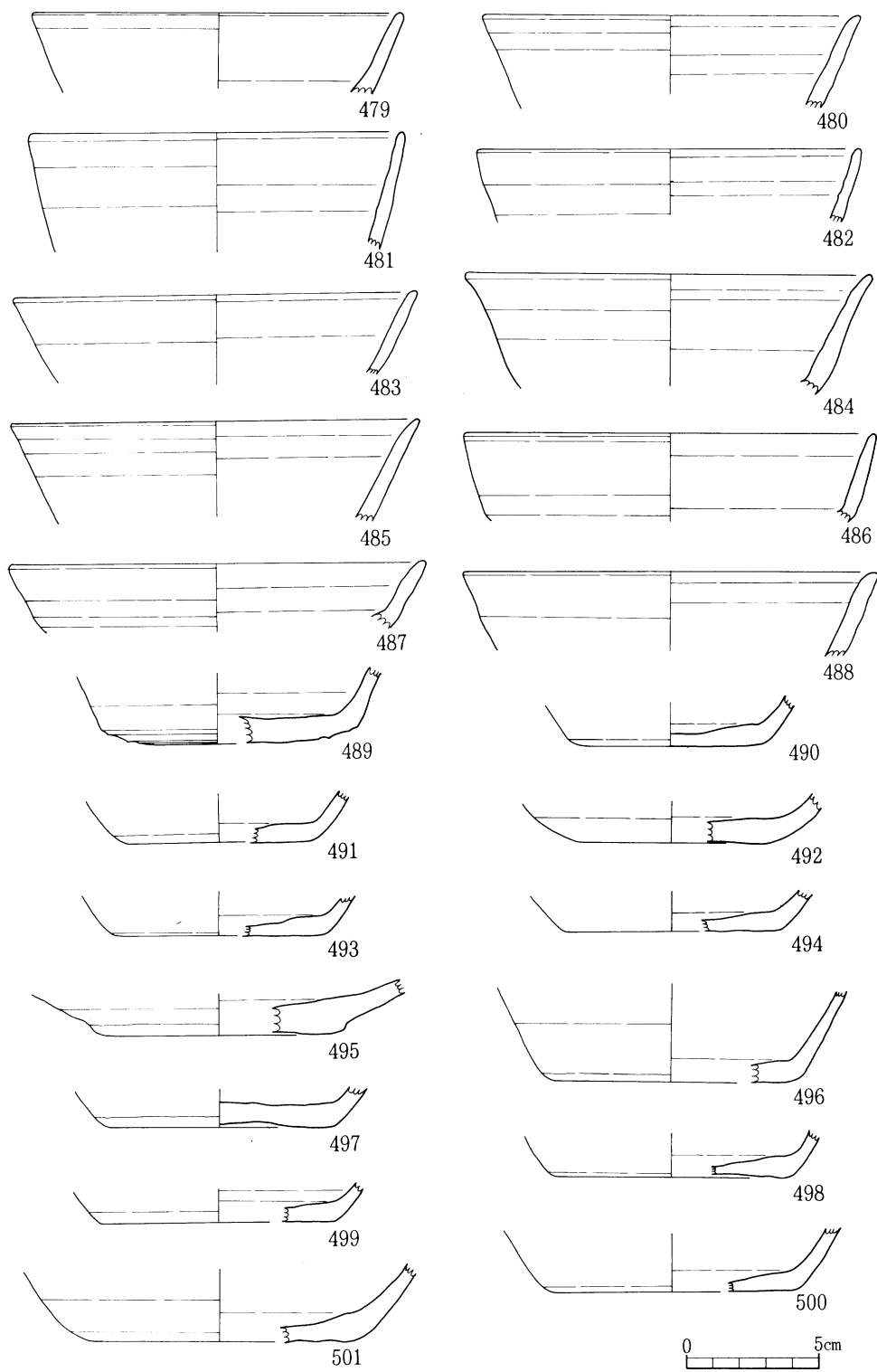
502～511は体部から底部まであり、器形のわかるものである。斜め上方に直線的にのびる体部に特徴をもち、口縁端部は丸くおさめる。口縁部はやや外反気味である。口径は9.8～17.5cmと幅があり、器高は3.4～5.8cmを測る。体部端より若干内側に高台を貼り付け、体部と底部の境に明瞭な稜を持つ。502は高台高が低く断面方形の高台を貼り付けている。高台の貼り付けの中心が体部とずれている。503～511の高台は端部が水平につくられ、外にひろがっている。504の高台はやや内にひろがっている。502・505は火襷をもち、509は体部に重ね焼きの痕跡をとどめており、重ねられた部分以外は淡黒灰色を呈す。胎土には砂粒をあまり含まず、青灰色を呈し硬質に焼成されている。

512～518は体部のみである。器高が高く口径も12.6～18.2cmと大きい。512～518は口縁部が外反するもので、514・515・518は端部が尖り気味である。517・518は直口かやや内弯気味の口縁部である。516・518は淡茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、硬質に焼成されたものである。515は灰色を呈したやや軟質の土器である。512は外面に緑灰色の鮎状の自然釉を発している。

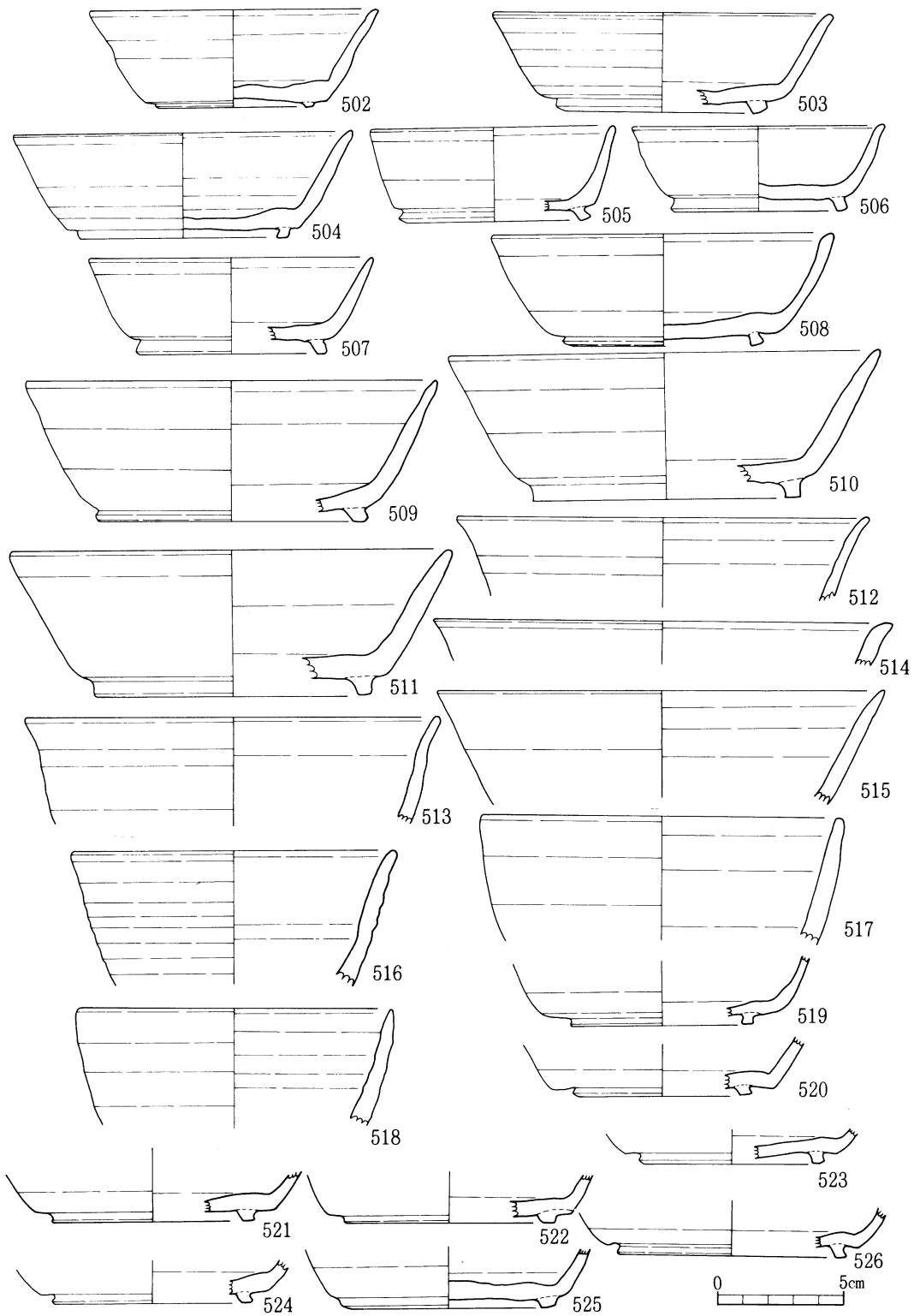
519～546は貼り付け高台を持つ碗の底部である。520～533は底部端より若干内側に高台を貼り付け、体部と底部の境に明瞭な稜を持つものである。高台端部は水平につくられ外にひろがるもの(520・523～526・533)と垂直に下がるもの(534・546)高



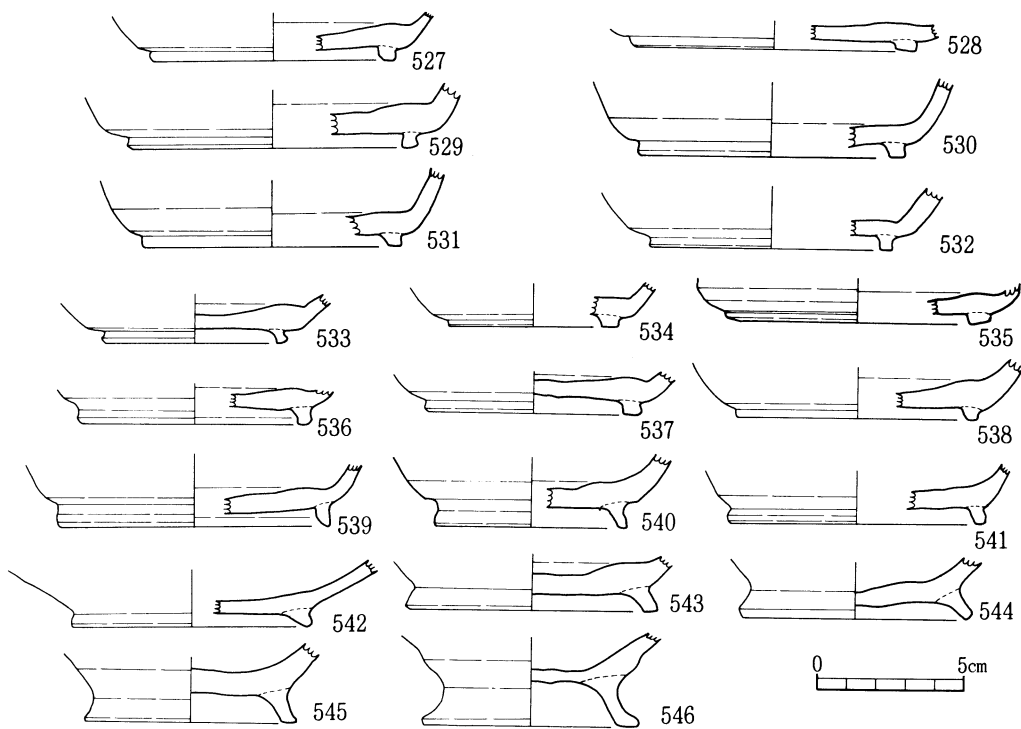
第74图 須惠器(4) 坏



第75図 須惠器（5）坏



第76図 須恵器(6) 碗



第77図 須恵器(7) 碗

台が底部端近くに貼り付けされたもので、このため体部と底部は明瞭でない。534～538の高台は断面逆台形の端部を水平につくり、外にややひろがっている。

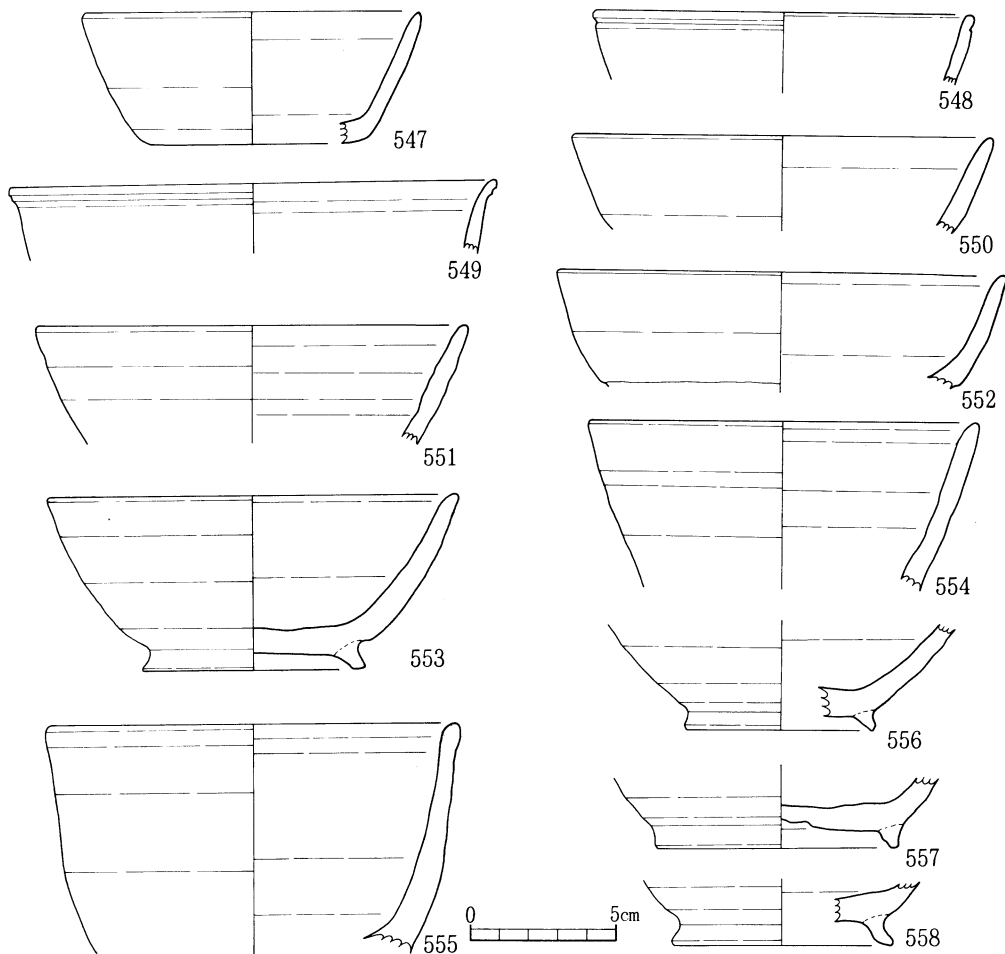
539～546は、高台高が高く外にひろがっている。色調は青灰色～灰色を呈しているが、543・546は赤茶褐色を呈し、硬質に焼成されている。529・540・544は灰白色で焼成は軟質である。

525・533・534・537・538は高台を貼り付けた粘土の痕が付け根に残っている。535・539は体部に重ね焼きの痕跡をとどめており、重ねられた部分以外は淡黒灰色を呈す。541は、体部外面から底部にかけて青灰色の飴状の自然釉を発している。

547～558は赤褐色を呈した、生焼けといわれている須恵器である。胎土には砂粒をあまり含まず、硬質に焼成されたものである。器形は坏・碗である。

#### 高坏 (第79図, 559～563)

559～561は脚筒部である。559は坏部との境に接合したときの粘土の痕が残っている。内外面に絞り痕が残る。560も脚筒部のみであるが、大形の高坏である。坏部との剥離接合面がはっきりしている。559・560とも青灰色を呈し、硬質に焼成されている。561はハケ目調整痕がみられる。灰白色を呈し、焼成は軟質である。562は短い脚部で、脚端部は鳥嘴状に下方に突出するつくりである。青灰色を呈し、焼成は硬質である。外面に黒色の飴状の自然釉を発



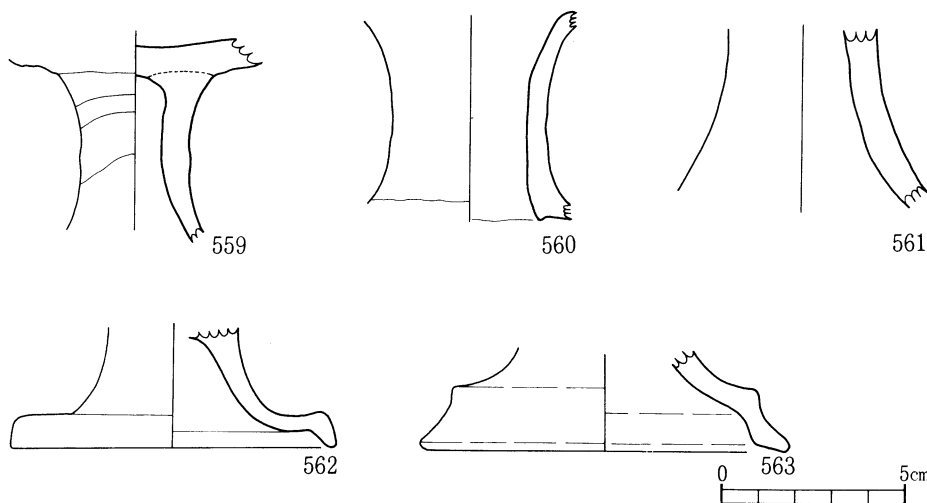
第78図 須恵器(8) 碗

している。563は脚の裾部である。裾部が柱状部より屈曲して広がり、さらに端部近くで内側に屈曲するものである。赤褐色を呈し、細砂粒を多く含んでいて焼成は硬質である。横方向のハケ目調整を施している。

鉢(第80図, 564~580)

564~566は鉄鉢である。口径19.2~19.3cmを測り、やや外開きに立ち上がった体部は口縁部において内弯する。口縁端部は平坦に仕上げる。内外面とも横方向のハケ目調整が施されている。それぞれ青灰色・赤橙色・灰色を呈し、565の焼成は軟質であるが、他は硬質に焼成されている。567~570の体部は直線的に立ち上がり、口縁端部下には1条の凹線を施し、口縁端部を丸くおさめる。570は赤茶褐色を呈している。焼成はいずれも硬質である。

571~575の体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。外面に平行状叩きを施し、内面はヨコナデ調整を行ったものである。571・572は黄灰色を呈し、軟質の焼成で



第79図 須恵器（9） 高坏

ある。573～575は青灰色～灰色を呈し、硬質の焼成である。573は緑灰色の自然釉を発し、また内外面ともスサや砂粒が固く付着している。

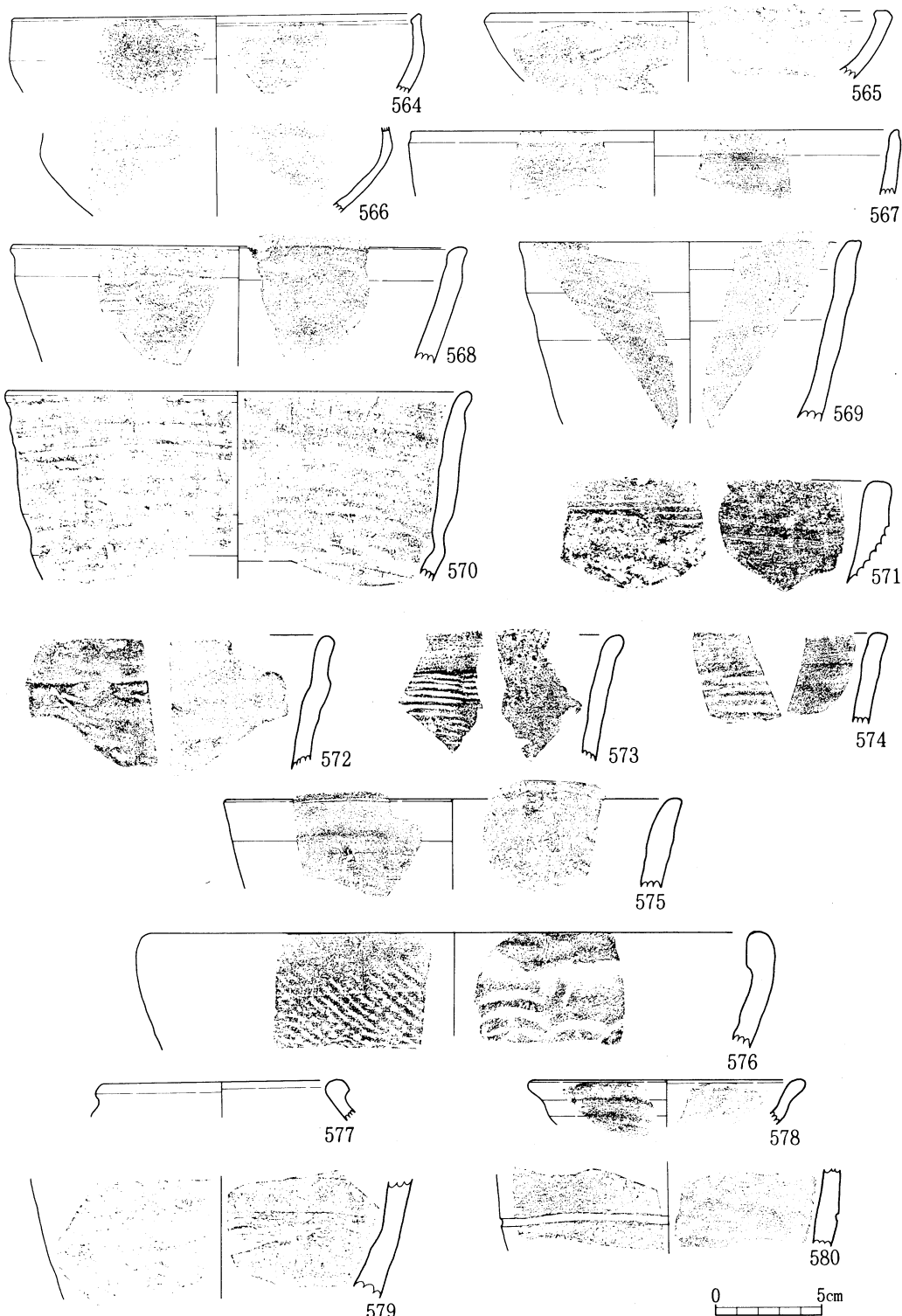
576の体部は直線的に立ちあがり、口縁部は内弯し、口縁端部には粘土貼り付けを行い肥厚させている。内面に同心円状叩き、外面に格子状叩きがみられる。土師質であるが、生焼きの須恵器と土師器の区別は難しく、ここでは叩き痕を有したものは須恵器で統一した。577玉縁口縁をもつもので、578は外反する口縁をもつものである。579・580は直行する体部である。内面は両方とも横方向のハケ目調整を施し、579は外面に平行状叩き、580は1条の凹線を施す。

#### 壺（第81～83図）

581は短頸壺の蓋である。口径13.5cmを測る。体部は口縁端部までゆるやかに傾斜し、口縁部は外に開く形態であり先端をまるく仕上げている。外面は自然釉を発し、内面は灰色でナデ仕上げを行っている。

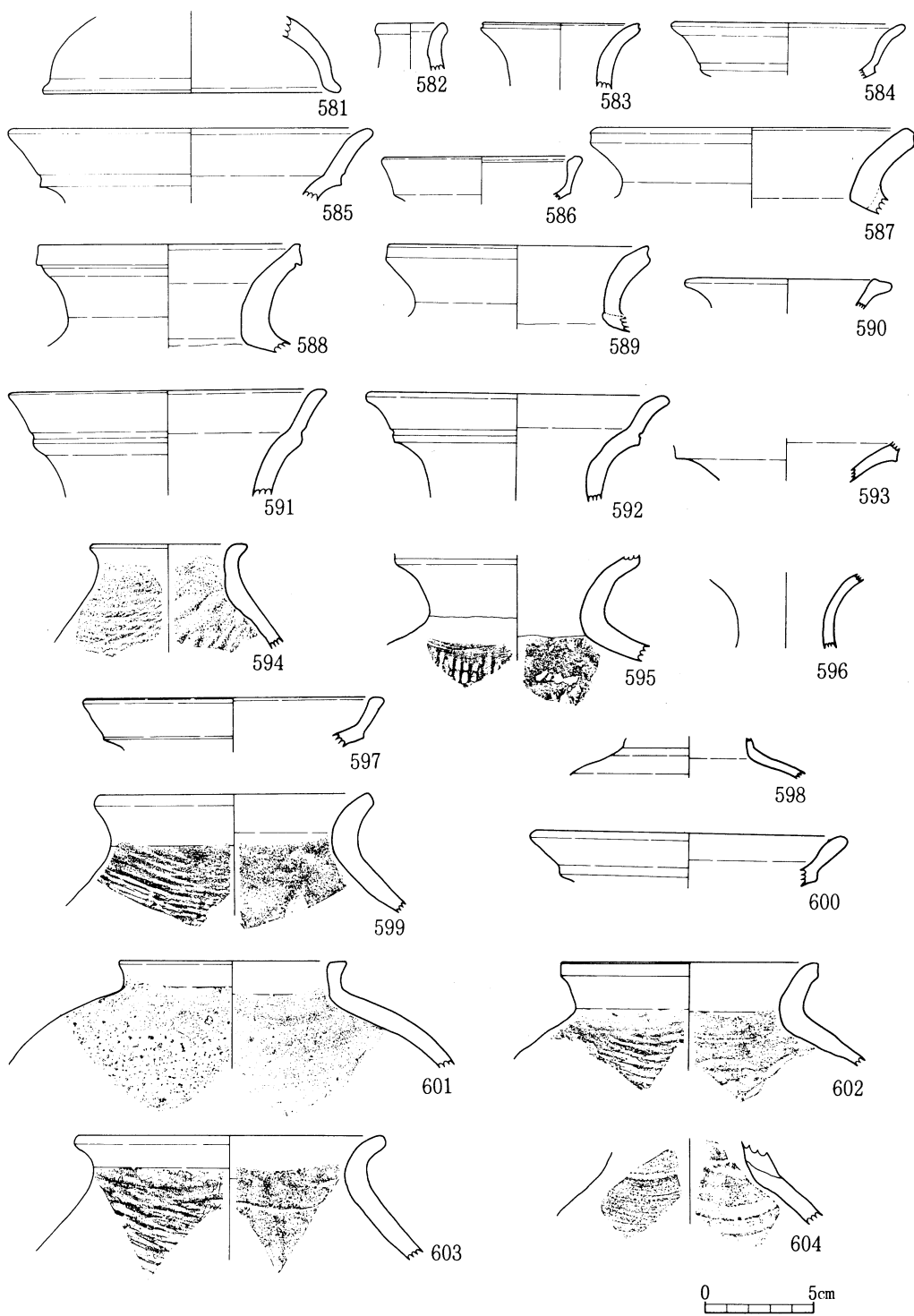
582は口径3.5cmを測る小型長頸壺の外反する口頸部である。583は口径7.3cmを測る長頸壺で外反する口頸部をもつものである。590は高坏脚部とも考えられる。594は小型の壺の口径7.2cm測る口頸部である。口頸部は「く」の字状に外反している。突帯などの装飾はなく簡素な作りである。口頸部の内外面は横ナデ、体部は外面カキ目、内面を円叩きによって調整している。細砂粒を多く含むものの、焼成は良好で外面は赤茶褐色、内面は灰色を呈している。

596は長頸壺の頸部で灰色の飴状自然釉をも発している。601は口径10.5cmを測る広口短頸壺である。やや内弯しつつ外傾する低い口頸部は、膨んだ肩部との境を明瞭にしている。598も同様である。601は、肩部付近に黒灰色の飴状の自然釉を発し、スサや砂粒が固く付着している。605～611は体部から頸部にかけての破片である。606・607は外面を格子状叩きで内

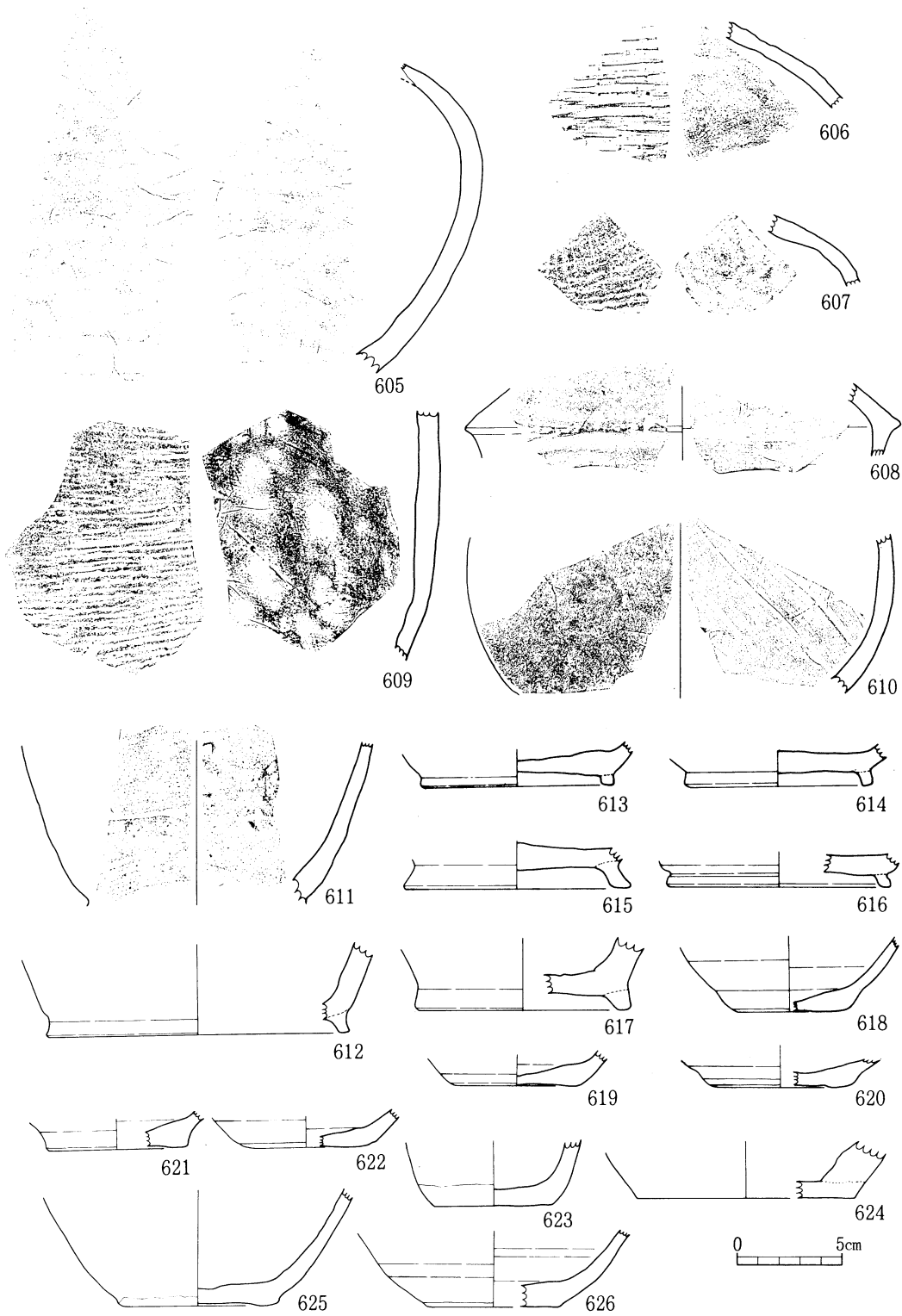


第80図 須惠器 (10) 鉢

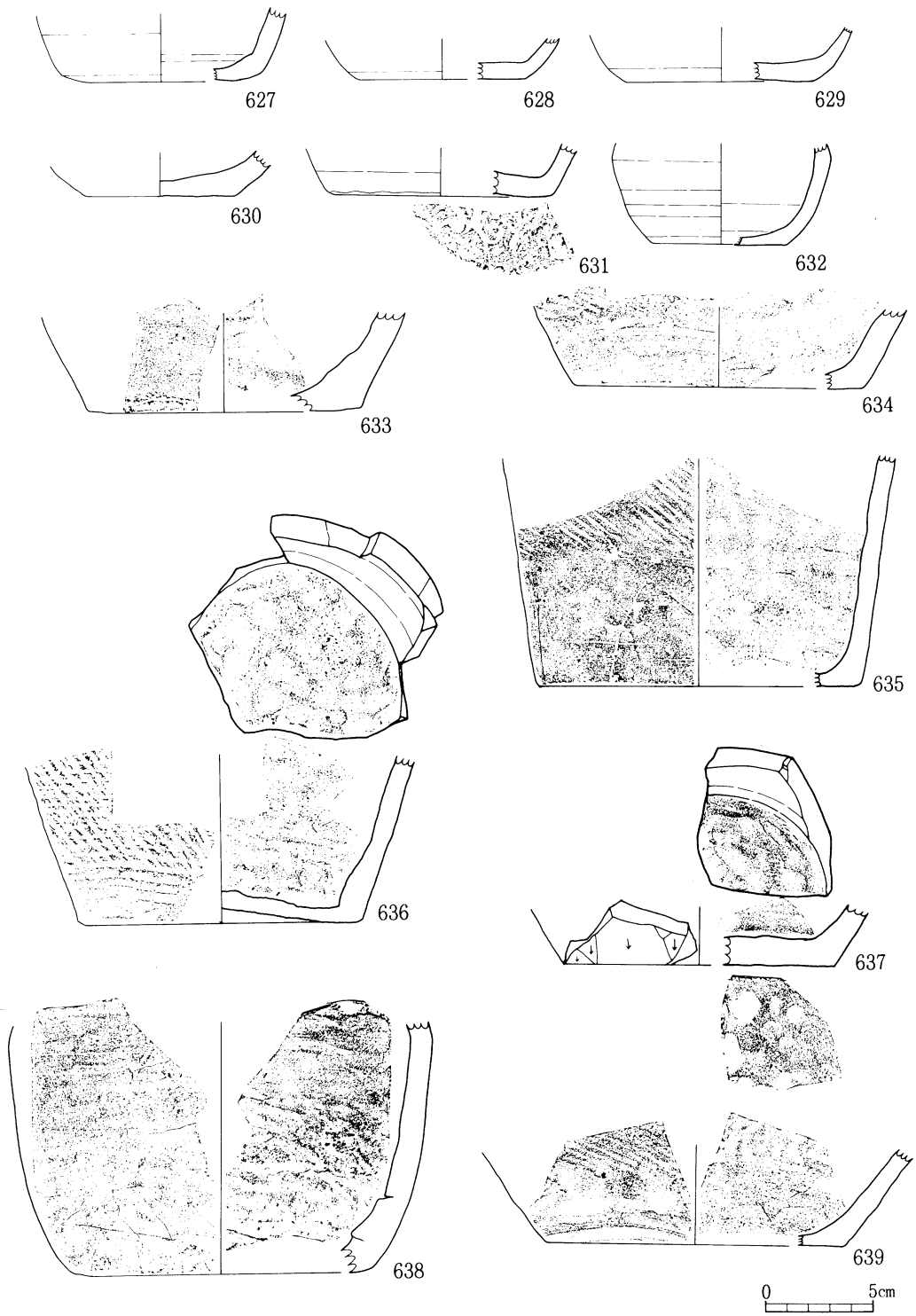




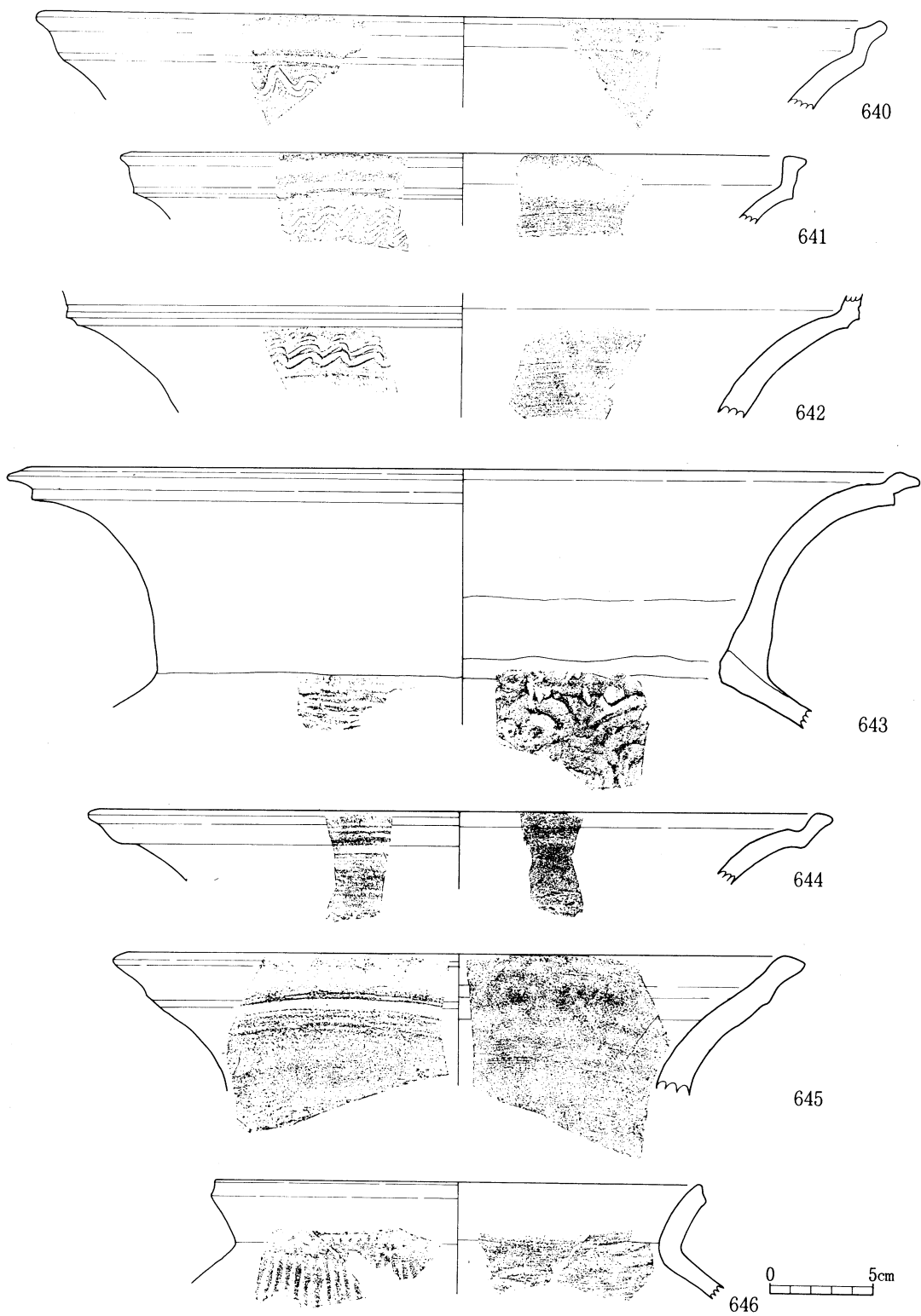
第81圖 須惠器 (11) 壺



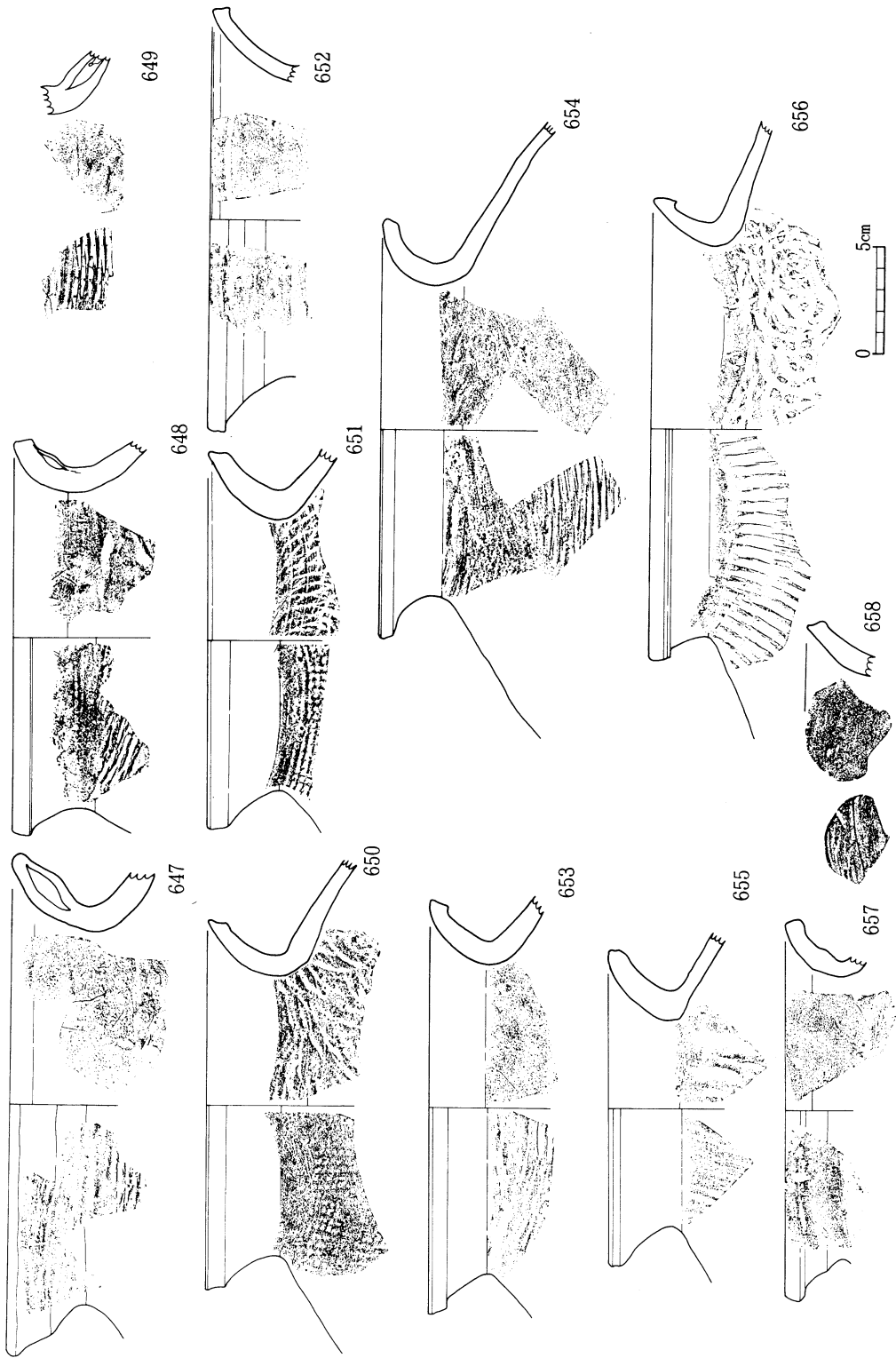
第82図 須恵器 (12) 壺



第83図 須恵器 (13) 壺



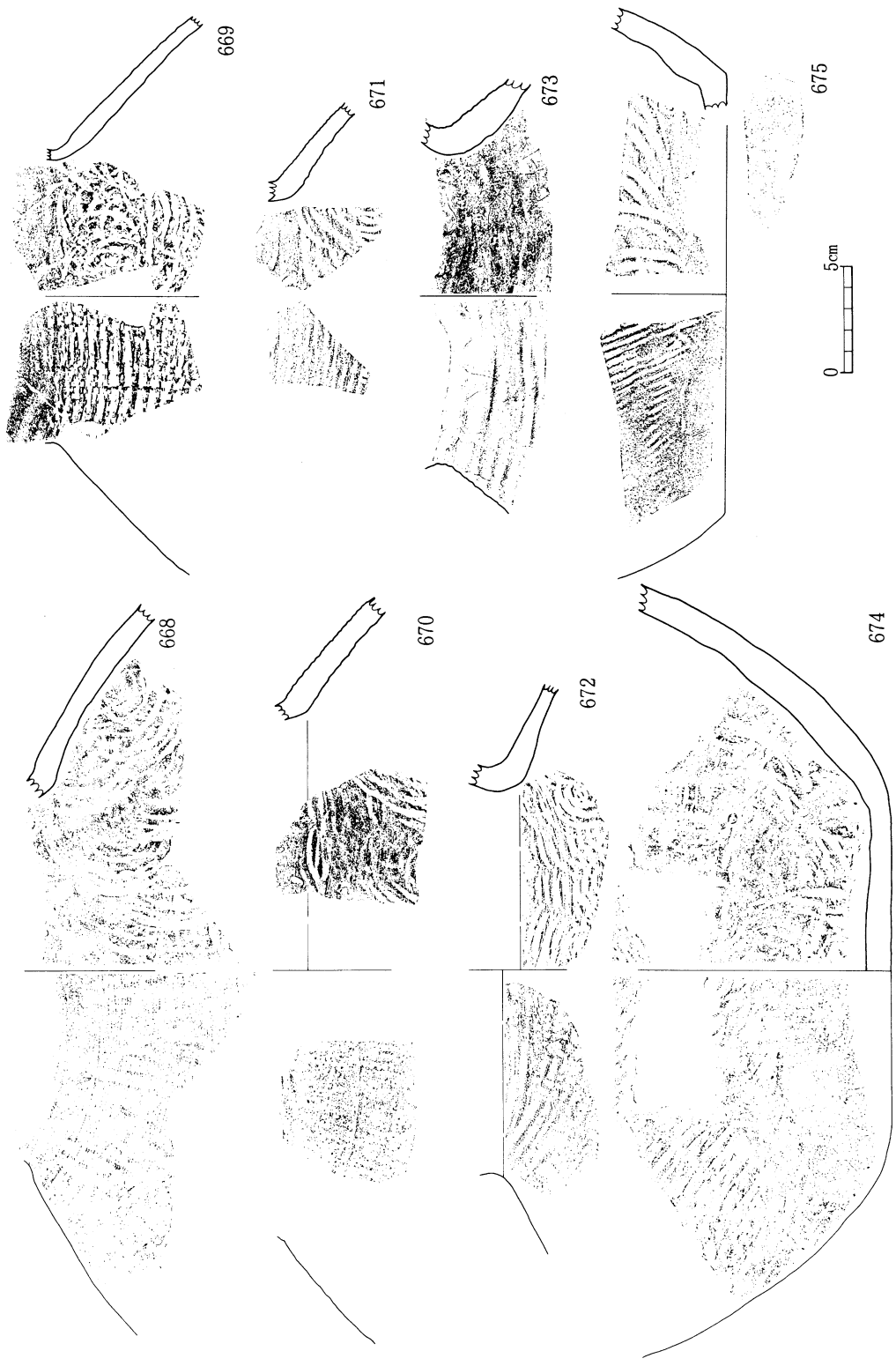
第84図 須恵器 (14) 甕



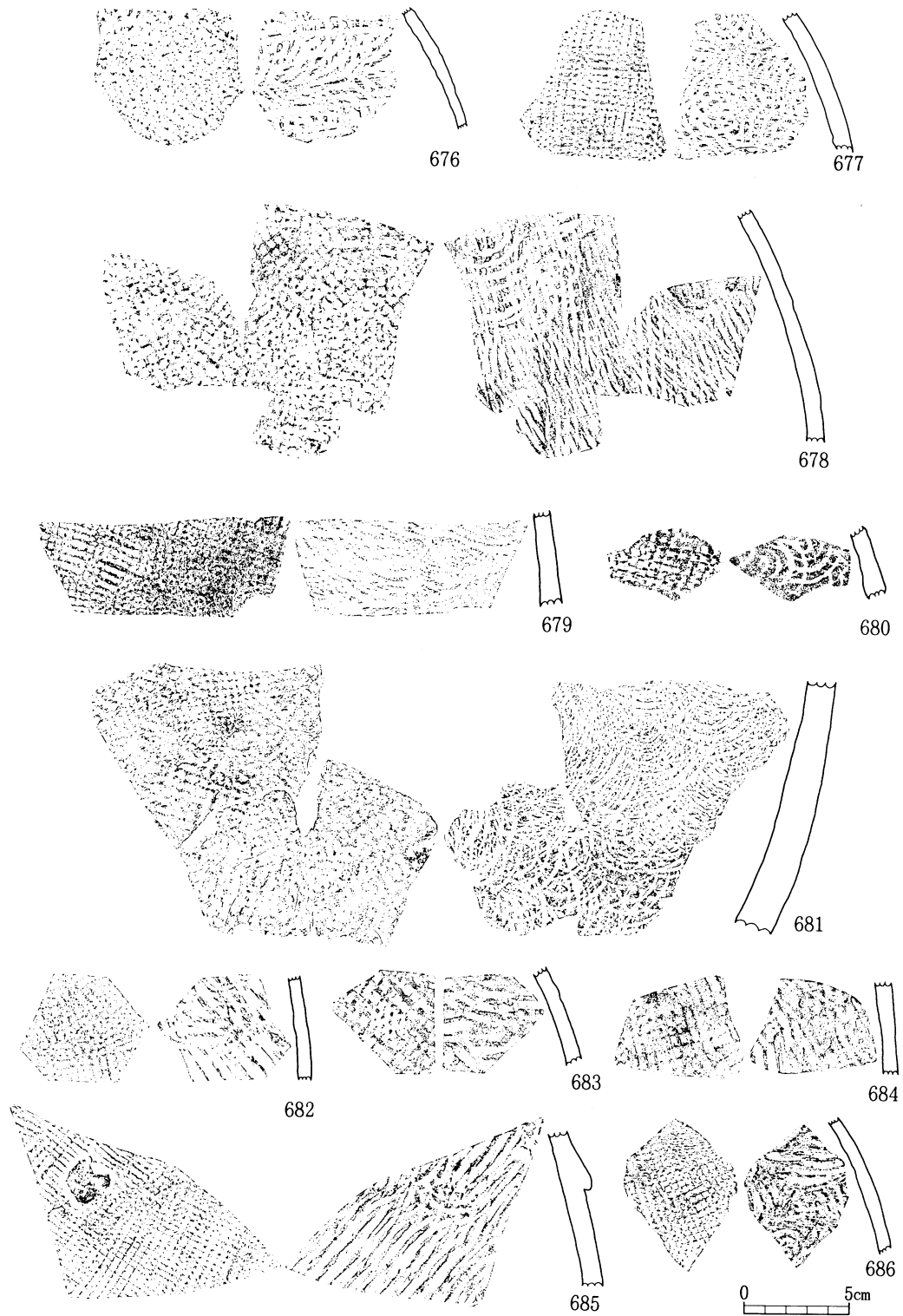
第85図 須恵器 (15) 甕



第86図 須惠器 (16) 瓦

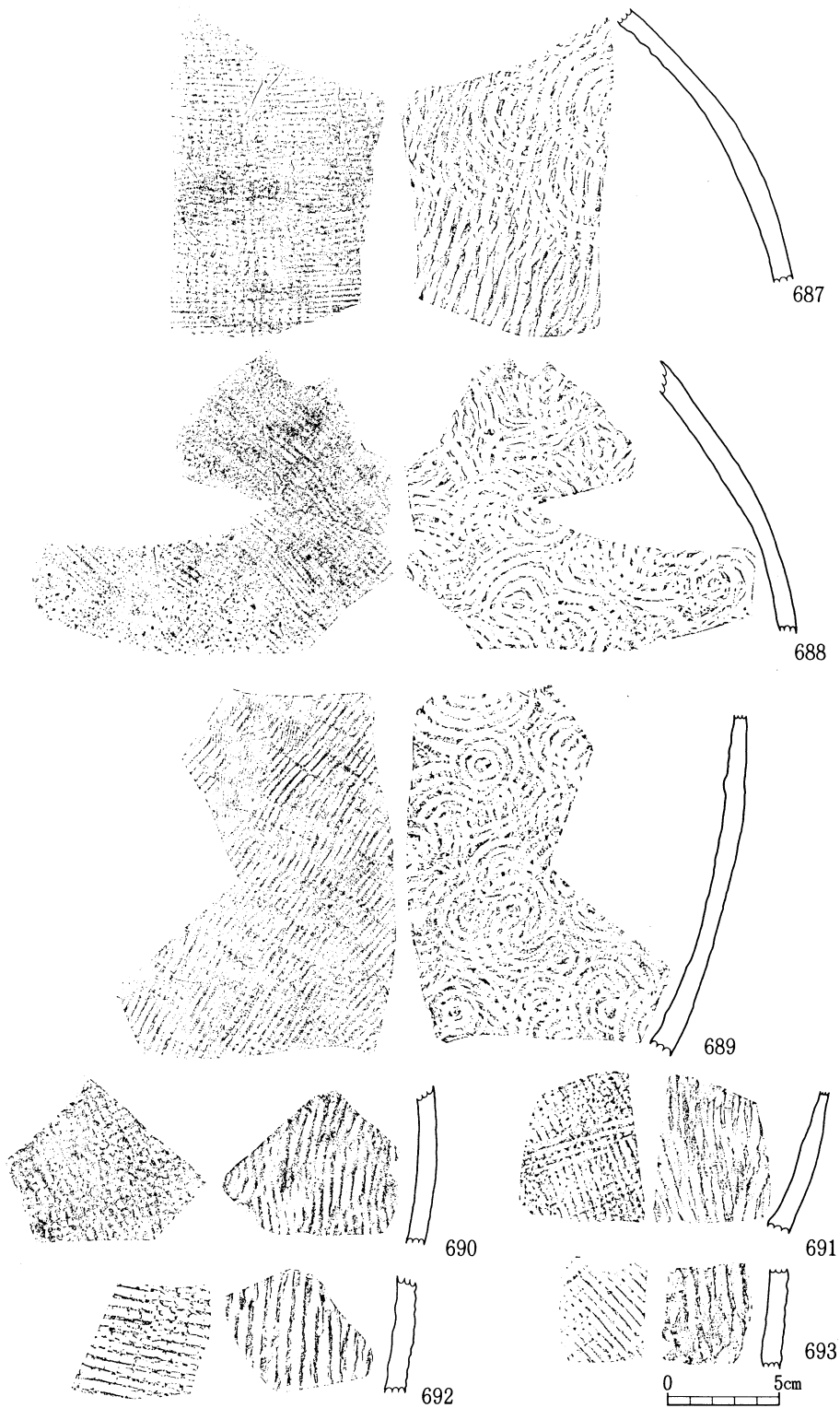


第87図 須恵器 (17) 甕



第88図 須恵器 (18) 甕

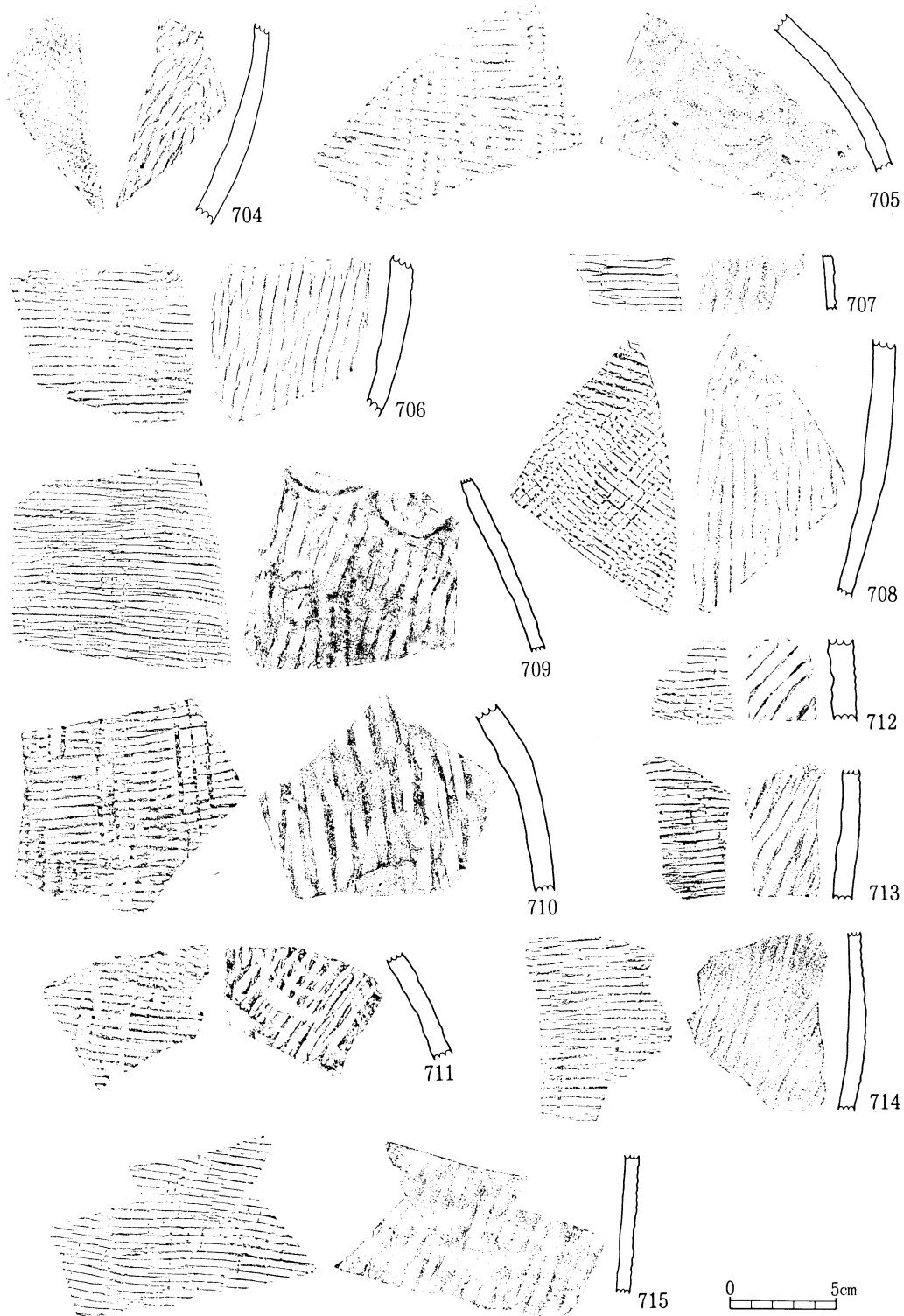




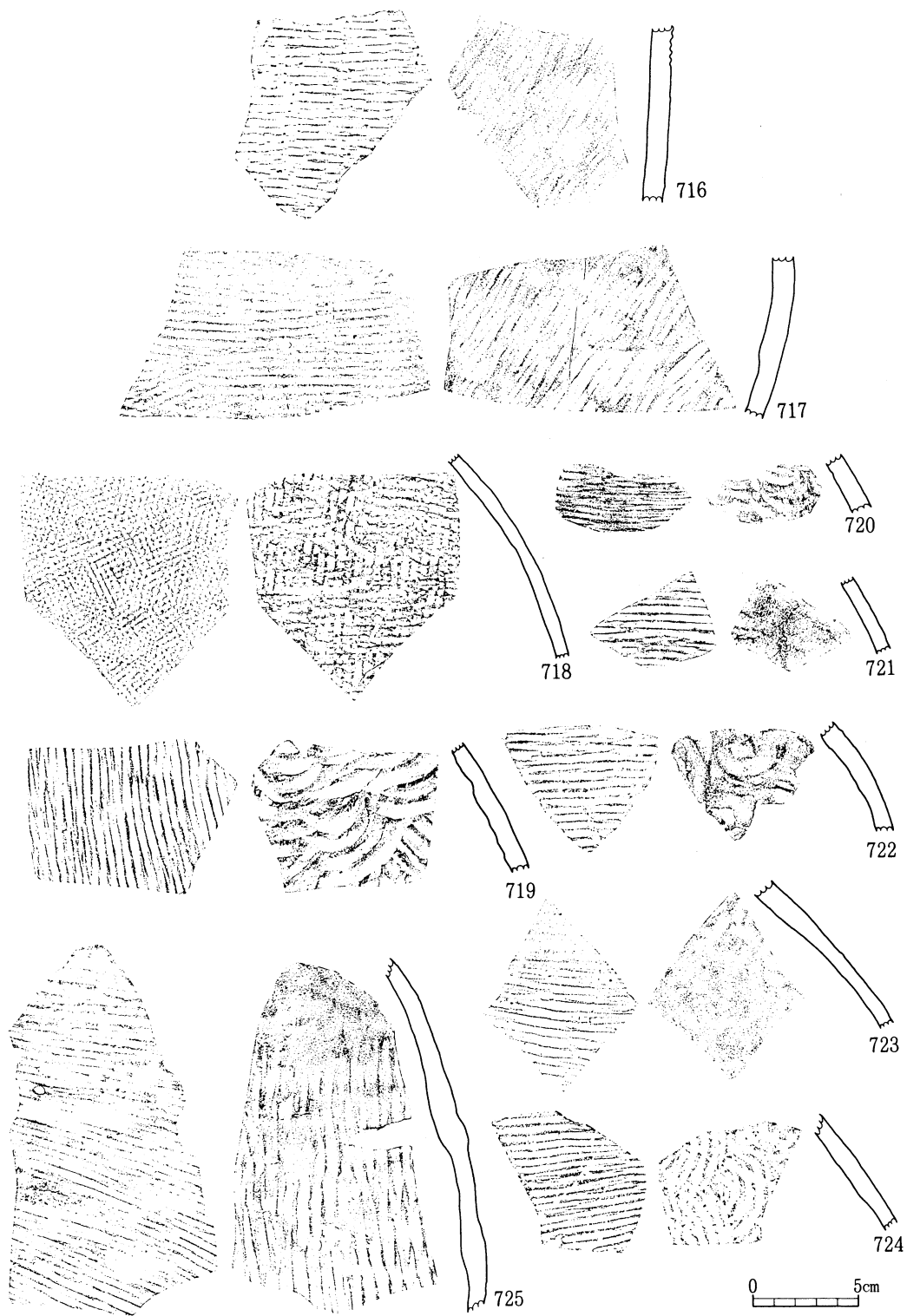
第89圖 須惠器 (19) 甕



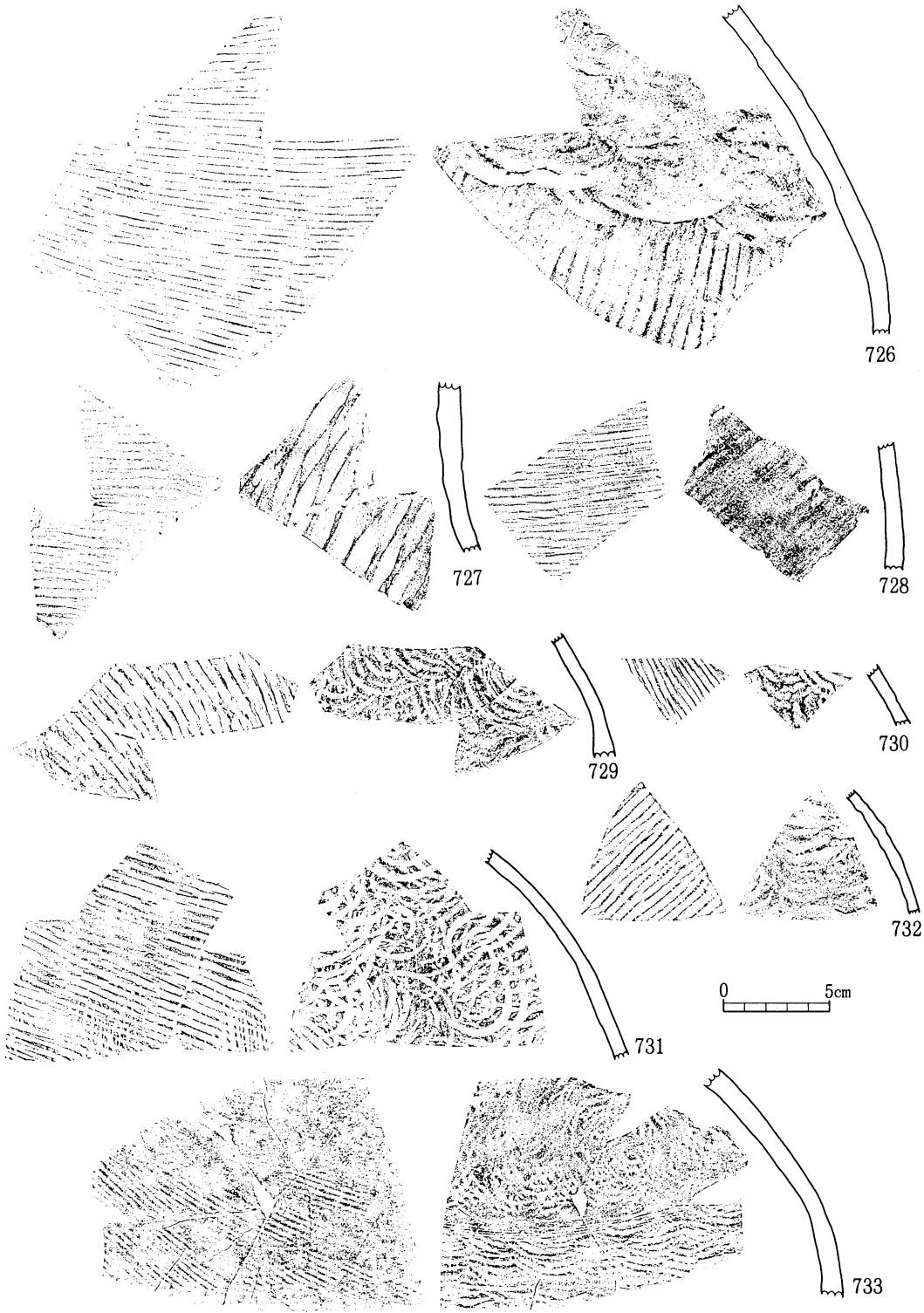
第90圖 須惠器 (20) 瓿



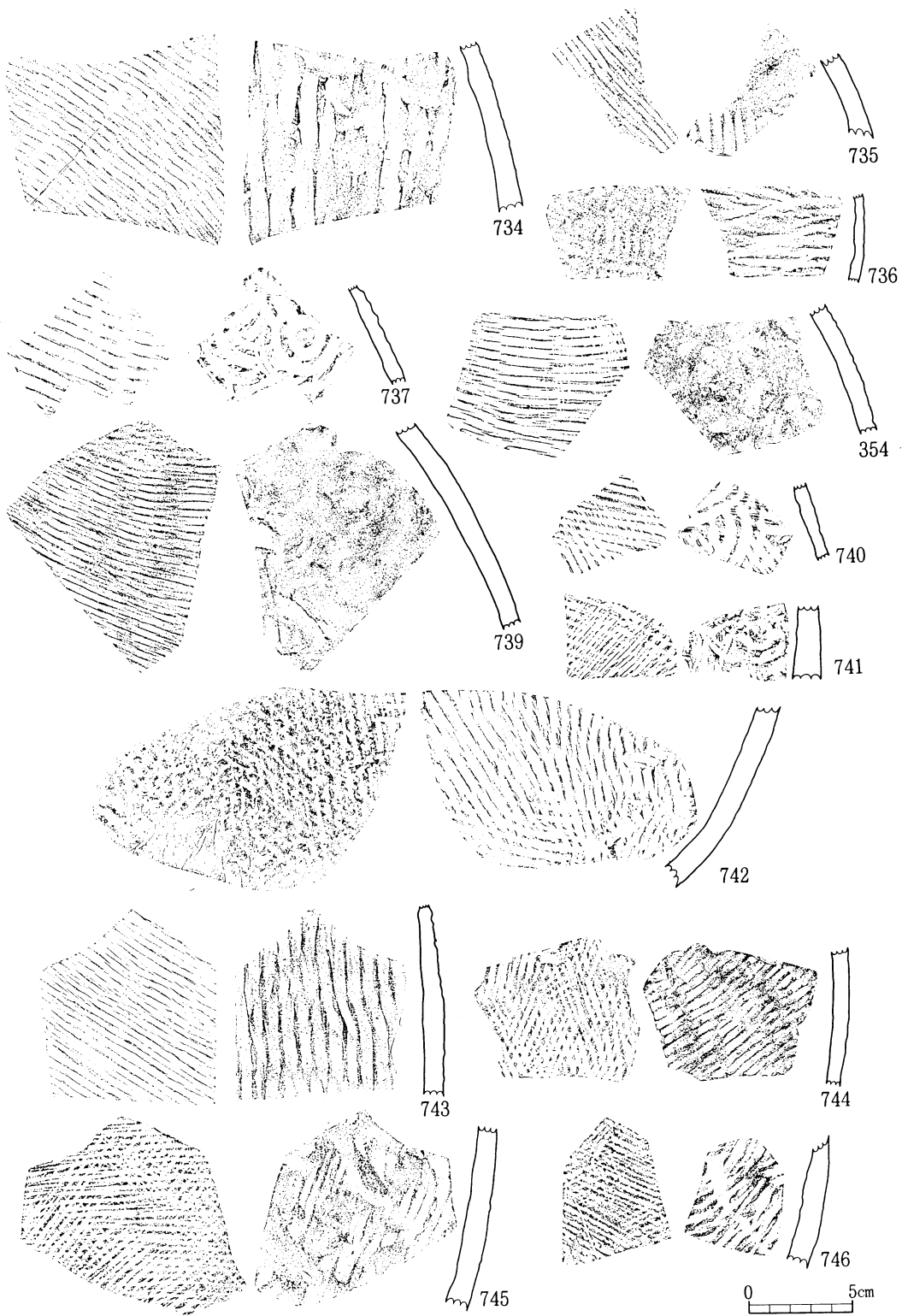
第91圖 須惠器 (21) 甕



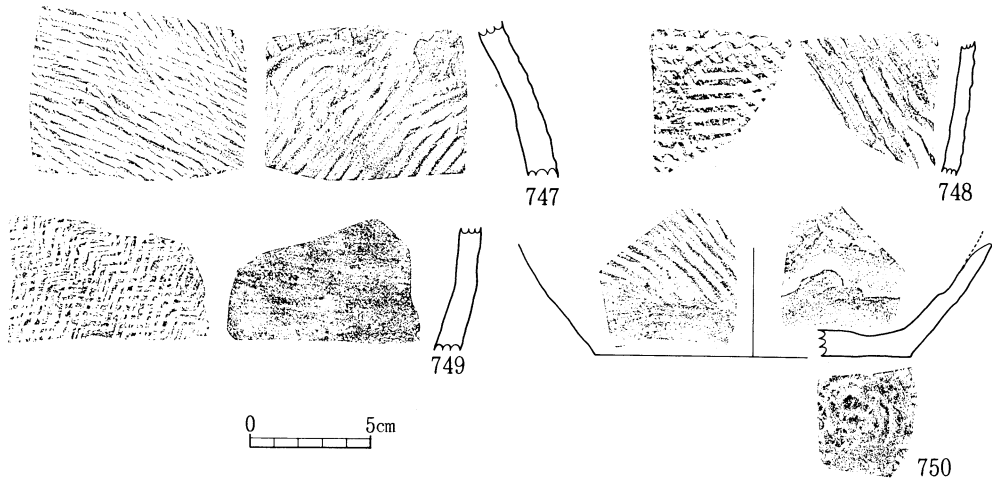
第92図 須恵器(22) 甕



第93圖 須惠器 (23) 瓿



第94図 須恵器 (24) 瓿



第95図 須恵器 (25) 甕

面はナデ調整が施されている。608はほぼ直角状に屈曲した肩部で、内外面ともナデ調整を行っている。外面は黒灰色で内面は灰色を示す。

613～639は壺底部である。613～617は有高台で、618～639が平底である。612は高台高の低い高台を貼り付け、高台端部は水平につくられ外にひろがるものである。

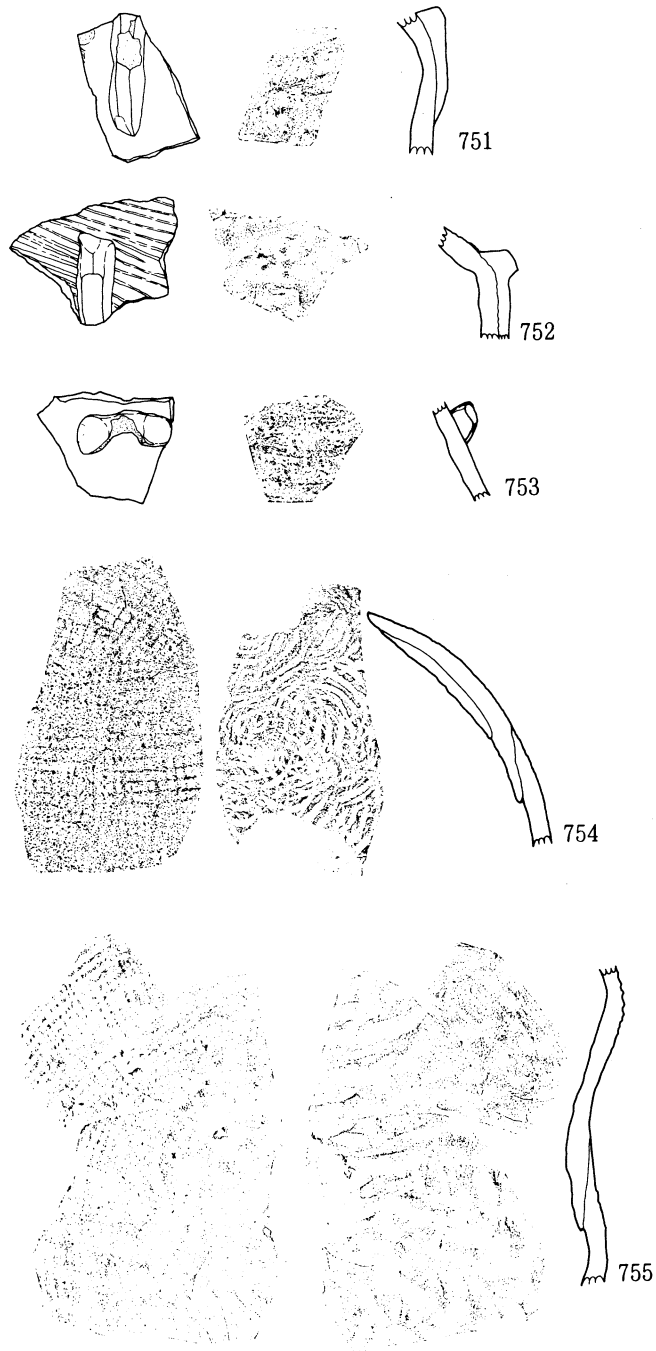
613・614・616は底部端より若干内側に高台を貼り付けたもので、高台は外にひろがるものと、垂直に下がるものがある。615・617はどっしりとした高台を外にひろげている。

615は青灰色で焼成は硬質であるが、その他のものは灰色を呈し、軟質な焼上りであるが、その他のものは灰色を呈し、軟質な焼成である。

#### 甕 (第84～96図)

640～642は須恵器甕の口縁部である。頸部が大きく外反し、口縁下位において屈曲するものである。屈曲部には一条の突帯を巡らし、その下位に篋状施文具による波状沈線を数状巡らすものである。653～658は頸部が締め大きく外反する口縁部である。外面を格子状叩き、平行状叩きで内面に同心円状叩きが見られるものである。659～673は頸部から胴部にかけての部分で、やはり外面を格子状叩き、平行状叩きで内面に同心円状叩きが見られるものである。674・675は底部で、外面を平行状叩き、内面を同心円状叩きが見られる。

676～749は甕胴部で、外面に平行状、格子状叩きが、内面に平行状、同心円状叩きが見られる。色調は青灰色～灰色が多く一部に赤茶褐色を呈したのものもある。750は底部で、外面に同心円状叩きが見られる。



0 5cm

第96図 須恵器(26) 瓦



第22表 須臾器一覽表(1)

番号	器種	出土区層	法量			備考
			口径	口径	器高	
388	蓋	F-12 Ib		3.0		
389	"	F-11 Ib		1.8		
390	"	F-9 Ia	13.6			
391	"	F-13 Ib	13.4			
392	"	G-12 Ib	16.0		2.2	
393	"	F-15 Ib	12.0			
394	"	F-9 Ia				
395	"	G-11 Ia	12.0			
396	"	F-10 Ia	13.2			
397	"	F-10 Ib	13.2		1.1	
398	"	F-14 Ib	13.6			
399	"	F-13 Ib	13.7		1.5	
400	"	F-14 Ib	13.9	1.6	2.3	
401	"	F-14 Ib	14.0		1.2	
402	"	F-13 Ib	14.0		0.9	
403	"	F-14 Ia	14.3			
404	"	F-13 Ib	14.4			
405	"	F-14 Ib	14.6		1.5	
406	"	F-12 Ib	15.6		1.8	
407	"	F-10 Ib	15.6		1.9	
408	"	F-10 Ib	16.4		1.4	
409	"	F-13 Ib	17.6			
410	"	F-10 Ib				
411	"	F-11 Ib	13.2		1.7	
412	"	F-18 Ib	14.0			
413	"	F-14 Ib	14.6		1.9	
414	"	F-10 Ib	16.2		1.4	
415	"	F-10 Ib				
416	"	G-10 Ib				
417	"	G-11 Ia				
418	"	F-11 Ib	12.2		1.7	
419	"	F-13 Ib	12.2		1.1	
420	"	F-13 Ib	12.6		1.0	
421	"	F-13 Ib	13.4		1.3	
422	"	F-12 Ib	13.6			
423	"	F-11 Ib	13.8		1.3	
424	"	F-12 Ia	15.8			
425	"	F-11 Ib	16.1			
426	"	F-11 Ib	16.4			
427	"	F-12 Ib	16.6			
428	"	F-12 Ia				
429	"	表探				
430	"	F-11 Ia				
431	"	G-8 I				
432	"	G-11 Ia				
433	"	F-17 Ib				
434	"	F-10 Ib	14.2		2.2	
435	"	F-15 Ib	15.2		1.1	
436	"	F-14 Ib	16.0			
437	"	F-13 Ib	16.8			

番号	器種	出土区層	法量			備考
			口径	口径	器高	
438	蓋	G-9 Ib	13.8		1.3	
439	"	F-8 I	18.0		2.1	
440	"	E-14 Ib	16.6			
441	"	F-14 Ib	17.4		1.4	
442	"	F-13 Ia	15.0			
443	"	F-12 Ib	13.9		1.3	
444	"					
445	"	F-7I				
番号	器種	出土区層	法量			備考
			口径	口径	器高	
447	皿	F-12 Ib	12.9	9.9	1.6	
448	"	F-12 Ia	14.2	11.2	2.0	
449	"	G-13 Ia	15.2	10.6	2.3	
450	"	F-12 Ib	12.9	9.9	1.6	
451	"	F-12 Ia	14.2	11.2	2.0	
452	"	G-13 Ib	15.2	10.6	2.3	
453	"	F-15 Ib	15.1	11.0	2.3	
454	"	F-10 Ib	19.8	14.4	2.0	
455	坏	G-8 Ib	11.4	6.6	3.8	
456	"	F-15 Ib	11.6	7.6	3.6	
457	"	F-15 Ib	12.6	8.0	3.5	
458	"	F-13 Ib	12.4	8.2	3.1	
459	"	F-16 Ib	12.7	8.4	3.5	
460	"	F-11 Ib	10.2			
461	"	F-15 Ib	10.6			
462	"	F-10 Ib	11.0			
463	"	G-13 Ib	11.0			
464	"	G-11 Ia	11.6			
465	"		11.8			
466	"	F-15 Ib	11.9			
467	"	F-10 Ib	11.9			
468	"	G-8 I	12.2			
469	"	F-15 Ib	12.2			
470	"	F-8 I	12.6			
471	"	F-15 Ib	12.8			
472	"	F-11 Ib	12.8			
473	"	F-13 Ib	13.0			
474	"	F-13 Ib	13.4			
475	"	F-15 Ib	13.4			
476	"	F-13 Ib	13.5			
477	"	F-12 Ib	13.6			
478	"	F-8 Ib	13.8			
479	"	F-8 I	14.0			
480	"	F-13 Ib	14.2			
481	"	E-14 Ib	14.2			
482	"	F-10 Ib	14.4			
483	"	F-10 Ib	15.2			
484	"	F-12 I	15.4			

第23表 須惠器一覽表(2)

番号	器種	出土区層	法量			備考
			口径	底径	器高	
485	坏	G-10 Ib	15.4			
486	"	F-11 Ib	15.5			
487	"	F-13 Ia	15.6			
488	"	G-9 Ib	15.6			
489	"	F-14 Ib		4.8		
490	"	F-15 Ib		6.0		
491	"	F-12 Ib		6.8		
492	"	E-13 Ib		6.8		
493	"	F-11 Ib		7.4		
494	"	E-8 Ib		8.0		
495	"	F-13 Ib		8.2		
496	"	G-8 甗		8.6		
497	"	F-10 Ib		8.2		
498	"	F-14 Ib		8.4		
499	"	F-11 Ib		8.8		
500	"	F-11 Ib		9.0		
501	"	E-8 Ib		9.0		
502	甗	F-14 Ib	11.4	6.2	3.9	
503	"		13.5	8.3	3.9	
504	"	F-14 甗	13.5	8.4	4.2	
505	"	F-10 Ib	9.8	7.6	3.7	
506	"	F-11 Ib	10.0	7.0	3.4	
507	"	F-10 Ib	11.2	7.6	3.8	
508	"	F-10 Ib	13.5	8.0	4.5	
509	"	F-11 Ib	16.3	10.8	5.6	
510	"	F-11 Ib	17.1	10.6	5.8	
511	"	F-11 Ib	17.5	11.0	5.8	
512	"	F-15 Ib	16.4			
513	"	F-8 Ia	16.6			
514	"	G-9 Ib	18.2			
515	"	F-10 甗	17.8			
516	"	F-9 Ib	13.0			
517	"	F-10 Ib	14.5			
518	"	F-14 Ib	12.6			
519	"	F-12 Ib		7.3		
520	"	F-15 Ib		7.1		
521	"	F-14 Ib		8.0		
522	"	F-15 Ib		8.4		
523	"	F-12 Ib		7.4		
524	"	G-13 甗		8.0		
525	"	F-13 Ib		8.0		
526	"	E-16 Ib		9.0		
527	"	F-14 Ia		8.3		
528	"	E-16 Ib		9.4		
529	"	F-15 Ib		9.8		
530	"	E-15 Ib		9.0		
531	"	F-11 Ia		8.8		
532	"	F-14 Ib		8.3		
533	"	G-13 Ia		6.2		
534	"	G-13 Ib		5.8		
535	甗	F-17 Ib		7.8		
536	"	F-12 Ib		8.0		
537	"	F-8 I		7.3		
538	"	F-13 Ib		8.2		
539	"	F-13 Ib		9.2		
540	"	E-15 Ia		6.5		
541	"	F-14 Ib		8.8		
542	"	F-10 Ib		8.0		
543	"	F-14 Ib		8.6		
544	"	F-10 Ib		8.0		
545	"	F-9 Ib		7.2		
546	"	F-10 Ib		7.4		
547	坏	F-13 Ib	11.6			
548	"	F-14 Ia	13.0			
549	甗	G-10 Ib	16.6			
550	"	F-16 Ib	14.4			
551	"	F-18 Ib	14.8			
552	"	F-14 I	15.4			
553	"	G-8 甗	14.0			
554	"	F-14 I	13.3			
555	"	G-6 Ib	14.1			
556	"	G-9 Ib		6.5		
557	"	F-13 Ib		8.3		
558	"	E-15 Ib		7.5		
559	高坏	F-13 Ia				
560	"	F-13 Ib				
561	"	F-12 Ib				
562	"	F-10 Ib		8.8		
563	"	F-8 甗	10.0			
564	鉢	F-8 I	19.3			
565	"	I	19.2			
566	"	F-10 Ib				
567	"	E-16 Ib	23.0			
568	"	E-14 Ia	21.5			
569	"	F-9 Ib	16.0			
570	"	E-8 Ib	22.0			
571	"	F-16 Ib				
572	"	F-15 Ib				
573	"	F-13 Ib				
574	"	E-15 Ib				
575	"	F-15 Ib	21.5			
576	"	F-12 Ib	30.0			
577	"	F-14 Ia	12.0			
578	"	G-7 I	13.0			
579	"	G-7 甗				
580	"	F-16 Ib				
581	甗	F-9 Ib	13.5			
582	甗	F-8 I	3.5			
583	"	F-10 Ib	7.3			
584	"	F-9 I	10.8			

第24表 須惠器一覽表 (3)

番号	器種	出土区層	法量			備考
			口径	底径	器高	
585	壺	F-17 lb	16.7			
586	"	F-12 lb	9.2			
587	"	F-13 lb	14.8			
588	"	F-9 lb	12.0			
589	"	F-14 lb	12.0			
590	"	G-9 lb	9.5			
591	"	G-8 lb	14.6			
592	"	E-8 lb	14.0			
593	"	G-8 I				
594	"	F-16 lb	7.2			
595	"	F-9 la				
596	"	F-11 lb				
597	"	F-11	13.8			
598	"	F-8 I				
599	"	E-8 la	12.5			
600	"	F-10 lb	14.5			
601	"	F-14 la	10.5			
602	"	F-10 lb	11.8			
603	"	F-11 lb	14.2			
604	"					
605	"	F-10 lb				
606	"	F-15 lb				
607	"	F-13				
608	"	F-14 lb				
609	"	F-13 lb				
610	"	G-8 I				
611	"	G-13 lb				
612	"	F-9 lb		14.5		
613	"	F-10 lb		9.2		
614	"	G-8 I		9.0		
615	"	F-10 lb		10.8		
616	"	G-13 lb		10.6		
617	"	G-8 I		10.4		
618	"	F-6 IF		5.0		
619	"	G-11 lb		5.8		
620	"	F-14 lb		6.2		
621	"	E-15 lb		6.8		
622	"	F-14 lb		5.0		
623	"	F-6 IF		5.6		
624	"	F-10 lb		10.4		
625	"	F-9 lb		7.5		
626	"	E-13 lb		6.2		
627	"	F-13 lb		7.0		
628	"	F-13 lb		7.8		
629	"	F-10 lb		8.8		
630	"	F-13				
631	"	F-16 lb		10.0		
632	"	F-8 I		6.2		
633	"	F-13 lb		11.0		
634	"	E-8 lb		13.2		

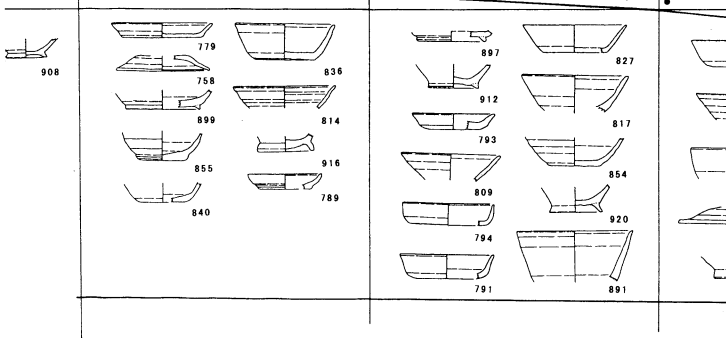
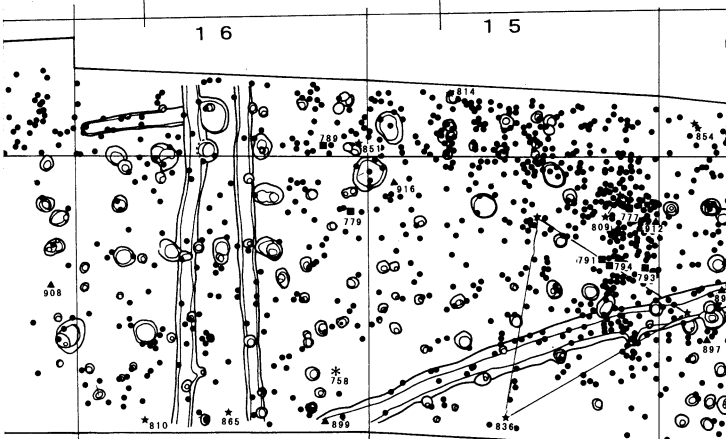
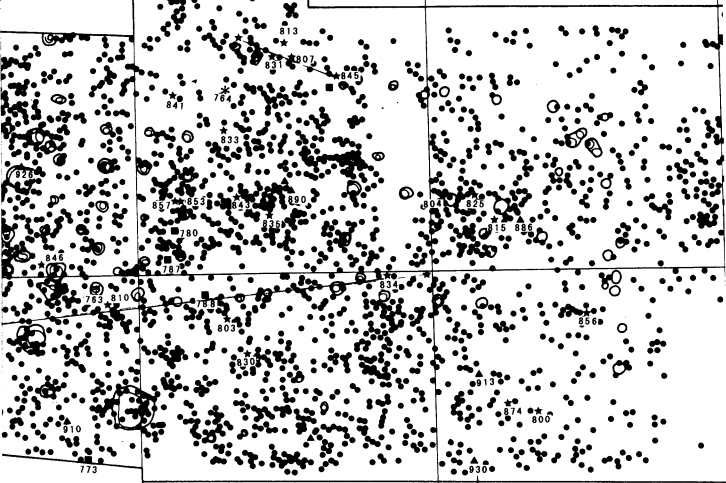
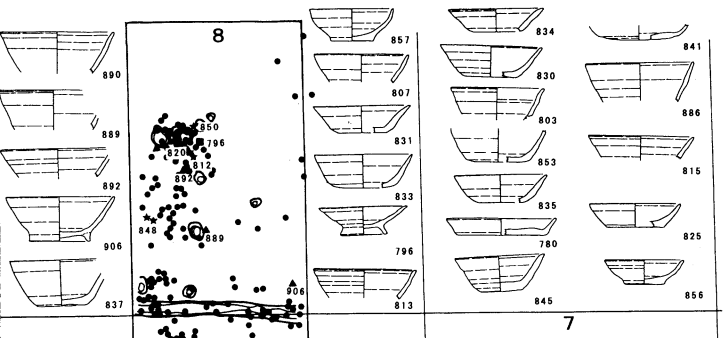
番号	器種	出土区層	法量			備考
			口径	底径	器高	
635	壺	E-8 lb		14.8		
636	"	F-13 lb		12.8		
637	"	F-15 lb		12.5		
638	"	F-9 lb		13.5		
639	"	F-14 lb		13.8		
640	甕	F-14 la	40.6			
641	"	F-10 lb	33.0			
642	"	F-14 lb				
643	"	F-13 lb	44.0			
644	"	F-14 lb	36.0			
645	"	F-7 I	33.0			
646	"	F-8 lb	23.5			
647	"	F-13 lb	23.3			
648	"	F-13 la	18.2			
649	"	F-14 lb				
650	"	F-10 lb	17.0			
651	"	F-14 lb	17.4			
652	"	F-11 lb	19.5			
653	"	F-13 lb	19.2			
654	"	F-11 lb	19.4			
655	"	F-13 lb	14.6			
656	"	F-12 lb	21.0			
657	"	F-7 I	17.2			
658	"	F-15 lb				
659	"	F-11 lb				
660	"	F-12 la				
661	"	F-10 la				
662	"	F-17 lb				
663	"	G-13 lb				
664	"	F-8 lb				
665	"	F-11 lb				
666	"	F-14 lb				
667	"	F-13 lb				
668	"	F-14 lb				
669	"	F-7 lb				
670	"	F-10 lb				
671	"	G-7				
672	"	F-12 lb				
673	"	F-14 lb				
674	"	F-11 lb		14.4		
675	"	F-11 lb		20.6		
676	"	F-13 lb				
677	"	F-13 la				
678	"	F-14 lb				
679	"	F-9 lb				
680	"	F-13 lb				
681	"	F-11 lb				
682	"	F-13 lb				
683	"	F-13 lb				
684	"	F-15 lb				

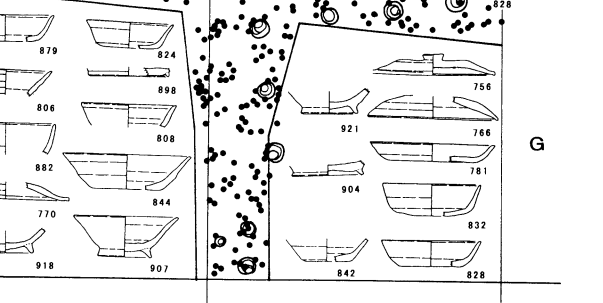
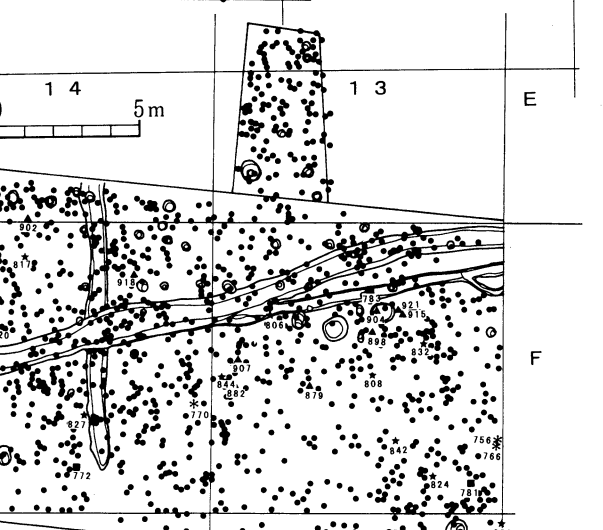
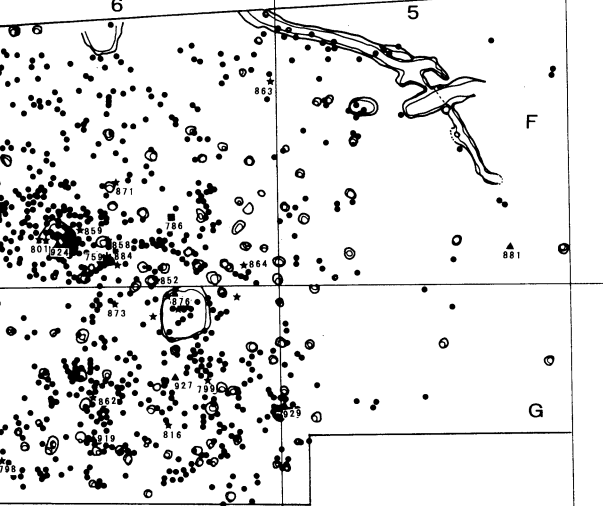
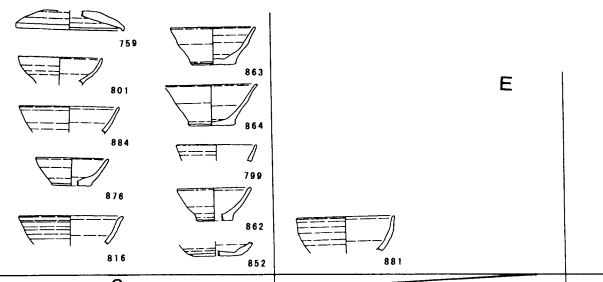
第25表 須惠器一覽表(4)

番号	器種	出土区層	法量			備考
			口径	底径	器高	
685	甕	F-12 lb				
686	"	F-13 la				
687	"	F-8 l				
688	"	F-13 匳				
689	"	F-13 lb				
690	"	F-12 lb				
691	"	F-12 lb				
692	"	F-11 lb				
693	"	F-6 l				
694	"	F-13 lb				
695	"	F-13 lb				
696	"	F-17 lb				
697	"	F-14 匳				
698	"	F-9 lb				
699	"	F-13 lb				
700	"	F-12 lb				
701	"	F-8 l				
702	"	F-9 lb				
703	"	F-15 la				
704	"	F-8 l				
705	"	G-9				
706	"	E-17				
707	"	F-9				
708	"	E-14				
709		F-8				
710		F-8				
711		F-16				
712		F-9				
713		E-8				
714		F-13				
715		E-8 匳				
716		F-8				
717		F-13				
718	甕	F-7l				
719	"	F-17 lb				
720	"	l				
721	"	G-9l				
722	"	F-9 lb				
723	"	F-13 lb				
724	"	F-13 lb				
725	"	E-8 la				
726	"	F-13匳				
727	"	F-9匳				
728	"	G-9 lb				
729	"	F-10匳				
730	"	F-9 lb				
731	"	E-14匳				
732	"	E-8 lb				
733	"	F-14匳				
734	"	F-13 lb				
735	"	F-9 lb				
736	"	F-14 lb				
737	"	F-14 lb				
738	"	F-12 lb				
739	"	G-9 lb				
740	"	F-12 la				
741	"	F-11 lb				
742	"	G-7l				
743	"	E-18 lb				
744	"	F-12 lb				
745	"	E-17 lb				
746	"	F-14 lb				
747	"	F-9 lb				
748	"	G-11 lb				
749	"	F-11 lb				
750	"	F-8l				



第97図 平安時代土師器出土状況





## ②土師器

土師器には、蓋・皿・坏・碗・鉢・甕がある。

### 蓋（第98図、756～771）

756～771は土師器の坏蓋である。756は完形品で、平坦な天井部に扁平な擬宝珠形つまみをもつもので、口縁部はかえしがなく、口縁部が下方に鳥嘴状に突出したものである。口径17.0cm、つまみ径3.0cm、器高3.0cmを測る。色調は黄白色を呈し、胎土に少量の砂粒を含む。焼成は良好である。器面の内外面とも横ナデ調整を施している。

757～763は平坦な天井部をもつもので、体部は口縁端部までゆるやかに傾斜し、口縁部が下方に鳥嘴状に突出したものである。口径が12.4～17cmで器高は2.0～2.0cmを測るものである。焼成は良好で、758～762は淡赤褐色を呈する。

764～769は、体部が天井部から口縁部にかけてゆるやかに傾斜しているもので、端部は下方に短く突出したもので、口縁部は外反し、口縁外面は丸みをもつ。口径は13.0～18.0cmで器高は1.4～3.6cmを測る。767は焼成も良好で色調は灰褐色を呈する。

770は、口径17.8cmを測る天井部から口縁部にかけてゆるやかに傾斜し、口縁部は外反する。色調は淡赤褐色を呈し、胎土に少量の砂粒を含む。焼成は良好で外面はていねいにヘラミガキされ、内面はナデ調整されている。

771は、平坦な天井部をもつもので口縁部はやや外反する。剥脱しているが天井部に7.5cmを測る大型の輪状つまみが付されていたと思われる。

### 皿（第99図、772～797）

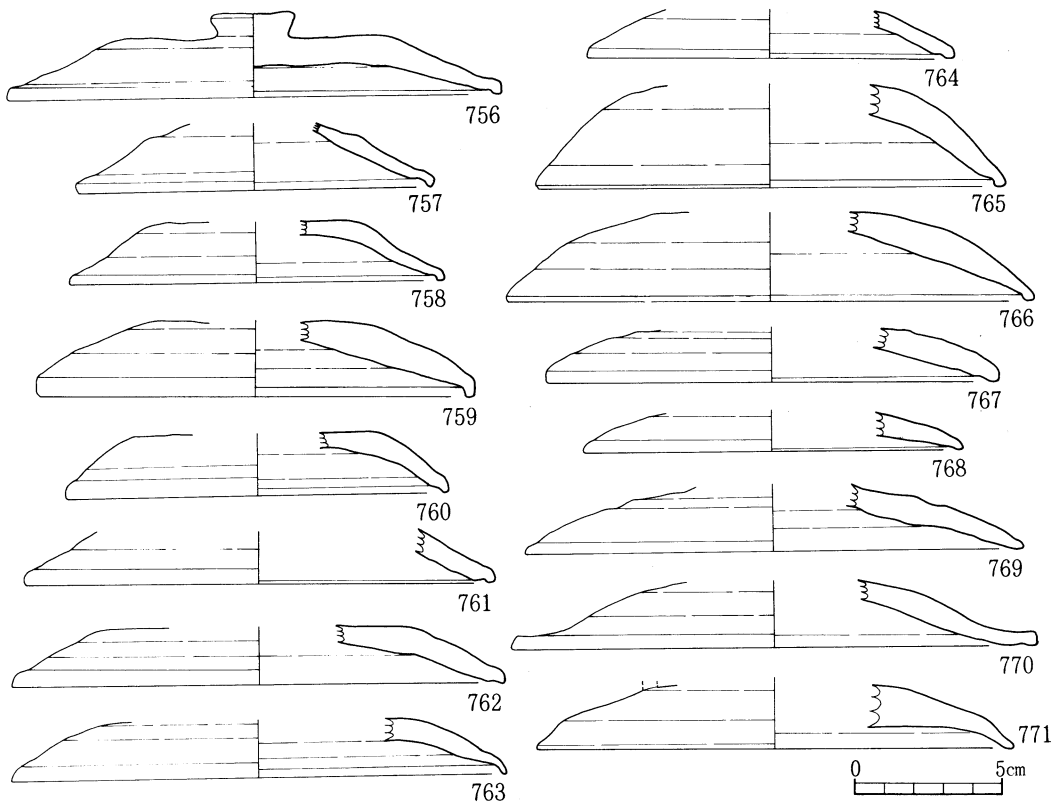
772～797は土師器の皿である。

772～784は底部がヘラ切りの平底で、体部は若干外反するものである。体部と底部の境に明瞭な稜をもつもので、体部の立ち上がり之急なものである。772～776は口径が10cm以下、器高も2cm以下のもので、器高は浅く体部はあまり外上方へ開かず、直行気味で立ちあがる。色調は黄白色を呈する。777は口縁端部が丸みをおびているが、他のものはやはり尖り気味である。778～784は口径が15.0～17.0cmで、器高も2.0～3.2cmを測る。色調は淡赤褐色を呈し焼成も良好である。781は図版のミスで黒色土器が混入した。内外面とも赤色塗料を塗り込めた朱色土器である。780～782は、体部と底部の境があいまいなものである。

785～795は、体部と底部の境が若干丸みをおびたものである。787～789は口径が8～10cmで器高は1.4～2.7cmを測る。底部はヘラ切りの平底で、体部は丸みをもち内弯しつつ立ちあがるもので、底部をやや直線的に形成している。790～793はやはりヘラ切りの平底で、体部下方が明瞭な稜をもち、口径8.8, 12.8, 16.0, 11.2cm、器高2.7, 3.2, 4.2, 2.2cmを測る体部が外上方へ開くものである。色調は黄白色、淡赤褐色を呈し、焼成は良好なものである。

794は口径12.6cm、器高2.9cmを測るもので、底部はヘラ切りの平底、体部はあまり外上方へ開かず直行気味で立ちあがる。色調は淡褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好である。





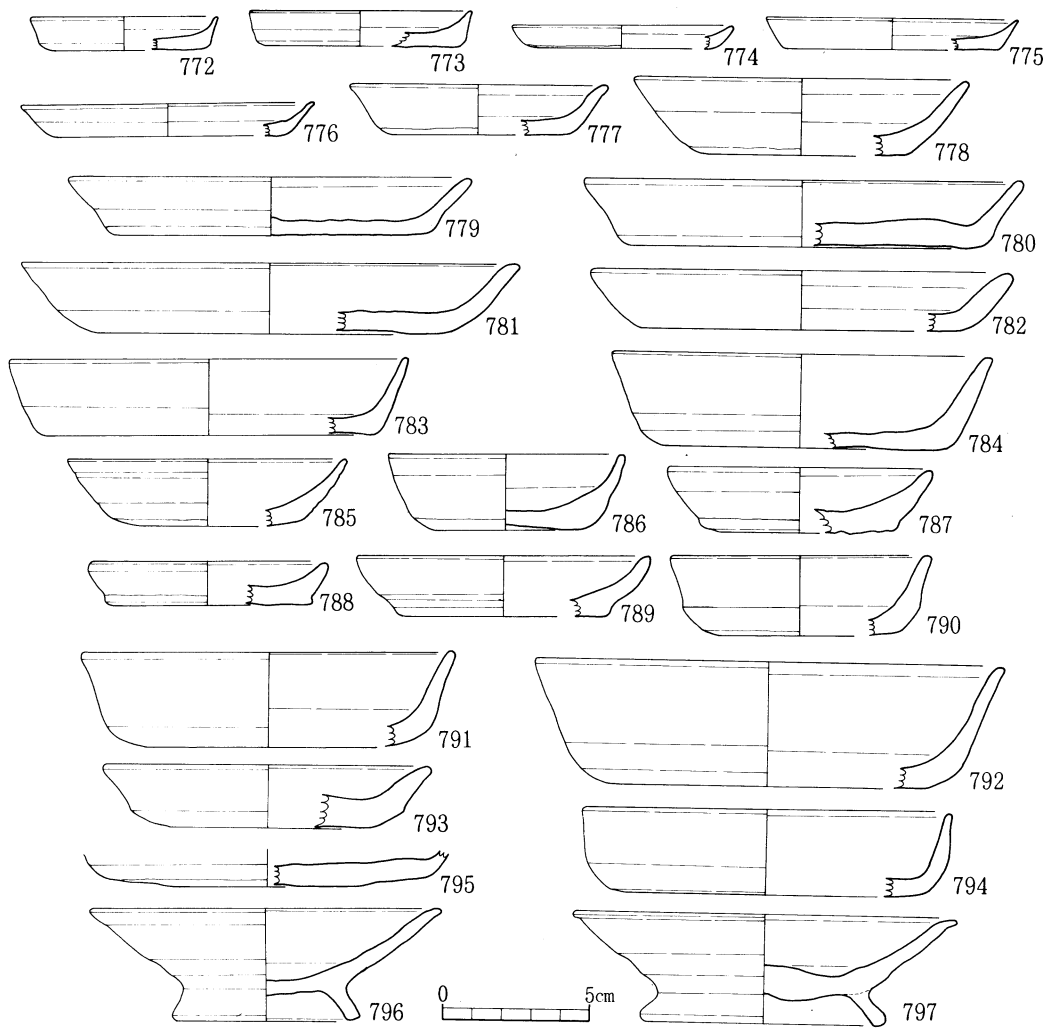
第98図 土師器(1) 蓋

796, 797は高台付皿である。底部から体部へ直線的にのび、平坦な皿に高台を付している。高台は外方へふんばるものである。796は口径12.0cm, 器高2.3cm, 高台高1.0cmを測る。色調は黄白色で、やはり横ナデ調整を施している。

坏(第100~103図, 798~878)

798~878は土師器の坏である。色調は黄灰色ないし淡赤褐色を呈し、胎土は黄灰色ないし淡赤褐色を呈し、胎土はよく精選され、わずかに砂粒を含む。

798~822は口径が10~15cmを測るもので、底部を欠損し体部のみであるが、体部のつくりがわかるものをまとめた。碗との区別は器高の浅いものを坏の中であつかった。798~800は体部の立ちあがり急で、斜め上方に直線的にのびるものである。801は体部が丸味をもち内湾しつつ立ちあがるものである。802~822は口縁部が外反するもので、803はナデ整形を行い、少し段状を呈している。806, 809, 810, 821は口縁部が外反するもので、体部は開き気味で直行する。822は淡赤褐色の色調を呈し、内外面とも丁寧なナデ調整を施し、体部に屈曲部がみられる。

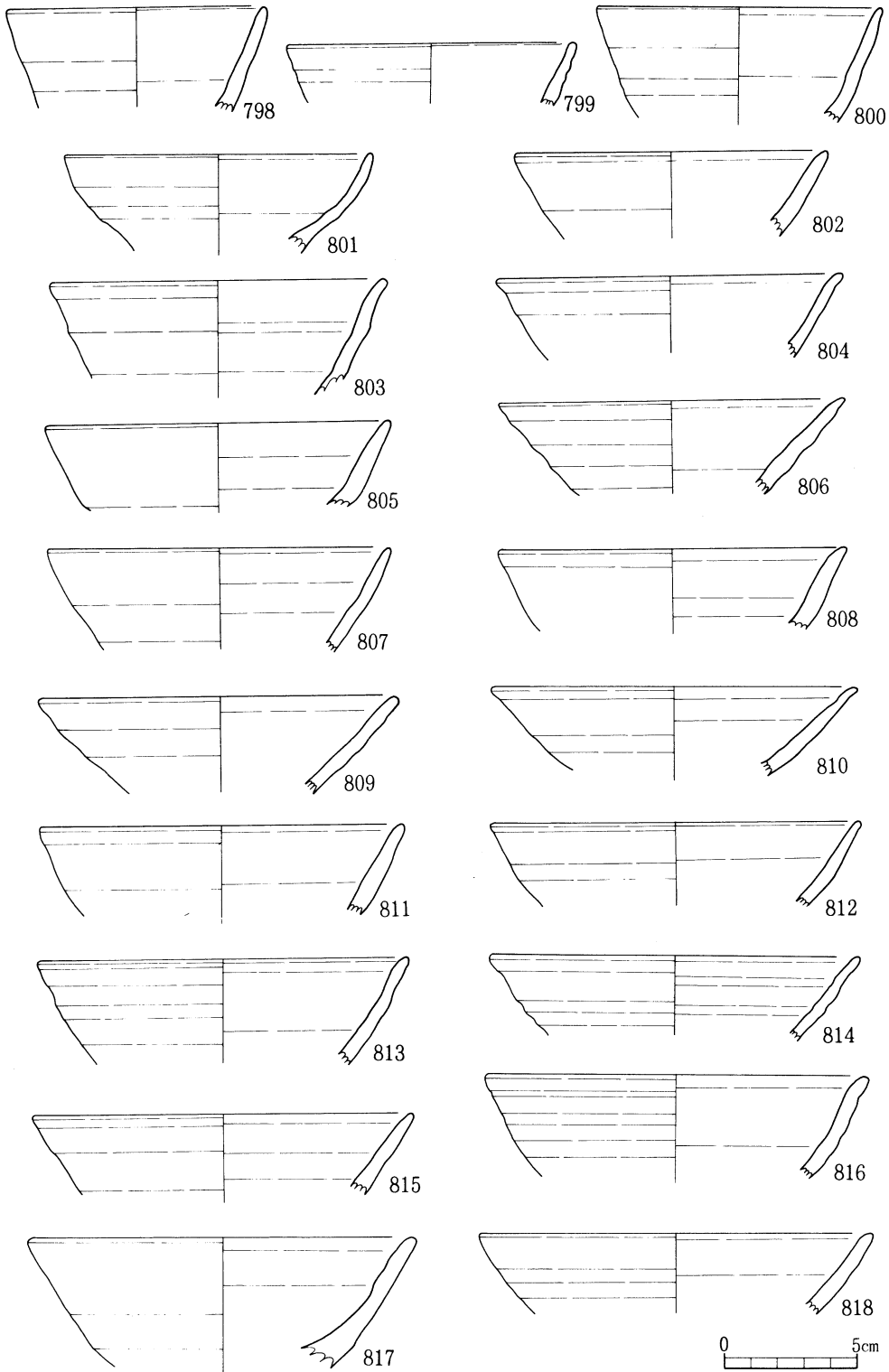


第99図 土師器(2) 皿

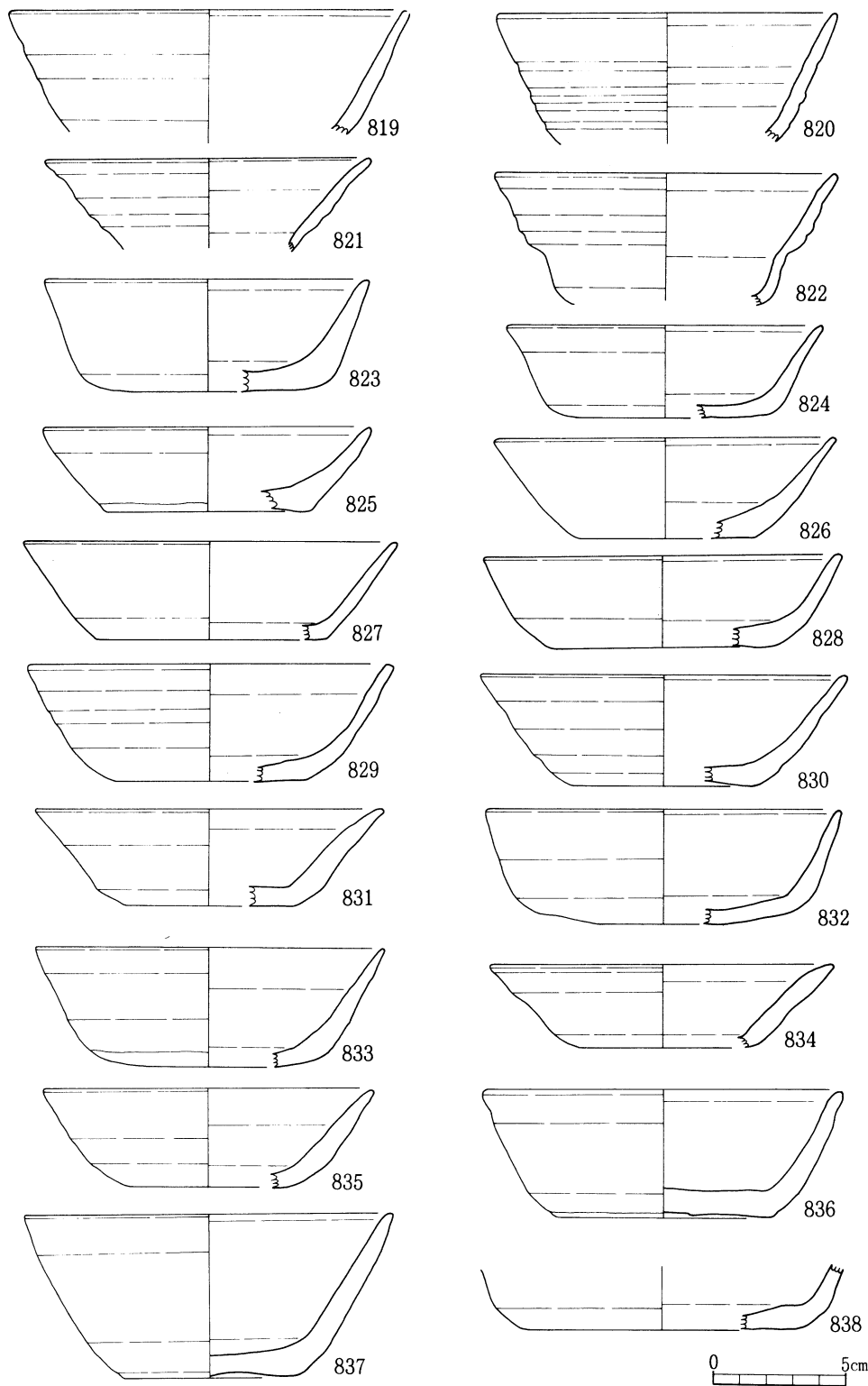
823~836は、口径12~14cm、底部径6.4~9.4cm、器高3~5cmの器高の浅い、体部と底部の境が丸く、体部の立ちあがり之急で口縁部は外反する坏である。底部は平底であり、底部外面はヘラ切り離しのあと比較的丁寧にナデ整形を施している。口縁端部は丸みをもつものと、尖り気味のものに分かれる。色調は淡赤褐色ないし黄灰色を呈し、精選された胎土である。832はヘラ切り離しのあとナデ仕上げをしたふくらみ気味の底部で、色調は淡褐色を呈し、焼成は粗である。

837はややあげ底で、口径14.0cm、底部径7.0cm、器高6.2cmを測る器高の高いもので、体部の立ちあがり之急で、斜め上方に直線的にのびるものである。

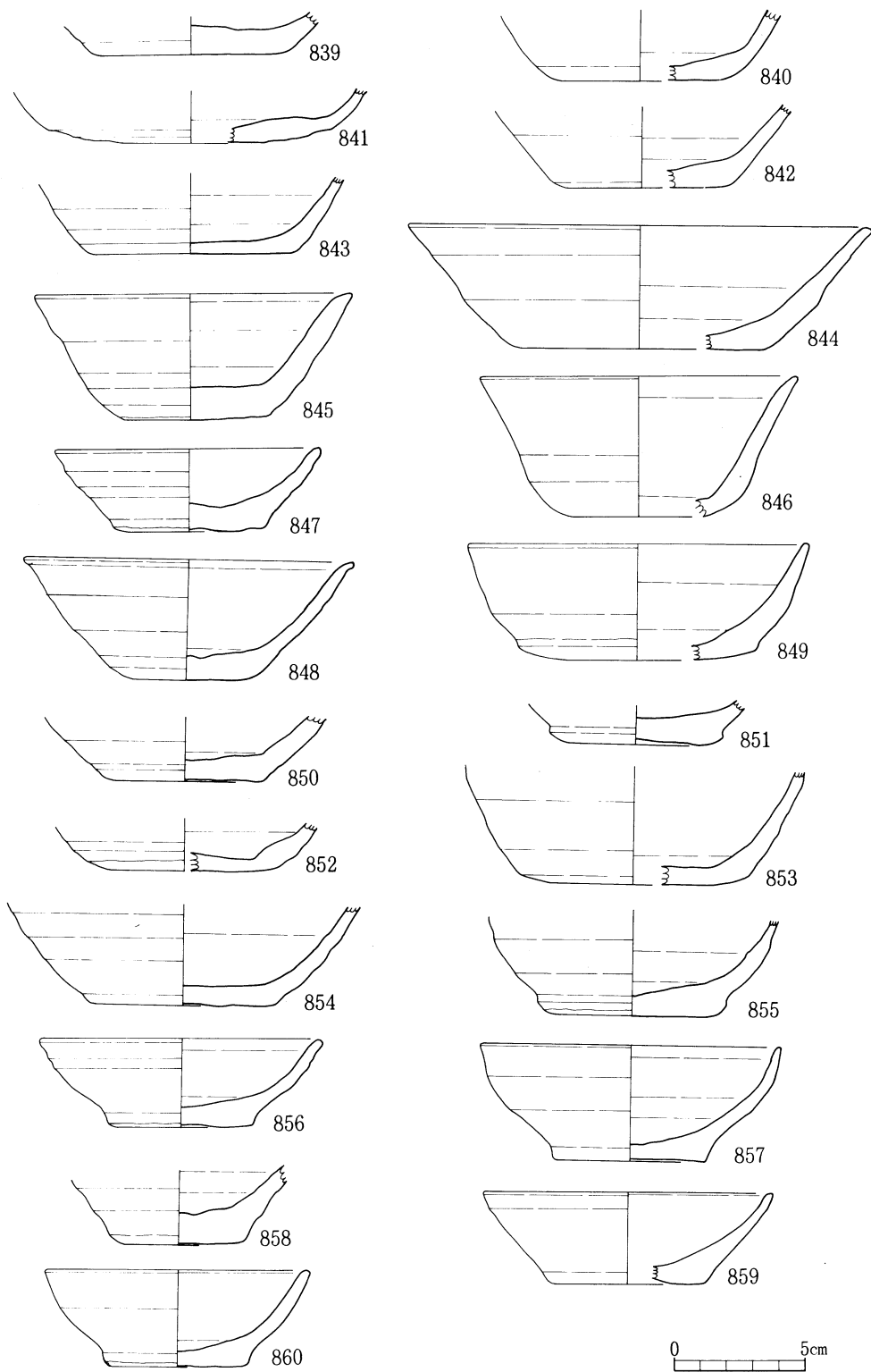
838・841は底径が10.0cm・9.6cmと底部が広いものである。844は口径17.6cm、底部径9.6cm、器高4.7cmを測る。表面観察を丁寧に行ったところ、外面に赤色顔料を塗り込めた朱色土器で



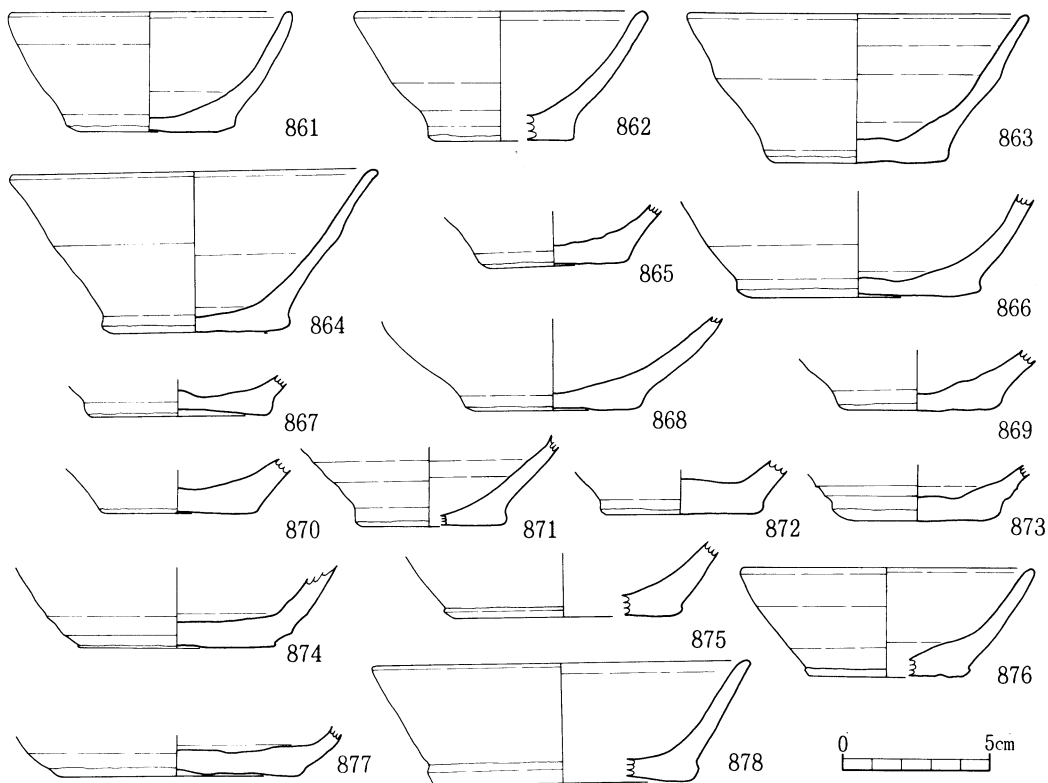
第100图 土師器(3) 坏



第101图 土師器(4) 坏



第102图 土師器(5) 坏



第103図 土師器(6) 坏

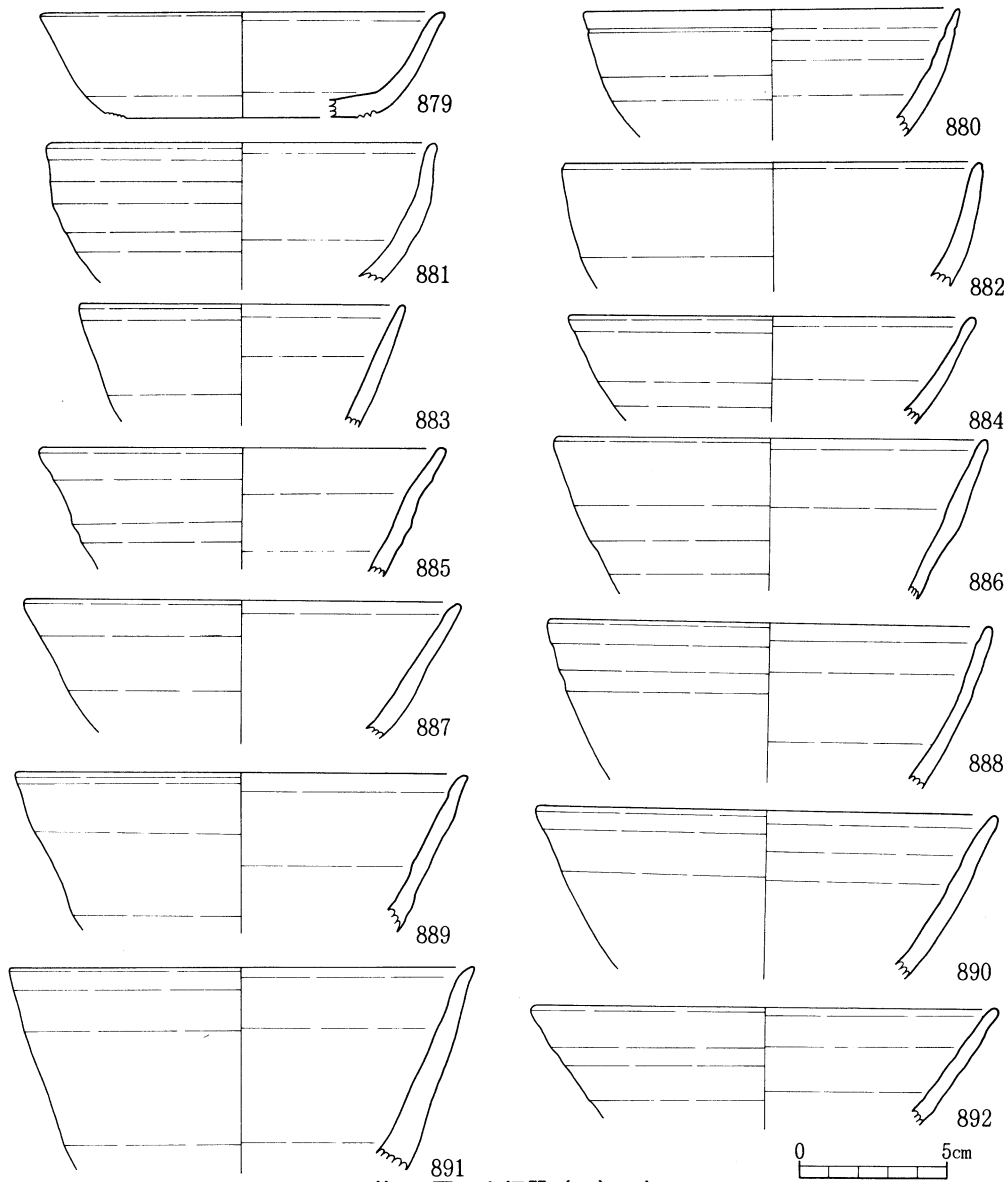
あることがわかった。ヘラ切り底である。

845～853は、平坦な底部から明瞭な稜をなして立ちあがる体部をもち、立ちあがりはやや急で斜め上方に直線的にのび、口縁部は外反するものである。847は底部付近に稜をもち、内面には煤が付着し、灯明として使用したと考えられる。849も底部付近に稜をもち、底部から内弯気味に開き、口縁部は外反する。色調は淡赤褐色を呈し、内外面とも丁寧なナデ整形を施している。854・855もヘラ切り底で、底部付近に稜をもつものである。

856～878は、口径5.0～6.5cm、底部径2.5～4.5cm、器高3.4～5.4cmを測る。底部にやや高さがあり、くびれ部を有しているもので、充実高台を呈している。856は内外面ともに煤が付着しているものである。淡赤褐色を呈し、精選された胎土で焼成も良好である。底部はヘラ切り底で切り離し後未調整である。内外面に赤色顔料塗布の痕跡がかすかに残っている。

857～862は平坦な底部から、体部が比較的浅く内弯気味に立ちあがるもので、口縁端部は丸みをおびるものと尖りぎみのものがある。

864はあげ底気味の底部から、明瞭な稜をなして立ちあがる体部をもち、立ちあがりはやや急で斜め上方に直線的にのび、口縁部は外反するものである。878はあげ底気味の底部をもつ器高の浅いものである。



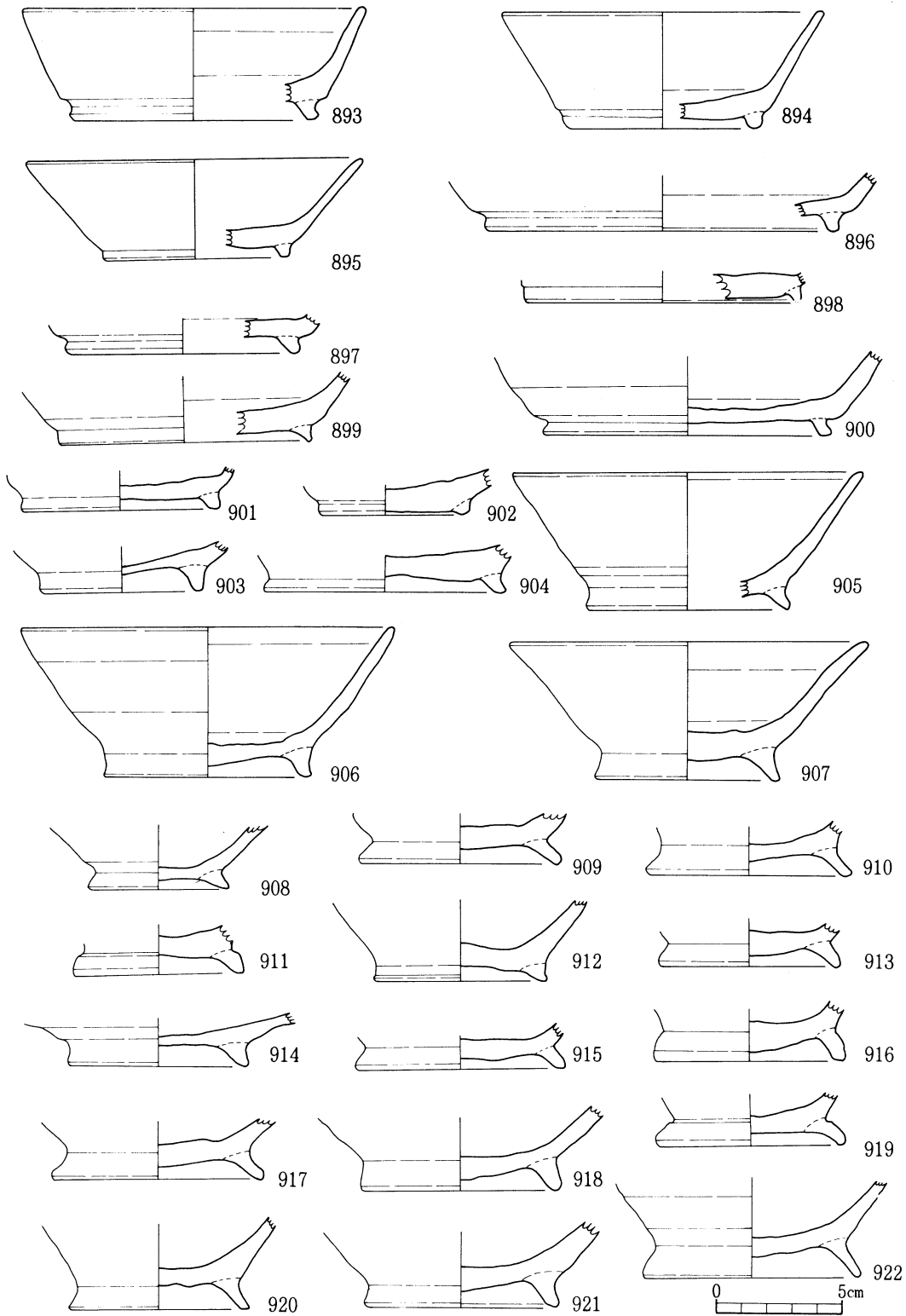
第104図 土師器(7) 碗

碗(第104~106図, 879~930)

879~930は土師器の碗である。色調は黄灰色ないし淡赤褐色を呈し、胎土はよく精錬されわずかに砂粒が含まれている。須恵器同様、高台を貼り付けてあるものを碗とした。器高は低くても貼り付け高台のあるもので、底部が欠損しているものについては、体部の器高の高いものを碗の中で見つかった。

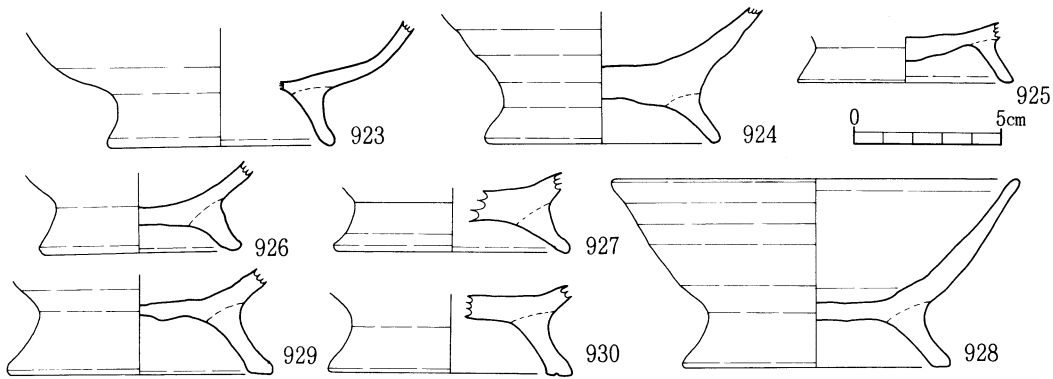
879~892は口径11~16cmを測るもので、底部が欠損し体部のみである。

879は貼り付け高台が欠損しているもので、器高は浅く、体部と底部の境が丸く、体部の立



第105図 土師器(8) 埴





第106図 土師器(9) 埴

ちあがり之急で外反するものである。

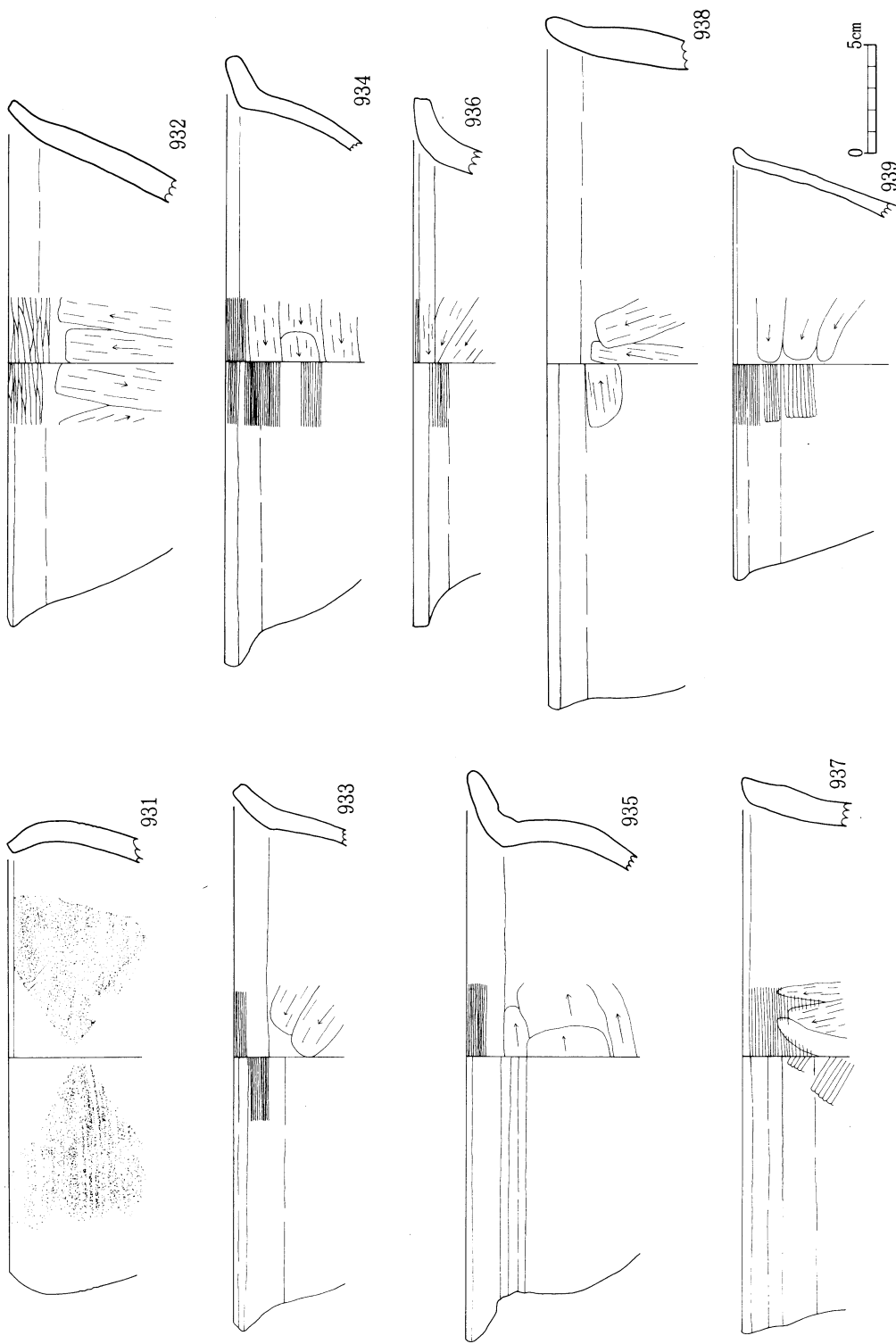
893~930は底部端より若干内側に高台高が低い高台を貼り付け、底部と体部の境に明瞭な稜をもつものである。893~895は底部から体部まであり、器形のわかるものである。斜め上方に直線的にのびる体部に特徴をもち、口縁端部は丸くおさめる。口縁部はやや外反気味である。906~928は碗の底部である。高台は外向し端部を丸くおさめるものが多い。906・907は斜め上方に直線的にのびる体部である。922~928は高台高が高いもので外向し端部を丸くおさめている。

鉢(第107図)

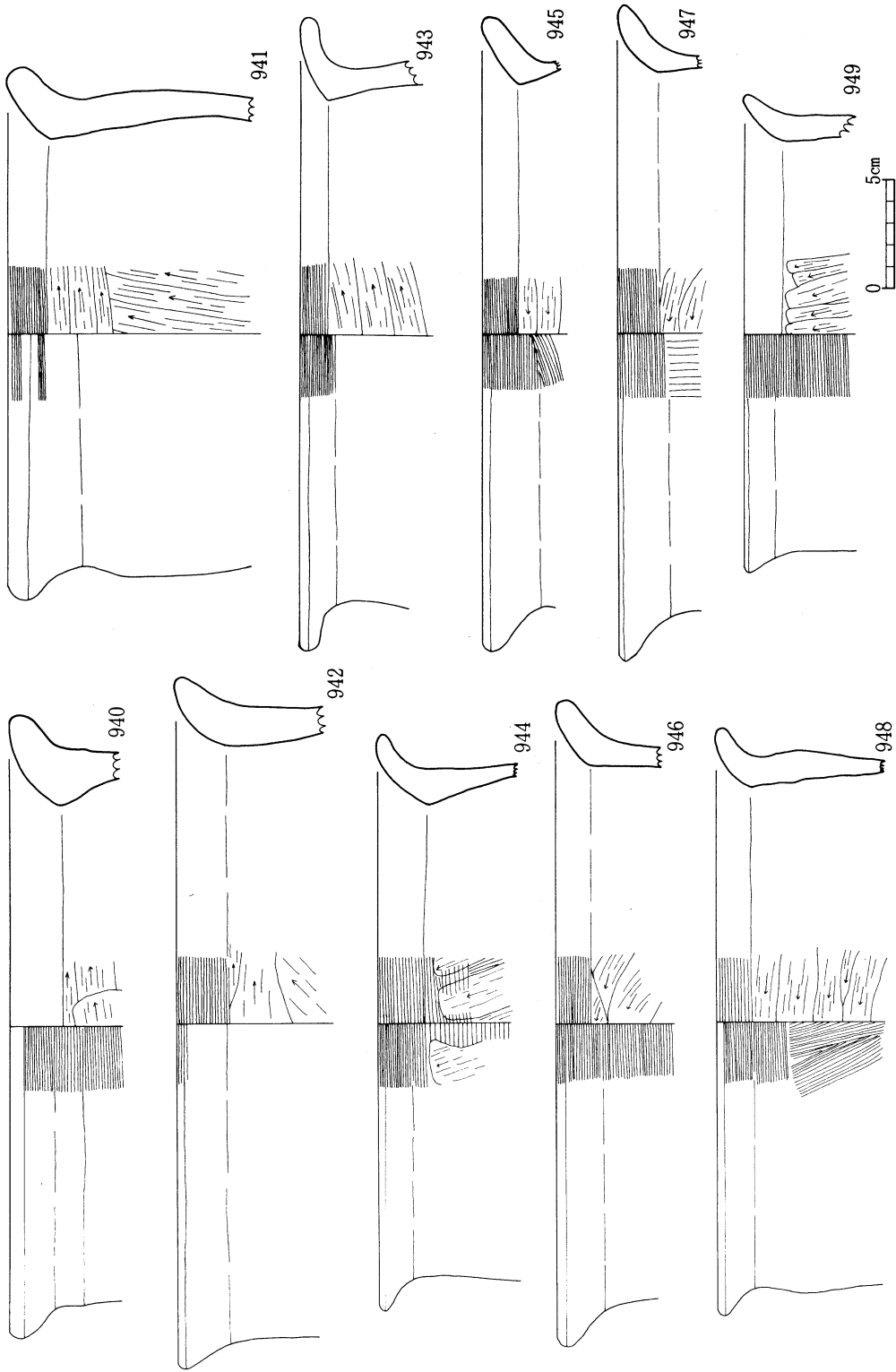
931は内弯する口縁部をもつ鉢で、口径16.2cmを測る。932~936は外反する口縁部をもつもので、20~24cmの口径を測る。外面はハケ目調整で、内面はヘラ削りである。内面に明瞭な稜をもつ。937・939は斜め上方に直線的にのびる体部をもつものである。

甕(第108~113図)

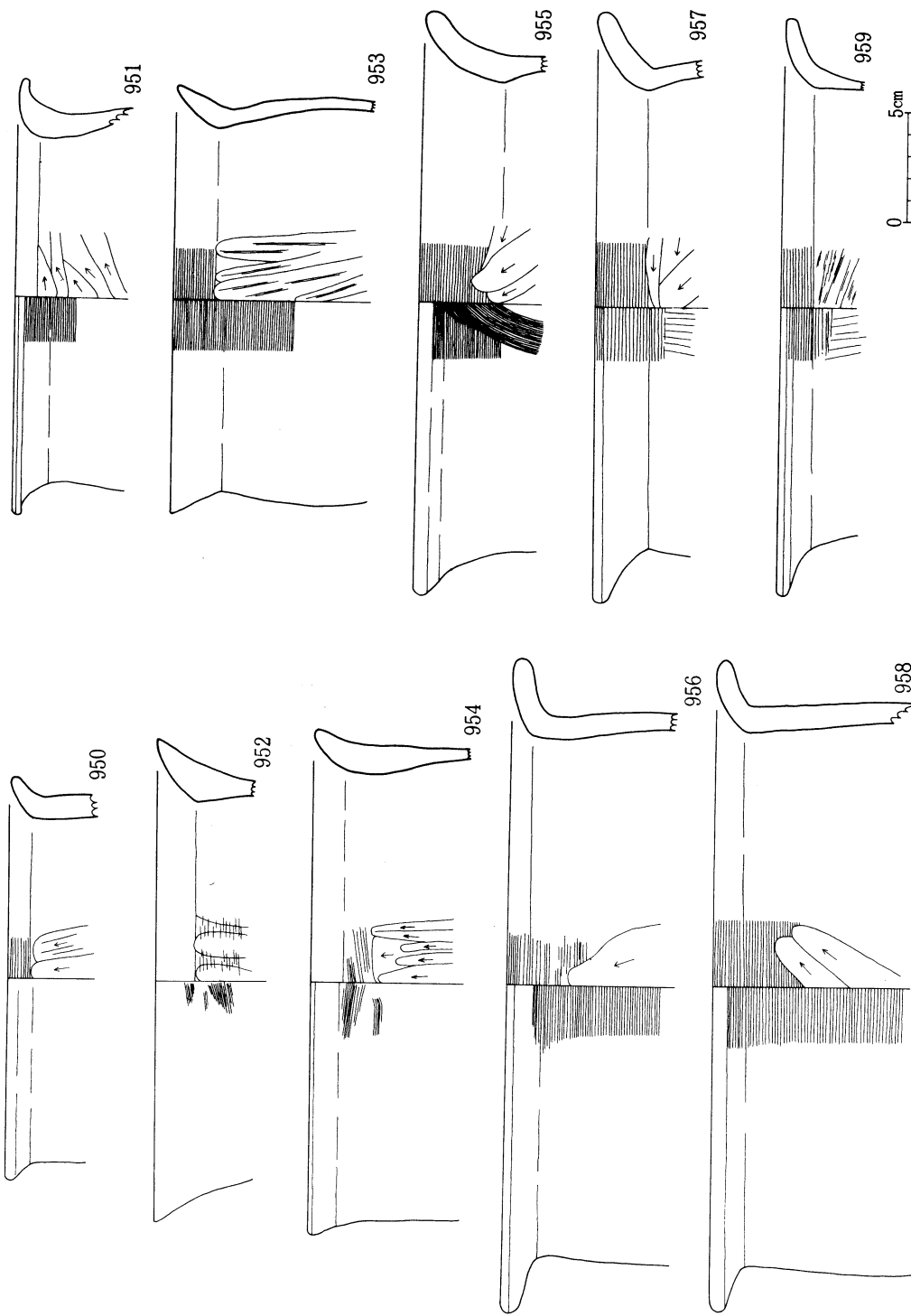
やや中膨らみの胴部をもち、外反する口縁部をもつもので、口径は15cm~25cmを測る。外面はハケ目調整で、内面はヘラ削りであるが口縁部付近には横位のハケ目調整が施されたものも多い。



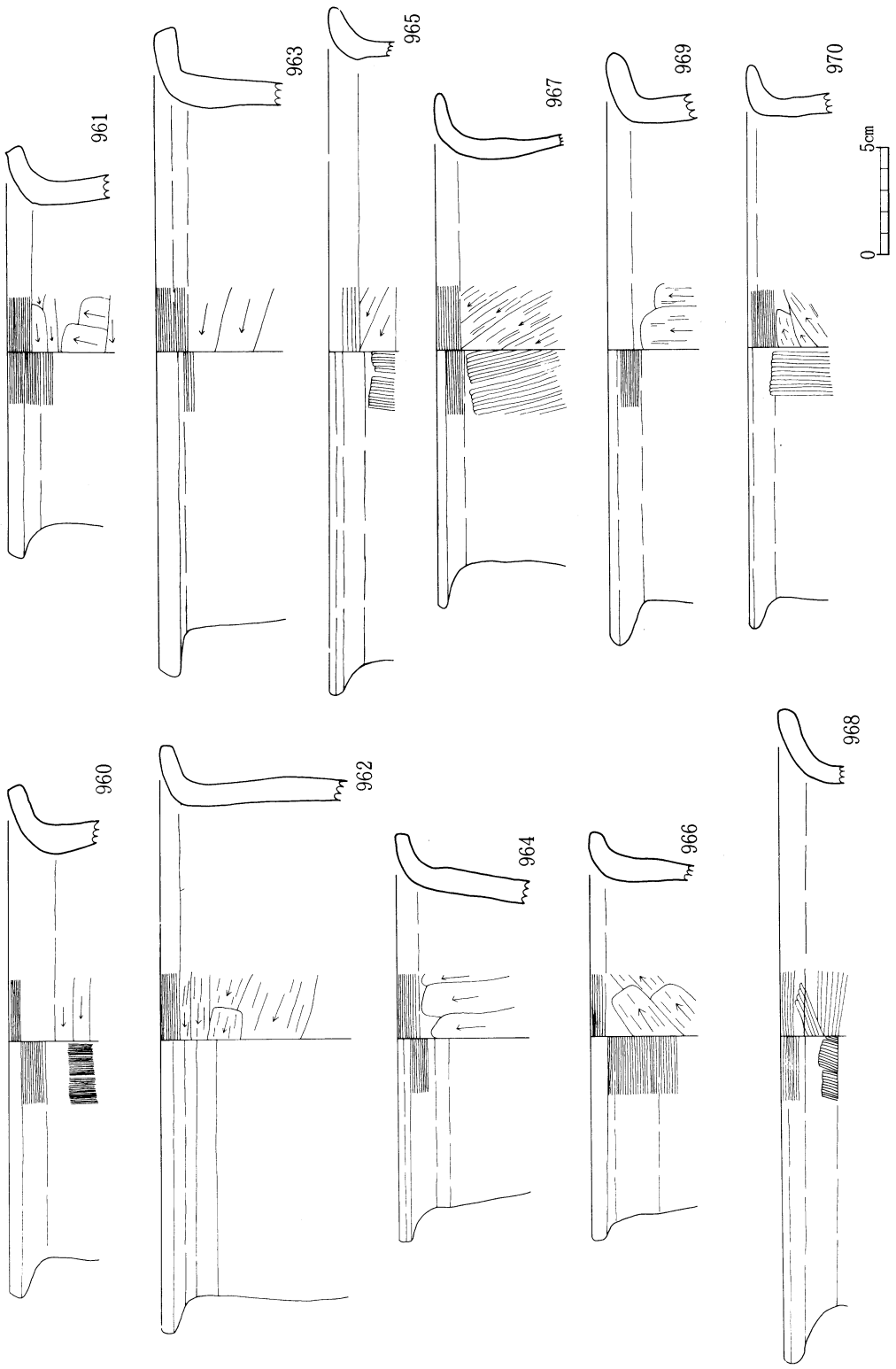
第107図 土師器 (10) 鉢



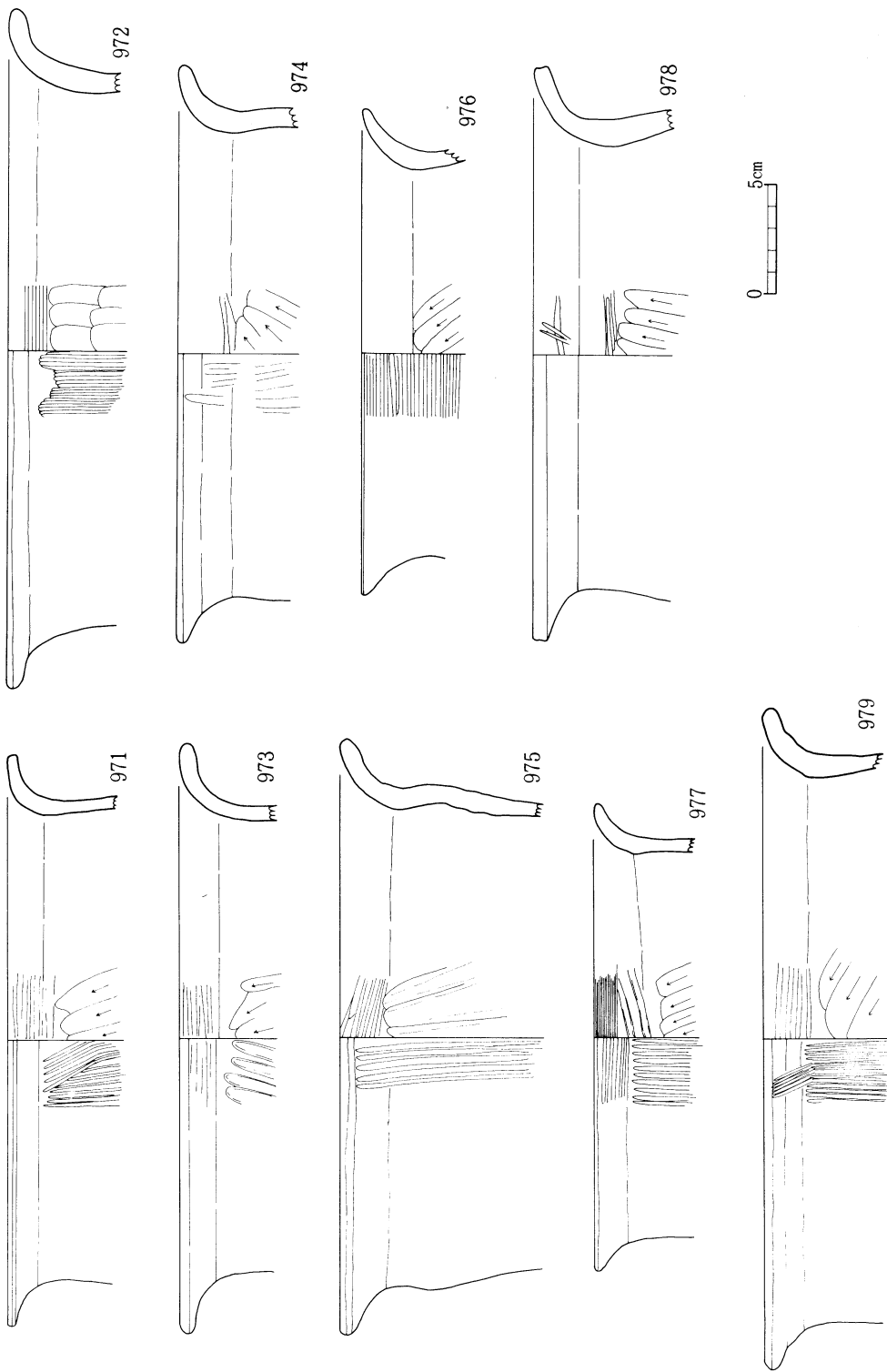
第108圖 土師器(11) 甕



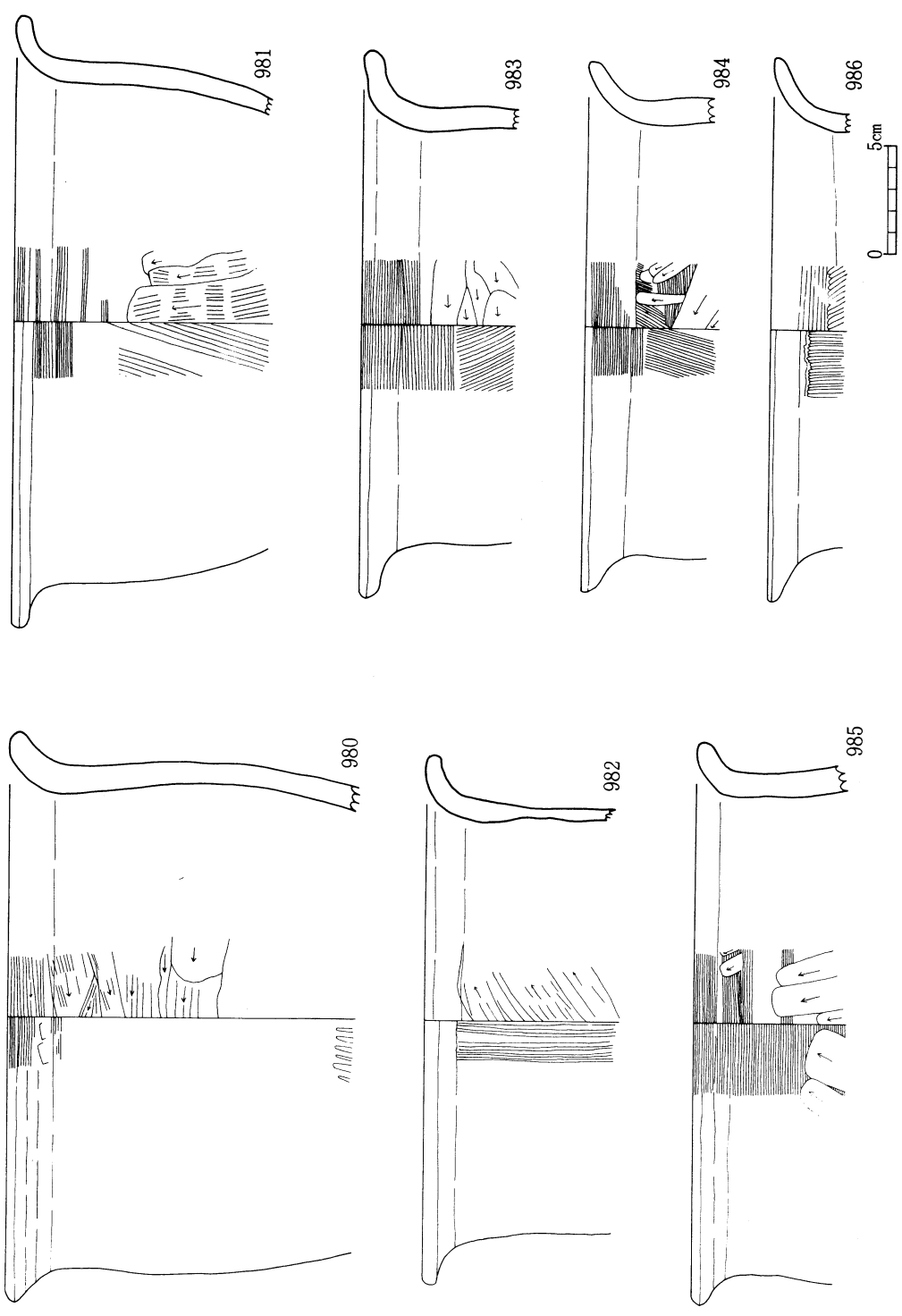
第109图 土師器 (12) 壺



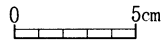
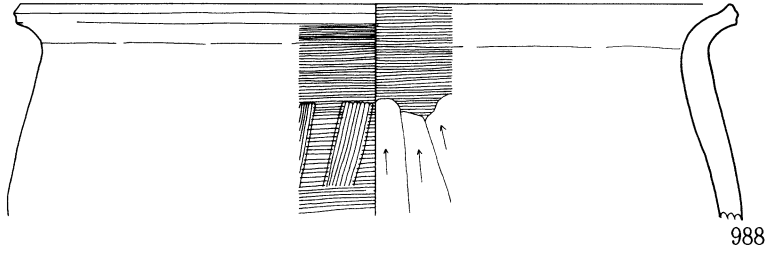
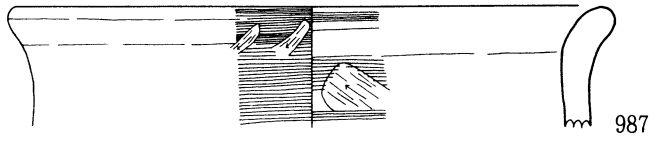
第110圖 土師器 (13) 羣



第111圖 土師器 (14) 壺

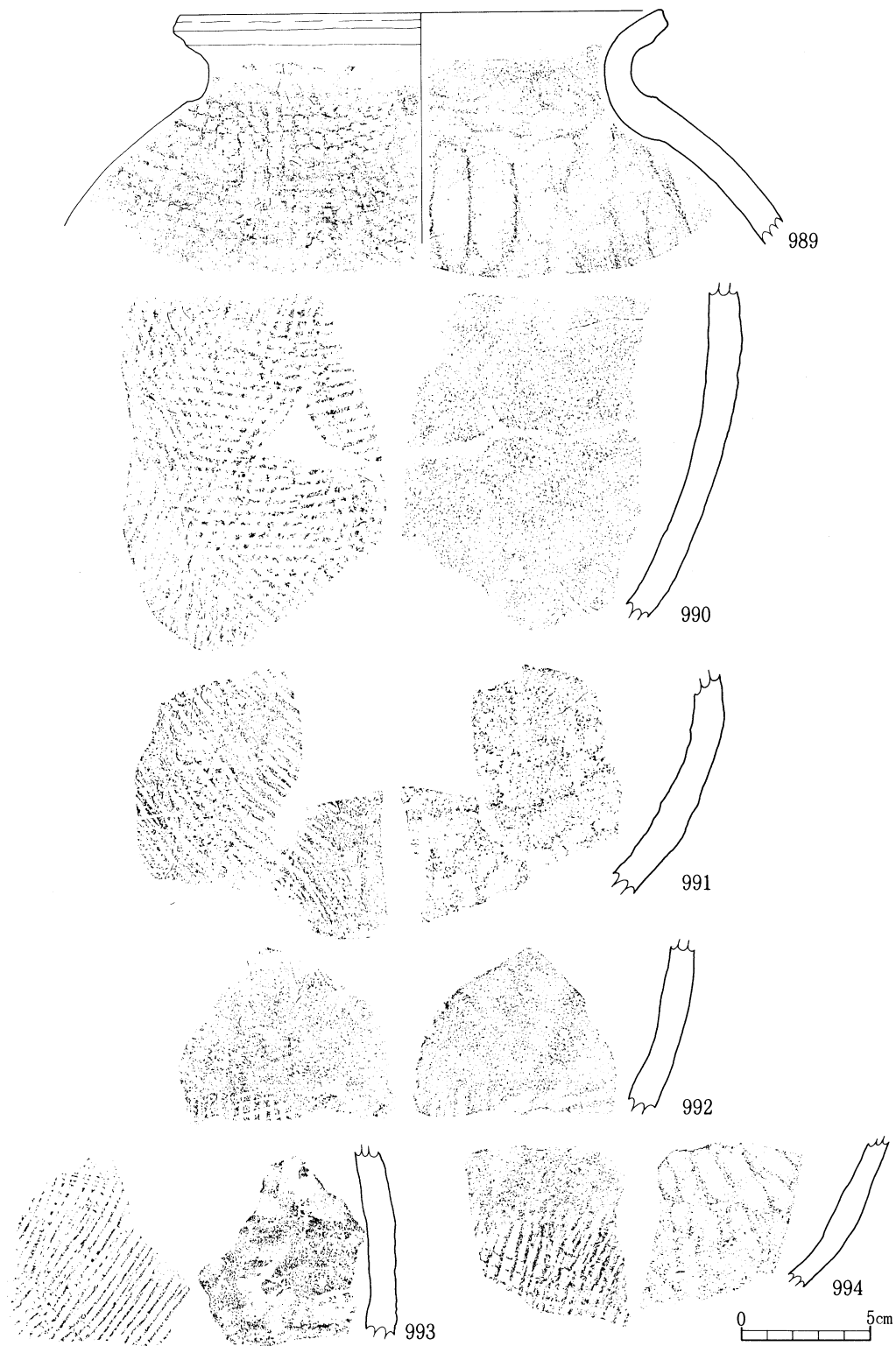


第112図 土師器 (15) 甕

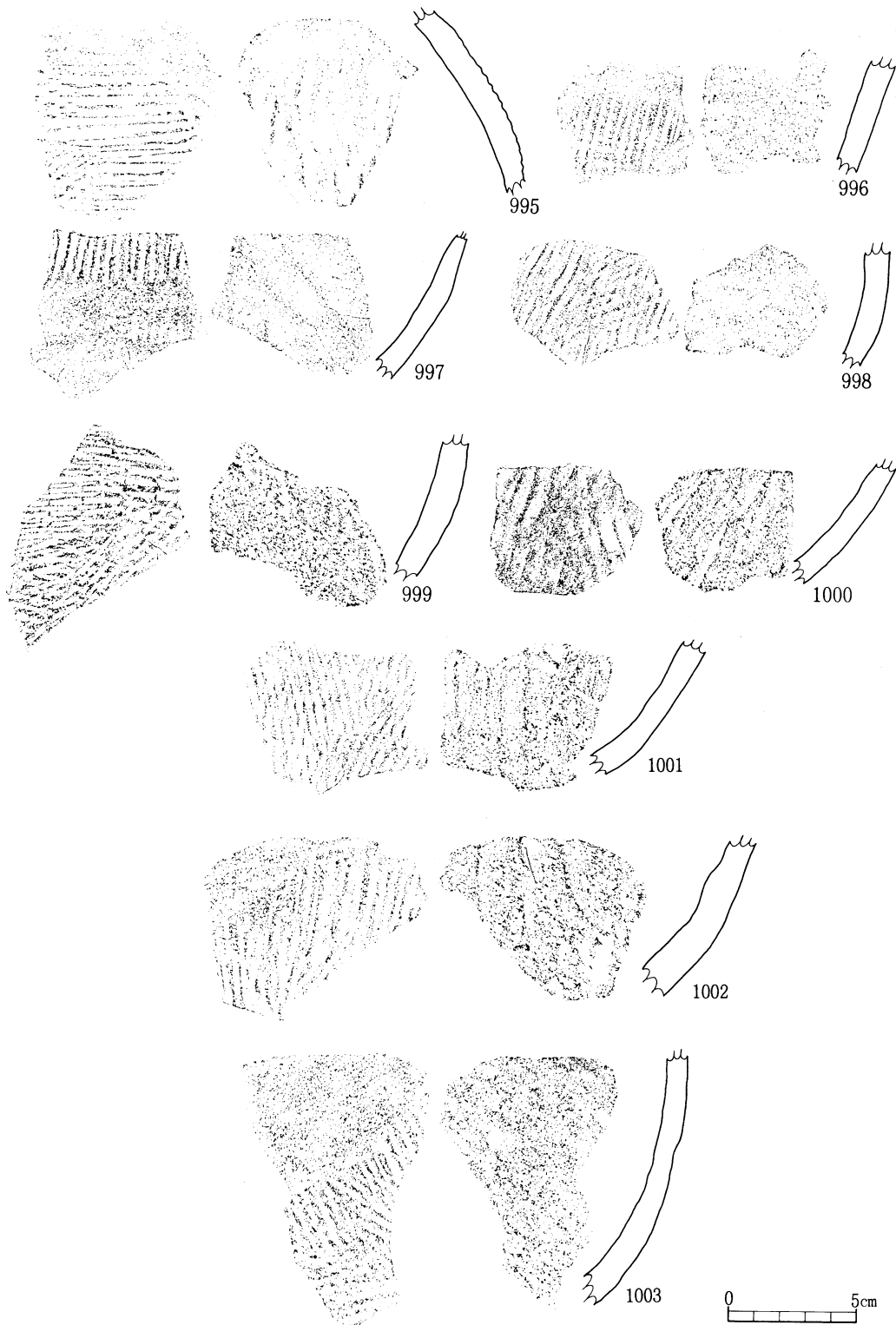


第113図 土師器 (16) 甕





第114図 土師器 (17) 甕



第115図 土師器(18) 甕

第26表 土師器一覽表(1)

番号	器種	出土区層	法量			備考
			口径	底径	器高	
756	坏蓋	F-13 Ib	16.8		3.0	
757	"	G-12 Ib	12.2			
758	"	F-16 Ib	12.8			
759	"	F-6 Ib	16.0			
760	"	F-10 Ib	13.0			
761	"	I	16.0			
762	"	G-12 Ib	16.8			
763	"	G-9 Ib	16.8			
764	"	F-8 I	12.5			
765	"	F-10 Ib	16.0			
766	"	F-13 Ib	18.0			
767	"	F-11 Ib	15.9			
768	"	F-12 Ib	13.0			
769	"	F-12 Ib	17.0			
770	"	F-14 Ib	17.8			
771	"	F-12 Ib	16.2			
772	皿	F-14 Ib	6.4	5.6	1.15	
773	"	G-9 Ib	7.6	7.0	1.2	
774	"	F-6 表	7.5	6.4	0.8	
775	"		8.6	7.4	1.1	
776	"	E-18 Ia	10.0	8.0	1.15	
777	"	F-15 Ib	8.8	6.6	1.7	
778	"	F-18	11.4	7.4	2.57	
779	"	F-16 Ib	13.6	11.0	1.95	
780	"	F-8 I	15.0	12.6	2.3	
781	"	F-13 Ib	17.0	13.0	2.4	
782	"	F-12 Ib	14.4	11.4	2.0	
783	"	F-13 Ib	13.6	11.6	2.6	
784	"	F-12 Ib	13.0	10.0	3.2	
785	"	F-8 I	9.4	6.4	2.3	
786	"	F-6 II	8.1	5.6	2.6	
787	"	F-8 Ib	9.0	6.8	2.2	
788	"	G-8 I	8.2	7.2	1.5	
789	"	E-16 Ib	10.0	7.2	2.0	
790	"	F-13 Ib	8.8	6.8	2.7	
791	"	F-15 Ib	12.8	10.0	3.2	
792	"	F-10 Ib	16.0	12.6	4.2	
793	"	F-15 Ib	11.2	6.0	2.2	
794	"	F-15 Ib	12.6	10.4	2.9	
795	"	G-12 Ib	12.4	11.0	1.2	
796	台付皿	E-8 Ib	12.0	6.4	3.8	
797	"	F-10 Ib	13.0	8.4	3.7	
798	坏	G-6 I	9.8			
799	"	G-6 Ib	10.8			
800	"	G-7 Ib	10.8			
801	"	F-6 I	11.6			
802	"	F-10 Ib	11.8			
803	"	G-8 I	12.8			
804	"	F-7 I	13.0			
805	"		13.0			

番号	器種	出土区層	法量			備考
			口径	底径	器高	
806	坏	F-13 Ib	13.0			
807	"	F-8 I	13.0			
808	"	F-13 Ib	13.2			
809	"	F-15 Ib	13.6			
810	"	G-9 Ib	13.8			
811	"	E-17 Ib	13.8			
812	"	E-8 Ib	14.0			
813	"	F-8 I	14.0			
814	"	E-15 Ib	14.0			
815	"	F-7 I	14.4			
816	"	G-6 Ib	14.4			
817	"	F-14 Ib	14.6			
818	"	G-8 Ib	14.8			
819	"	F-10 Ib	15.2			
820	"	E-8 Ib	12.8			
821	"	G-9 Ib	12.4			
822	"	F-10 Ib	15.0			
823	"	F-10 Ib	12.2	6.4	4.2	
824	"	F-13 Ib	12.0	8.0	3.5	
825	"	F-7 Ib	12.4	8.0	3.2	
826	"	F-13 Ib	13.0	6.8	3.8	
827	"	F-14 Ib	14.1	8.7	3.7	
828	"	G-13 Ib	13.5	8.6	3.5	
829	"	F-17 Ib	7.0	7.2	4.4	
830	"	G-8 I	13.9	7.0	4.2	
831	"	F-8 I	13.2	6.4	3.7	
832	"	F-13 Ib	13.4	9.4	4.3	
833	"	F-8 I	13.6	8.0	4.5	
834	"	G-8 I	13.0	6.6	3.0	
835	"	F-8 I	12.4	6.4	3.7	
836	"	F-15 Ib	13.6	8.4	4.8	
837	"	G-8 Ib	14.0	7.0	6.2	
838	"	F-12 Ib		10.0		
839	"	F-12 Ib		7.2		
840	"	F-16 Ib		9.6		
841	"	F-8 I		6.6		
842	"	F-13 Ib		8.8		
843	"	F-8 I		8.0		
844	"	F-13 Ib	17.6	9.6	4.7	
845	"	F-8 Ib	12.4	6.0	4.8	
846	"	F-9 Ib	12.0	5.0	5.3	
847	"	F-6 I	10.1	5.8	3.1	
848	"	E-8 Ib	12.6	5.0	4.6	
849	"	F-10 Ib	13.0	8.5	4.4	
850	"	E-8 I		7.0		
851	"	E-16 Ia		5.6		
852	"	F-6 I		6.0		
853	"	F-8 I		8.8		
854	"	E-14 Ib		7.2		
855	"	F-16 Ib		6.5		

第27表 土師器一覽表(2)

番号	器種	出土区層	法量			備考
			口径	底径	器高	
856	坏	G-7 I	10.8	5.4	3.4	
857	"	F-8 I	11.4	5.8	4.4	
858	"	F-6 I		5.0		
859	"	F-6 I	11.0	6.0	3.5	
860	"		10.0	5.4	3.7	
861	"	F-12 Ib	9.7	5.7	4.1	
862	"	G-6 Ib	10.0	5.0	4.4	
863	"	F-6	11.6	6.2	5.0	
864	"	F-6 I	12.4	6.4	5.4	
865	"	G-6 Ib		5.0		
866	"	F-10 Ib		8.2		
867	"	F-10 Ib		6.4		
868	"	F-9 匱		6.0		
869	"	G-6 Ib		5.4		
870	"	G-6 IF		5.2		
871	"	F-6 I		5.2		
872	"	F-9 Ib		5.6		
873	"	G-6 Ib		4.4		
874	"	G-7 I		6.8		
875	"	F-10 Ib		7.6		
876	"	G-6 Ib	10.0	5.6	3.7	
877	"	F-8 素		8.2		
878	"	F-11 Ib	12.8	8.6	4.0	
879	竈	F-13 Ib	13.8			
880	"	F-10 Ib	12.7			
881	"	F-5	13.3			
882	"	F-13 Ib	14.2			
883	"	F-9 Ib	11.0			
884	"	F-6 I	13.7			
885	"	G-8 I	13.7			
886	"	F-7 I	14.5			
887	"	E-8 Ib	14.8			
888	"	G-6 Ib	15.1			
889	"	E-8	15.2			
890	"	F-8 I	15.6			
891	"	F-14 Ib	15.8			
892	"	E-8 Ib	15.8			
893	"	F-12 Ib	13.8	9.6	4.4	
894	"	F-12 Ib	12.8	7.8	4.6	
895	"	F-12 Ib	13.6	7.6	4.0	
896	"	F-11 Ib		15.8		
897	"	F-14		9.4		
898	"	F-13 Ib		10.8		
899	"	F-16 Ia		10.0		
900	"	F-12 匱		11.4		
901	"	F-11 Ib		8.0		
902	"	E-14 Ib		6.0		
903	"	F-10 Ib		6.6		
904	"	F-13 Ib		9.6		
905	"	F-10 Ib	14.0	8.0	5.5	

番号	器種	出土区層	法量			備考
			口径	底径	器高	
906	竈	E-8 Ib	15.0	8.2	5.9	
907	"	F-13 Ib	14.4	7.2	5.5	
908	"	F-17 Ib		5.6		
909	"	E-17 Ib		8.0		
910	"	G-9 Ia		8.0		
911	"	F-9 Ib		5.2		
912	"	F-15 I		7.8		
913	"	G-7 Ib		7.2		
914	"	F-12 Ib		7.2		
915	"	F-13 Ib		8.4		
916	"	F-15 Ib		7.4		
917	"	G-12 Ib		8.4		
918	"	F-14 Ib		8.0		
919	"	G-6 I		7.6		
920	"	F-14 I		7.2		
921	"	F-13 Ib		7.8		
922	"			8.6		
923	"	F-14 Ib		7.8		
924	"	F-6 Ib		8.0		
925	"	G-9 Ib		7.4		
926	"	F-9 Ib		6.8		
927	"	G-6 Ib		8.0		
928	"	F-7 I	14.0	9.0	6.4	
929	"	G-6 Ib		9.0		
930	"	F-10 匱		8.4		
931	鉢	F-10 Ib	19.8			
932	"	F-12 Ib	24.3			
933	"	E-15 Ib	25.2			
934	"	F-9 Ib	28.2			
935	"	F-11 Ib	26.4			
936	"	F-12 Ib	24.2			
937	"	F-9 Ib	25.6			
938	"	E-8 Ia	32.0			
939	"	G-9 Ib	20.0			
940	甕	G-9 Ib	28.6			
941	"	E-8 Ib	24.5			
942	"	F-16 Ib	31.8			
943	"	F-9 Ib	29.1			
944	"	F-9 Ib	26.5			
945	"	F-13 Ib	29.1			
946	"	G-8 I	29.8			
947	"		30.2			
948	"	E-15 Ib	27.1			
949	"	F-11 Ib	22.0			
950	"	F-10 Ib	18.4			
951	"	F-11 I	19.9			
952	"	F-5 IF	20.1			
953	"	F-12 Ib	19.5			
954	"	F-11 I	23.0			
955	"	F-13 Ib	26.6			

第28表 土師器一覽表 ( 3 )

番号	器種	出土区層	法 量			備 考	番号	器種	出土区層	法 量			備 考
			口径	底径	器高					口径	底径	器高	
956	甕	F-11 lb	30.0										
957	"	F-13 lb	27.0										
958	"	G-7 I	29.7										
959	"	F-8 I	26.9										
960	"	F-10 lb	23.8										
961	"		19.2										
962	"	F-14 lb	27.3										
963	"	G-9 lb	30.3										
964	"	E-8 lb	19.0										
965	"	F-13 lb	32.1										
966	"	F-14 lb	19.0										
967	"	F-8 I	23.9										
968	"	F-13	30.5										
969	"	F-11 lb	27.6										
970	"	F-11 lb	26.3										
971	"	F-9 lb	25.9										
972	"	F-11 lb	30.7										
973	"	F-11 lb	26.7										
974	"	F-8 lb	36.2										
975	"	F-8 I	27.0										
976	"	F-9 lb	22.0										
977	"	G-8 I	21.1										
978	"	F-14 lb	25.9										
979	"	F-13 lb	30.0										
980	"	G-6 I	26.2										
981	"	F-12 lb	28.2										
982	"	F-10 lb	24.3										
983	"	G-7 lb	25.0										
984	"	E-8 lb	24.4										
985	"	F-17 lb	26.0										
986	"	F-13 lb	25.0										
987	"	G-6 I	25.0										
988	"	F-13 lb	29.9										
989	"		18.8										
990	"	G-6 lb											
991	"	E-8 lb											
992	"	F-9 lb											
993	"	E-8 lb											
994	"	G-7I											
995	"	E-8 la											
996	"	F-15 lb											
997	"	F-9 lb											
998	"	E-16 lb											
999	"	G-9 lb											
1000	"	G-9 lb											
1001	"	F-14 lb											
1002	"	F-14 lb											
1003	"	G-5 lb											

## 黒色土器（第118～120図）

黒色土器として一括して取りあげたが、内面のみ黒く研磨したもの、内面・外面とも赤く研磨したもの、内面のみ赤く研磨したものがある。内面・外面とも黒く研磨したものは出土しなかった。器形としては、皿、坏蓋、坏身、碗、鉢などの小型品のみである。

1010～1031は内黒土師器である。1010は口径18.0cm、底径12.0cm、器高2.0cm、の大型の皿で、体部と底部の境に丸みをもち、体部の立ちあがりはなめらかで、口縁部端を丸くおさめている。器面をヘラ磨きし、内面を黒色に燻したもので光沢をもつ。1011・1012は坏で、体部の立ちあがりは急で斜め上方に直線的にのびるものである。口縁部端は丸みをもつ。1013～1026は体部のみの碗である。坏と碗の区別は、器高の浅いものを坏にいった。また、高台を貼りつけてあるものは全て碗で取り扱った。1013～1016は体部の立ちあがりは急で斜め上方に直線的にのびるもので、口縁部端はまるみをもつもの、尖りぎみのものがある。1016は口縁部が外反する。1017～1026は体部が丸みをもち内湾しつつ立ち上がるもので、口縁部は外反するものもある。口縁部端は丸みをもつもの、尖りぎみのものがある。1018・1021の内面は縦方向のヘラ磨きを行い、口縁部付近は横方向のヘラ磨きで光沢をもっている。1027～1031は碗の底部である。高台は外向し端部は丸くおさめている。

1032～1079は内朱土師器である。内面・外面とも赤色顔料を塗り込めたもの（1032・1033・1041・1044・1051）と、いわゆる内朱土師器の内面だけに赤色顔料を塗り込めたものがある。

1032・1033は土師器坏蓋で、平坦な天井部をもつもので、口縁部はやや外反する。剥脱しているが天井部に7.5、8.0cmを測る大型の輪状つまみが付されていたと思われる。1034・1035は坏身である。体部の、立ちあがりが急で斜め上方に直線的にのび、口縁部は尖り気味である。1034は外面の口縁部端部に約5cmの赤色顔料を塗り込んでいる。1036・1047は体部が立ちあがりが斜め上方に直線的にのびる土師器碗である。口縁部は丸みをもつものである。口径は、13.4cm～17.3cmを測る。1036・1040は外面の下方に稜をもつものである。1040は外面の口縁は上方に約5cm幅の赤色顔料を塗り、また一部には赤色顔料が垂れている状態がみられる。内面はていねいなヘラ磨きで光沢がみられる。1041は内・外面とも赤色顔料が塗られ、また、内・外面とも稜をもつ。1043は、外面上方と下方に明瞭な稜をもつもので、外面にはわずかであるが赤色顔料がみられる。1044は内外面とも赤色顔料を施すもので、体部は斜め上方に直線的にのび、口縁部は丸みをおびる。1045・1046はやはり斜め上方に直線的にのびる体部をもち、口縁部は丸みをもつもので、外面に明瞭な稜をもつ。1048～1050は体部が丸みをもち内湾しつつ立ち上がるもので、口縁部は外反するものである。1048は口縁部が丸く、内面にはヘラ磨き痕がみられ光沢をもつ。口唇部から外面の口縁部まで赤色がみられる。

1051～1078は碗の底部である。高台は外向し端部を丸くおさめているものが多い。1051は、底部・高台・体部下方にだけ赤色顔料を塗ったもので、碗内面は黄灰色を呈し、胎土に細砂粒

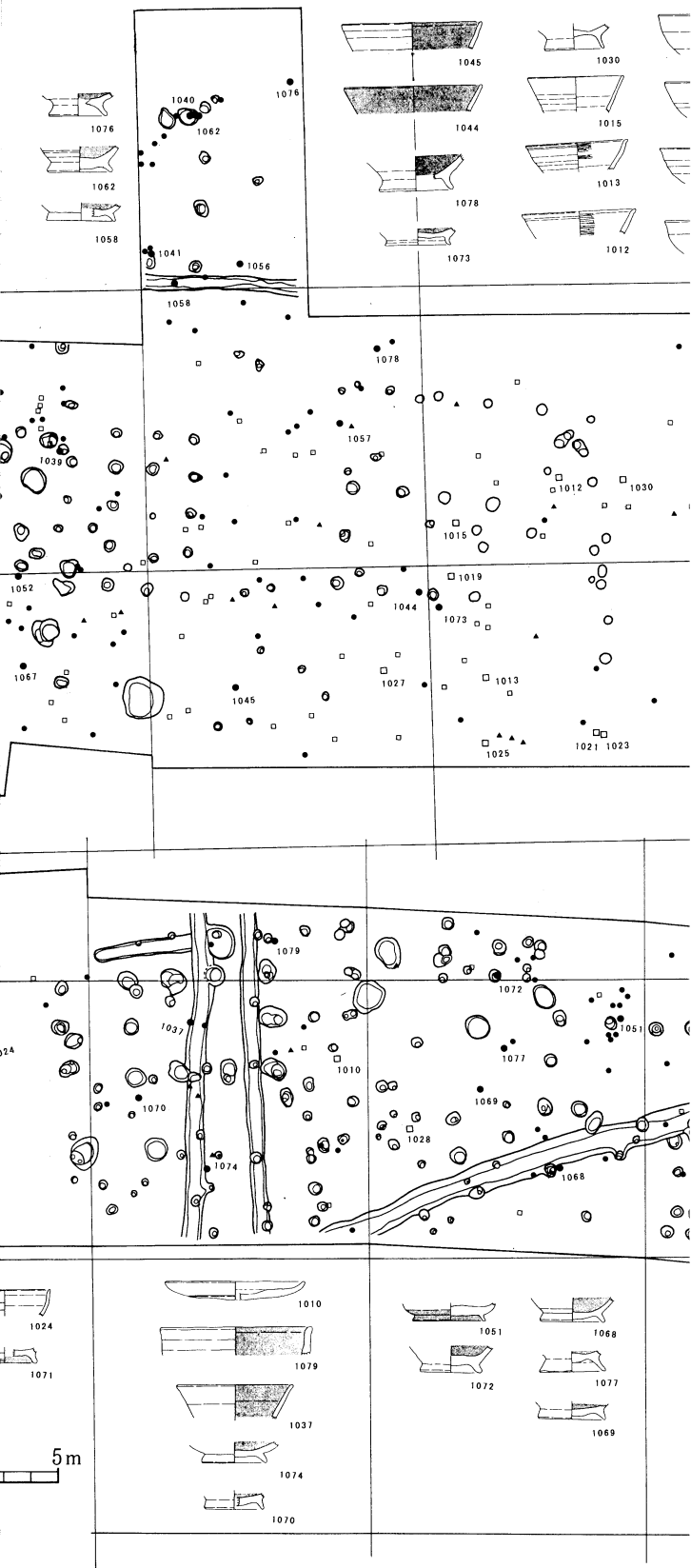


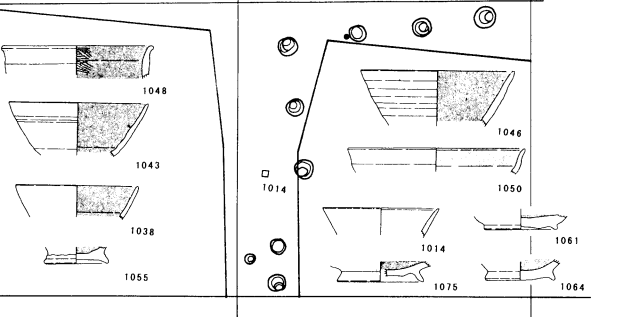
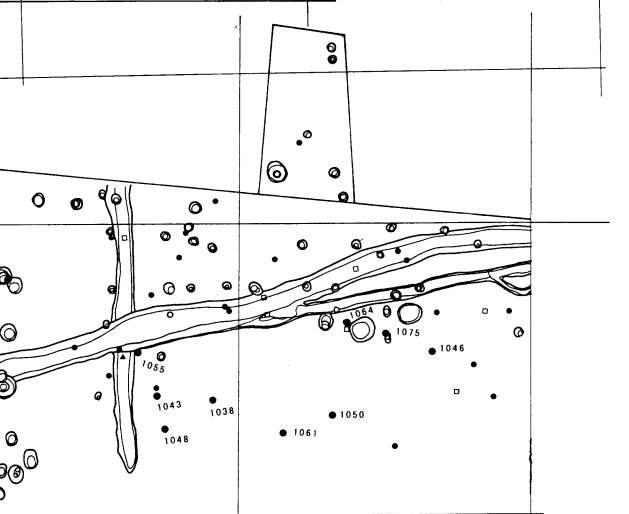
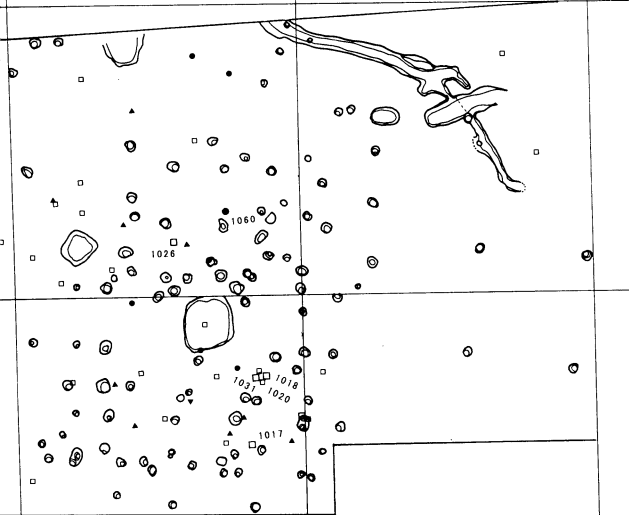
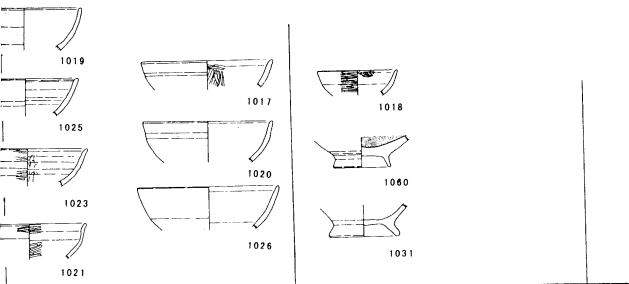


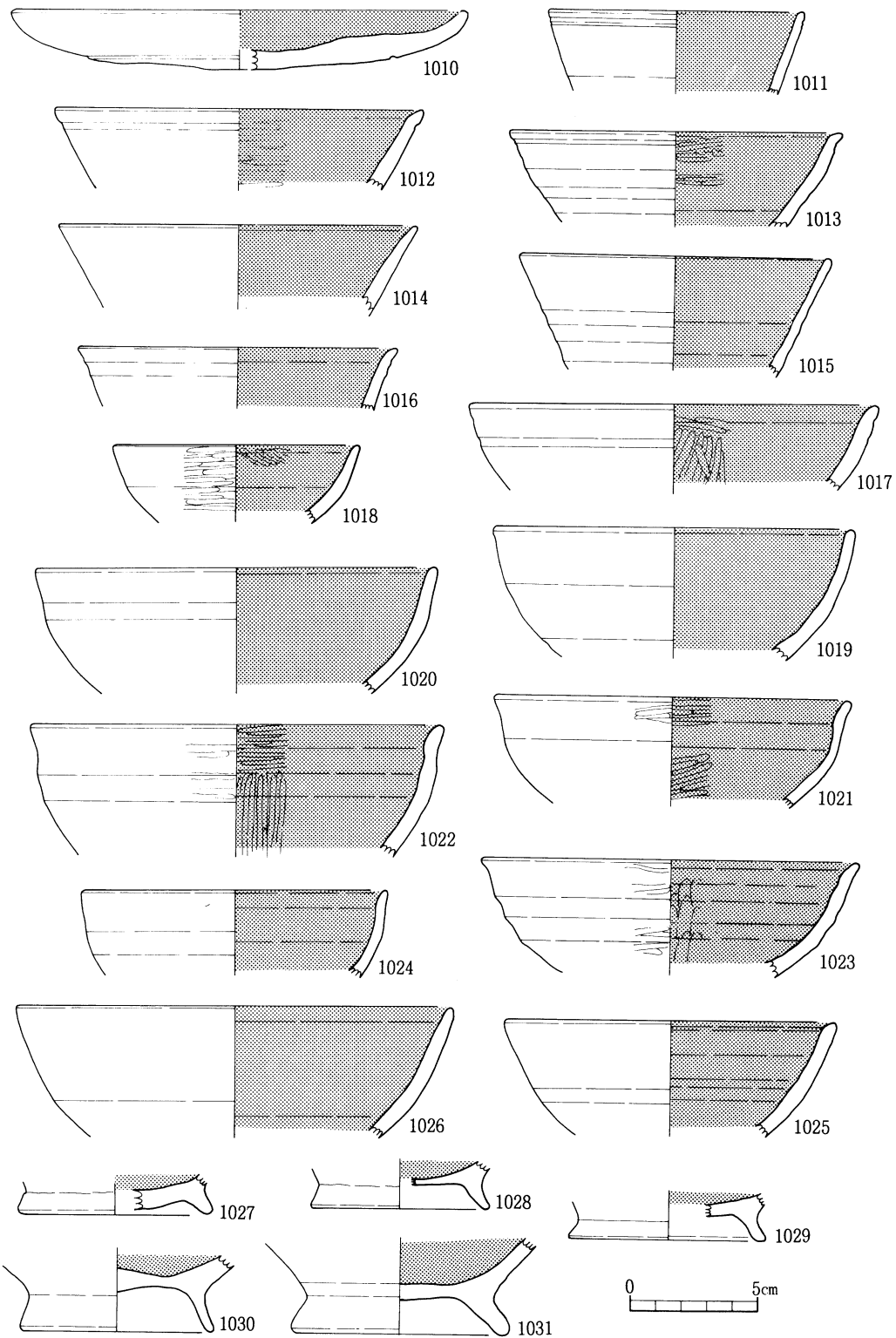
- 内黒土師器
- 内朱土師器
- ▲ 焼塩壺

第117図 黒色土器・焼塩壺出土状況

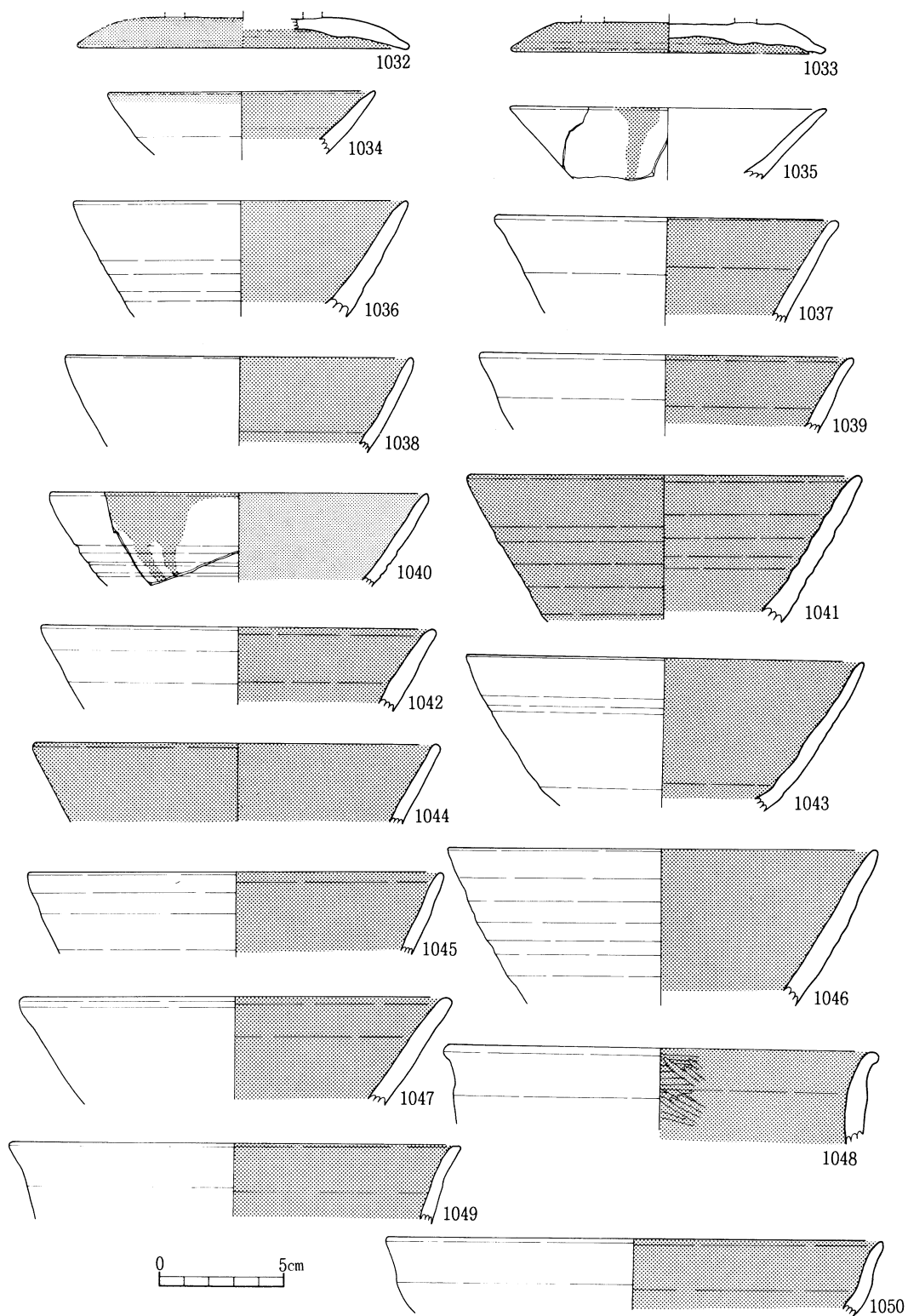




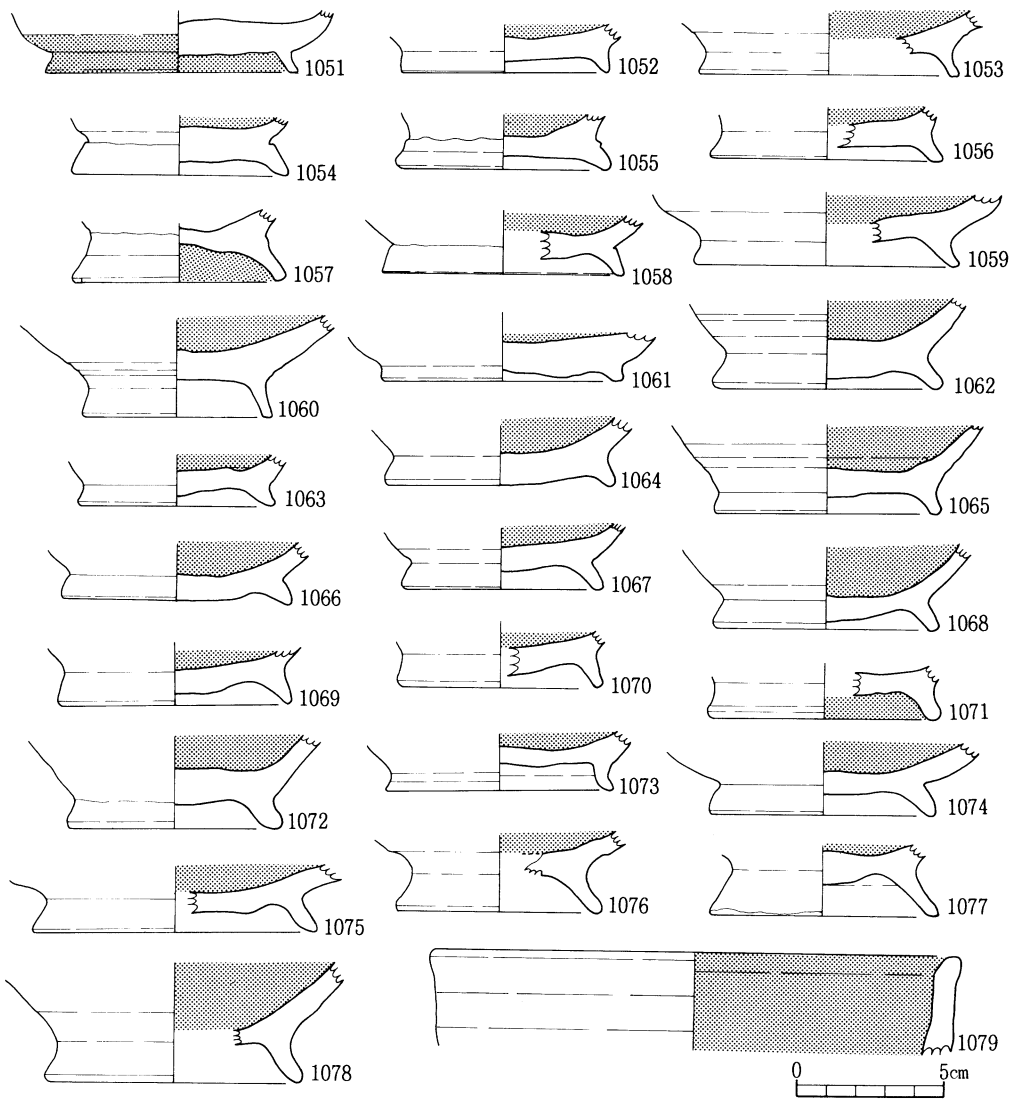




第118図 黑色土器(1) 内黒土師器



第119図 黑色土器(2) 内朱土師器

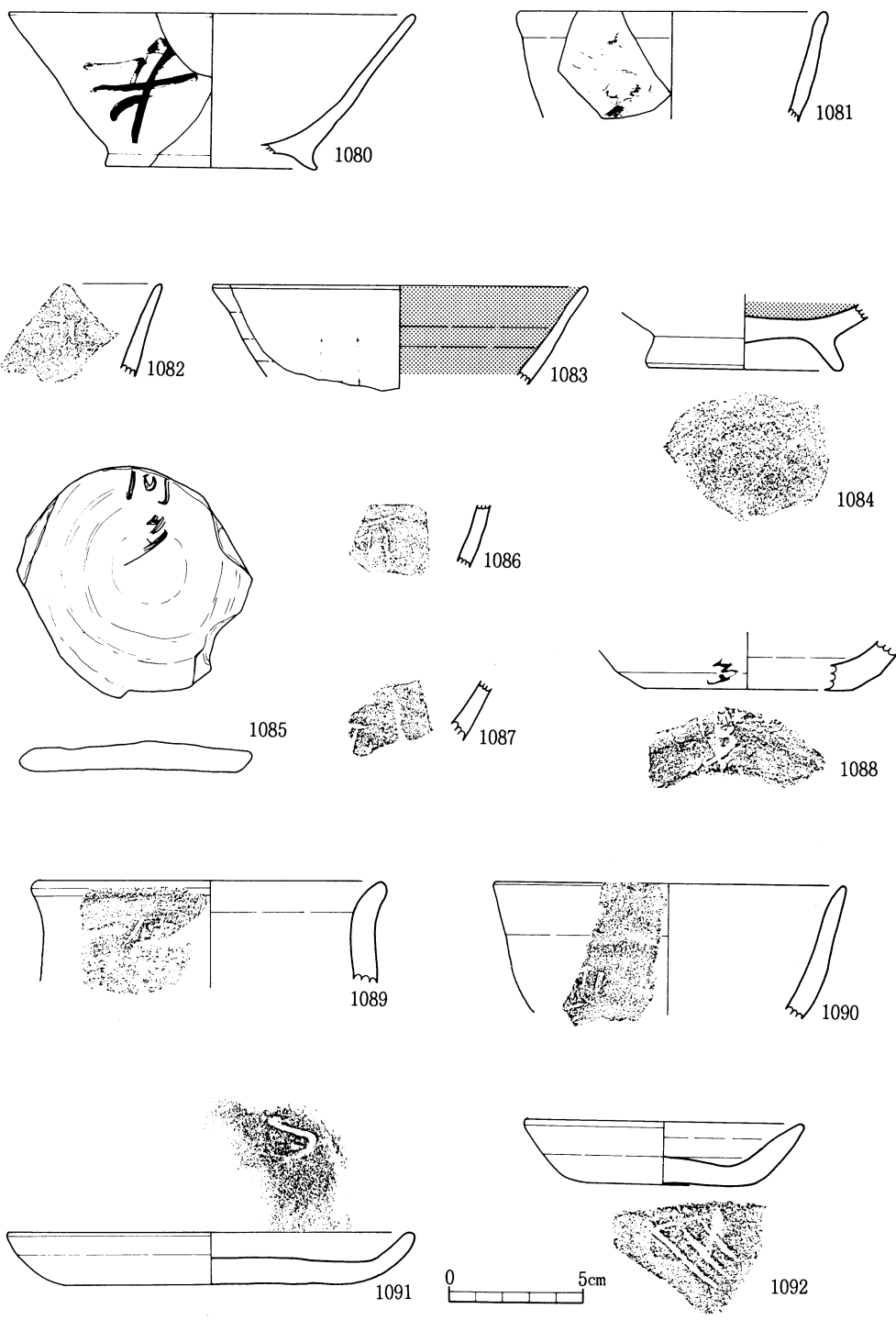


第120図 黑色土器（3） 内朱土師器

第29表 黑色土器一覽表

番号	器種	出土区層	法量			備考
			口径	底径	器高	
1010	皿	F-16 Ib	18.0	12.0	2.0	内黒土師器
1011	坏	G-7 I	10.0			" 口縁部
1012	"	F-7 I	14.5			" 口縁部
1013	甗	G-7 Ib	13.0			" 口縁部
1014	"	G-13 Ib	14.0			" 口縁部
1015	"	G-7 I	12.2			" 口縁部
1016	"	F-10 Ib	12.5			" 口縁部
1017	"	G-6 Ib	9.6			" 口縁部
1018	"	G-6 Ib	16.0			" 口縁部
1019	"	G-6 Ib	15.8			" 口縁部
1020	"	F-7 I	14.2			" 口縁部
1021	"	F-11 Ib	16.2			" 口縁部
1022	"	G-7 I	14.0			" 口縁部
1023	"	F-17 Ib	12.0			" 口縁部
1024	"	G-7 I	14.8			" 口縁部
1025	"	F-6 I	17.2			" 口縁部
1026	"	G-7 I	13.0			" 口縁部
1027	"	G-8 I		7.6		" 底部
1028	"	F-15 Ib		7.0		" 底部
1029	"	F-10 Ib		7.7		" 底部
1030	"	F-7 Ib		7.6		" 底部
1031	"	G-6 Ib		8.6		" 底部
1032	蓋	F-11 Ib	13.3			朱色土師器
1033	"	F-11 Ib	12.5	9.0	1.3	"
1034	坏	F-10 Ib	10.8			内朱土師器口縁部
1035	"	F-11 Ib	12.6			" 口縁部
1036	甗	F-11 Ib	13.4			" 口縁部
1037	"	F-16 Ib	13.8			" 口縁部
1038	"	F-14 I	14.0			" 口縁部
1039	"	F-9 Ib	15.0			" 口縁部
1040	"	E-8 Ib	15.2			" 口縁部
1041	"	E-8 Ib	15.8			朱色土師器口縁部
1042	"	F-9 Ib	15.8			内朱土師器口縁部
1043	"	F-14 Ib	16.0			" 口縁部
1044	"	G-8 I	16.4			" 口縁部

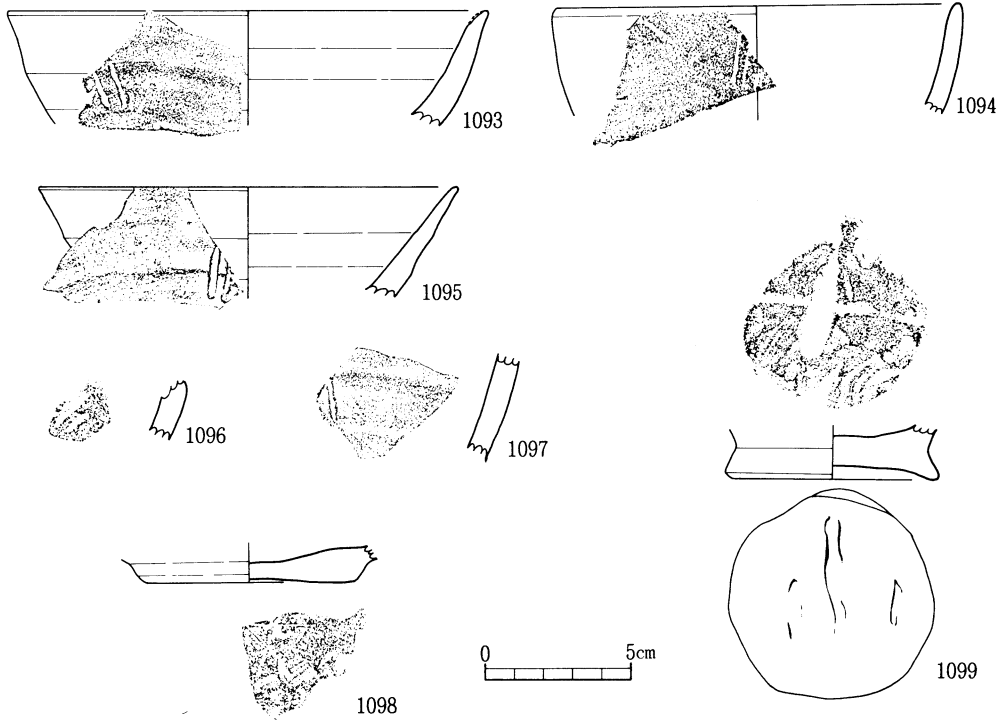
番号	器種	出土区層	法量			備考
			口径	底径	器高	
1045	甗	G-8 I	16.6			内朱土師器口縁部
1046	"	F-13 Ia	17.3			" 口縁部
1047	"	F-10 Ib	17.3			" 口縁部
1048	"	F-14 Ib	17.4			" 口縁部
1049	"	E-16 Ib	18.1			" 口縁部
1050	"	F-13 Ib	20.0			" 口縁部
1051	"	F-15 Ib		8.6		朱色土師器 底部
1052	"	G-9 Ib		7.0		内朱土師器 底部
1053	"	F-11 Ib		8.8		" 底部
1054	"	F-11 Ib		7.3		" 底部
1055	"	F-14 Ib		7.3		" 底部
1056	"	E-8 Ib		8.0		" 底部
1057	"	F-8 I		7.3		" 底部
1058	"	E-8 Ib		8.3		" 底部
1059	"	F-10 Ib		9.0		" 底部
1060	"	F-10 Ib		6.4		" 底部
1061	"	F-13 Ib		8.2		" 底部
1062	"	E-8 Ib		7.8		" 底部
1063	"	F-10 Ib		6.7		" 底部
1064	"	F-13 Ib		7.8		" 底部
1065	"	G-10 Ib		7.7		" 底部
1066	"	E-16 Ib		7.8		" 底部
1067	"	G-9 Ib		6.9		" 底部
1068	"	F-15 I		7.7		" 底部
1069	"	F-15 Ia		8.0		" 底部
1070	"	F-16 Ib		7.0		" 底部
1071	"	E-17 Ia		8.0		" 底部
1072	"	E-15 Ib		7.3		" 底部
1073	"	G-7 I		7.7		" 底部
1074	"	F-16 Ib		7.6		" 底部
1075	"	F-13 Ib		9.6		" 底部
1076	"	E-8 I		6.4		" 底部
1077	"	F-15 Ib		7.8		" 底部
1078	"	F-8 I		8.8		" 底部
1079	鉢	E-16 Ia	18.1			" 口縁部



第121図 墨書土器・篋書土器・刻書土器（1）

がみられる。1057・1071も貼り付け高台と底部に赤色顔料を塗ったものである。1053・1062・1065は外面に明確な稜をもつものである。

1079は内朱土師器の鉢である。体部はあまり開かず、直線的に立ちあがり口縁部にいたる。口縁部端はやや丸みをおび、外反する。内面に赤色顔料を塗り込めたもので、外面は黄灰色を呈し、胎土はわずかに細砂を含む。



第122図 刻書土器(2)



#### 墨書土器（第121図）

1080は土師器碗である。高台は剥脱しているが、底部から体部は斜め上方に直線的にのび、口縁部は丸みをおびるものである。内面に赤色顔料を塗った内朱土師器で丁寧なヘラ磨きで光沢がみられる。外面に、口縁部から底部にむけて「安」と読める墨書がある。約3cm離れた口縁部付近にも墨書がみられるが、薄く判読できなかつた。1081は体部の立ちあがり急な土師器碗で、肉太の大きな字で書いてあるが判読できない。

#### 篋書土器（第121図）

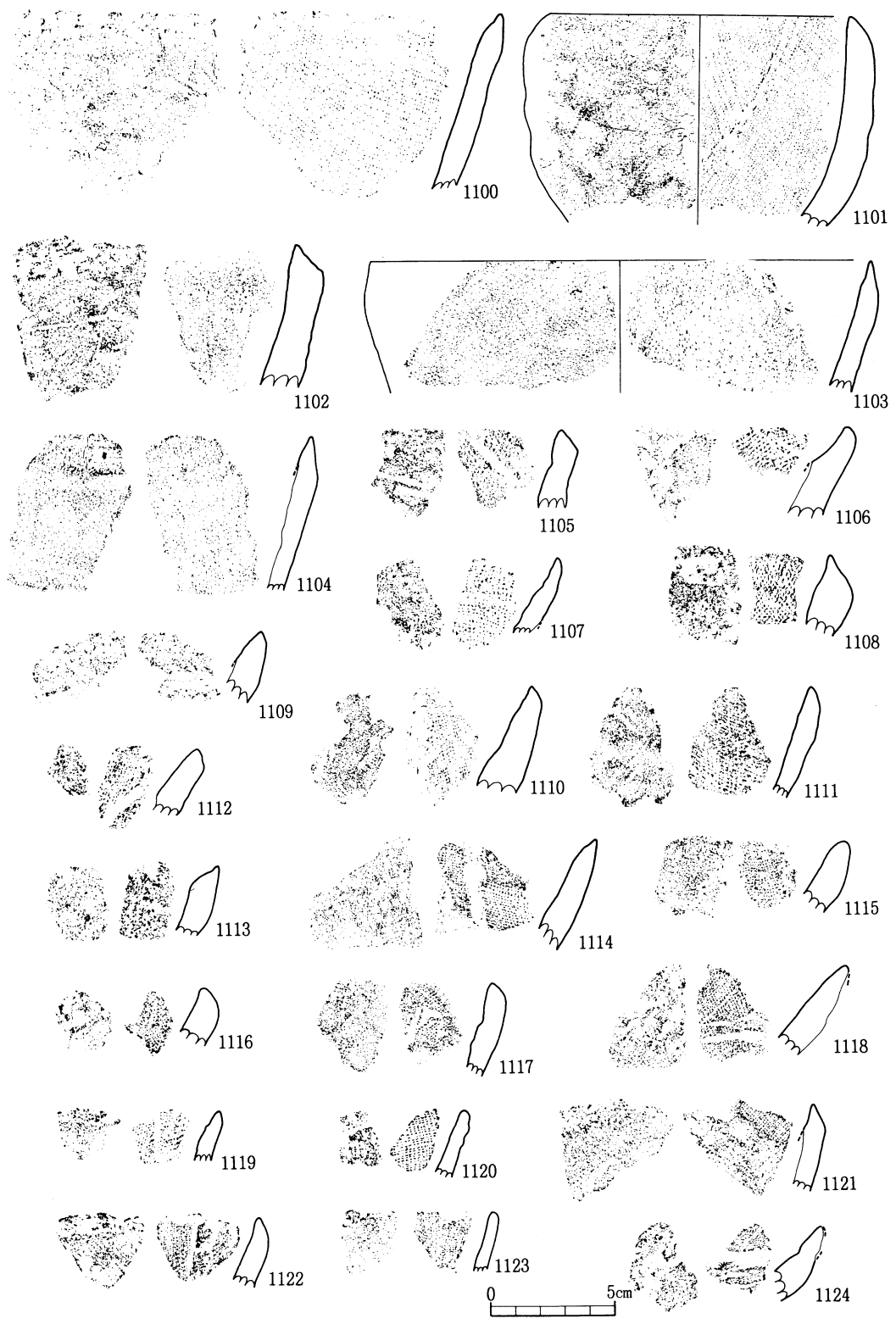
1082～1084は焼成後に刻んだ篋書土器である。直行する体部をもつ土師器碗で、口縁部付近に「カ」と刻んでいる。内・外面とも丁寧なナデ整形を行い、色調は淡燈色を呈している。1083は内・外面とも赤色顔料を塗った黒色土器で、体部はやや内弯しながら口縁部が外反し、口縁端は丸くなる土師器碗である。体部外面に「井」が刻まれている。1084は高台が外反し、端部は丸くおさめた内朱土師器の碗である。内面底部に「井」が刻まれている。赤色顔料が丁寧に塗ってあり、その上から鋭い刃物状のもので刻んだものであろう。

#### 刻書土器（第121, 122）

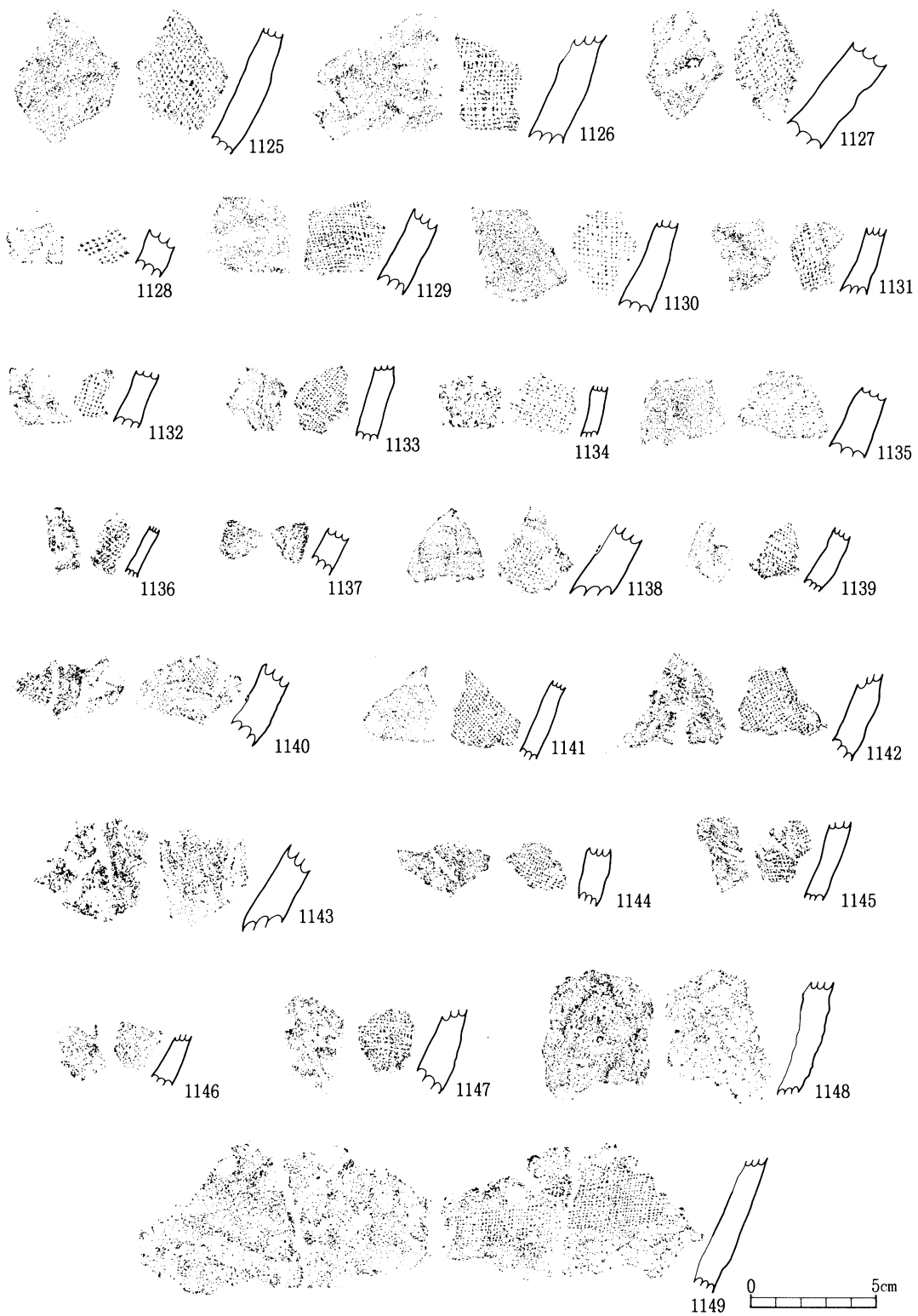
1085は土師器皿の底部を転用し、周辺部には研磨による調整がみられる。端部に約2mmの又状施文具で「阿多」と刻まれている。淡褐色の色調を呈している。1086・1087は土師器の外面に「阿」の一部が刻まれている。1086はヘラ状施文具で、1087は鋭い刃物状のもので刻んでいる。1088は土師器壺の底部である。「多」と読める。多の上方にも線刻がみられ阿多の可能性がある。色調は暗青灰色を呈している。1089は口径13.1cmを測る土師器の鉢である。口縁部付近に「仲」がヘラ状施文具によって刻まれている。1090は、口径13.2cmを測る土師器碗で、外面に「小」か「川」と読める文字を刻んでいる。1091は、口径15.2cm、底径10.8cm、器高2.0cmを測る淡褐色を呈したヘラ切底をもつ土師器皿である。底部内面端に線刻がなされているが、判読できない。1092～1097までは、土師器皿、碗などの底部や、体部外面に「川」が鋭い刃物状のもので、刻まれたものである。1098は内黒土師器の坏底部に鋭い刃物状のもので「∨」が刻まれている。1099は、高台が外反し端部は丸くおさめた土師器碗の底部である。底部内面に「十」、外面に指頭で「小」と刻まれている。

#### 焼塩壺（第123～125図）

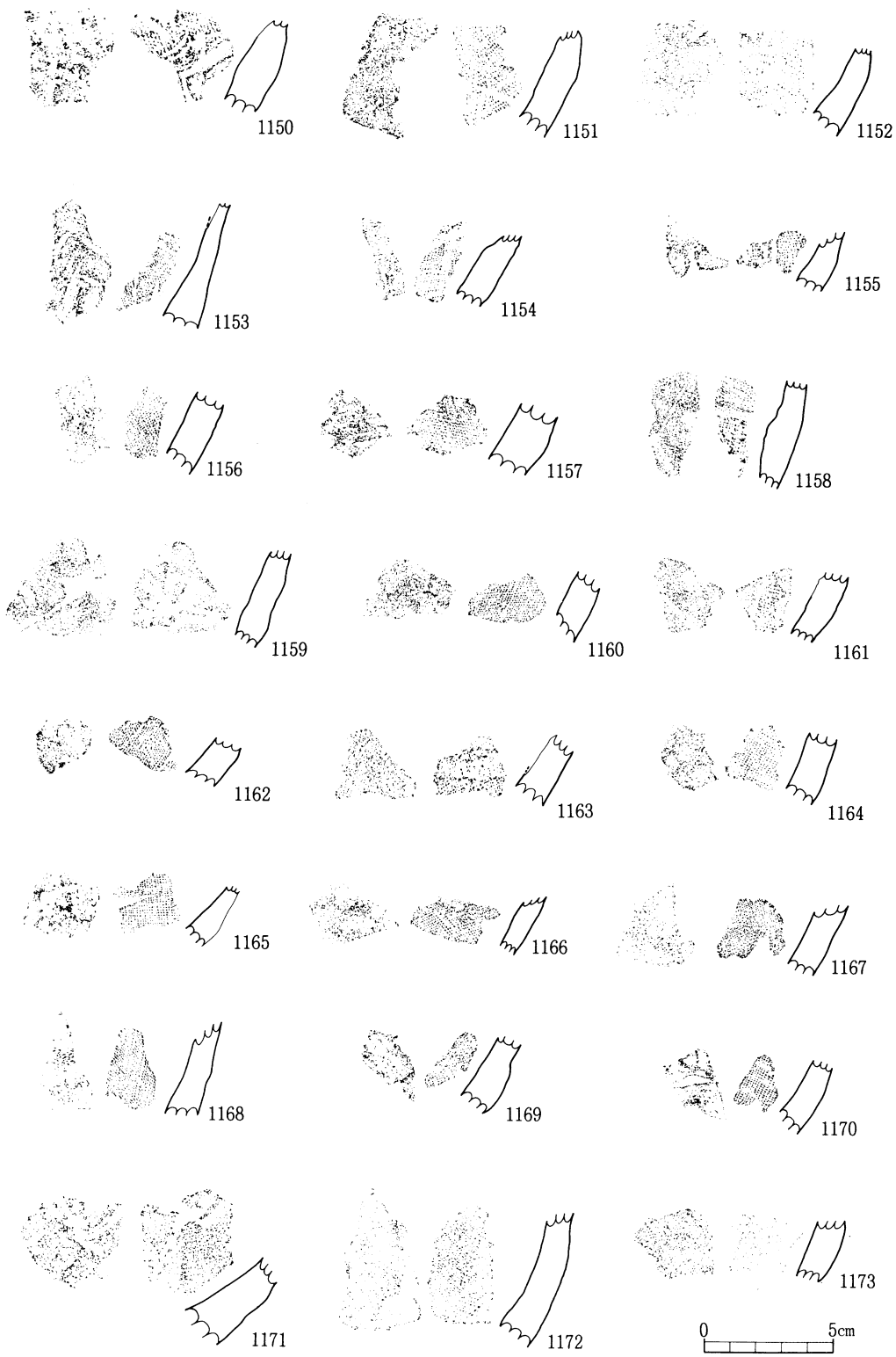
小中原遺跡では焼塩壺と呼ばれる内面に布目痕を付した円錐形の鉢形を呈するもので74点出土している。全て破損品であるが、丸底状の底部をもち、体部の立ちあがり急で、1011がやや内弯するが、その他のものは斜め上方に直線的にのび、口縁端は反り気味で、断面三角形を呈している。口径は12.0～20cmを測る。胎土は荒く、細砂粒を多く含んでいる。外面調整はヘラケズリによる整形のあと、再度ナデ調整を伴うもので、荒い仕上げである。色調は淡燈色～暗褐色を呈している。二次焼成をうけたもの（1111, 1143, 1144, 1153, 1162）もある。



第123图 烧塩壺 (1)



第124图 烧盐壶(2)



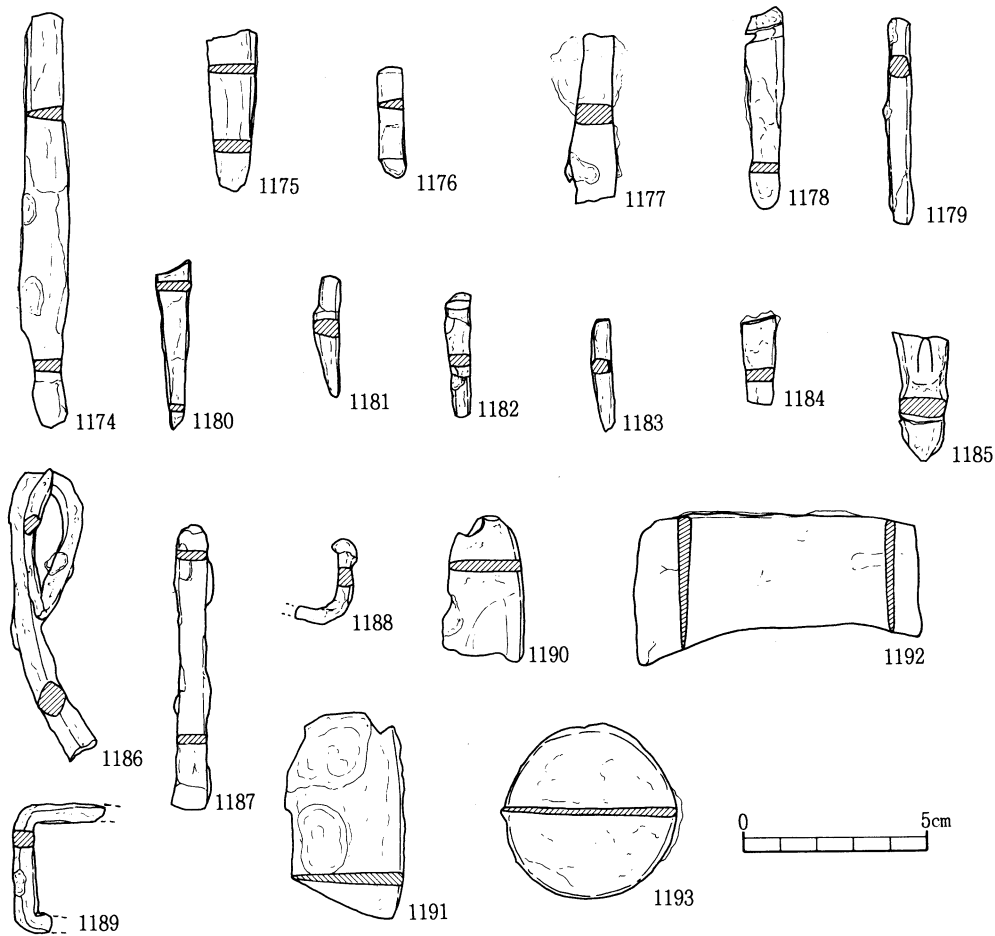
第125图 烧盐壺 (3)

第30表 焼塩壺一覧表

番号	出土区	出土層	縦(cm)	横(cm)	備考	番号	出土区	出土層	縦(cm)	横(cm)	備考
1100			0.15	0.12	口縁	1137	F-6	II b	0.14	0.12	
1101	F-16	II a	0.08	0.09	"	1138	F-G-6	I b	0.13	0.15	
1102	G-7	II	0.08	0.07	"	1139	F-14	II a	0.13	0.12	
1103	G-6	I b	0.10	0.10	"	1140	F-14	II a	0.12	0.10	
1104	F-16	II b	0.10	0.10	"	1141	G-6	Pit	0.13	0.11	
1105	G-7	II	0.20	0.09	"	1142	F-8	II	0.10	0.12	
1106	G-6	I b	0.16	0.16	"	1143	G-8	II	0.13	0.19	
1107	G-6	II F	0.15	0.12	"	1144			0.13	0.09	
1108	G-8	I b	0.14	0.13	"	1145	G-6	I b-II	0.13	0.09	
1109	G-8	I b	0.14	0.12	"	1146	G-6	I b	0.12	0.10	
1110	F-7	I b	0.13	0.11	"	1147	F-15	II b	0.12	0.10	
1111	F-8	II	0.12	0.13	"	1148	F-6	I	0.12	0.08	
1112	G-8	I b	0.12	0.12	"	1149	G-6	I b	0.11	0.14	
1113	F-16	II b	0.12	0.10	"	1150	F-8	II	0.10	0.14	
1114	E-15	II b	0.12	0.11	"	1151			0.13	0.11	
1115	F-16	SD	0.11	0.10	"	1152	F-6	II	0.11	0.11	
1116	F-14	II a	0.12	0.10	"	1153		II	0.10	0.17	
1117	F-7	I	0.10	0.12	"	1154	F-15	II a	0.08	0.07	
1118	G-7	II	0.10	0.11	"	1155	G-7	II	0.11	0.08	
1119	F-16	SD08	0.10	0.10	"	1156	F-17	II b	0.11	0.08	
1120	G-9	II b	0.09	0.14	"	1157			0.10	0.10	
1121	F-16	II b	0.09	0.08	"	1158	G-7	II	0.10	0.07	
1122	E-17	II b	0.09	0.07	"	1159	G-9	II b	0.09	0.08	
1123	F-17	II b	0.07	0.10	"	1160	F-16	II b	0.09	0.07	
1124	F-7	II上	0.07	0.07	"	1161	G-6	I b	0.08	0.12	
1125	G-6	I b	0.20	0.18		1162	G-6	I b	0.08	0.09	
1126	G-6	I b	0.19	0.14		1163	G-6	I b	0.08	0.10	
1127	G-6	I b	0.17	0.16		1164	G-11	II a	0.08	0.10	
1128			0.18	0.22		1165	F-16	SD08	0.07	0.09	
1129	G-7	II	0.17	0.15		1166	F-16	SD08	0.09	0.08	
1130	G-6	Pit 8	0.16	0.17		1167	F-14	II b	0.07	0.07	
1131	F-G-6	II	0.16	0.14		1168	F-16	II b	0.08	0.07	
1132	F-G-6	II	0.16	0.12		1169	F-14		0.10	0.07	
1133	F-7	I b	0.11	0.12		1170	G-8	I b	0.07	0.09	
1134	F-G-8	I b	0.15	0.13		1171	F-17	II b	0.08	0.10	
1135	G-6	I b	0.14	0.16		1172	E-16	II b	0.08	0.07	
1136	F-6	I b	0.14	0.14		1173	F-G-6	II a	0.06	0.05	

鉄製品 (第126図)

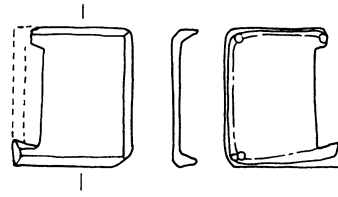
遺跡からは多くの鉄製品が出土したが、形態のわかる20点を図示した。1174～1178は峰先は欠損しているが、刀子と思われるものである。1174～1176は残りはよく、茎尻は丸くおさまる。1179～1183はクギである。角クギである。1185は先端部があるが、先端部が尖り気味で湾曲し、鉄ノミの可能性はある。1186、1187は棒状の鉄製品である。1188・1189は「コ」状になった鉄製品である。1190～1192は鎌状の製品である。1192は大型の曲刃鎌で欠損しているが、長さ7.8cm、最大幅4.0cm、厚さ0.4cmを測るものである。1193は腐食のため突孔が判明しないが、形態より紡錘車であろう。径4.5cm、厚み0.2cm、重量16.4gを測る。



第126図 鉄製品

帯金具 (第127図)

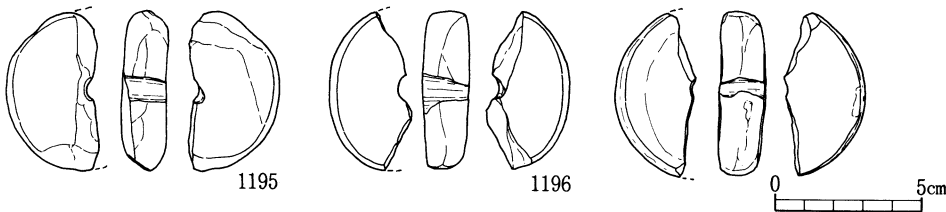
1194は銅製帯金具である。横2.9cm, 縦2.2cmを測る横長の巡方で、破損しているが下方に横2.1cm, 縦0.3cmの透し穴がある。裏側がやや広がっている。裏面の四方に、鉾足を取り付けた表金具である。表面には黒漆膜が残っている。



第127図 帯金具 (2/3)

紡錘車 (第128図)

土師質の紡錘車と思われる遺物が3点出土している。径はいずれも5.5cm内外を測る。中央に0.5~1.0cmの片面からの孔を穿つもので、この時期の紡錘車には、土師器坏からの転用が多いが、これらは当初より紡錘車として製作された

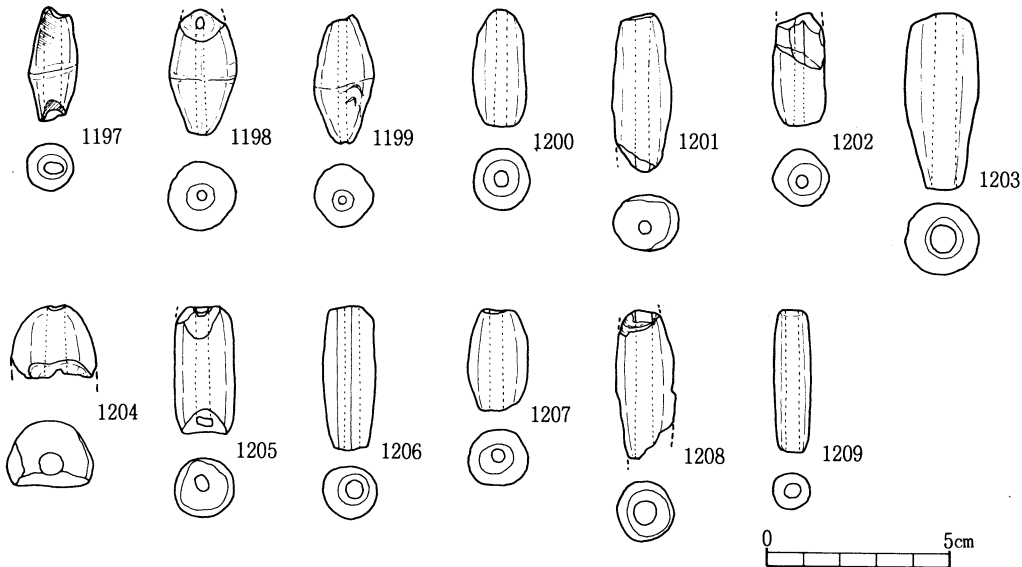


第128図 紡錘車

ものである。1196は版組後に接合した。

土錘 (第129図)

土錘は13点出土した。いわゆる管状土錘である。長さ3.6~5.0cm, 幅1.0~2.0cmを測るもので、重量は、3.8, 8.4, 6.3, 6.6, 9.5, 6.0, 13.0, 7.2, 9.1, 8.1, 7.6, 8.3, 4.1g

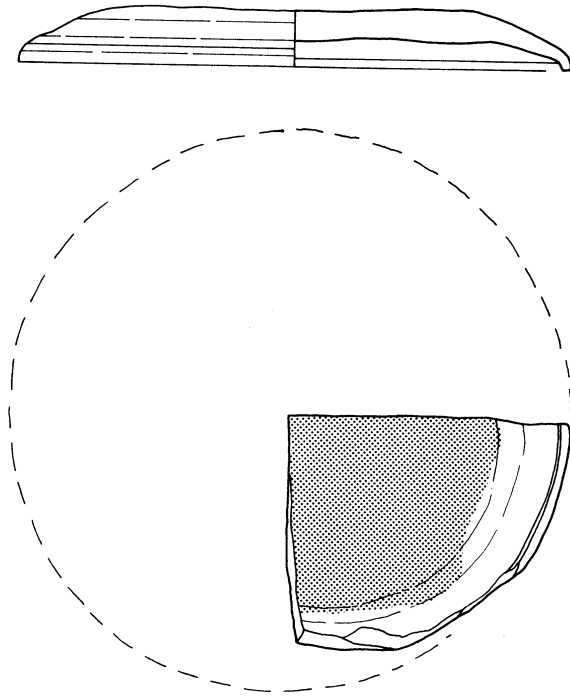


第129図 土錘

である。色調は黄灰色、赤褐色、暗灰色を呈する。形態的には中央部がふくらみ稜をもち、両端がすぼまる形のもの、棒状のもの、細身のものがある。形態的にも違いがあり漁網錘としての利用だけであったのか疑問も残るところである。

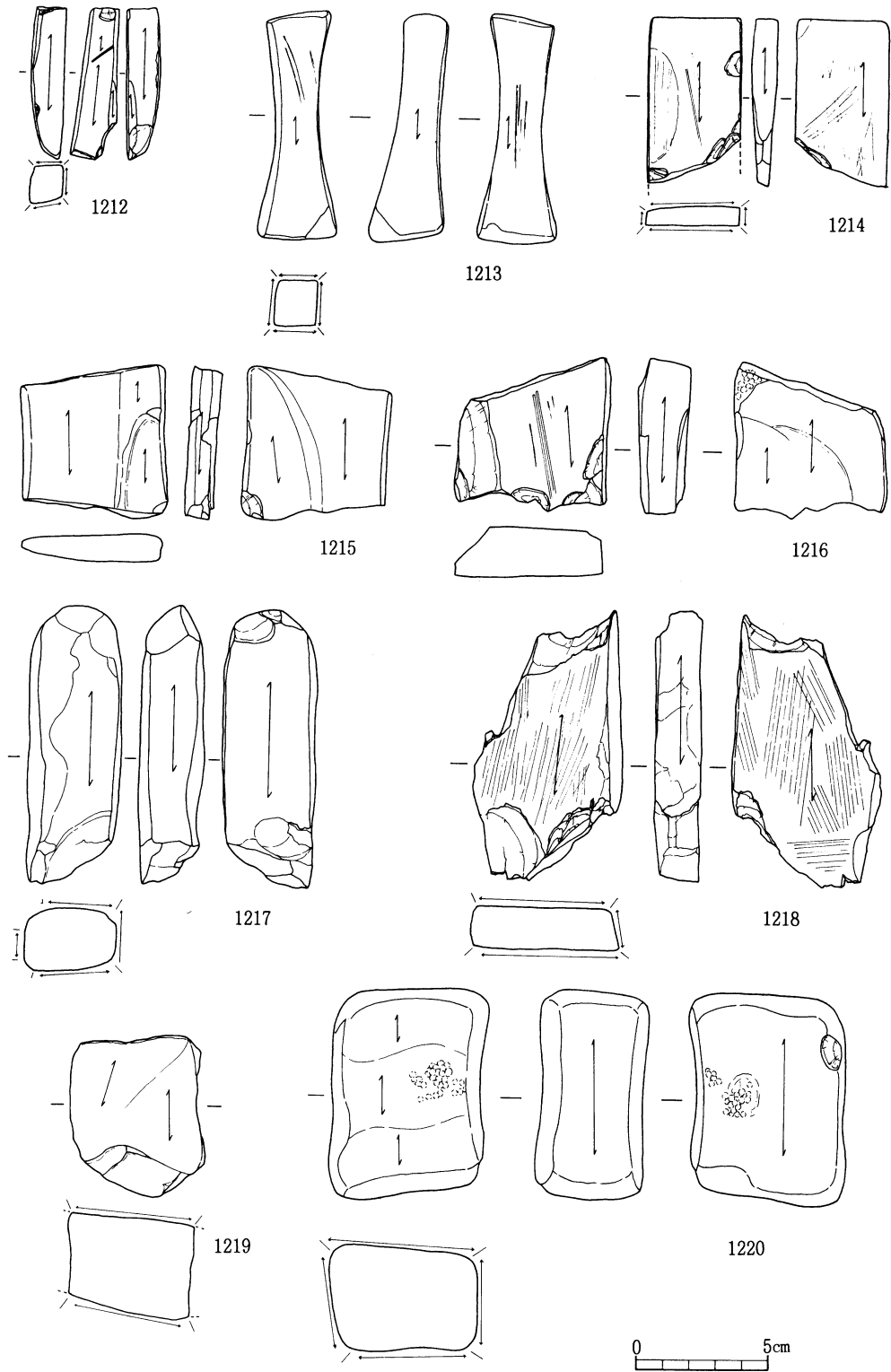
陶硯（第130図）

1210は、平坦な天井部をもち、口縁部はかえしがなく、口縁端が下方に鳥嘴状に突出する須恵器坏蓋の転用硯である。陸部として使用した個所には顕著な磨耗部がみられる。口径は15.5cmを測る。

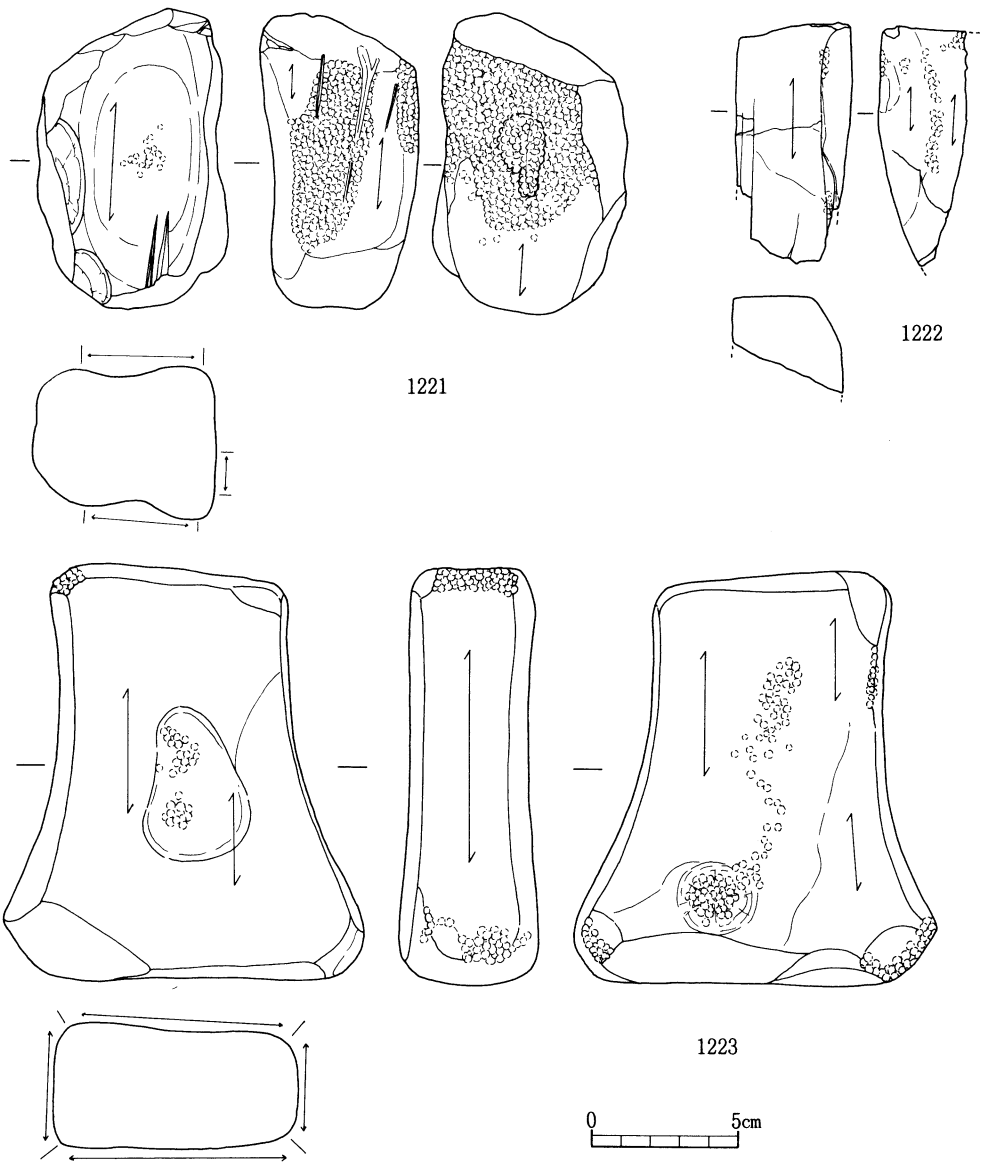


第130図 陶 硯





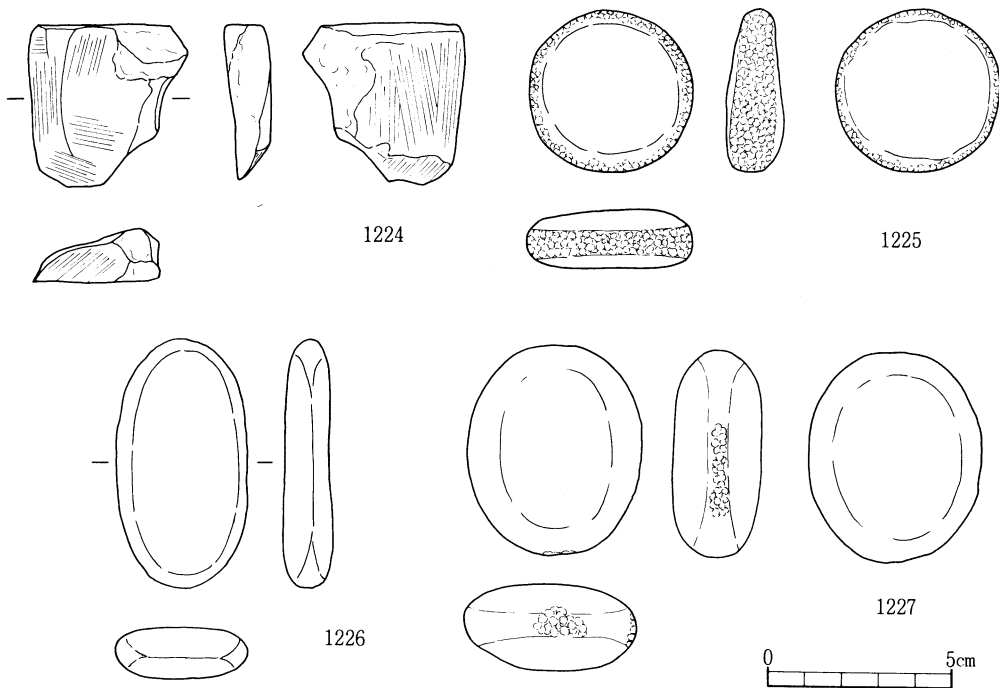
第131图 平安时代石器(1) 砥石



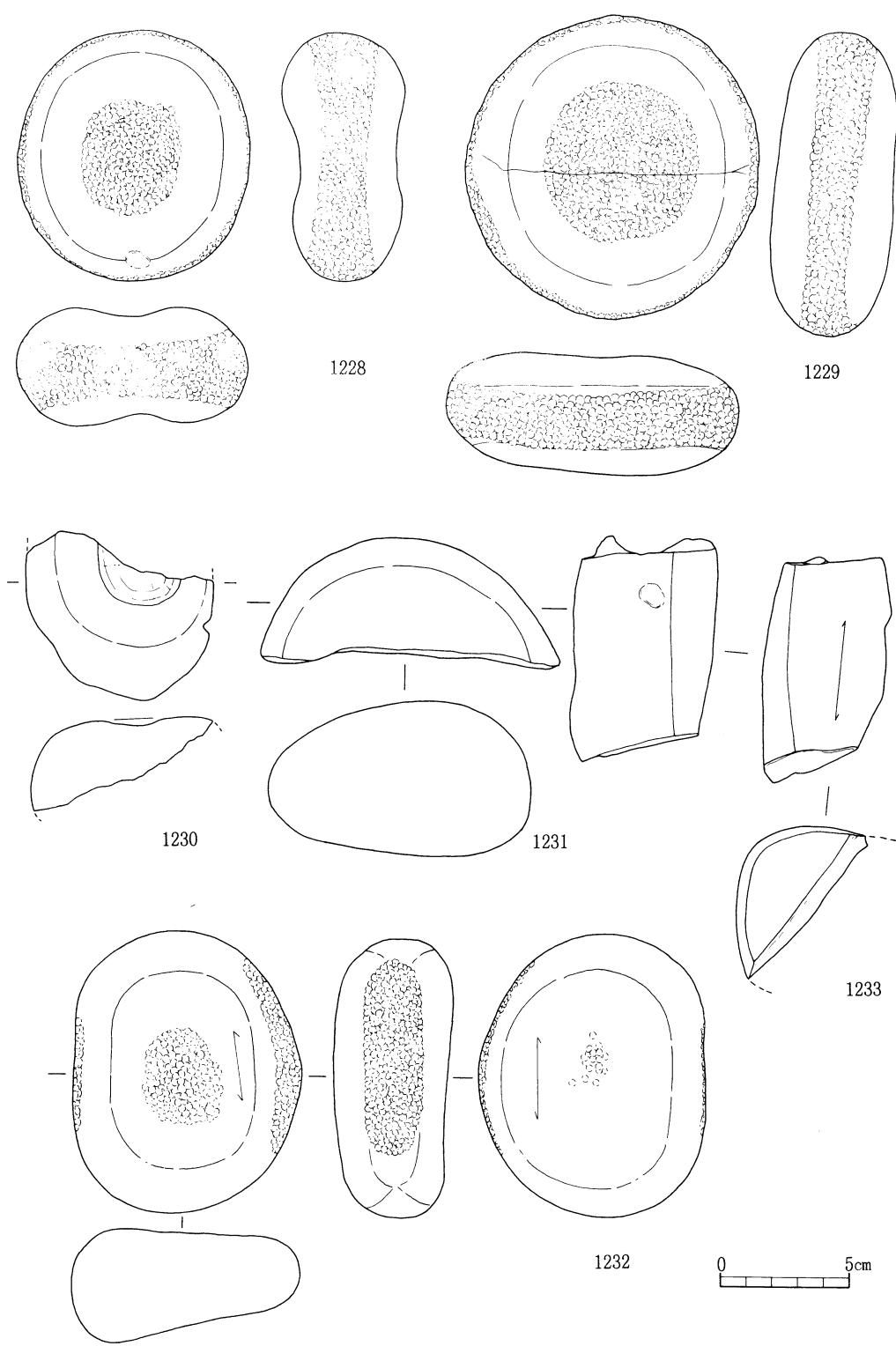
第132図 平安時代石器(2) 砥石

石器

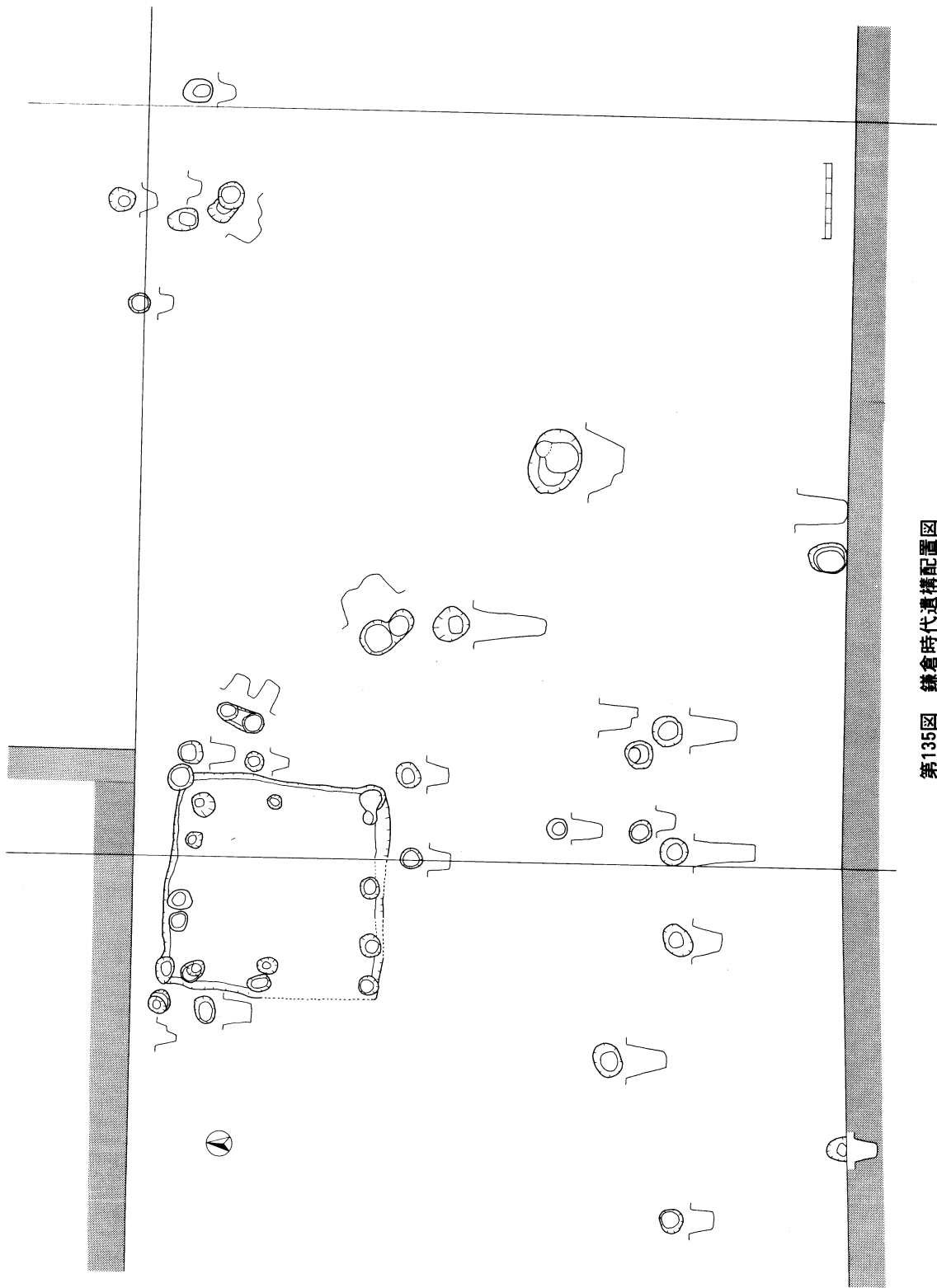
平安時代の石器は、砥石、敲石、磨石が出土した。1212～1214は角柱状の砥石で、よく整形されたものである。形態より携帯用と思われる。1212は砂岩で、縦方向の研磨がみられる。1213は天草砥と呼ばれているシルト岩で、長さ8.8cm、最大幅3.0cm、厚さ1.8cmを測る。完形品で中央部が湾曲し、よく使用しているものである。やはり、縦方向の研磨がみられる。1214はシルト岩である。1215・1216は砂岩製で荒砥である。1217は天草砥で荒割し、整形することなく砥石として利用している。1220は花崗岩を石材にした完形品である。長さ7.8cm、最大幅5.8cm、厚さ4.0cmを測り、四面に研磨痕が認められる。また、中央部は湾曲し、敲打痕等もみられることから、用途の広さが感じられる。1221は砂岩で凹みをもつものである。正面下方に鉄状の用具によると思われる溝が二条あり、また側面、裏面には敲打による。凹みが施されている。砥石以外の使用も考えられる。1222は研磨器と思われる砂岩製のものである。1223は研磨と敲打痕のみられるもので、側面は両面とも湾曲している。1224は、凝灰岩の研磨器である。1225～1233は磨石である。石材は砂岩、安山岩、シルト岩である。1225は側縁部全周に敲打痕がみられる小型の敲石である。1226は小型の扁平な磨石である。1227は川原石を利用した小型の敲石である。1228・1229は凹み、敲打痕のある磨石である。1230は凹石、1231は磨石、1232は敲打痕のある磨石である。1233は磨石である。



第133図 平安時代(3) 砥石



第134図 平安時代石器(4) 磨石



第135図 鎌倉時代遺構配置図

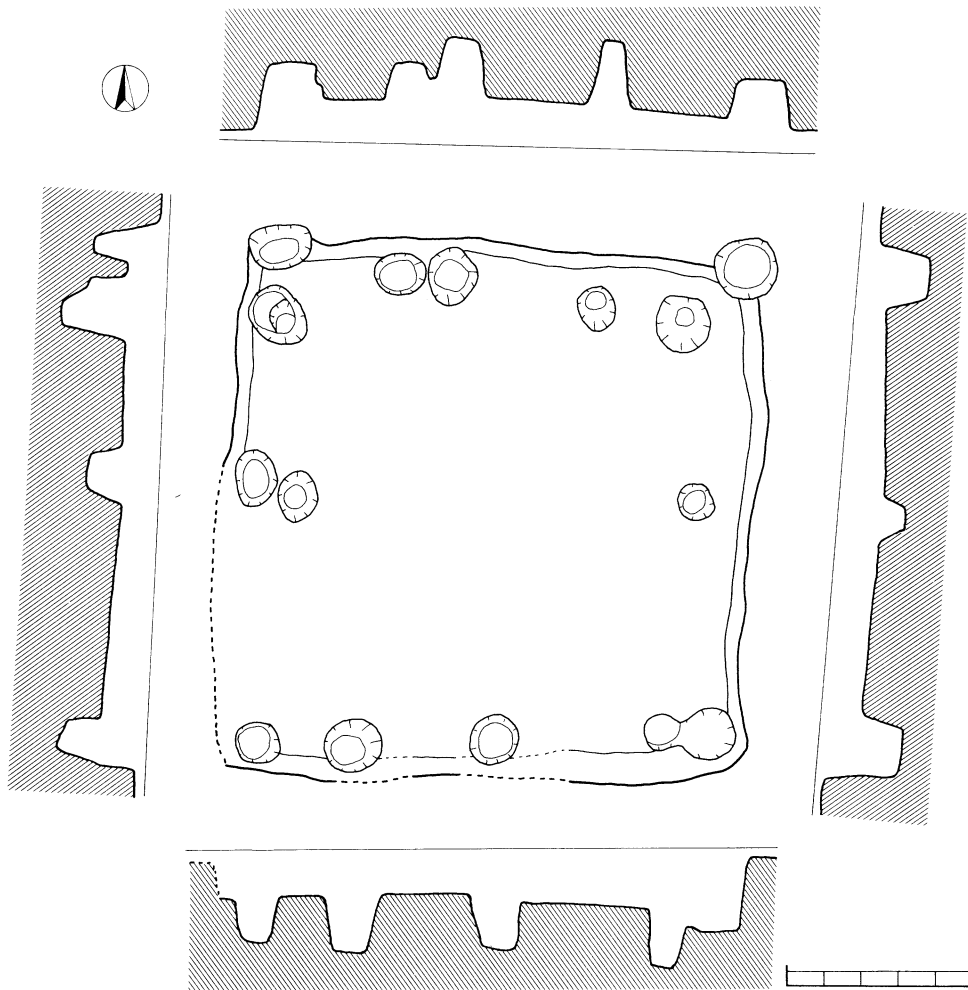
## 第4節 鎌倉時代の調査

### 1 調査の概要

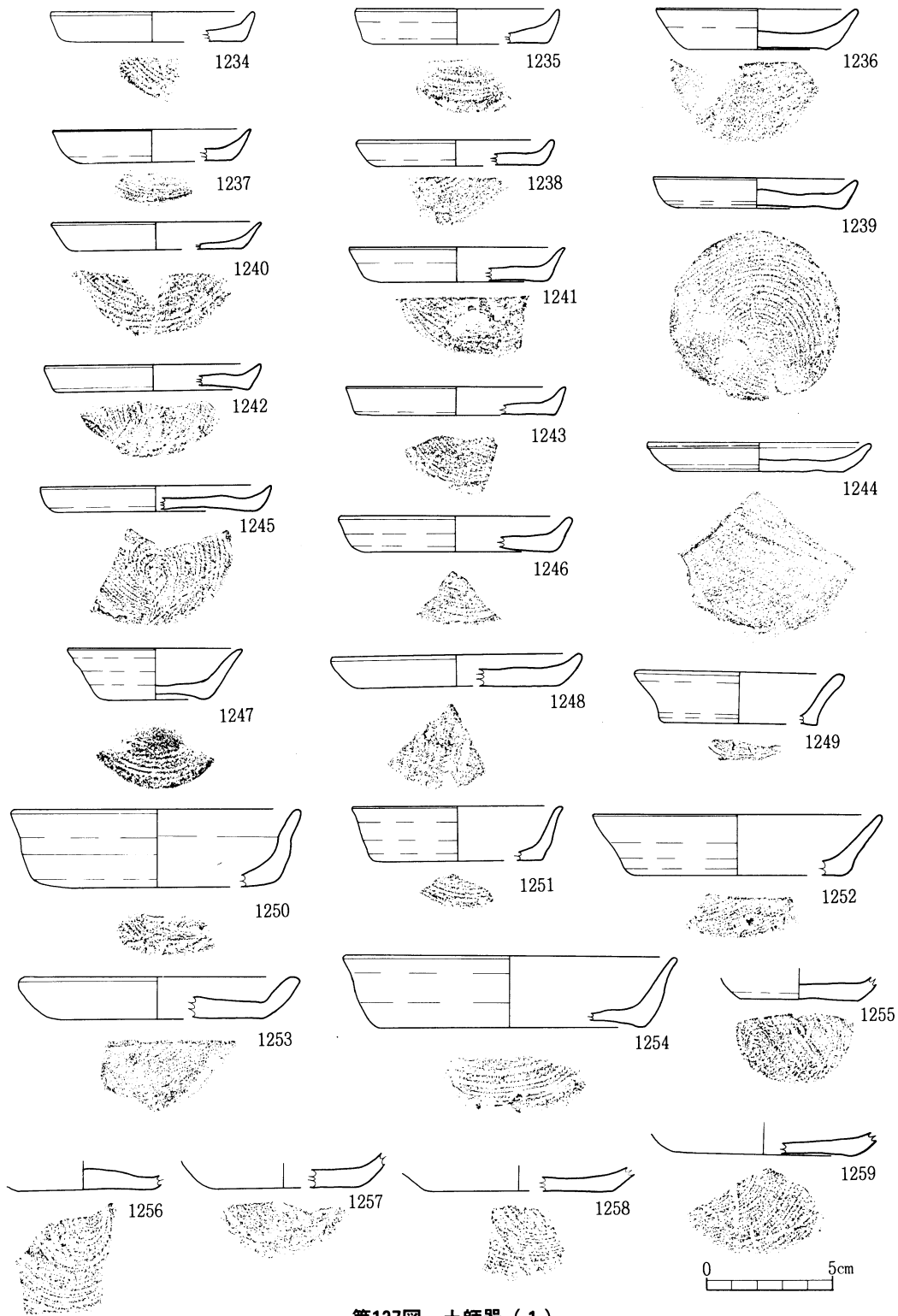
平安時代の調査は、F-18・19区のⅡa層出土の遺物と、Ⅱb層上面で検出された遺構であった。遺構は竪穴遺構1基と柱穴24個が検出された。遺物は、土器（土師器・陶磁器）約500点が出土した。土師器は皿・大皿が主で鉢も出土している。陶磁器は、青磁・白磁・染付・天目などである。小片が多かったが、碗と皿が主である。

### 2 遺構

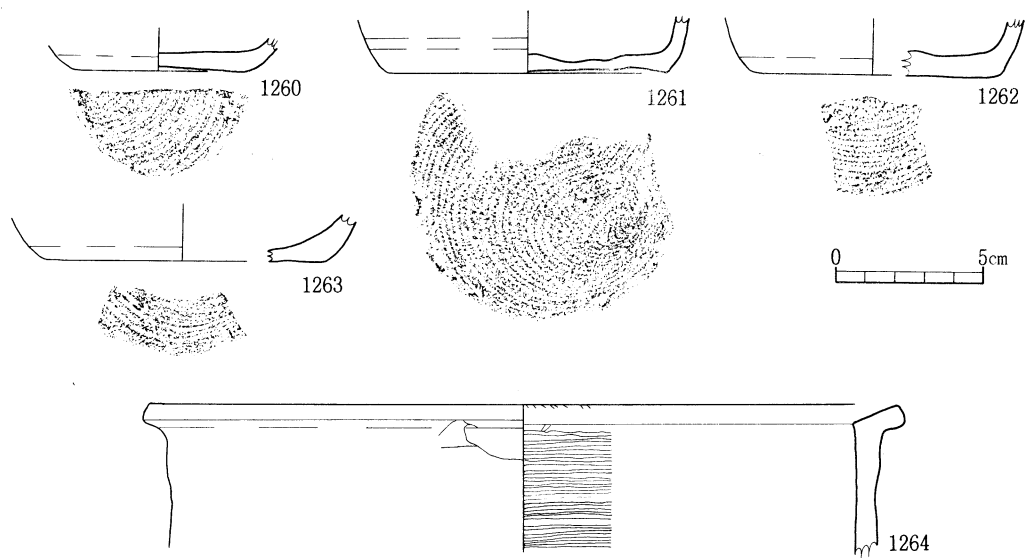
柱穴24個と長径3.0m×短径2.9mの方形プランの竪穴遺構を検出した。柱穴はまとまりがみられなかった。竪穴遺構は、主軸がN02度E方向である。Ⅲ層中位まで掘り込み床面とする。深さ約20cm、面積は約9㎡である。側壁はわずかに傾斜を呈する。柱穴は総数14個を検出する。



第136図 竪穴遺構



第137図 土師器 (1)



第138図 土師器 ( 2 )



第31表 土器一覧表

番号	器種	出土区層	法 量			備 考
			口径	底径	器高	
1	小皿	F-7 I b	7.9	7.9	1.2	
2	〃		7.9	7.0	1.4	
3	〃	F-18 II b	7.7	5.5	1.6	
4	〃	F・G	7.8	6.2	1.3	
5	〃	F-13 II a	7.8	6.6	1.0	煤痕
6	〃	F-13 II b	7.9	6.8	1.2	
7	〃	F-13 II b F-14 II b	8.1	6.9	1.1	
8	〃	F-12 II b	8.4	6.6	1.4	
9	〃	F-14 II b	8.5	7.6	1.1	煤痕
10	〃	F-13 II a	8.5	7.7	1.2	
11	〃	F-17 II b	8.9	6.7	1.2	
12	〃		9.0	7.6	1.1	煤痕
13	〃	F-14 I a	9.0	7.4	1.4	
13	〃	F-18 I a	9.8	7.8	1.2	
15	〃		6.7	4.0	2.0	煤痕
16	小皿	F-12	6.4	6.1	2.1	
17	〃	G-8 II	8.0	6.6	2.2	
18	大皿	G-8 II b	10.2	7.0	3.1	
19	〃	F-18 II b	10.7	8.1	1.6	煤痕
20	〃	F-13 II a	11.3	8.4	2.4	
21	〃		13.0	10.4	2.8	
22	〃	F-14 I a			4.4	
23	〃	F-18			5.5	
24	〃	G-6 I b			5.6	
25	〃	F-18 I b			6.6	
26	〃	G-11			7.0	
27	〃	F-7 I			5.8	
28	〃	F-13 II b			7.3	
29	〃	F-13 I b G-13 II a			9.1	
30	〃	G-14 I b			9.2	

### 3 出土遺物

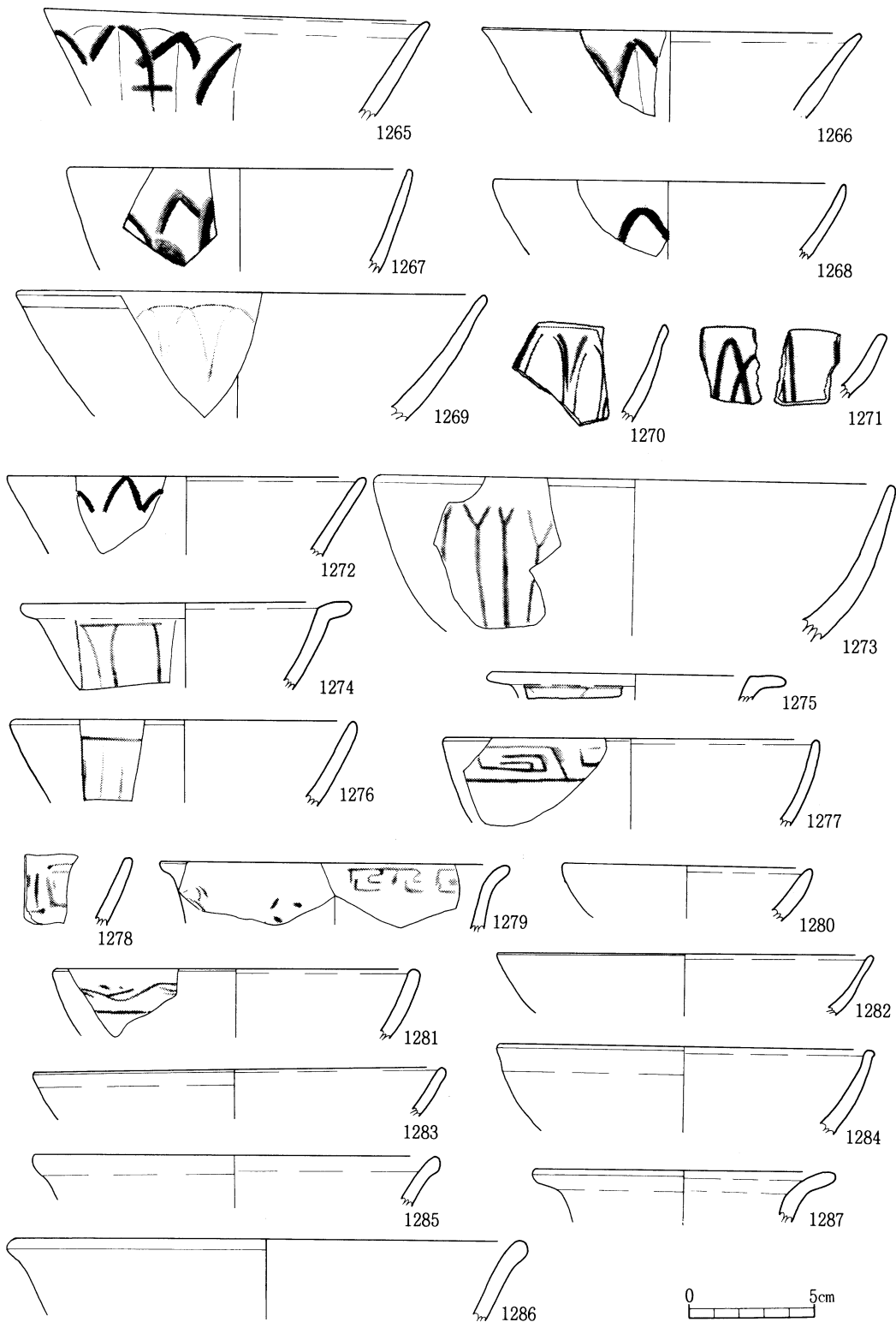
#### a 土師器

鎌倉時代以降の土師器は、ほとんどが皿で一点だけ鉢がみられる。

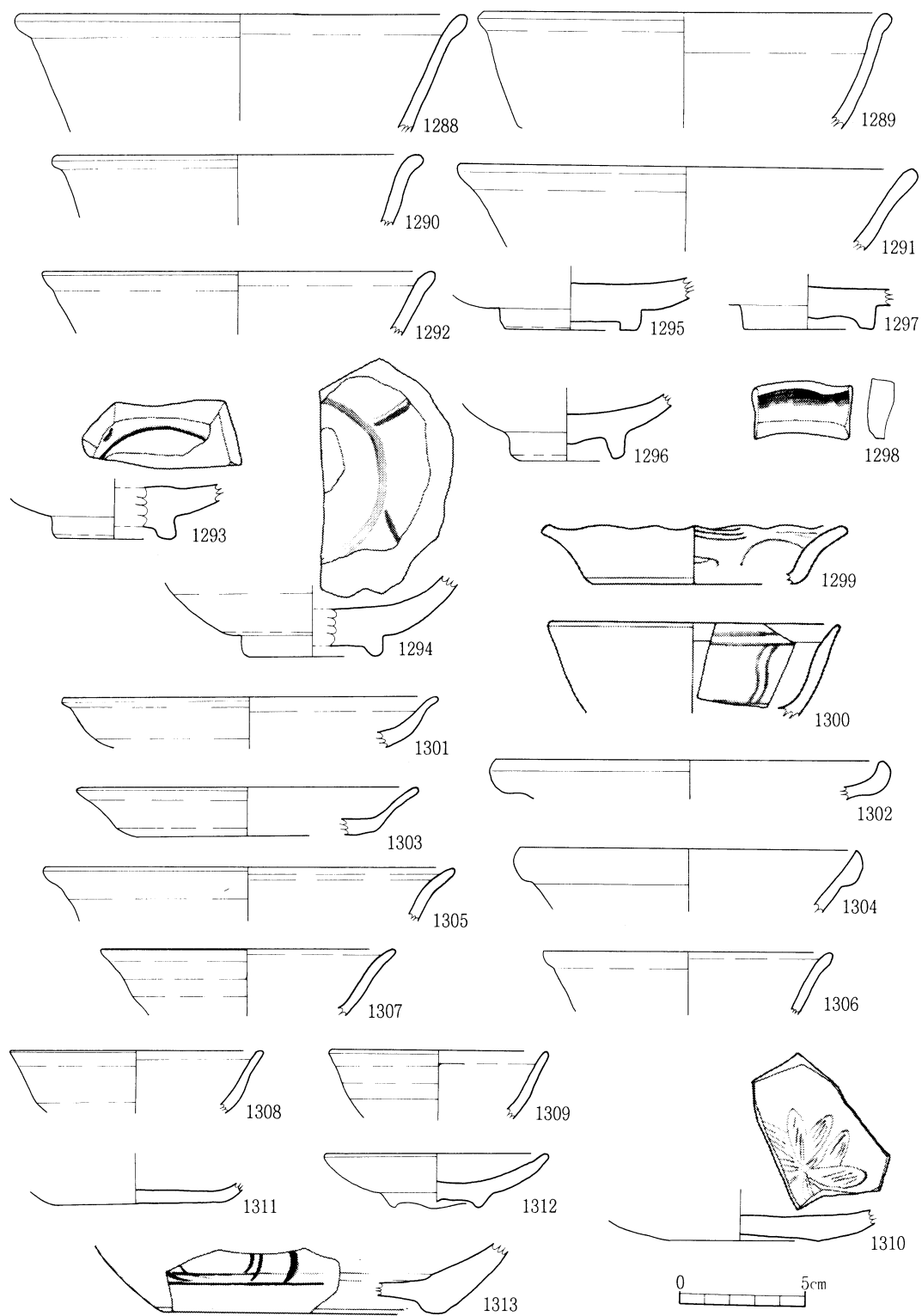
1234から1247までは、口径が10cm未満で、器高が2cm未満の小皿である。底部から口縁部にかけては、外向して立ち上がる1238・1242・1245は、底部内面に煤痕がみられる。1248～1250までは、口径が10cm未満で、器高が2cm以上の小皿である。やはり底部から口縁部にかけては、外向して立ち上がる。1248に煤痕がみられる。1251～1254までは大皿であるが、1252だけが器高が、2cm未満である。底部から口縁部にかけては、外向して立ち上がる。1253に煤痕がみられる。1255～1263は、口縁部がないためにはっきりとした形態はわからない。1252に煤痕がみられる。

皿の底部はすべて糸切底である。

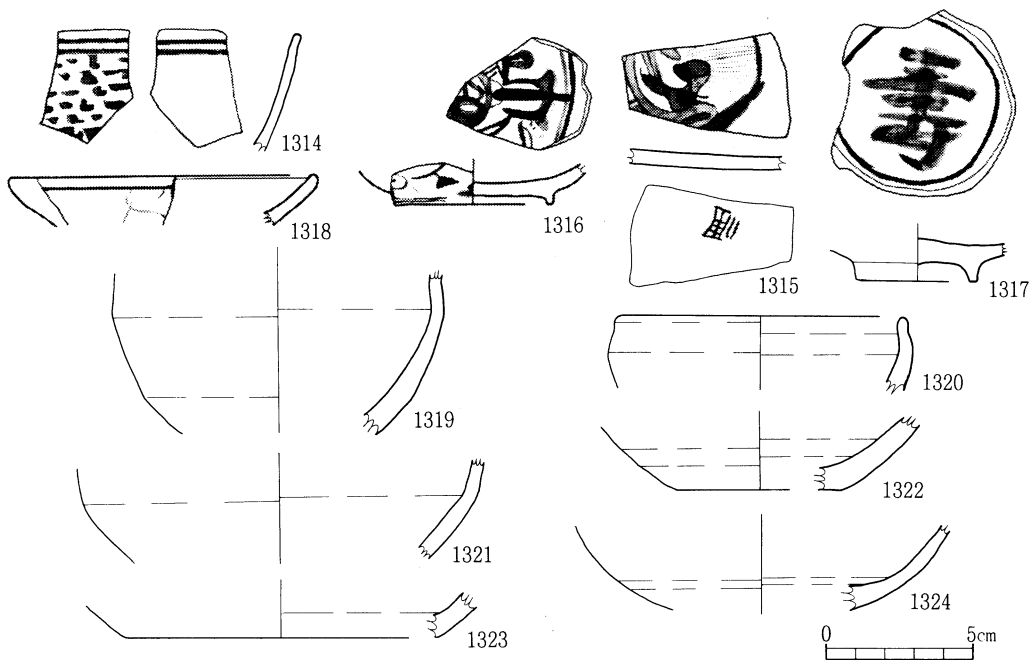
鉢は口径25.4cmを計る。内部は、刷毛で整形してある。



第139图 陶磁器 (1)



第140图 陶磁器(2)



第141図 陶磁器 (3)

## 2 陶磁器

本遺跡から出土した陶磁器は、青磁・白磁・染付・天目などである。出土総量は 180点あまりを数えるが、全体的に遺物は小片が多く、図示できないものも多かった。器形は、すべて碗か皿である。出土地区は、遺跡全体にわたるが、主として18区に集中がみられた。種別は、青磁の出土が多くみられた。

### (1) 青磁

1265～1280は、有文の碗の口縁部である。その中で、1265～1276は、連弁の文様をもつものである。1265～1269は、連弁の形がはっきりしてしのががある。色調は、全体的に緑を呈するが、1268・1269は、薄い茶褐色である。1270～1275は、しのがとれて連弁自体も簡略化されている。色調は、薄緑色である。1276は、文様がさらに簡略化され縦位の線描のみとなる。色調は、濃い緑色で貫入が見られる。1277～1279は、雷文を施文する。色調は、緑を基調とするが、1278は、他の二つに比べやや緑が薄い。1280は、流水文状の文様である。色調は、緑色である。

1281～1292は、無文の碗の口縁部である。1285・1286は、貫入が見られる。1286～1288は、玉縁口縁を呈している。1289～1292は、端反りの口縁をもつものである。1290は、貫入が見られる。全体的に色調の統一はみられない。緑系統のものは、1283・1285・1286・1289・1291で、1283はやや青みがかかっており、1291は他に比べ緑が濃い。灰色系統のものは1284・1282・1287・1288・1292で、1292を除き明るい色調を帯びる。茶系統のものは、1284・1288で、1284の方がやや明るい色調を呈している。

1293～1297は、碗の底部である。すべて高台は、削り出しで、蛇の目高台である。1293・1294

は、暗文と呼ばれる文様を施文してある。1293は、釉薬が高台内部までかかっているように見えるが、高台自体の残りが悪いためはっきりわからない。1294は、畳付けのところまで施釉されている。また、見込み部分に重ね焼き用の目砂がみられる。1295は、高台際まで施釉されている。1296・1297は、貫入がみられ、高台まで施釉されている。色調は、全体的に緑色であるが、1295は、灰色の色調を帯びている。

1298～1303は、皿である。1298は、段皿。1299は、稜花皿で内面に文様を施す。1302は貫入が見られる。色調は、1301・1303は灰色を帯びているが、他のものは緑系統である。

#### (2) 白磁・青白磁

1304～1312は、白磁。1313は、青白磁である。1304～1309は、碗の口縁部で、1304は、玉縁口縁を呈している。1305～1309の碗は、口はげの口縁を呈している。1309は、腰部以下に施釉されていない。色調は、全体的に灰色がかかった色合いをしている。

1310～1312は、白磁の底部である。1310は、碗の底部である。見込みの部分に多くのピンホールがみられ、また、重ね焼き用の目土の跡がみられる。全体に施釉されている。1311は、皿の底部であると考えられる。これも全体に施釉されている。1312も皿の底部と思われる。見込みに陰花文が施されている。釉は、底の部分には、かけられていない。色調は、1312はクリーム色がかかった色調をしているが、他は白色である。

1313は、青白磁の盤ではないかと考える。釉薬は、見込み部分までかかっているが底部にはかかっている。また、底部には、重ね焼き用の目砂がみられる。胴部には、片刃彫りの文様が見られる。

#### (3) 染付

1314は、碗の口縁部ではないかと思う。外面胴部に幾何学文を施し、内部に圈線がみられる。1315は、皿の底部であろうと思うが、見込み底に柳文が施されている。1316は、碗の底部である。見込み底に五弁花文が、外面胴部に唐草文が施されている。1317は、碗の底部である。見込みに「壽」文字が、書かれている。高台は、削り出しの蛇の目高台で、畳付けの近くまで施釉されている。

#### (4) 天目茶碗

1318～1320は、建窯で生産されたものと思われる。1319は、口縁部で他は胴部である。1321・1322は前期のもの比べると光沢がやや劣る。両方とも底部付近であるが、底部は施釉されていない。1323は、光沢が余りなく、完成後火を受けたようである。

## 第V章 まとめにかえて

小中原遺跡では、縄文時代草創期から鎌倉時代までの長い期間にわたる生活跡が検出され、それぞれの時期において重要な問題を提示している。以下、時代を追って簡単にまとめてみたい。

### 1 縄文時代草創期

第V層の薩摩火山灰下層から4点の土器片と石鏃・剥片・スクレイパー・磨石・石皿が出土した。出土遺物は総計71点と少なかったが、調査面積が狭かったことを考えると小中原台地周辺に遺跡は広がるものと想定される。

### 2 縄文時代早期

第IV・V層から検出された遺構は、集石が2基である。十数個の礫がやや集中した状況で検出された。掘り込み等は認められず、集石下位は平坦面であった。遺物はF・G-4～6区に集中した。土器は、岩本式・前平式（円筒・角筒）・吉田式・円筒条痕文土器などが出土した。

石器は、石槍・石鏃・スクレイパー・剥片・石斧が出土した。また、石材については、黒耀石・チャート・頁岩・鉄石英・石英・安山岩がみられた。

### 3 縄文時代後・晩期

第Ⅲ層上部から後期から晩期の遺物が出土した。南福寺式・市来式土器などである。晩期の土器は浅鉢・深鉢で上加世田式土器などである。

### 4 弥生～古墳時代

7～15区のⅡb層下部から弥生～古墳時代の遺物が出土した。弥生時代の甕と古墳時代の高坏・小型鉢・壺・甕である。

### 5 平安時代

多くの遺物とともに掘立柱建物跡・土壇・溝状遺構などが検出された。

柱穴が744個検出され、掘立柱建物跡としてまとまったものが12棟であった。2間×3間のものが9棟、1間×1間、1間×2間のものがそれぞれ1棟ある。掘立柱建物跡7は、調査区域外に延びているため規模は不明であるが、建物柱穴の平均径が60cmを測り、他の柱穴の平均径45cmより大きく柱穴の配置から総柱建物の可能性がある。これらは主軸方向や出土遺物からして、少なくとも2時期以上のものと思われる。

検出面から10～30cmの浅い掘り込みをもつ長方形・楕円形・円形の土壇が36基検出された。断面形は逆台形状をなしたものが主で一部に鍋底状に掘込まれたものもある。性格は不明であるが、F-18区から検出された長さ35cm、幅27cm、深さ9cmの土壇からは火葬人骨が検出された。

溝状遺構は13条検出された。東西方向に走る4条と南北方向に走る8条、それと屈曲する1条からなる。幅は0.2m～0.8m、検出面からの深さは0.1m～0.4mを測る。埋土中からも遺物は出土したが、流水作用の砂粒等は確認できなかった。区域をあらわす遺構と考えられる。

溝状遺構と掘立柱建物跡の切り合い関係から溝状遺構と掘立柱建物跡には新旧関係があることが判明した。

以上の遺構は主として平安時代のもので9世紀前後のものであるが、時間不足のため分類することが出来なかった。

須恵器は9世紀前後のものが主で、坏蓋・皿・坏身・碗・高坏・壺・鉢・甕などの器種があり、これらは遺跡より約2km程南東部にある須恵器窯の荒平古窯跡群（注1）のものと推定されるが、本格的調査がなされていないため、詳細は不明である。しかし、内面に同心円状叩き（車輪文）のあるものが多く、熊本県の荒尾窯跡群（注2）と関係のあるものと考えられる。須恵器の坏蓋を転用した硯も出土している。

土師器には、坏蓋・皿・坏身・碗・壺・鉢・甕などの器種があり、これらも平安時代のものである。坏・碗の中には墨書土器・篋書土器・刻書土器があった。特にこの遺跡での成果として「阿多」と刻書されたものは遺跡の性格を示唆するものと思われる。国土地理院発行の5万分の1地形図「加世田」には遺跡地の上に阿多と記載してある。1000年も昔から阿多の名称が継続されてきていたことは驚くに値する。

黒色土器も多く出土した。このように多量に出土したものは、薩摩郡衙推定地の川内市西ノ平遺跡（注3）が知られている。内面のみ黒く研磨したもの、内外面とも丁寧に研磨したもの、内外面とも赤色顔料を塗り込めたもの、内面のみ赤い内朱土師器がある。器形としては、皿・坏蓋・坏身・碗・鉢などの小型品のみである。

このほか、焼塩壺・帯金具・鉄製品などが出土している。

これらの遺構・遺物等から官衙的性格の強いものがみつまっている。旧薩摩国には13の郡があり、阿多郡には鷹屋・葛例・田水・阿多の4郷があることから、これらに関する遺跡と推定することが出来る。この阿多一帯で調査が進めば、古代史の謎が解けてくる可能性も考えられる。

## 6 鎌倉時代

鎌倉時代の遺構・遺物は台地西側の18～20区を中心に検出された。遺構は竪穴遺構1基と柱穴24個が検出され、遺物は土師器・陶磁器が出土した。土師器は皿・大皿が主で鉢も出土している。陶磁器は、青磁・白磁・染付・天目で碗と皿が主である。

注1 上村俊雄「荒平須恵器古窯址群発見の意義とその問題点」『古文化談叢14』1984

注2 松本健郎「荒尾窯跡群一生産遺跡基本調査報告書Ⅱ」『熊本県文化財調査報告48』1980

注3 鹿児島県教育委員会「成岡・西ノ平・上ノ原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』1983

## 小中原遺跡の地質

成尾 英仁

小中原遺跡付近の一般的な地形は、万之瀬川がつくる沖積平野周辺に分布する、比高20～30mの急崖により境されたシラス台地である。台地内部は平坦で定高性に富んでいるが、場所によっては細く長い谷が内部まで刻まれている。

本遺跡の基本的な地層は南薩地方西部に見られるものと同じであり、①耕作土 ②黒色腐植土 ③ガラス質黄橙色火山灰 ④肌色土 ⑤軽石混入黒色腐植土 ⑥肌色土 ⑦褐色粘質土 ⑧白色火砕流堆積物の順に堆積している。場所によりいくつかの地層が欠けたり、厚くなったり薄くなったりしているが、白色火砕流堆積物を除いて、いずれも下位の地層に平行にマントルベッディングして堆積しており、降下火砕物とそれを母材として発達した腐植質土と考えられる。以下、各層の特徴と鉱物組成、起源について述べることにする。なお、層番号は 頁の区分に従った。

### I層 耕作土

II層 色調の違いによりa、bの二層に区分される。上部のa層はやや色の薄い黒色腐植土で暗灰色褐色を呈する。2～3mm大の白色で新鮮な軽石が点在している。全体にサラサラしており粘質はない。下部のb層は上部にくらべ黒味が強く、真黒色を呈する腐植土である。全体に岩片の含有量も少なく、サラサラしており粘質はない。腐植含有量が多く、手でさわると付着する。b層は有色鉱物の含有量が多く、鏡下では全体に黒っぽく見える。有色鉱物ではシソ輝石が多く、次いでフツウ輝石である。本遺跡の他の層準にくらべ、少量のカンラン石とカクセン石が入っている。カンラン石は薄い茶色を呈しており、角がとれて丸くなっている。カクセン石はごくまれに認められるが、黒緑色でへき開が明瞭な長柱状である。火山ガラスも見られるが、やや薄い茶色をしたバブルウオール型のものが大部分である。

III層 黄橙色ガラス質火山灰、上端はやや腐植が混入し黒ずんでいるが、中～下部は明るい黄橙色を呈している。全体にオガクズ状の火山灰で粘質はなくサラサラしている。また、成層構造などは認められない。ほぼ、同一の厚さで下位の地層に平行に堆積している。有色鉱物はシソ輝石、フツウ輝石がほぼ等量入っており、他の層準の地層に較べフツウ輝石が多い特徴がある。火山ガラスは、バブルウオール型のものが多量に入っているが、繊維状の細長いガラスも入っている。バブルウオール型の火山ガラスはやや薄い茶色を帯びており、平板状・Y字形・粒状など形態は様々である。繊維状のものは風化し、やや薄いピンクを呈している。鉱物・ガラス以外では、白色～灰白色の岩片が目立っている。

IV層 明茶白色弱粘質土、全体的に汚れた肌色を呈し、やや粘質を帯びた土壌である。成層構造などは認められないが、明茶白色とややくすんだ肌色の土壌がダンゴ状になり、それらが複雑にまだらに入り込んでいる。有色鉱物ではシソ輝石が多量に入っており、それ以外わずかに



フツウ輝石が入っている。無色鉱物ではシャチョウ石以外に、わずかに石英が認められる。火山ガラスはバブルウオール型のものがわずかに入っているが、それらのほとんどは透明無色である。形状は平板状やY字形など様々である。繊維状の火山ガラスは認められない。岩片は白色～灰白色で、安山岩もしくは石英安山岩質である。

V層 含軽石黒褐色腐植土、腐植含有量が多いため黒味が強く、また粘質も強くベトベトしている。本層の下部には長径2 cm以下の風化した黄橙色軽石が点在している。軽石の上下方向への移動は少なく。遠方から観察すると軽石が層をなしているように見える。有色鉱物はシソ輝石とフツウ輝石であるが、シソ輝石が大部分をしめる。火山ガラスはほとんど入っていないが、まれに無色透明で平板状のバブルウオール型のものが見られる。岩片は灰白色～白色のものが多く。

VI層 茶褐色弱粘質土、やや汚れた肌色を呈する土で、粘質がありベトついているが、下位の層に比べると弱い。有色鉱物はシソ輝石が大部分で、次いでフツウ輝石である。シソ輝石には磁鉄鉱が多く付着し、また全体に風化し部分的に赤色の酸化皮膜が見られる。火山ガラスは無色透明な平板状のバブルウオール型のものが主体で、上位の層に比べかなり多量に入っている。

VII層 茶褐色強粘土質、粘質のきわめて強い土で、チョコレート層と俗称されている。かわくとクラックが入る。鏡下では有色鉱物が少なく、無色鉱物と火山ガラスが目立ち白っぽく見える。有色鉱物はシソ輝石とフツウ輝石で、シソ輝石の含有量が多い。上位のシソ輝石同様磁鉄鉱の付着や、赤色皮膜の付着が見られる。無色鉱物はシャチョウ石と石英、火山ガラスは無色透明な平板状のバブルウオール型である。岩片は蛋白石様の鈍い光沢をもつものが目立つ。

VIII層 白色火砕流堆積物、比高20～30mの急崖を形成する火砕流堆積物で、多量の軽石や無色透明なバブルウオール型火山ガラスを含んでいる。鉱物組成はシソ輝石、フツウ輝石、シャチョウ石、石英である。

小中原遺跡の各層について、肉眼の特徴と鏡下における鉱物組成について述べてきたが、以上のことから各層は次のような起源を持つものと考えられる。

II層は色調の違いにより、上下二層に区分されるが、下部は他の層準に見られないカンラン石・カクセン石を含んでおり、またレンガ色の岩片を含んでいる。開聞岳噴出物には特徴的にカンラン石が含まれ、レンガ色の岩片を多量に含んでいることから、本層の中に開聞岳噴出物が入っていると考えられる。また、池田カルデラ起源の池田湖火山灰は南薩地方一帯から大隅地方中～南部に広く分布し、有色鉱物としてカクセン石を含んでいるが、本層のカクセン石は層準から判断して池田湖火山灰に由来すると考えられる。ただ、小中原遺跡付近では両者とも層として残っていないことから、分布の限界に近く腐植土集積中に混入した程度であったと思われる。

III層は薄い茶色を帯びたバブルウオール型の火山ガラスが多量に入っていること、有色鉱物としてシソ輝石・フツウ輝石を含んでいること、色調が黄橙色を帯びていることなどから、

鬼界カルデラから約6,300年前に噴出したアカホヤ（幸屋火砕流堆積物）に対比される。鏡下では繊維状の火山ガラスも認められることから、火砕流堆積物や降下軽石も堆積していると推定されるが、肉眼的観察ではそれらは認められない。しかし、ここより北部の鹿児島市周辺でも火砕流堆積物や降下軽石が堆積していることから、本遺跡では堆積したもののその後の作用により欠如したと考えられる。

Ⅳ層はシソ輝石やフツウ輝石を含み、また肉眼的にも火山灰の堆積層を持つことから、指宿火山起源の権現山火山灰とされてきたが、最近の発掘の増加に伴い県内中～南部の大半の遺跡で認められるようになり、しかもその厚さがほとんど変化しないことなどから、非火山起源の堆積物の可能性が指摘されるようになった。

Ⅴ層は厚い黒色腐植土中に黄橙色軽石が点在しているが、軽石の鉱物組成としてシソ輝石・フツウ輝石を含んでいること、縄文時代早期と細石刃時代の境界に位置することなどから、桜島火山起源の薩摩（P14、薄層理軽石質火山灰）に対比することができる。薩摩は約11,000年前に桜島の袴越付近で発生した海底火山噴出により生じたもので、南九州の広い範囲に厚く堆積している。薩摩半島中軸部では約50cmの厚さに堆積しているが、本遺跡では堆積状況が不明であり良くない。

Ⅵ～Ⅶ層は無色透明で平板状のバブルウオール型の火山ガラスを多量に含んでいること、有色鉱物としてシソ輝石・フツウ輝石を含んでいること、小型ながら無色鉱物の石英を含んでいることなどから、下位の入戸火砕流堆積物（シラス）を母材として発達した腐植土が風化した土壌と考えられる。県内の他地方の遺跡では、この層準にカクセン石を含む特徴的な火山灰が挟まっているが、本遺跡では検出されなかった。

Ⅷ層は無色透明なバブルウオール型火山ガラスを多量に含み、また少量ながら石英を含むことなどから、始良カルデラから約22,000年前に噴出した入戸火砕流堆積物（シラス）に対比することができる。

小中原遺跡の堆積物中の鉱物組成

	有 色 鉱 物	無 色 鉱 物	ガ ラ ス
Ⅱ層 b	Hy Au O <sub>11</sub> Ho	P1 Qz	バブルウオール (b)
Ⅲ層	Au Hy	P1	バブルウオール (b) 繊維状
Ⅳ層	Hy Au	P1 Qz	バブルウオール (w)
Ⅴ層	Hy Au	P1	バブルウオール (w)
Ⅵ層	Hy Au	P1 Qz	バブルウオール (w)
Ⅶ層	Hy Au	P1 Qz	バブルウオール (w)

# 鹿児島県金峰町小中原遺跡出土の火葬人骨

小片丘彦・竹中正巳・峰 和治・佐藤正史  
(鹿児島大学歯学部口腔解剖学第2講座)

平成2年(1990)10月、鹿児島県日置郡金峰町新山に所在する小中原遺跡の調査の際、火葬人骨が出土した。所属年代は考古学資料から、9世紀ごろ(平安時代)と推定される。鹿児島県下における同時代の火葬人骨は蔵骨器に納められたものが大部分である。本例は土壌中に石や木炭片も敷かず、直接納められており、考古学的にも意義ある出土例であると考えられる。

本火葬人骨の出土状態は現在の地表下50cmほどのところに、長さ35cm、幅27cm、深さ9cmにわたって無秩序に集積されていた。火葬骨の保存状態は極めて悪く、焼骨特有の亀裂、捻れや収縮が認められた。これらはすべて小骨片で、最も大きいものでも長径45mmほどであり、全重量も240g程度しかなかった。なお、残存する骨の構成や全重量などから、本火葬骨は1個体分であると考えられる。接合、復元により確実に骨種を同定できた骨片は以下の通りである。

## 1. 頭蓋骨

左側頭骨(錐体)、左頭頂骨(ラムダ縫合・鱗状縫合を含むアステリオン近辺、鱗状縫合部)

## 2. 上肢骨

左上腕骨(内側縁から内側上顆部)、右橈骨(骨頂部、骨体部)

## 3. 下肢骨

右大腿骨(骨頭)、左腓骨(骨体部)、右腓骨(骨体部)

このほか、左右不明であるが大腿骨(骨体中央部)、上下不明であるが歯槽部が同定された。しかし大半は、残念ながら部位の確認ができなかった。したがって、性別、年齢を推定することは不可能であった。

焼骨の色調は平野(1935)が200℃で焦茶色、400℃で黒色、500℃で灰白色、600℃で純白色、800℃で淡桃色を帯びた乳白色となると述べている。本火葬骨をその色調で分けると、全焼骨片の3/4が灰白色で、残りは、ほとんど外面が灰白色で内面が黒色の骨片であった。わずかではあるが、全体が黒色や青灰色を示す骨片や、骨片の一部がほとんど焼けておらず骨本来の淡黄色を示すものがみられた。灰白色を示す骨片のほとんどは体肢骨片で、外側は灰白色で内面が黒色を示す骨片の大半は頭蓋骨片であった。淡黄色を示すのは、右大腿骨骨頭の一部であった。これは、大腿骨骨頭が寛骨臼に深く覆われており、火力が及ばなかったためと考えられる。同一個体中でも、体の各部分、骨の各部位によって焼け具合が異なっていることがよく分かる。

また、軟部組織に包まれている長骨が焼けた場合、白骨を焼いた場合に比べ外面の深い干割れ、著しい捻れが起こると Buikstra (1973) が述べている。本焼骨の長骨破片にもその特徴がみられるので、本例も軟部組織が残っている段階で焼かれたものと思われる。

最後に、本火葬人骨の調査の機会を与えてくださった鹿児島県教育委員会文化課に感謝する次第である。

[参考文献]

Buikstra.J.E., 1973:Technique and interpretation in the

~The Perrins Ledge Crematory~ by J.E.Buikstra and

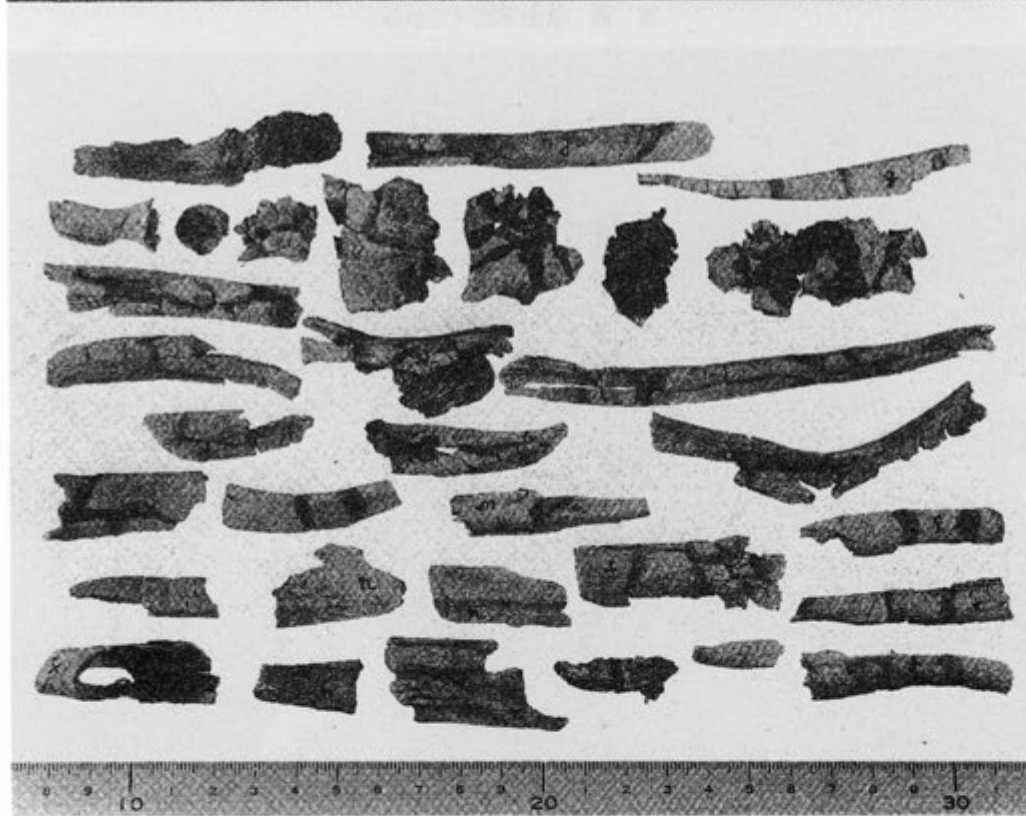
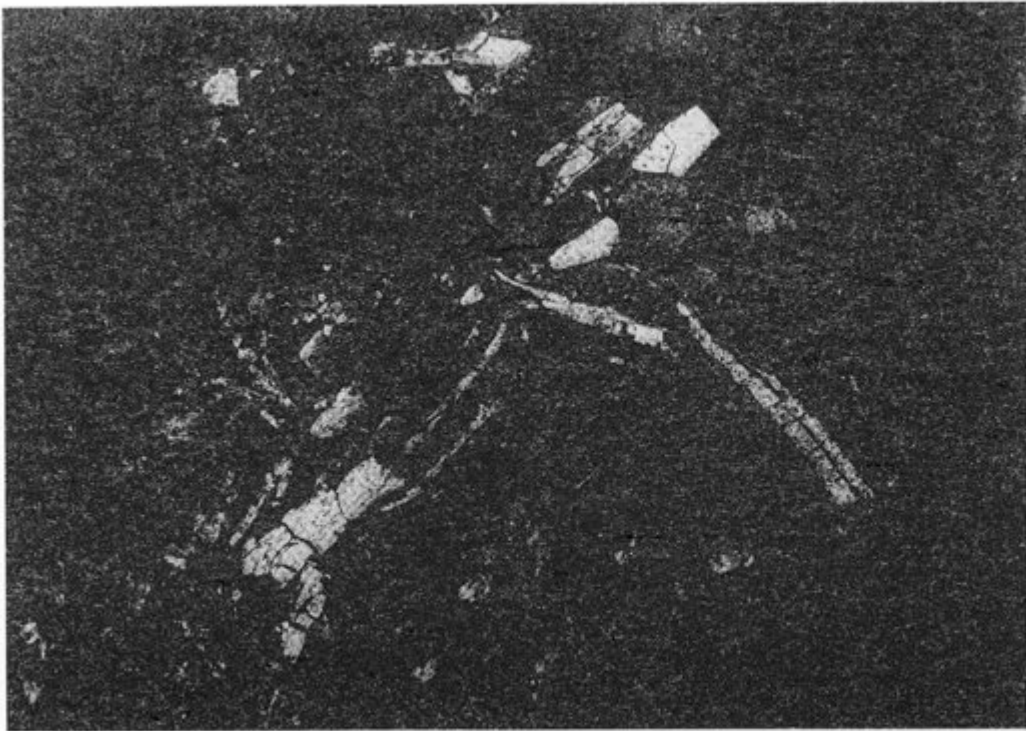
L.Goldstein. Illinois State Museum. pp15-23

平野賢二, 1935:歯牙の熱処理に対する研究(第一編)人類歯牙の熱処理に就いて, 口腔病学雑誌, 9: 375-393

池田次郎, 1981:出土火葬骨について, 大安萬侶墓, 奈良県立橿原考古学研究所編 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告, 34:79-88

松下孝幸, 1984:鹿児島県大隅半島出土の火葬骨, 鹿児島考古, 18:163-169

小片丘彦, 1988:川内市御陵下町越ノ巣出土蔵骨器内の火葬骨, 川内市歴史資料館年報, 昭和62年度:5-6





遠景 航空写真(北から)



近景 航空写真(北から)



近景 航空写真（北から）



近景 航空写真（東から）



遠景 航空写真（西から）



遺構（西から）





遺構（航空写真）



縄文時代草創期発掘風景



土层断面



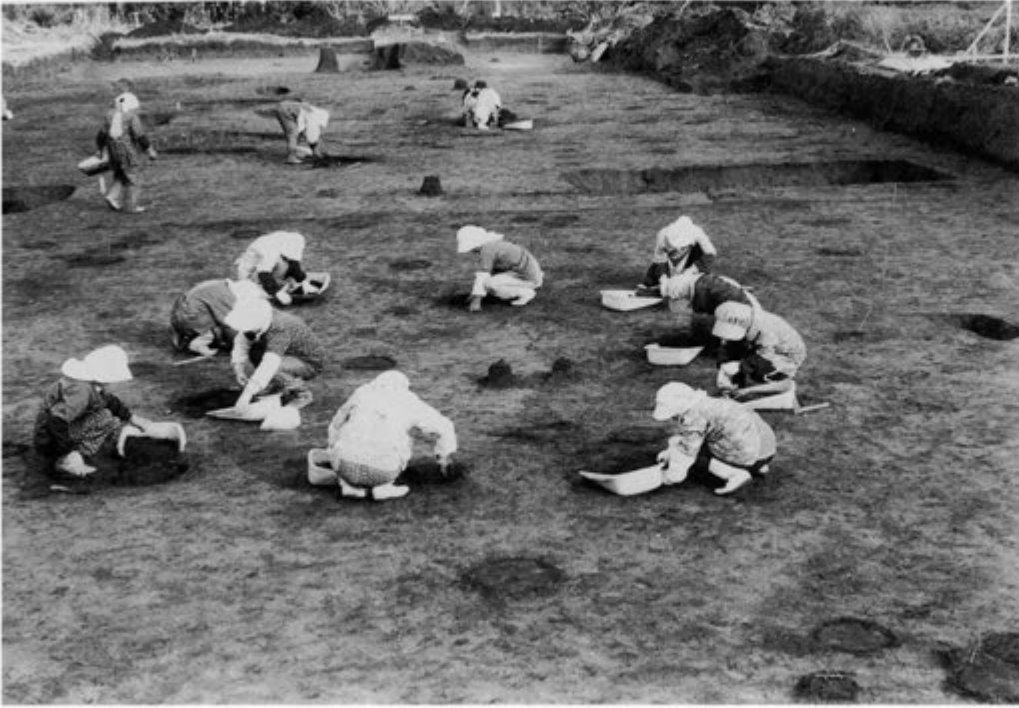
土层断面 (G-21区)



発掘風景（第一次調査）



発掘風景（第二次調査）



遺構検出作業風景



平安時代遺物出土状況



平安時代遺物出土状況



平安時代遺物出土状況



平安時代遺物出土状況



土師器坏出土状況



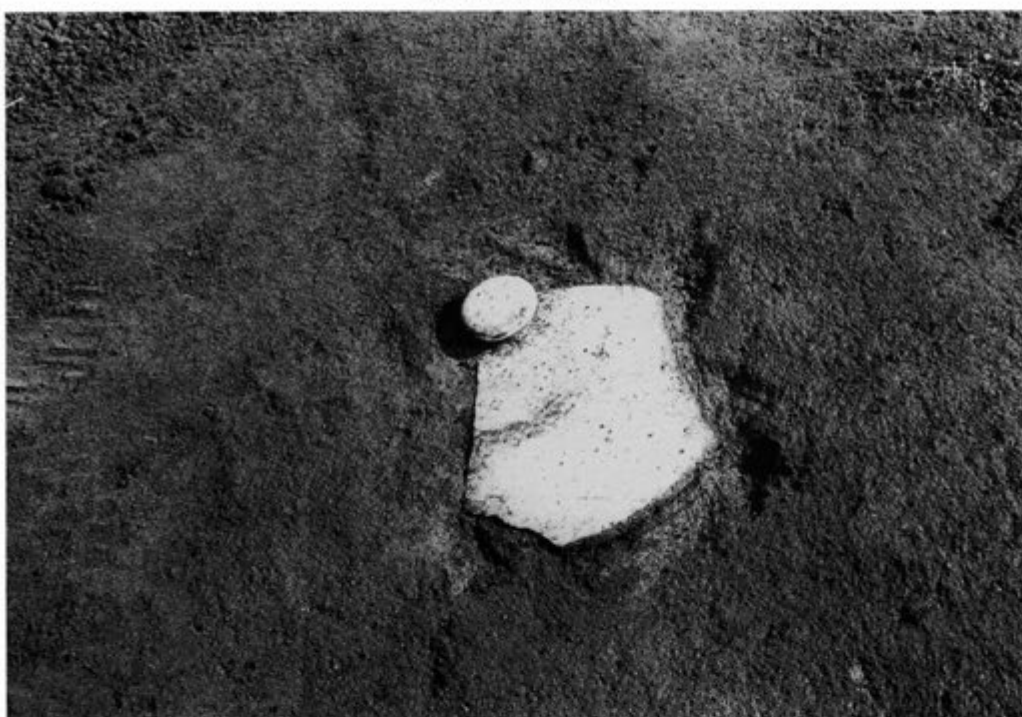
土師器坏出土状况



土師器坏出土状况

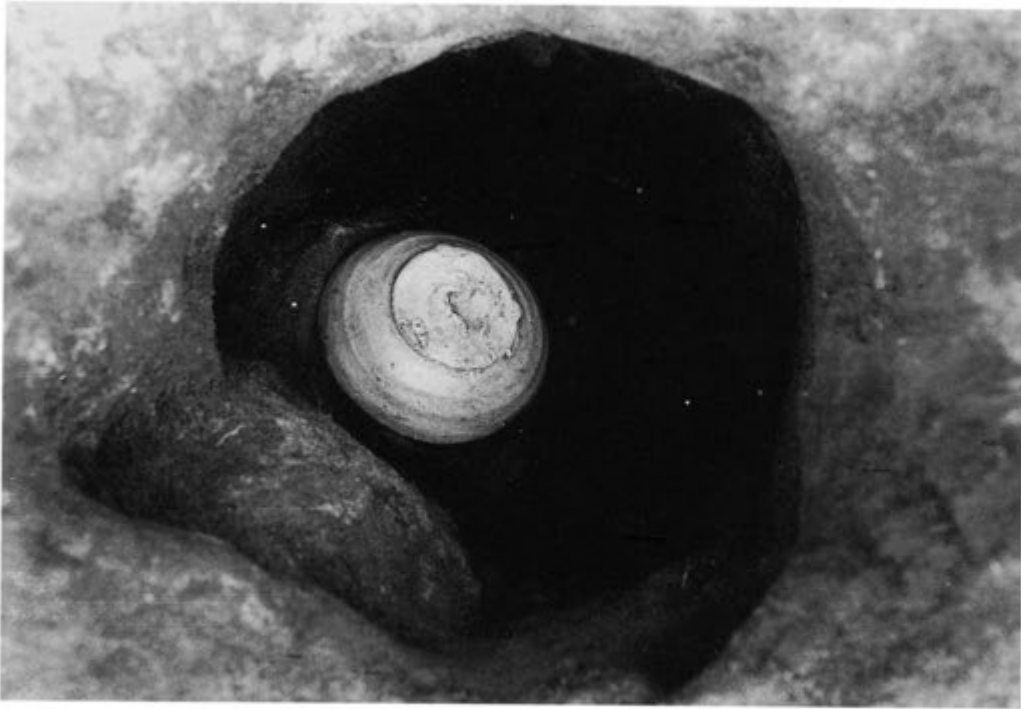


土師器坏出土状况

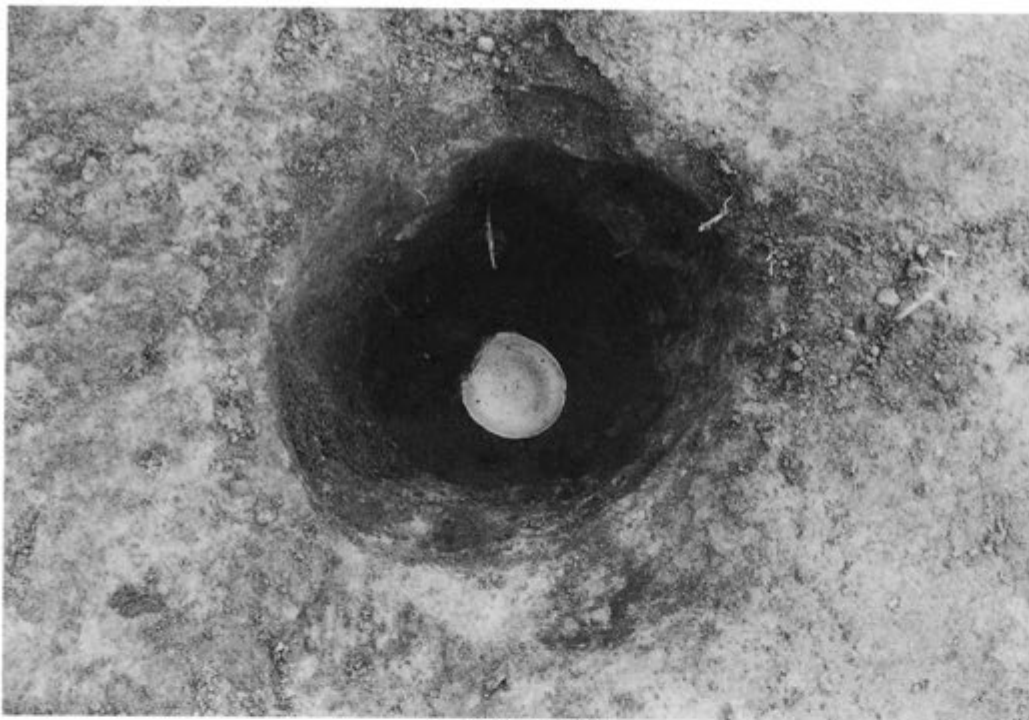


須惠器蓋出土状况





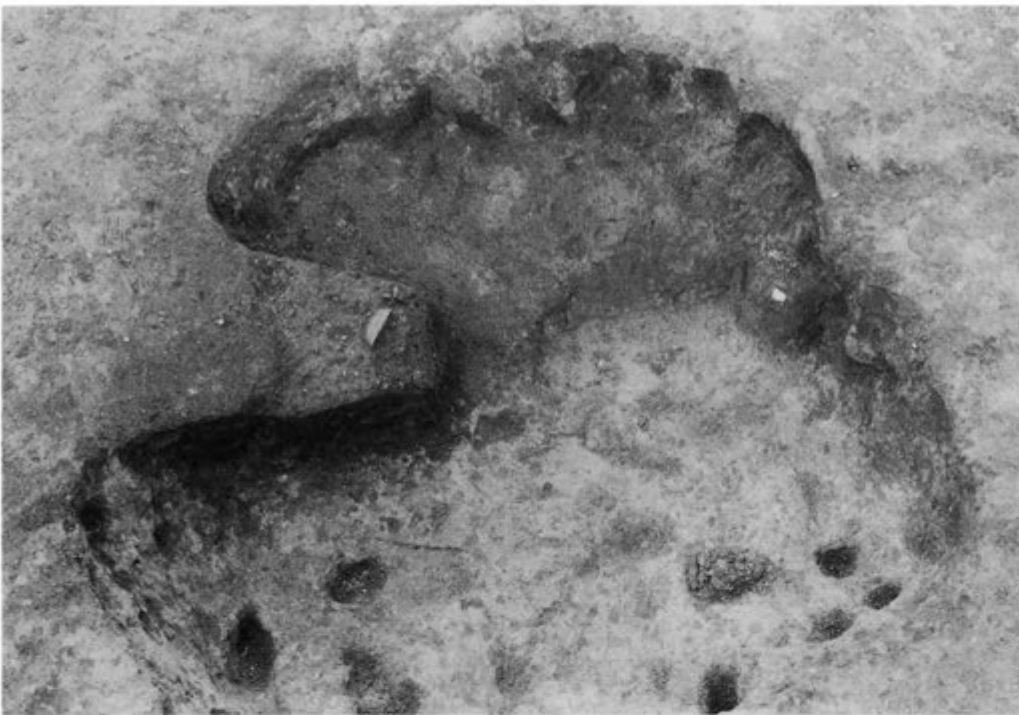
土師器环出土状況



土師器皿出土状況



成川式土器出土状況



土壇 (SK04) と土師器坏出土状況



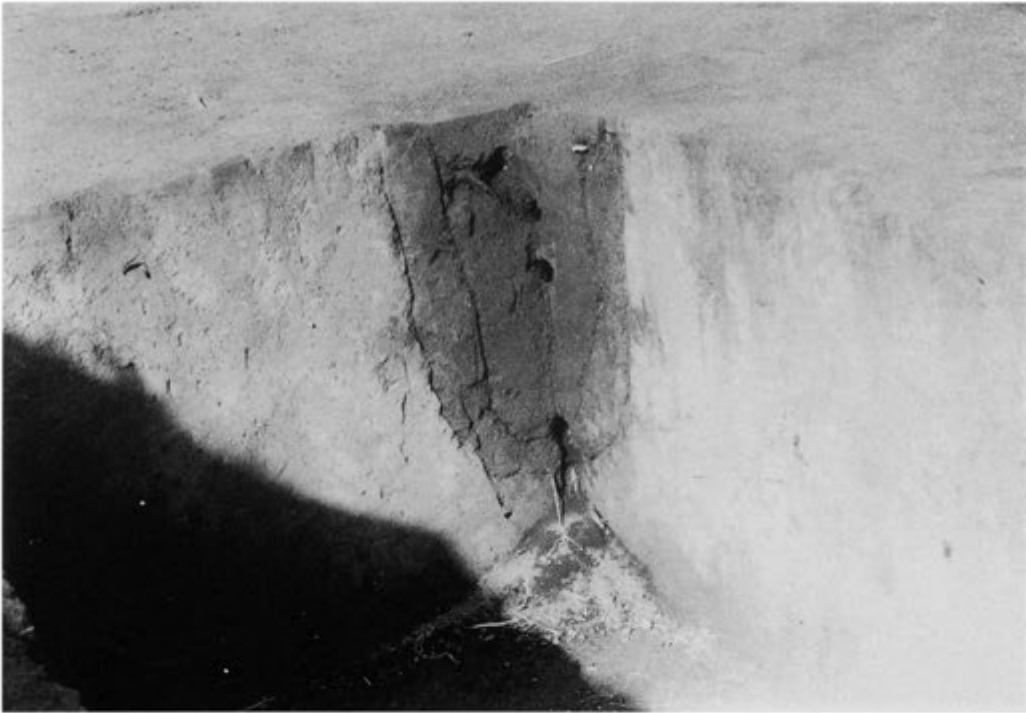
縄文土器出土状況



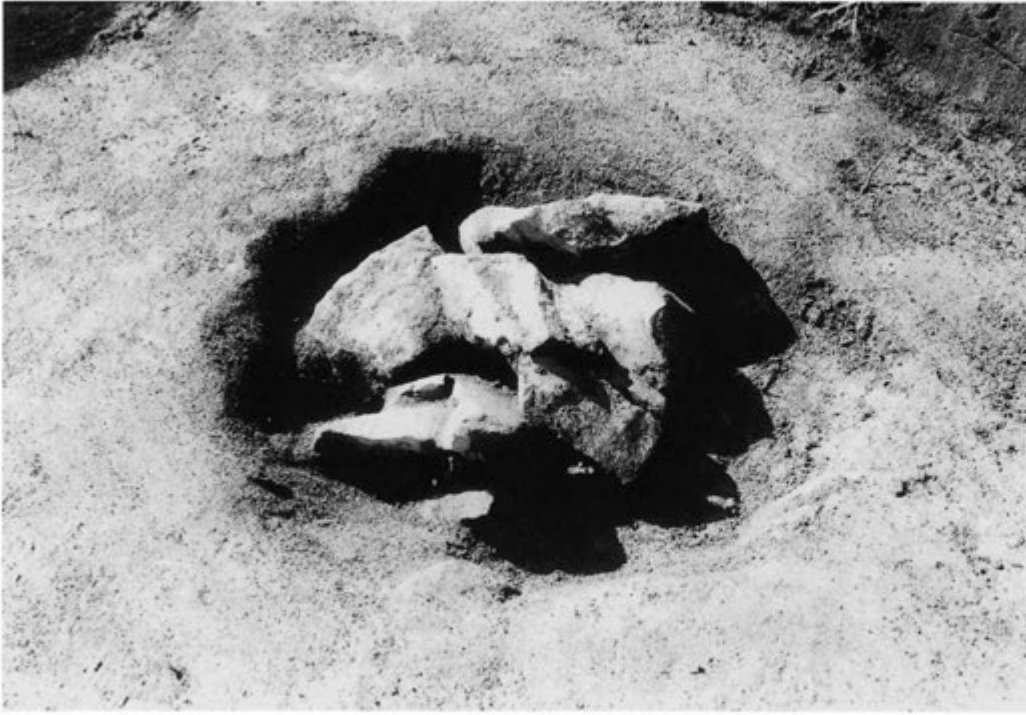
縄文時代後期土器出土状況



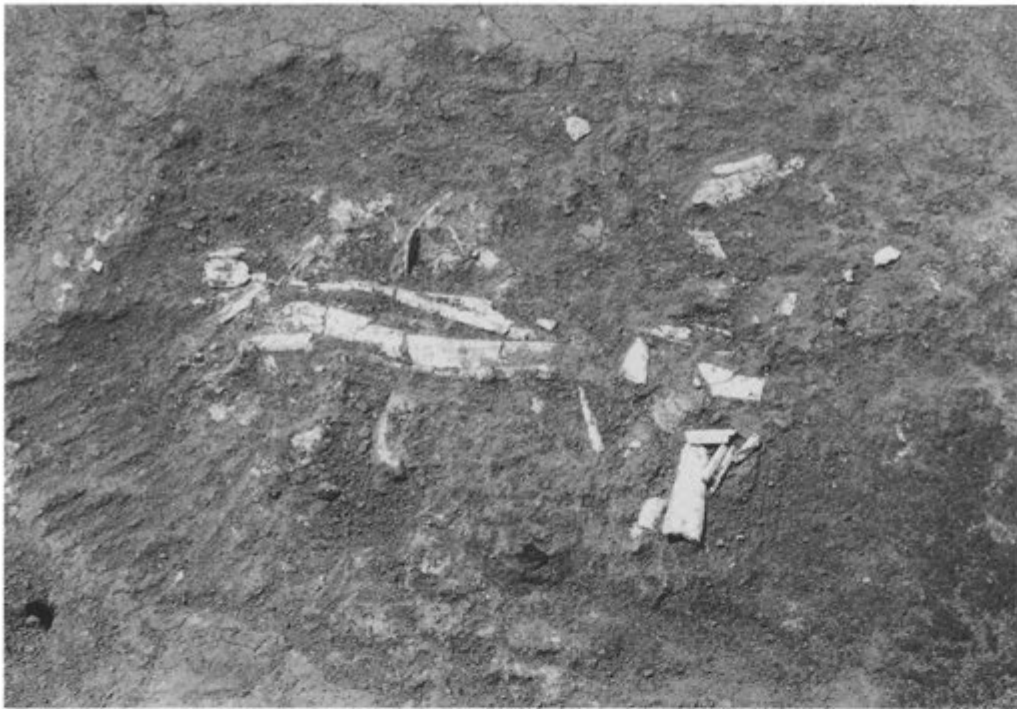
柱穴検出状況



柱穴断面



ビット検出状況



平安時代土壙人骨出土状況



掘立柱建物跡 (SB02)



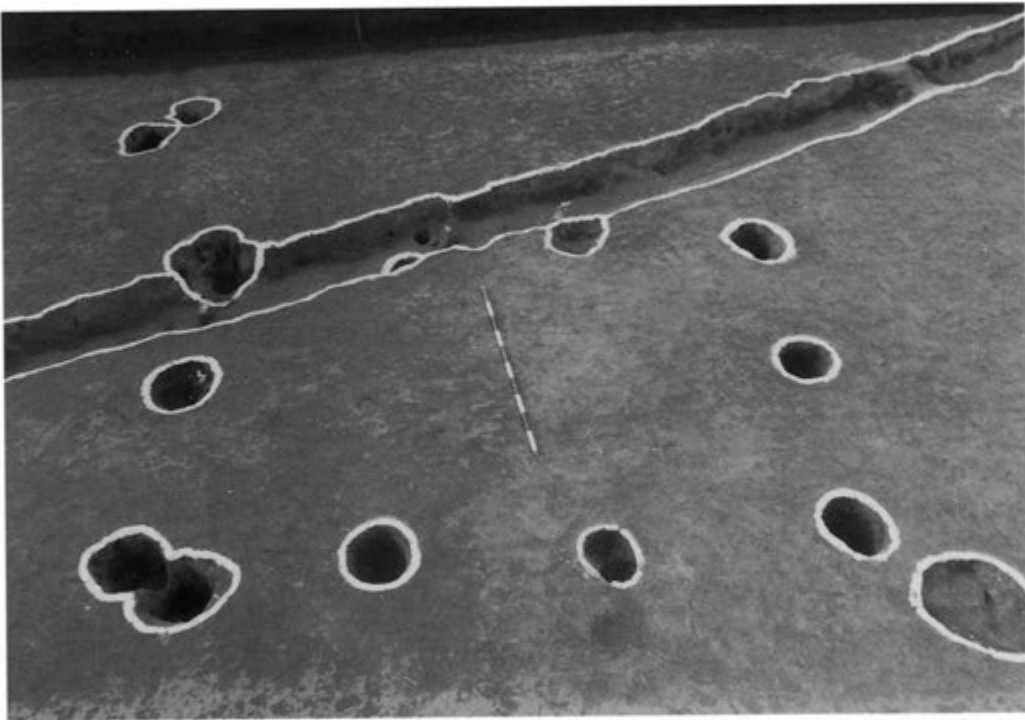
掘立柱建物跡 (SB03)



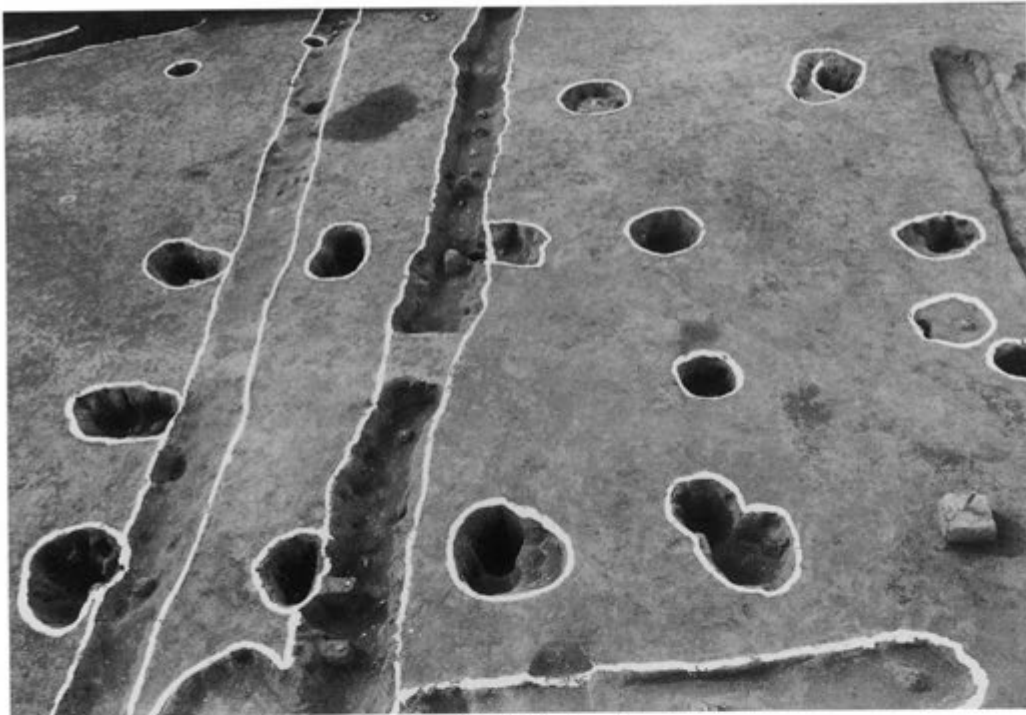
掘立柱建物跡 (SB03)



掘立柱建物跡 (SB06, SB07)



掘立柱建物跡 (SB10)

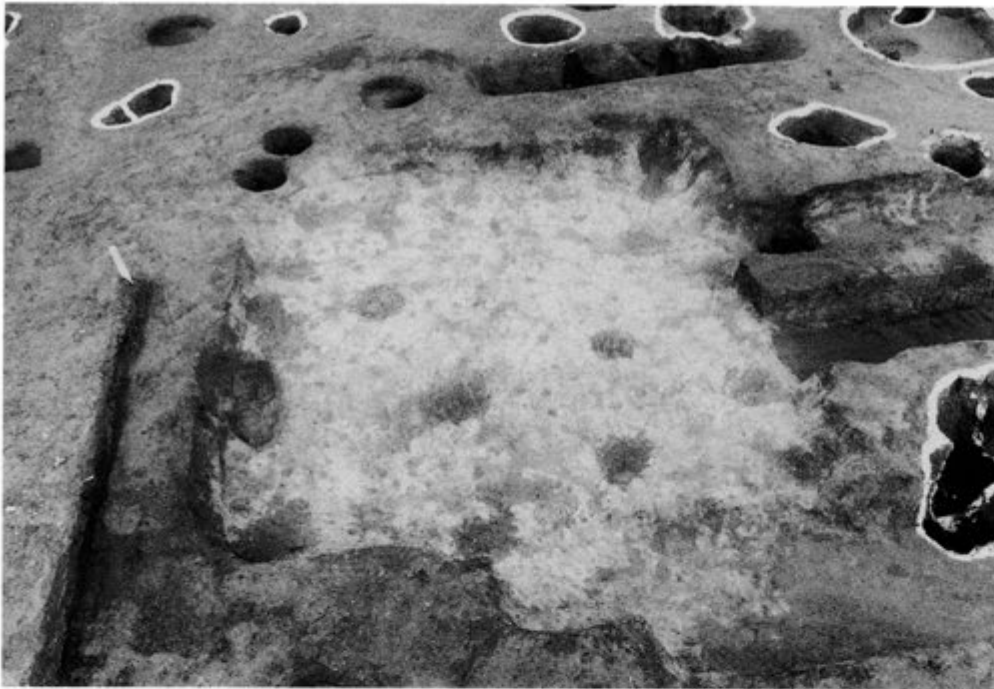


掘立柱建物跡 (SB10)





鎌倉時代竪穴遺構



鎌倉時代竪穴遺構



繩文時代出土石器



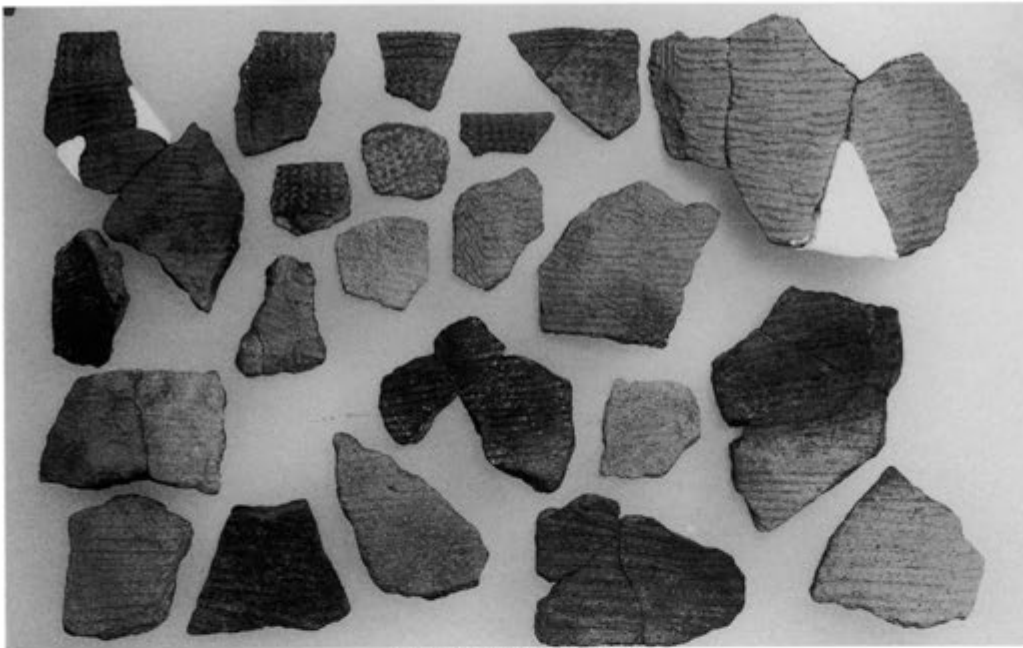
縄文時代早期土器 (1)



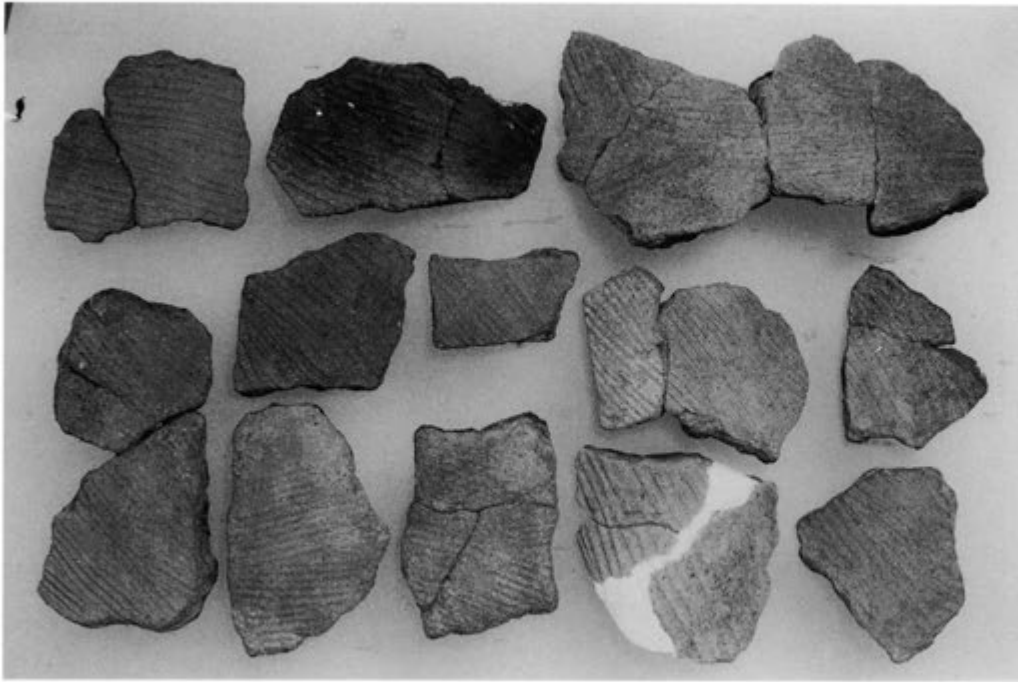
縄文時代早期土器 (2)



縄文時代早期土器 (3)



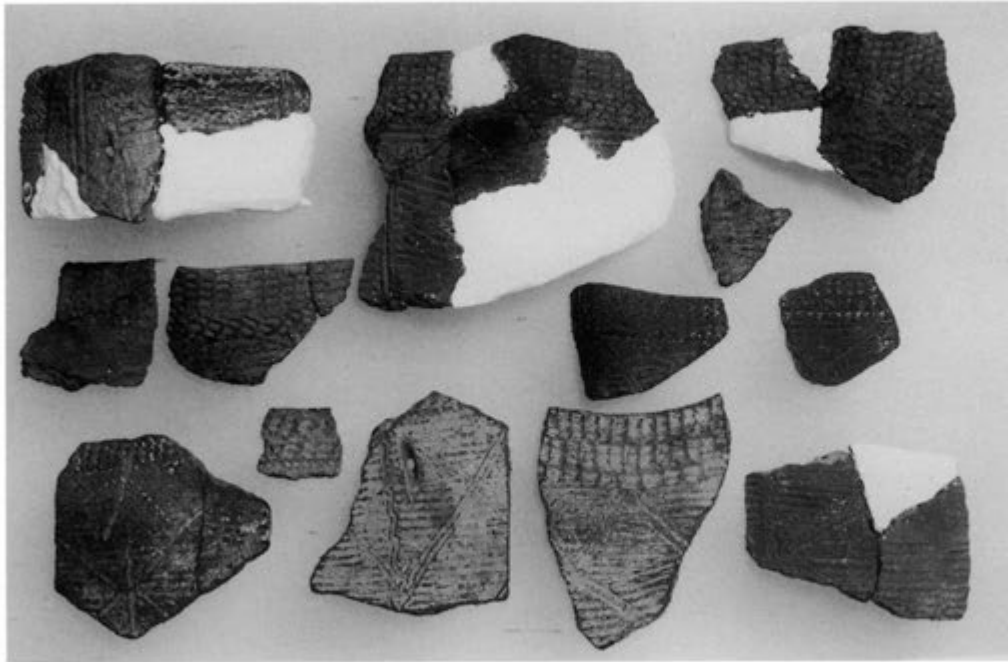
縄文時代早期土器 (4)



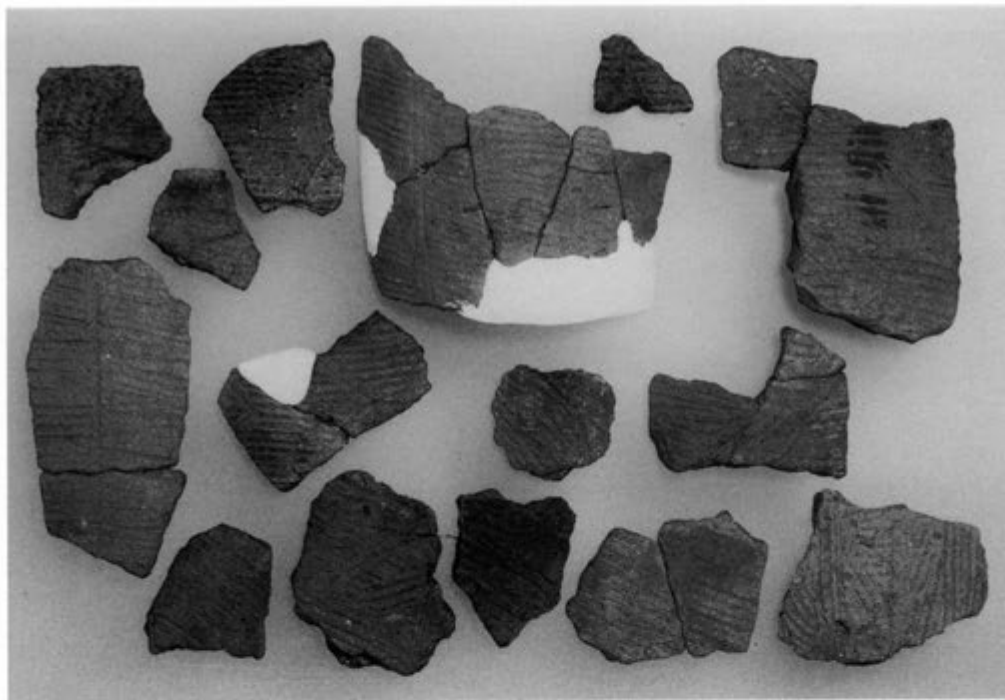
縄文時代早期土器 (5)



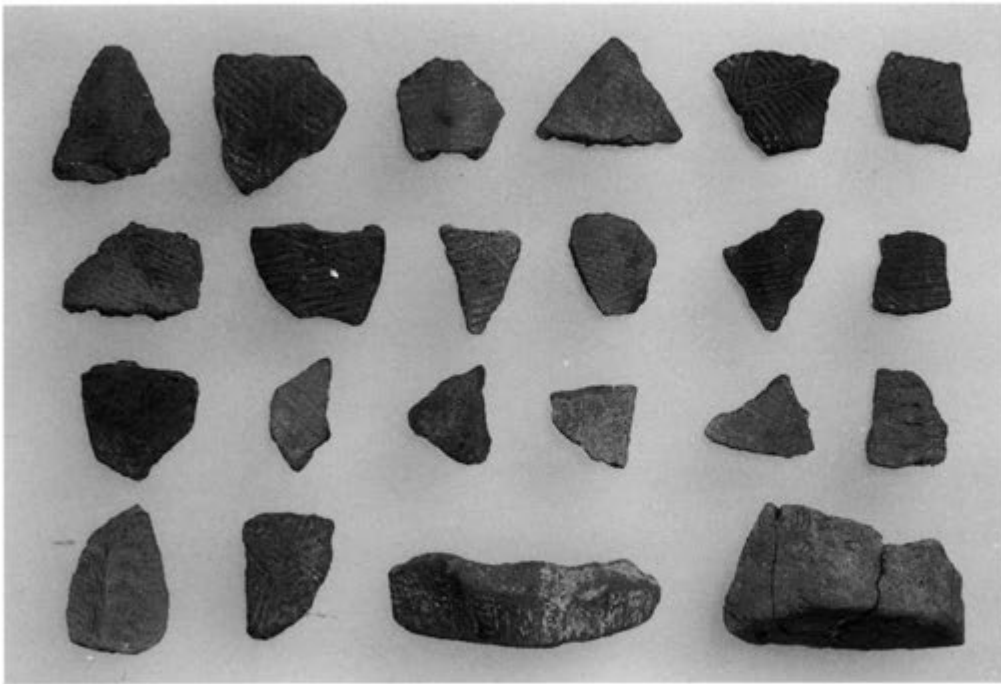
縄文時代早期土器 (6)



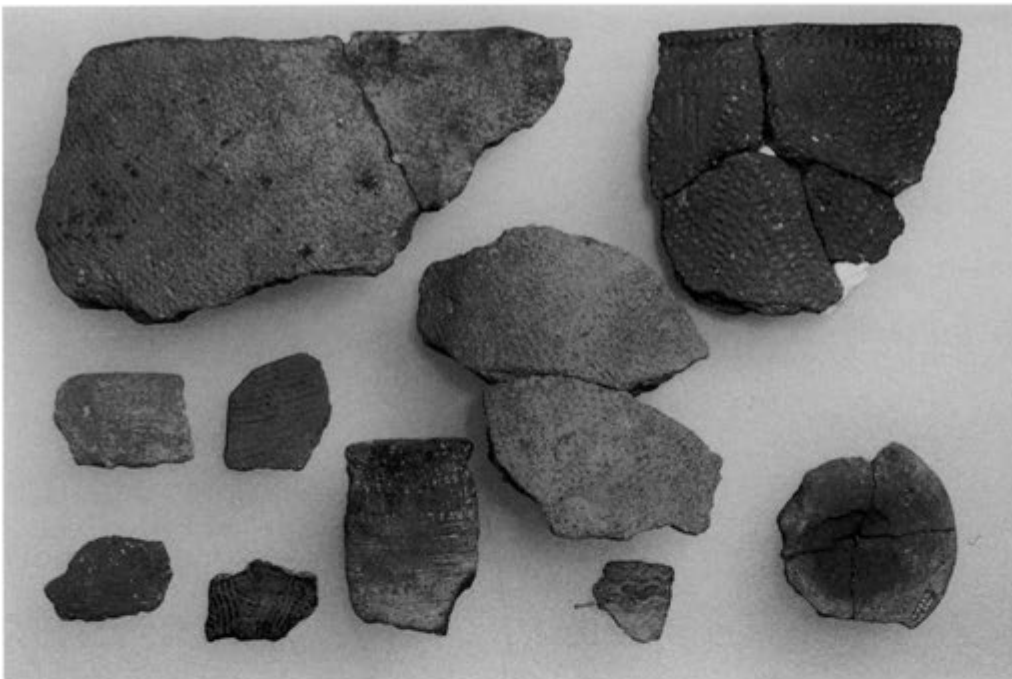
縄文時代早期土器 (7)



縄文時代早期土器 (8)



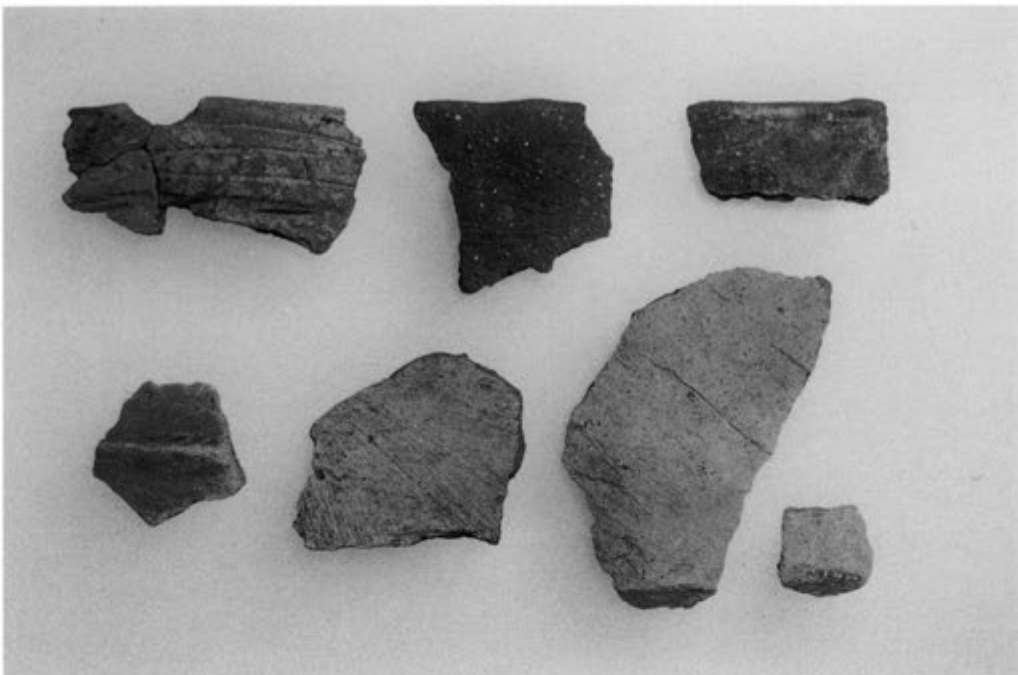
縄文時代早期土器 (9)



縄文時代早期土器 (10)



縄文時代後期土器 (1)



縄文時代後期土器 (2)





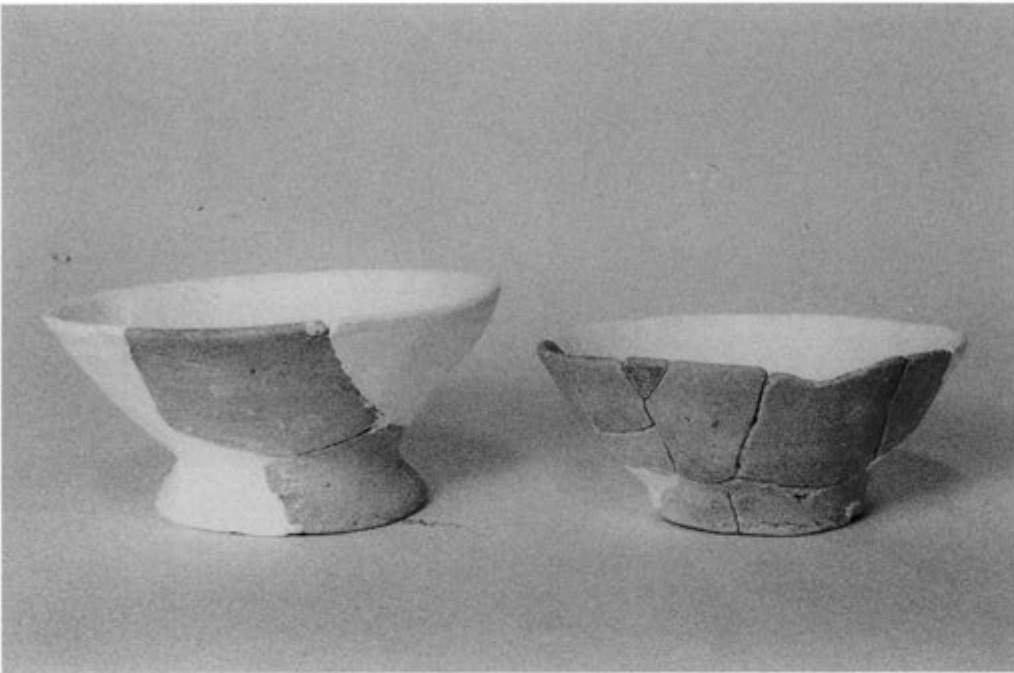
縄文時代晩期土器



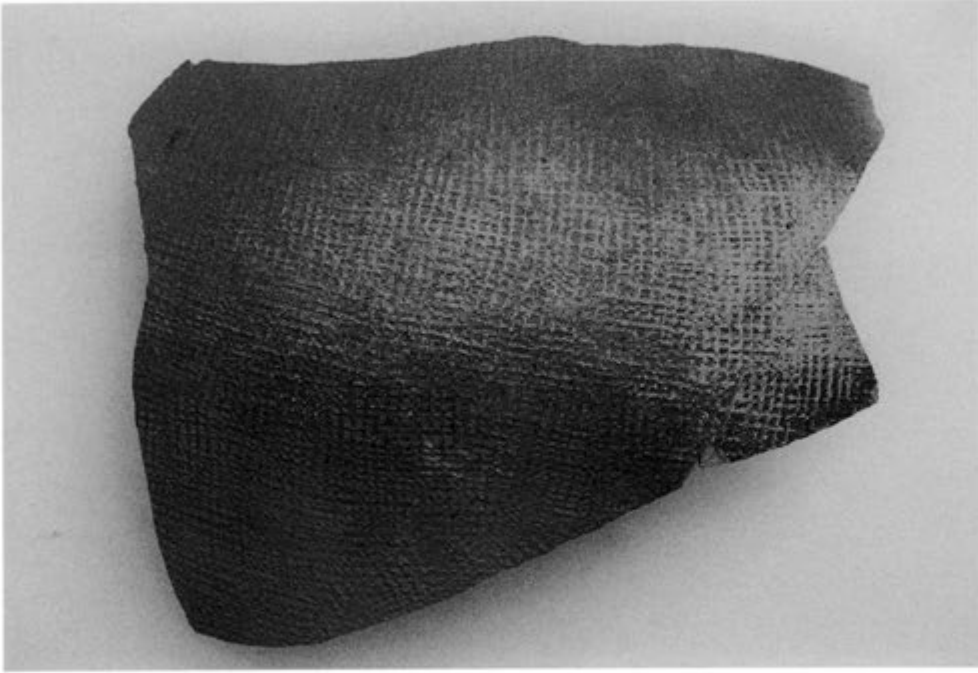
弥生～古墳時代土器



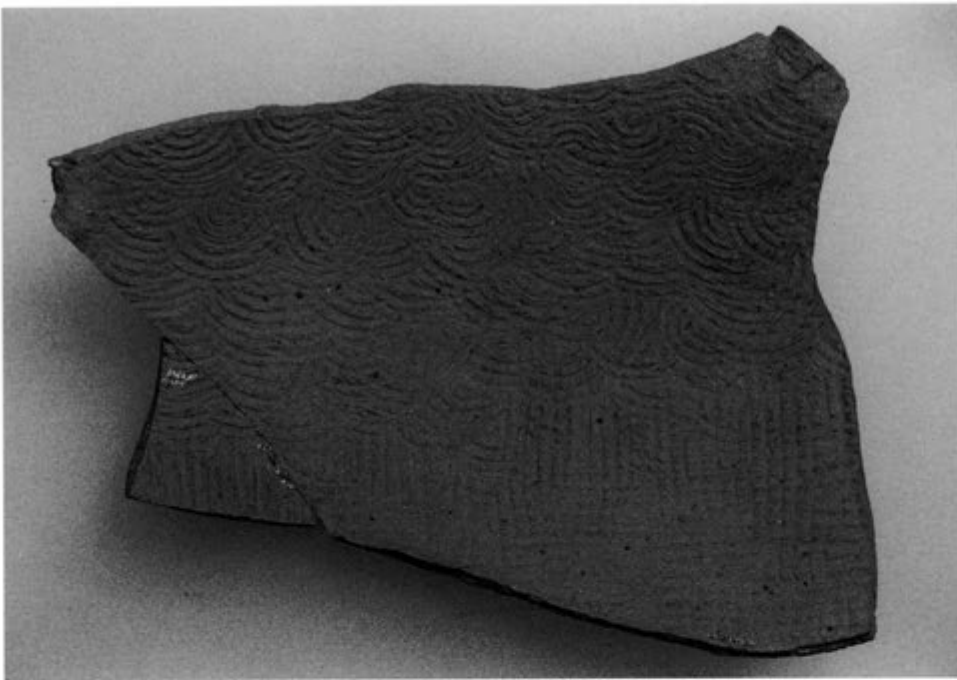
据立柱建物跡出土遺物（1）



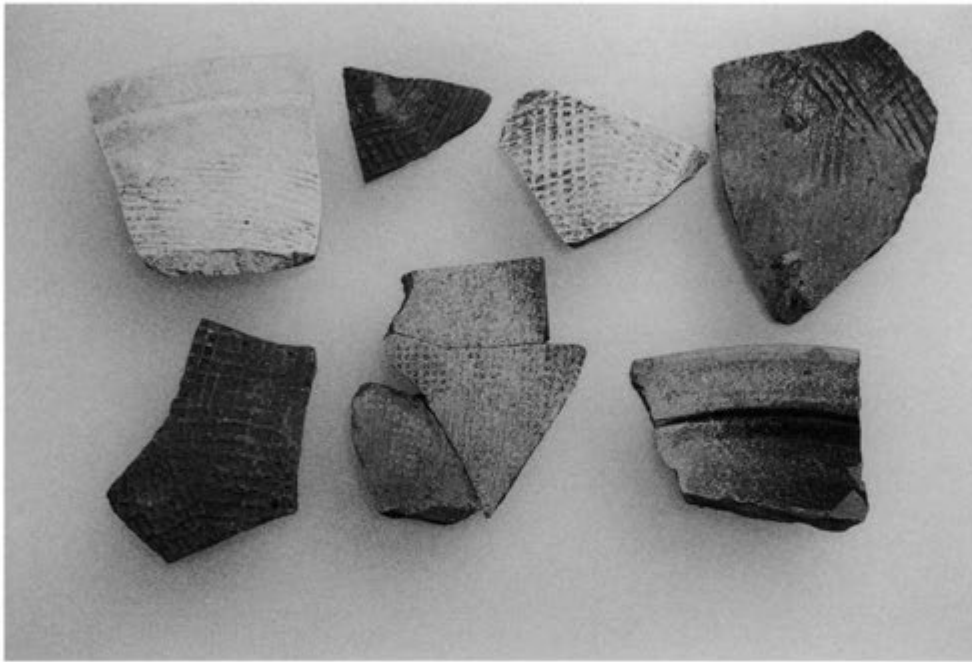
据立柱建物跡出土遺物（2）



土壙出土遺物 (1)



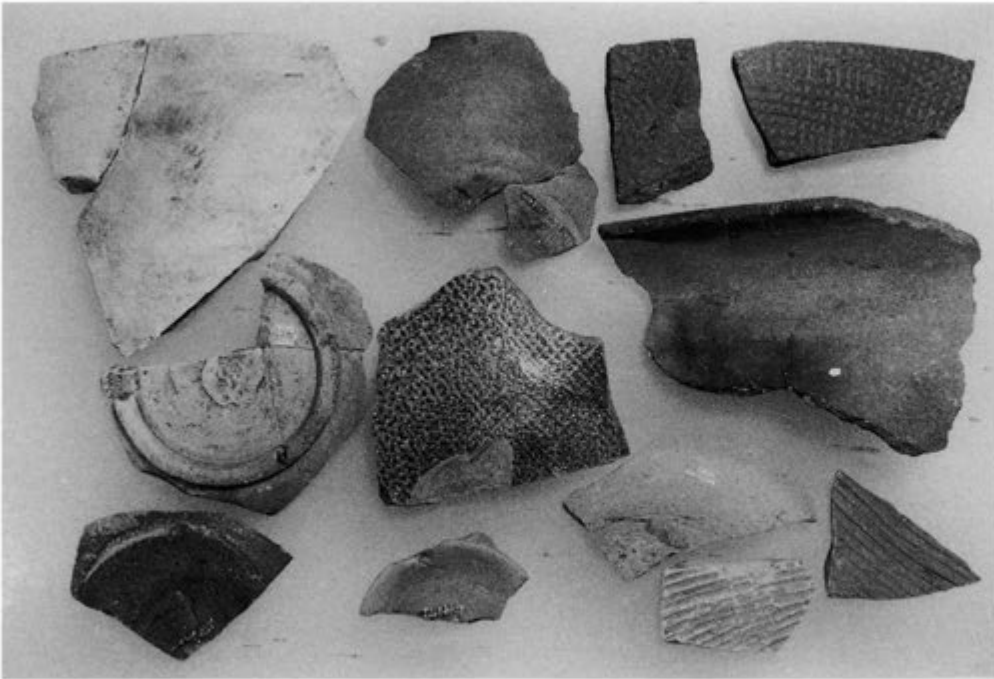
土壙出土遺物 (2)



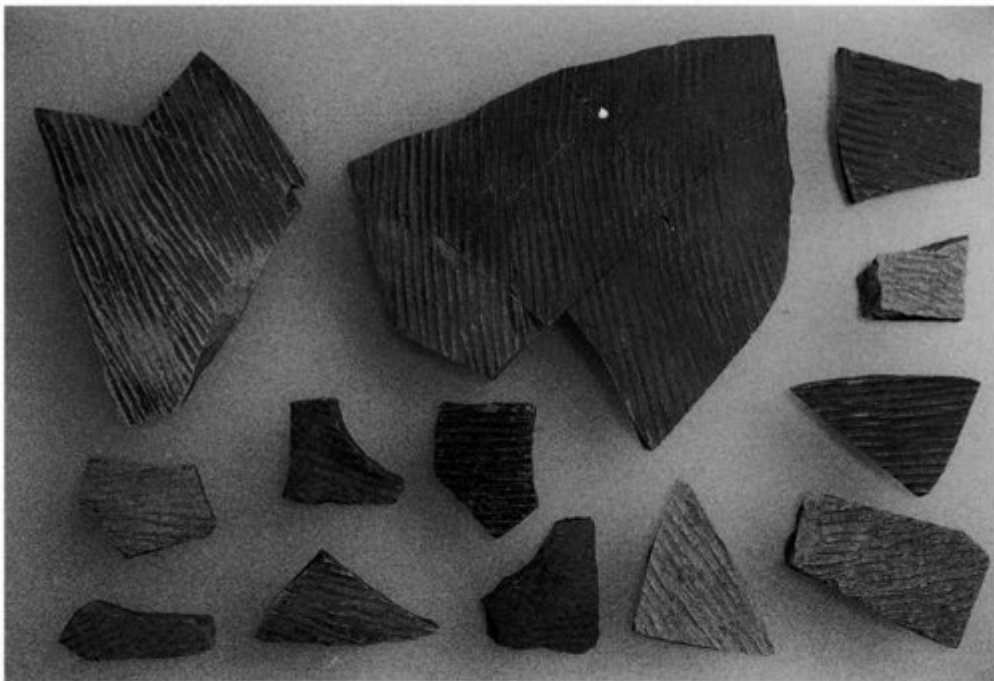
溝状遺構出土遺物 (1)



溝状遺構出土遺物 (2)



溝状遺構出土遺物 (3)



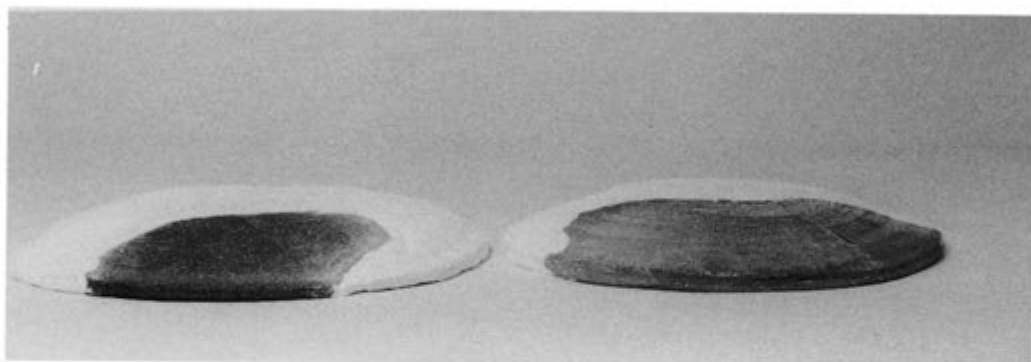
溝状遺構出土遺物 (4)



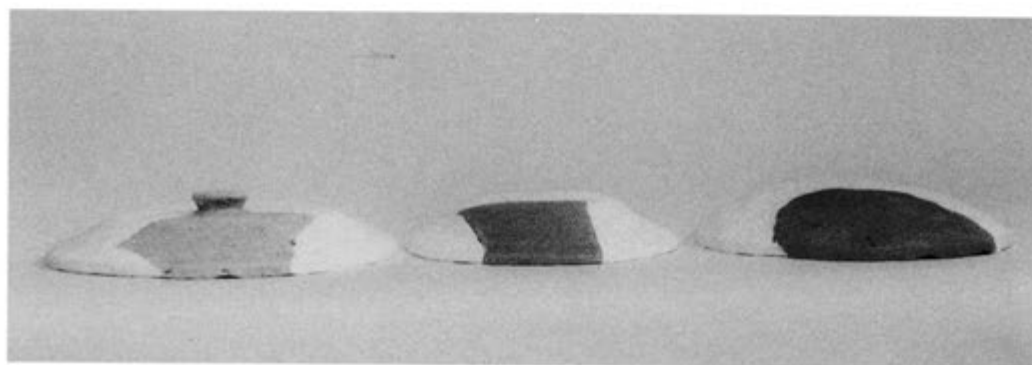
その他の遺構出土遺物（1）



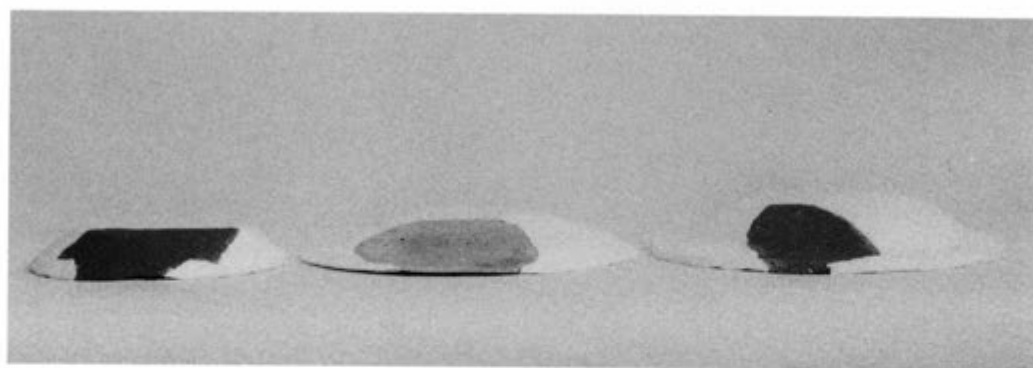
その他の遺構出土遺物（2）



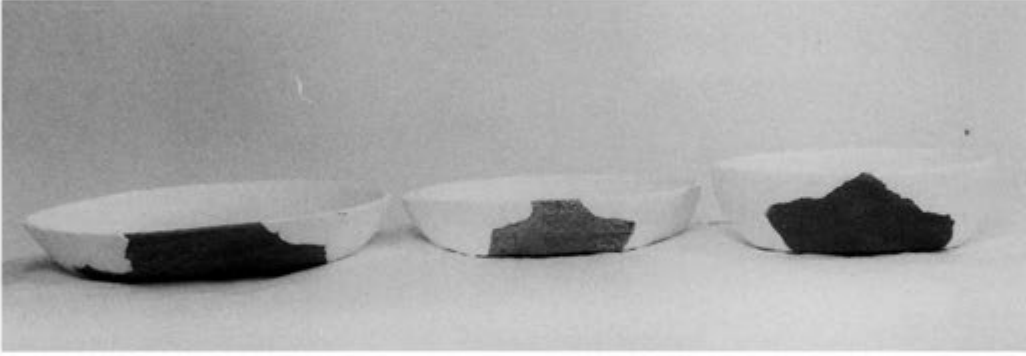
須惠器蓋(1)



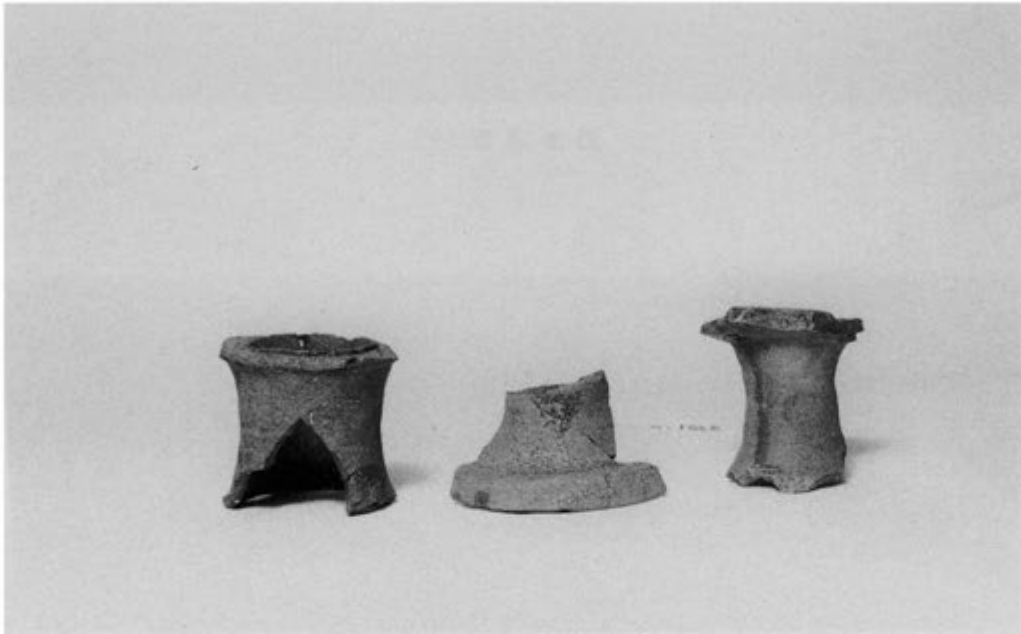
須惠器蓋(2)



須惠器蓋(3)

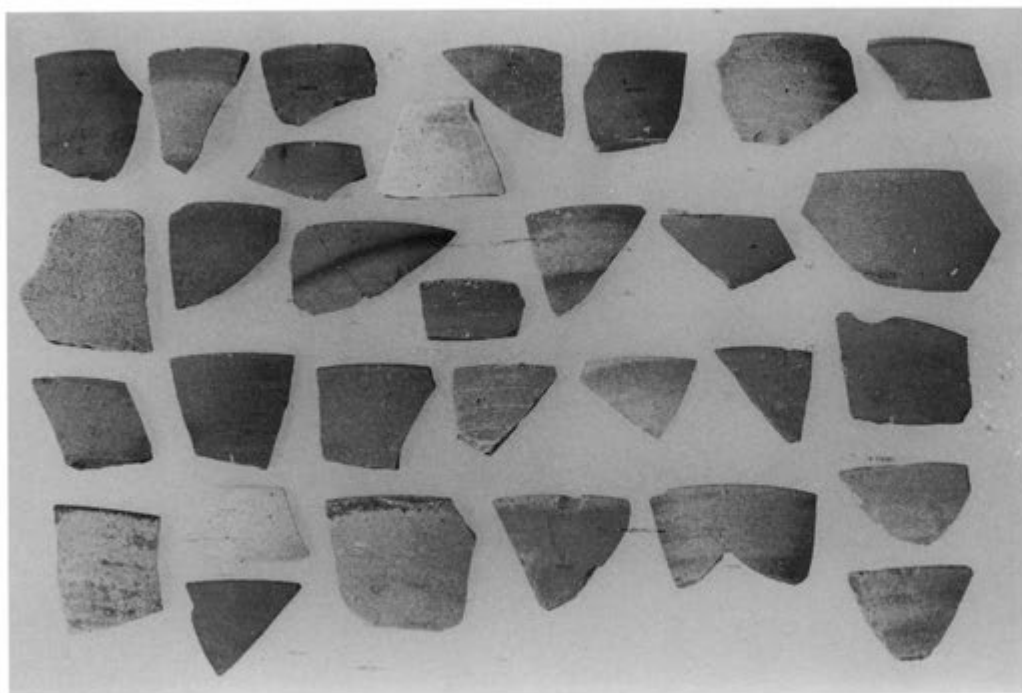


須惠器皿

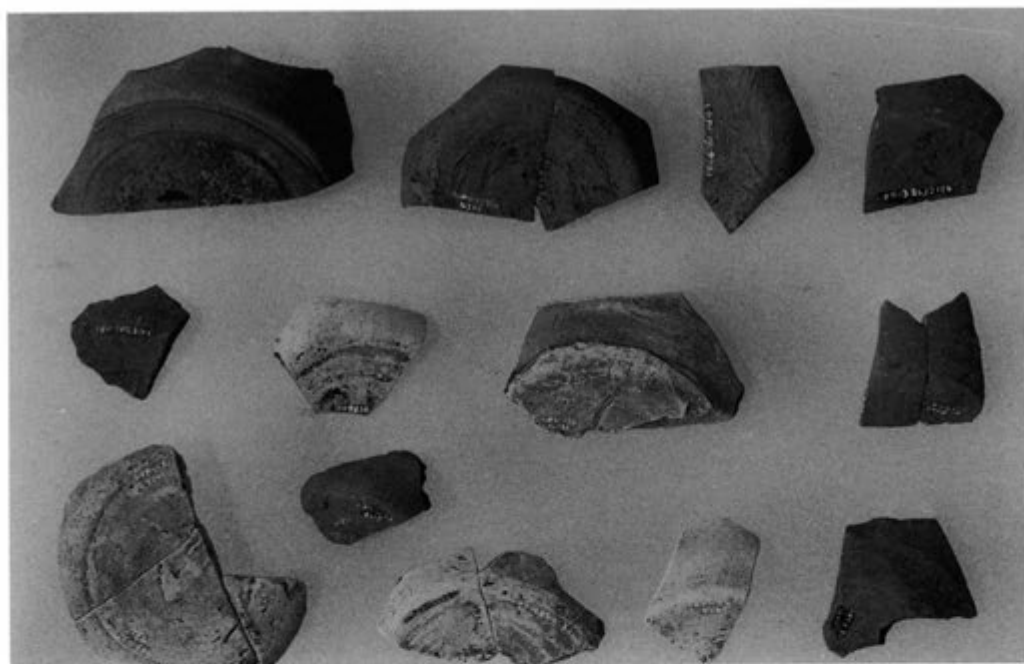


須惠器高坏

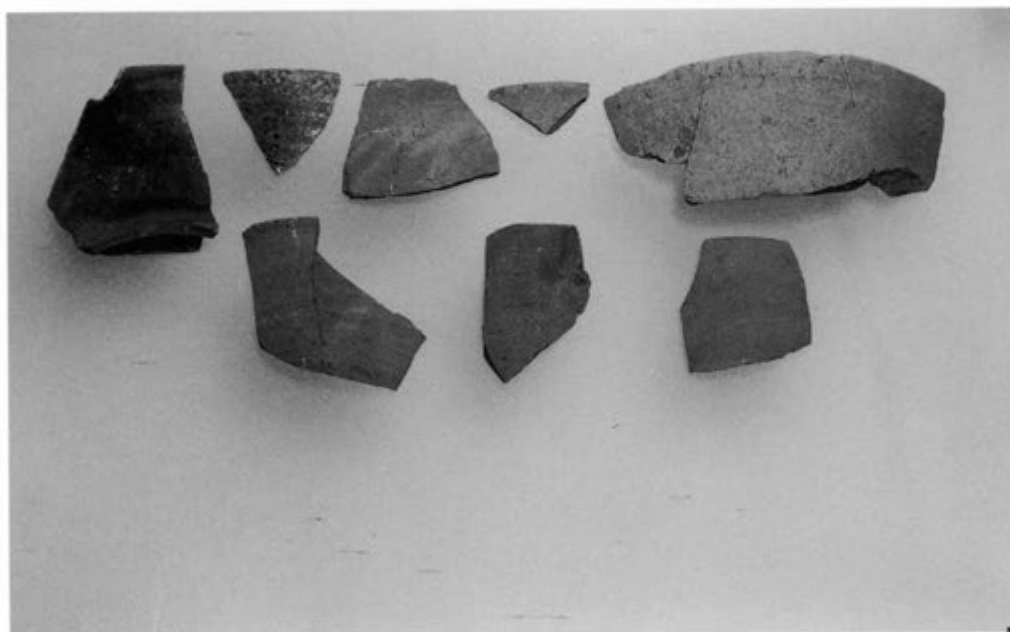




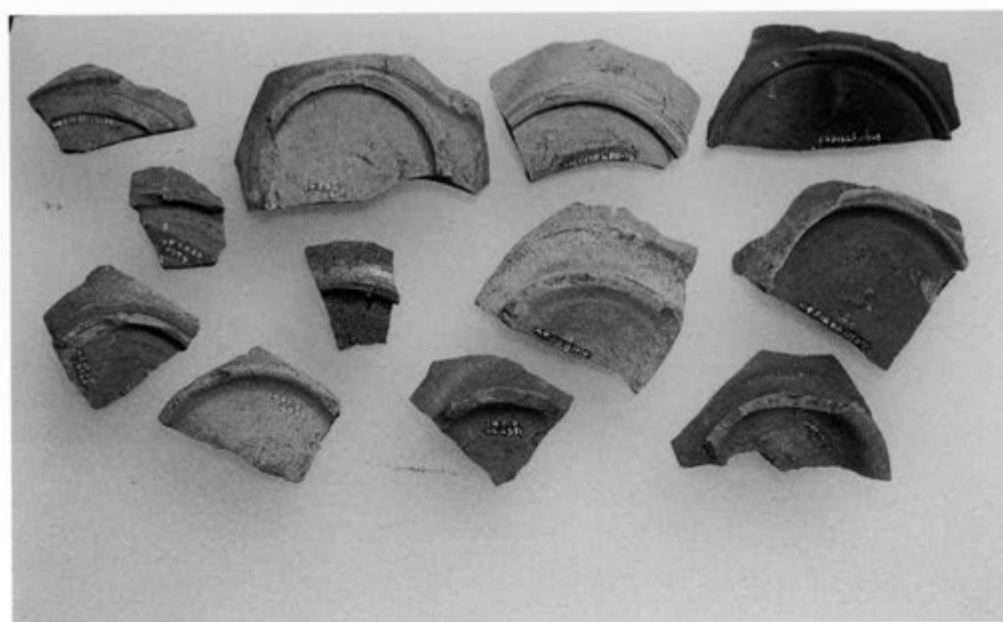
須惠器坏(1)



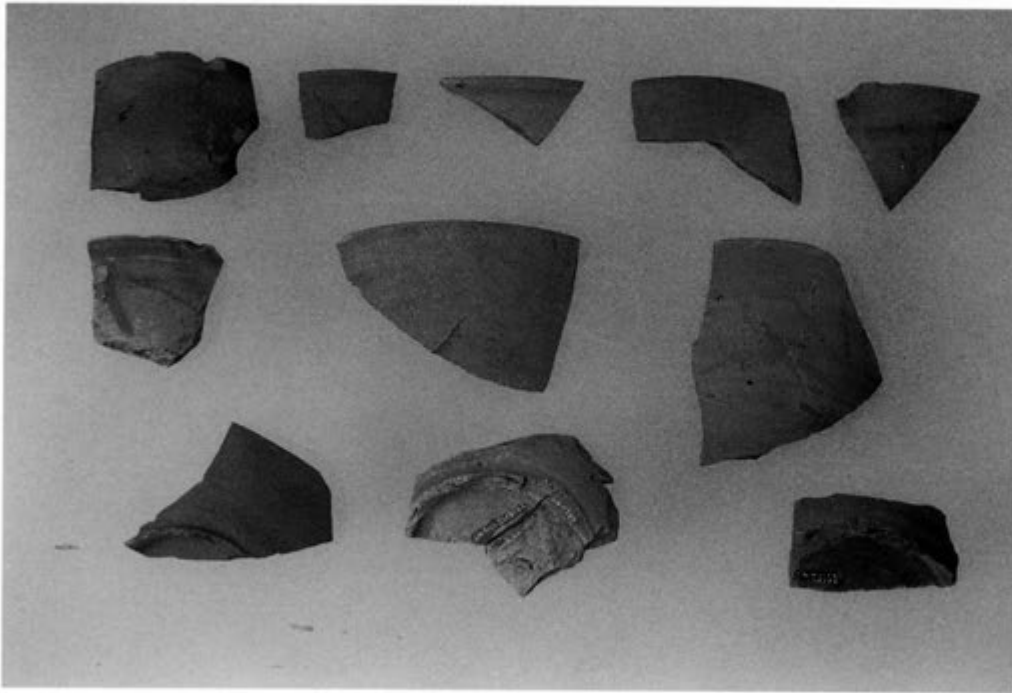
須惠器坏(2)



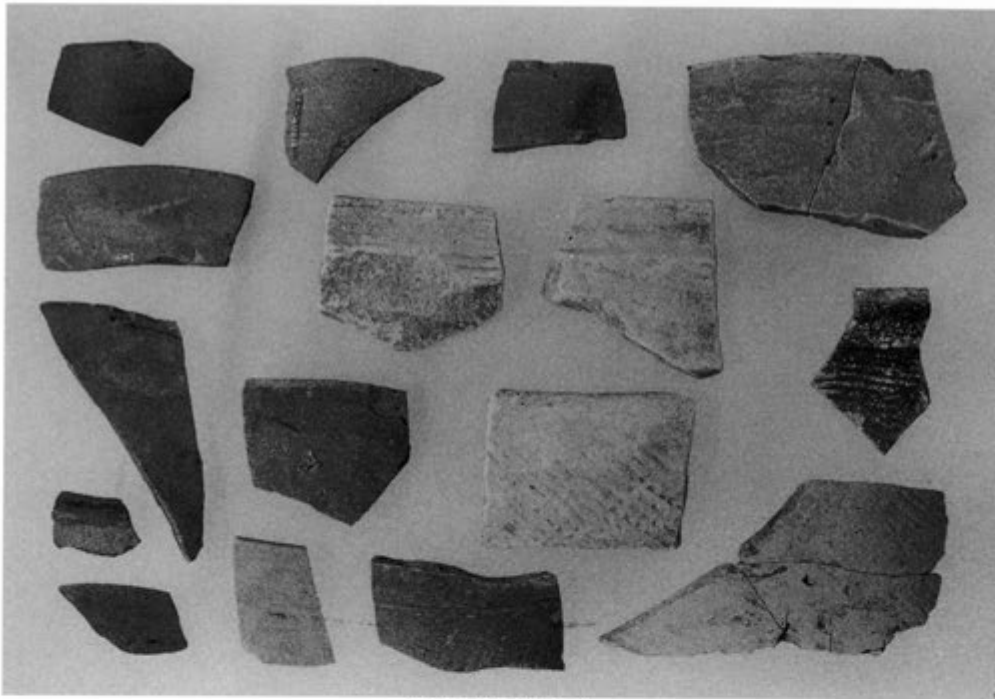
須惠器碗(1)



須惠器碗(2)



須惠器鉢



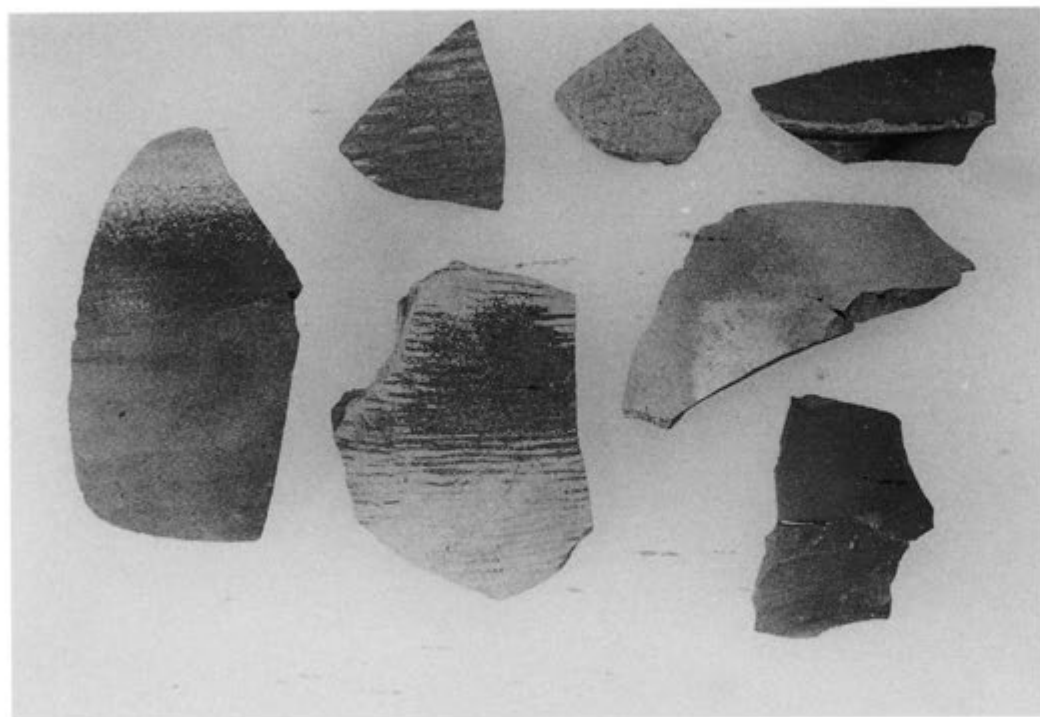
須惠器壺(1)



須惠器壺(2)



須惠器壺(3)



須惠器壺(4)



須惠器壺(5)



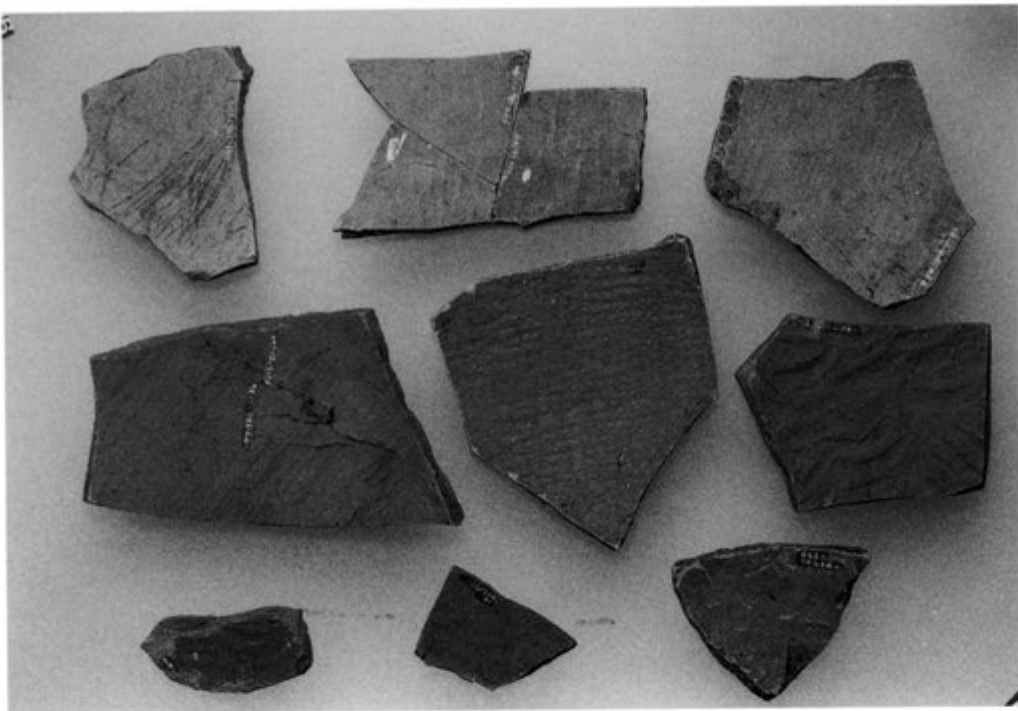
須惠器甕(1)



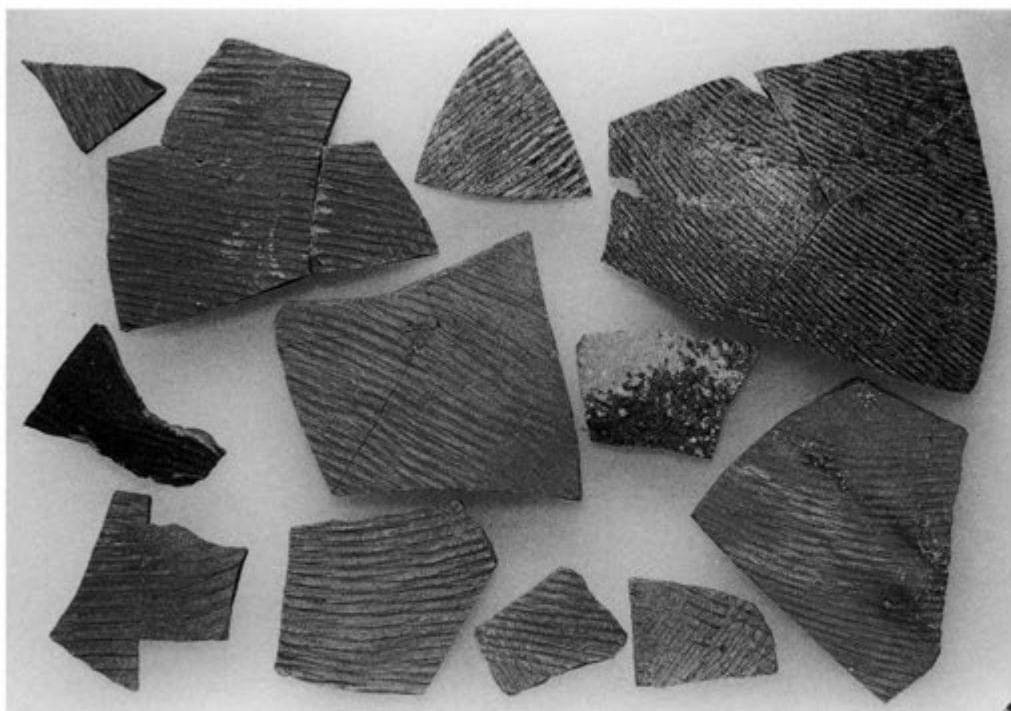
須惠器甕(2)



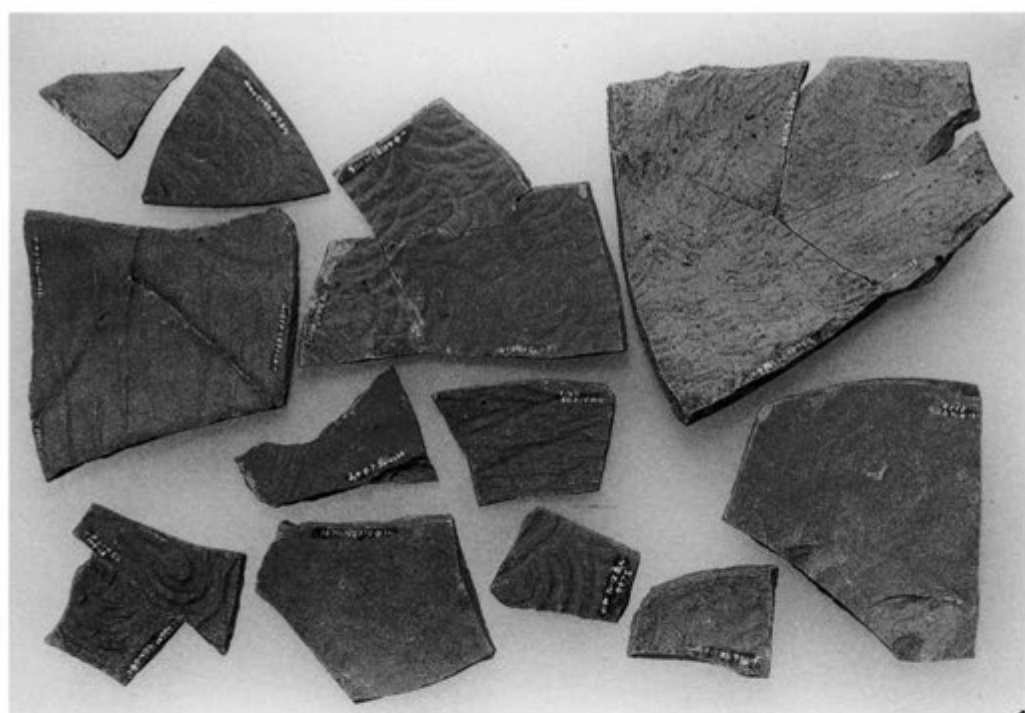
須恵器甕(3)



須恵器甕(4)

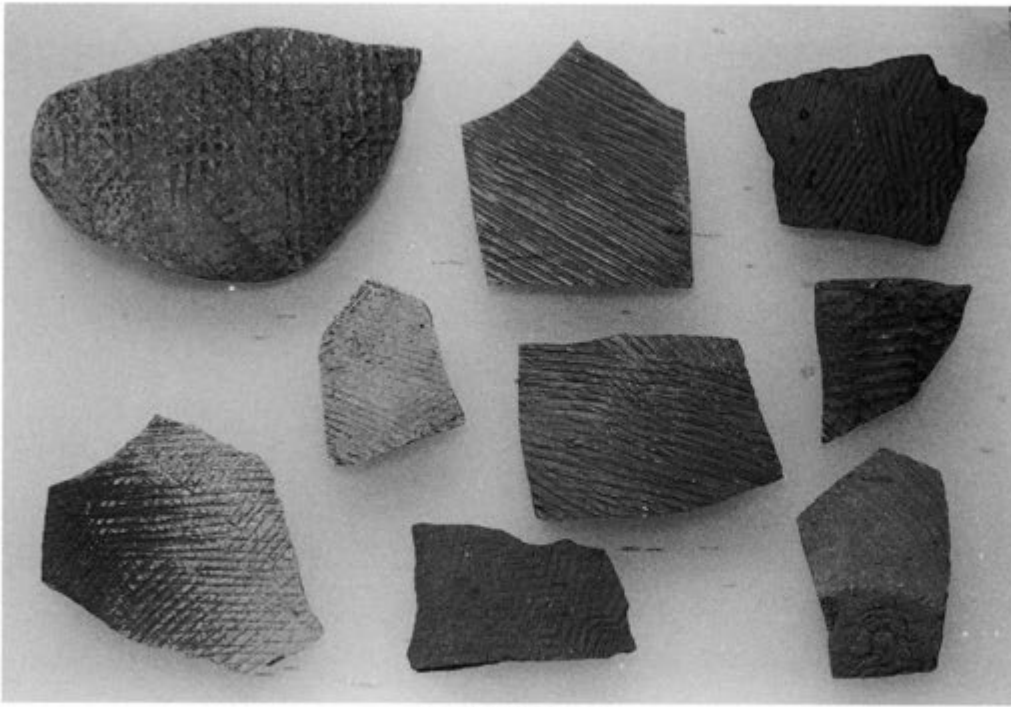


須惠器甕(5)

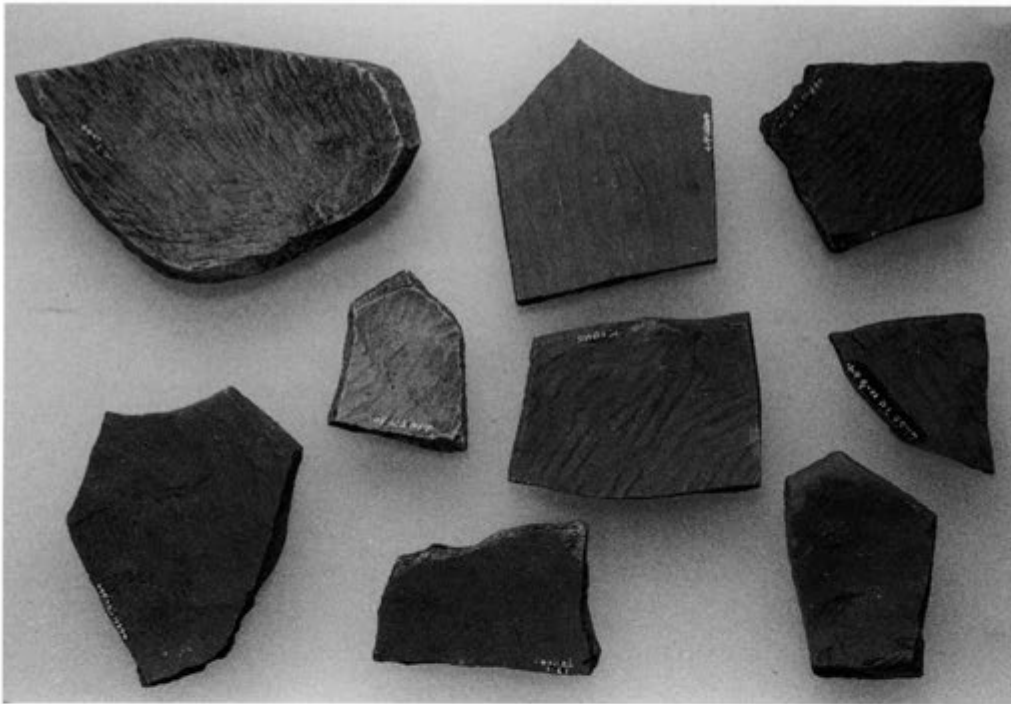


須惠器甕(6)

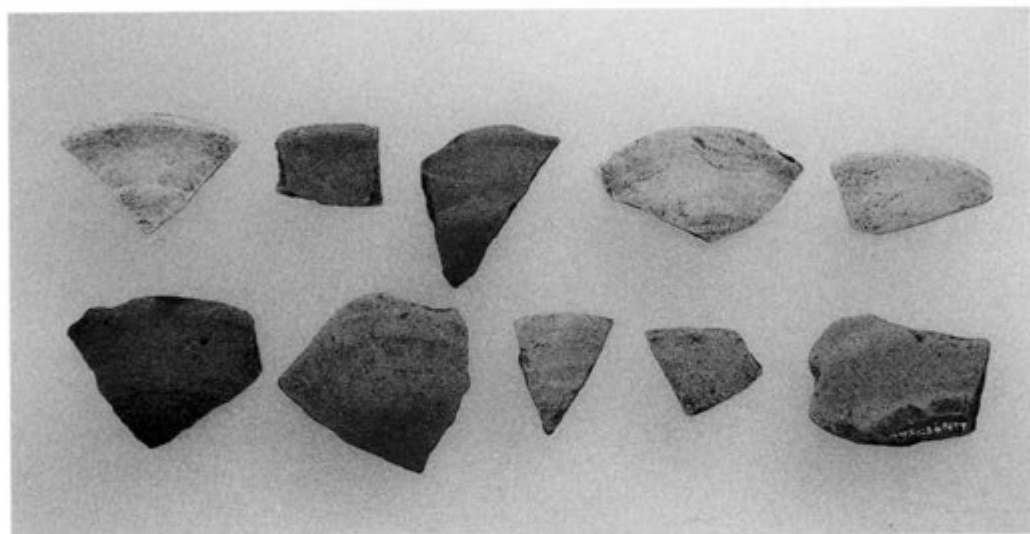




須惠器 甕 (7)



須惠器 甕 (8)



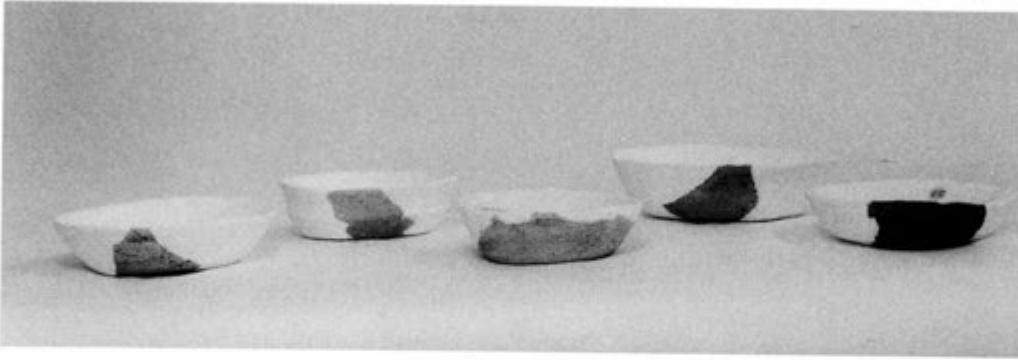
土師器蓋



土師器皿(1)



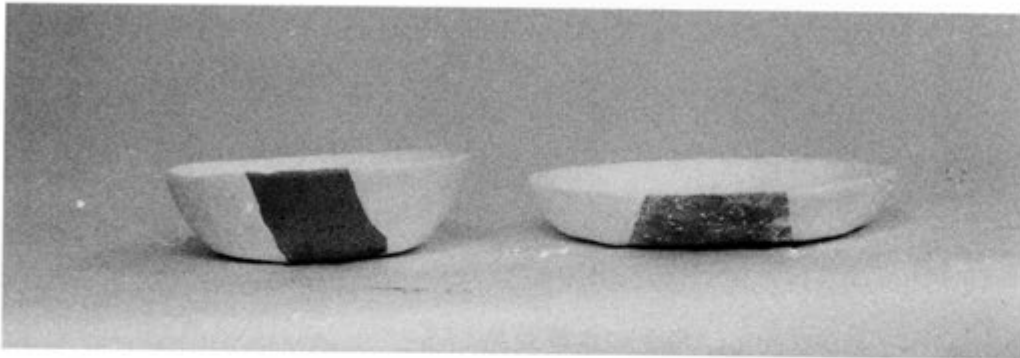
土師器皿(2)



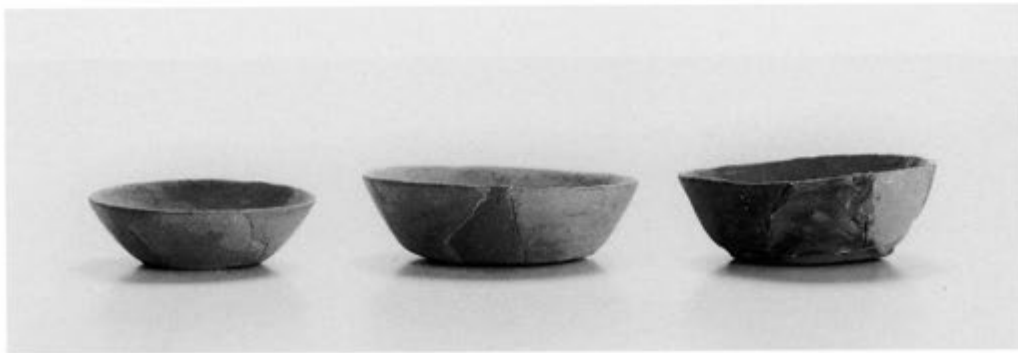
土師器皿(3)



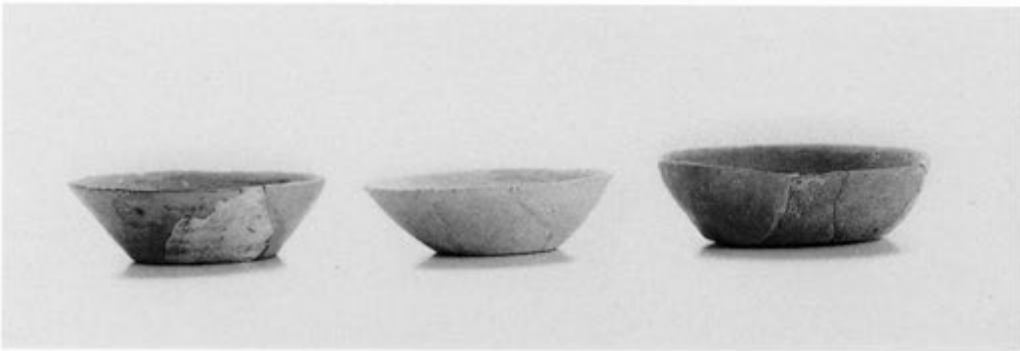
土師器皿(4)



土師器皿(5)



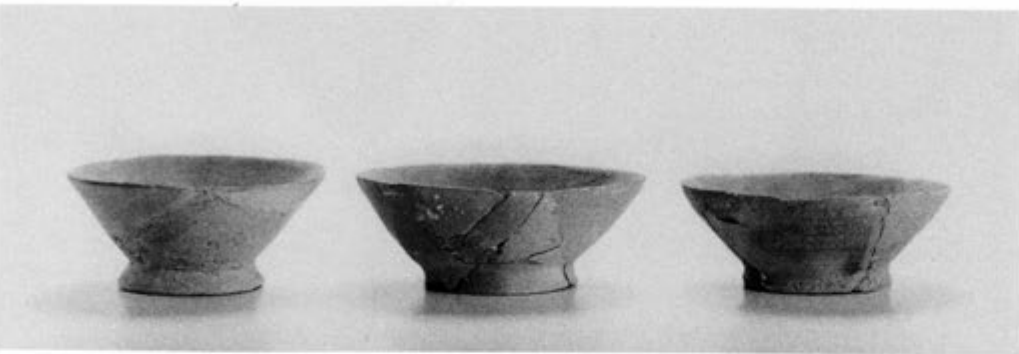
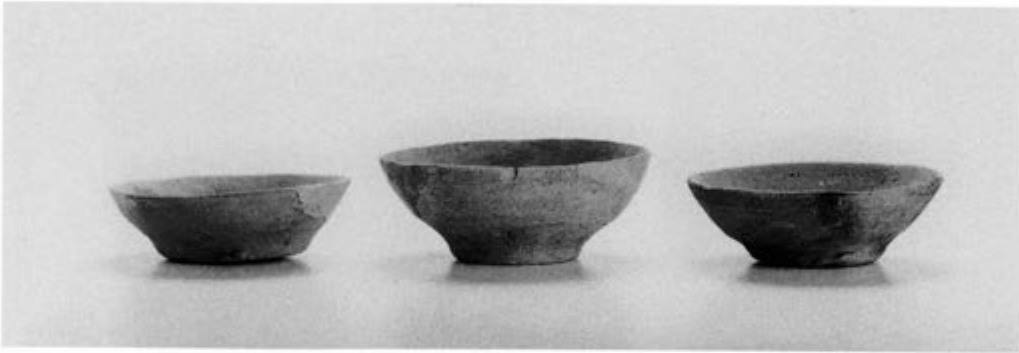
土師器环(1)



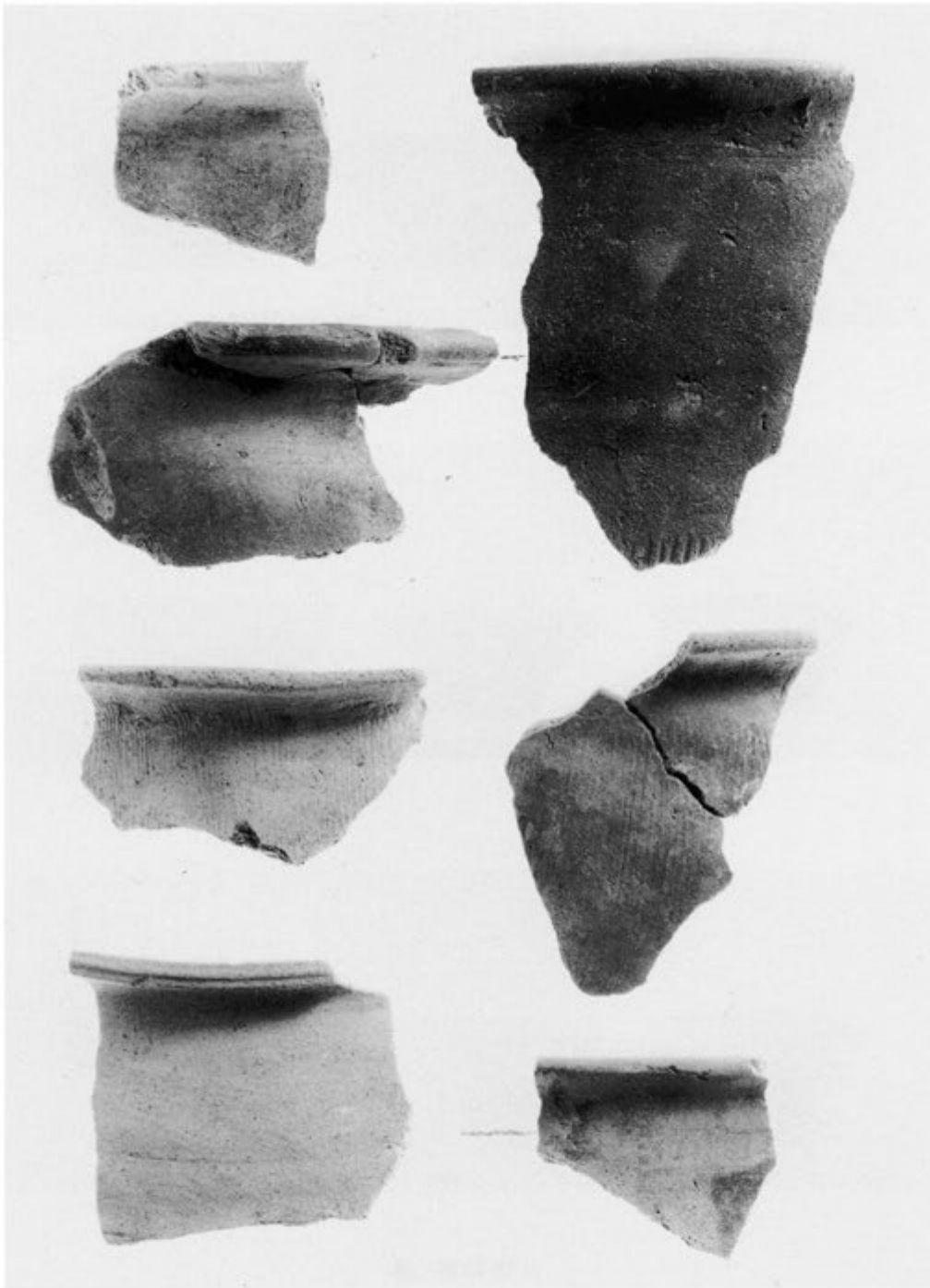
土師器坏(2)



土師器坏(3)

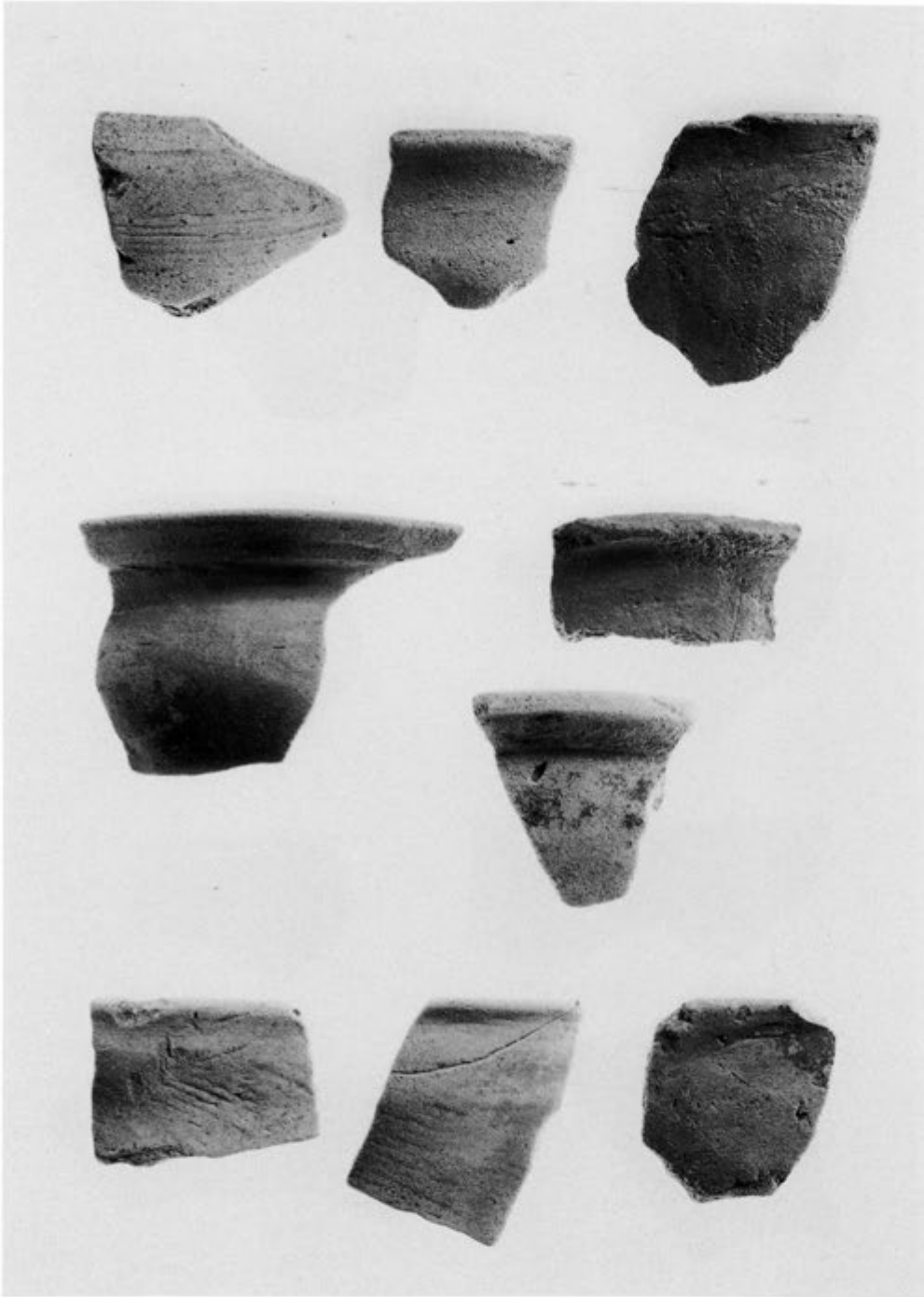


土師器坏・碗

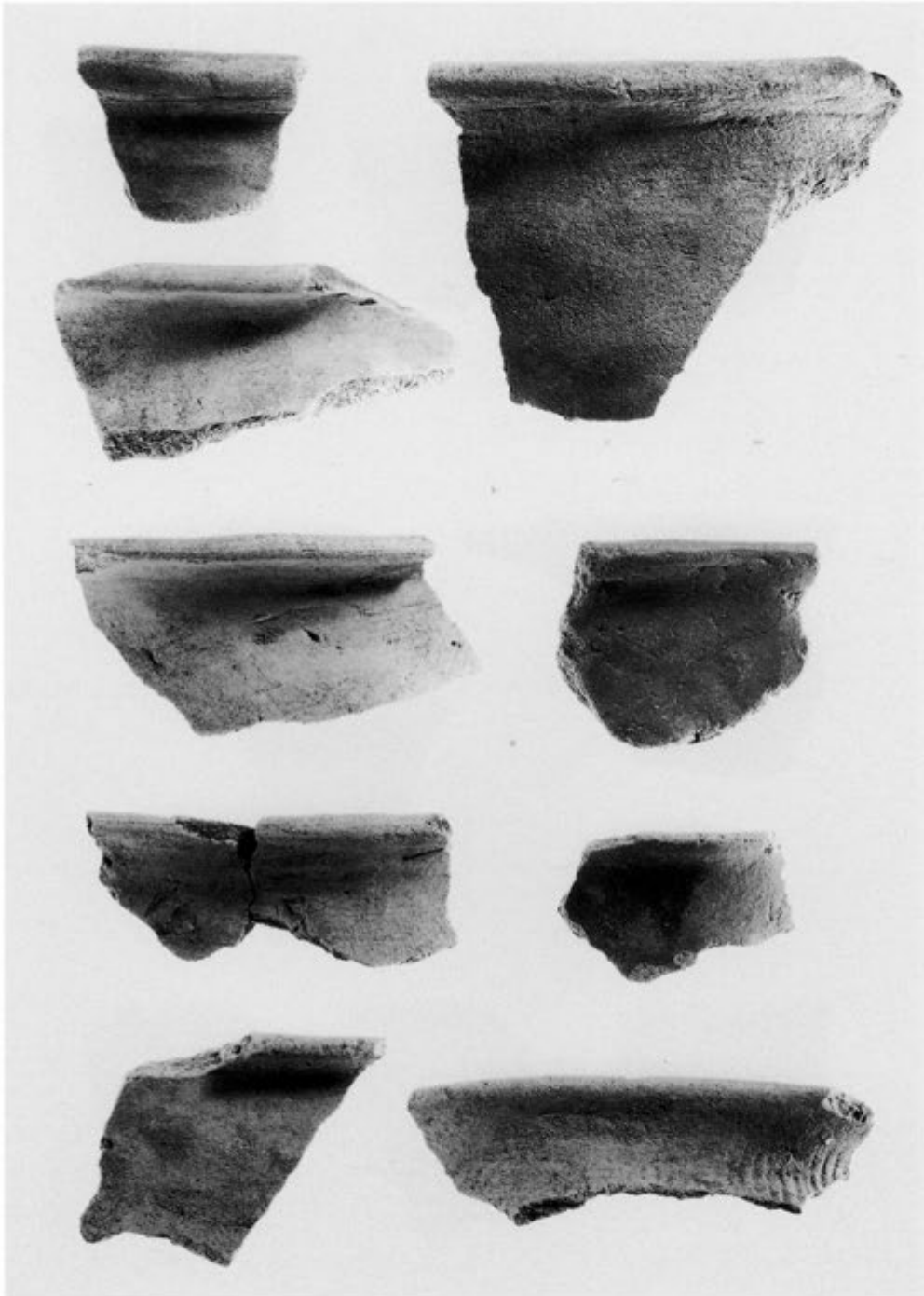


土師器鉢





土師器 甕 (1)



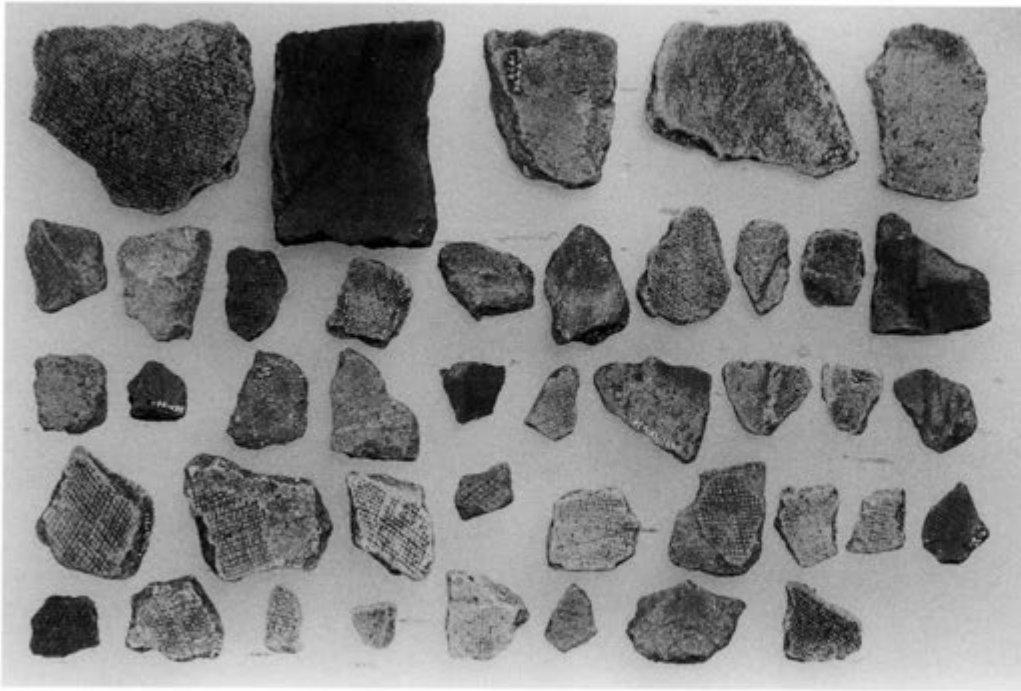
土師器甕(2)



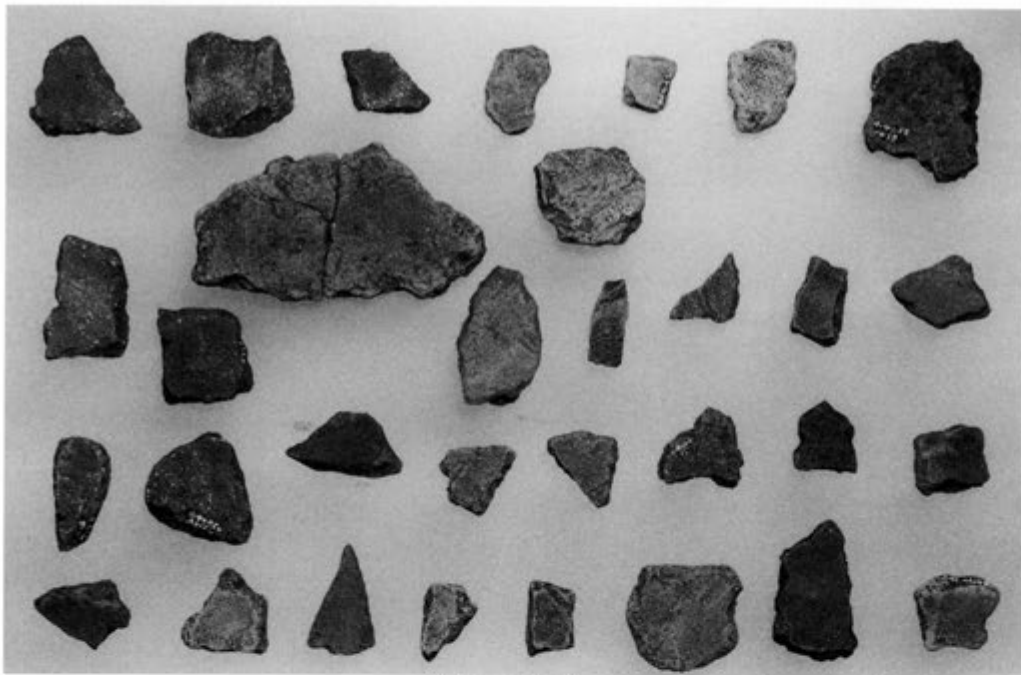
「阿多」刻書土器



墨書土器・篋書土器・刻書土器



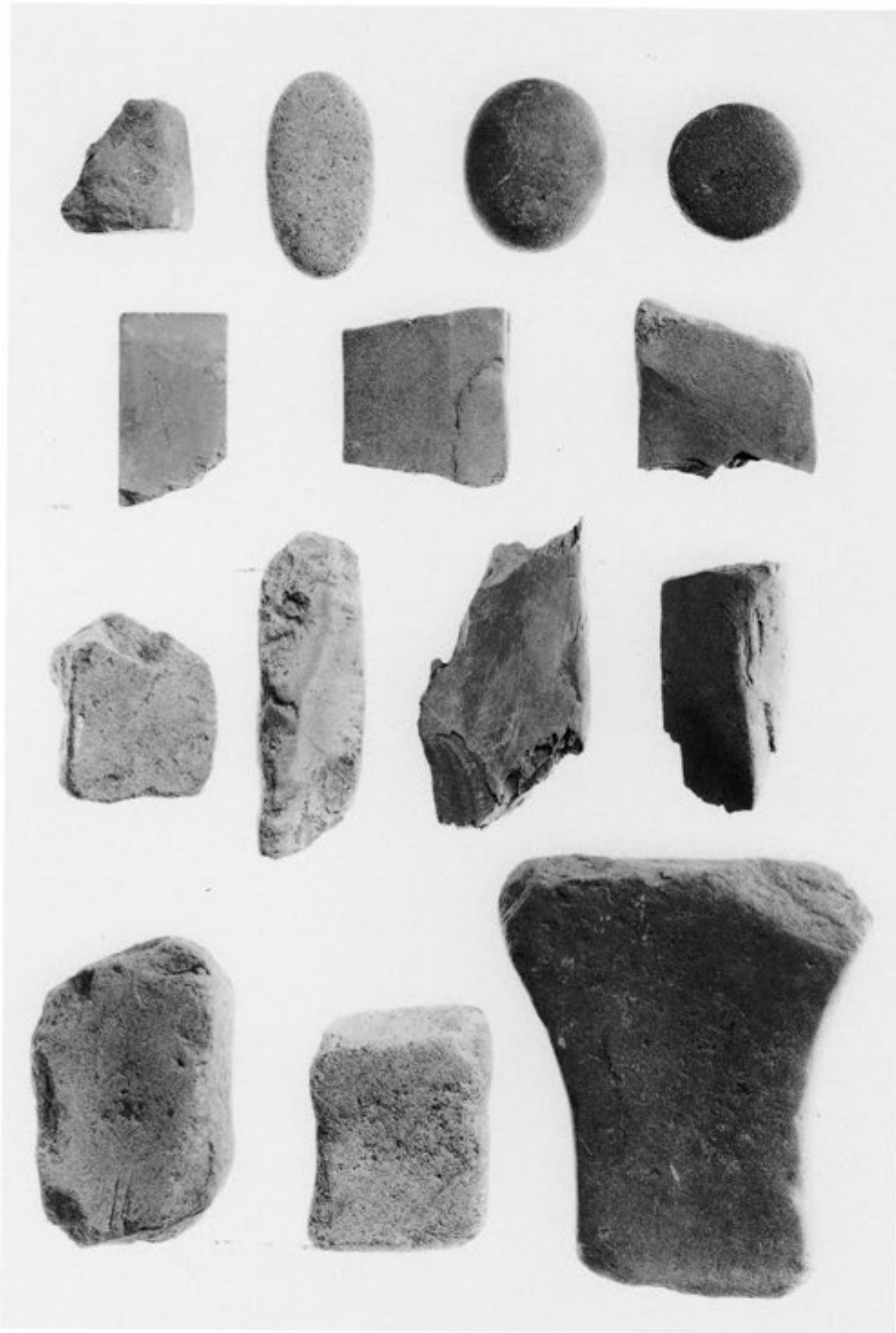
烧埴壺(1)



烧埴壺(2)



帯金具・紡錘車・土錘



平安時代砥石

## あ　と　が　き

遺跡を調査する前、初めて現地立ち周辺を望むと、古代信仰の対象となった金峰山、野間岳が仰げる。神話に出てくる「古代吾田の里」がこの近辺に存在したのだなあと思いつつ、調査を進めていくことになった。「多」の線刻土器が出土したときは、ひょっとしたら?……続々出土してくる平安時代の宴跡。文学資料も「阿多」「安」「川」等、地名に関係あるものが出土してくる。地図で位置の確認を行うと、遺跡のある地点に阿多と記載されている。1,000年も昔から阿多の名称が継続されてきていたのだ。

連日、真っ赤に燃えた太陽や地中から鋭く突出した霜柱等、自然との闘いであった。続々出土する遺物。整然と並ぶ柱穴群、構溝。当時の役所跡では……。日増しに不安と期待が入り交じってくる。広いと思った道路幅を狭く感じたり、遺構の半分しか調査出来ず、歯軋りをした事。何とか調査を終了すると、目の前に山と積まれた膨大な資料。調査以上に厳しい日々であった。それでも、ここに報告書を発刊することが出来た。万全を期したつもりであるが、必ずしも十分といえないものになった。今後、検討を要するものも多いと思う。機会をみて不備を修正し、その責務を全うしたいと思う。

調査にあたり便宜を図って下さった金峰町教育委員会、阿多歴史研究会の皆様、そして作業員としてご協力いただいた地元の方々、整理作業に従事していただいた文化課埋蔵文化財収蔵庫の方々に心より感謝申し上げます。

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(57)  
一般地方道鹿児島加世田線に伴う埋蔵文化財報告書

### こ　な　か　は　る 小　中　原　遺　跡

発行日　1991年3月30日  
発　行　鹿児島県教育委員会  
〒892　鹿児島市山下町14-50  
印刷所　中央印刷(株)  
〒892　鹿児島市春日町12-16